

異色ある新時代の風俗

# 奇譚クラブ



演劇俳優養成所を撮る  
変人奇人めぐり

新年号

現地ルポ

恐怖の北海道

奇譚クラブ

新年号

中国奇書中の白眉!!  
新編 水滸伝

美麗装幀  
各頁に色紙を貼入

川上未夫著  
装幀美に押出  
石津博典

B6型 216頁  
定価 160円  
送料 20円



一読必す  
自心をもつかせぬ  
面白さ天下無類

発行所 近畿図書株式会社  
大阪市南区生玉町10  
振替 大阪 122 6 31 番



曲騷狂マダム淫 賭  
津志一 役





艶色晝夜帯

新釋 鏡之權三重帷子

緑猛比古作

止し印子 絵

5









# 脚線美の魅力

女性の持つ肉体の魅力の中で、最も異性に迫るものは、素足の美しさである。特に中年の男性にとっては、決定的なものである。





十九の春に恥らう

志津子

指折りて

近き日に幸いあること

夢みいたり

指折りて

生くる身に限りあること

いのちみつめたり

指折りて

十九の春を迎えぬ

指折りつきぬ

指折りて

涙せるかな

指折りて

ほゝえめるかな

指折りて

いづれぞ多き

涙せる日の多かりき

指折りて

涙せるかな



組合う処女 二態

背面と背面、正面と正面、組合う二組の処女の姿態は、まだ未熟な果実を手にするような生硬さがぬけきれないが、この垢抜けのしない所に生娘の魅力がかくされている。





# 抱擁



処女の乳房と  
お臍と臀部  
日本人の典型的な娘の肉体  
その長所と短所を遺憾なく  
發揮している







# 存在しないページ

※落丁や切抜きらしき痕跡が無い為、  
占領軍の検閲により削除された可能性も

(より古い号では、ここに『遊閑奇譚新聞』『艶笑娯楽館』『滑稽珍聞』  
などが赤色単色刷りで挿入されている)



★隅から隅まで読みごたえある  
 新時代の異色ある風俗雑誌  
 ★★

婦女子に特高の情を  
**問拷** (責めの人)  
 片矢 薫

が弱い処女の身に苛酷な拷問を受けつゝ、白状を告げなかつた愛と地に生ける庶民の隠忍の歴史。

暴露小説  
**永田町異聞**

国政審計の殿堂、国会議院の奥に湧まく桃色桃風の暴露だ。

三田 幸三郎

印度宮廷秘史  
**娼婦** ウトパラグル  
 中澤公平

九才にして母となるという早熟  
 国印度の或る宮廷に於ける  
 乱痴図絵

エロチックなエピソード  
**かつら** と **ユ一モ**  
 お嬢さん  
 花園 一郎

探訪  
 読物

**公衆電話をめぐる**

売春婦と誘引女学生  
 三角関係の人妻のなげき  
 身重になつた家出娘

椿 昭彦



# 奇譚クラス

## 新年号 目次

グビヤノド脚線美の魅力・

表紙

口絵……須磨利之……花菱玲子

責の小説

拷問

片矢

としゆき

薫

探訪報告記公衆電話をめぐる女

椿昭彦

諸国変人奇人めぐり

だこのとつあん  
男湯をのぞく番台女  
娼婦時代の思い出

二俣志津子  
潮 マリ  
吉岡銀子

印度宮日昇ラッパラララ

中野公平(今幾久蔵)

見上ぐる寝業ナイロン土俵に咲く相撲花……土俵四股平

時局 双心怖の北海道愛山久

淫奪や  
狂騒曲

賭

かけにえ

犠牲

二俣志津子(花菱玲子画)

抱腹絶倒

カツラを志れとお嬢さん

(浦井弱画)花園二郎

寢室異聞

国房の本乃伊

丹波太郎(花菱玲子画)

異色短篇

罰金と附文

(志田よし画)北海道

事実小説

小説永田町界隈

港三郎(柴谷幸三郎画)

巷説漫譚

尻(しりり)

(作並画)増田志郎

蒐集奇譚

猥褻掛図絵

榛之木参一(須磨利之画)

古相諷刺

社用族候補生

(曾根泰郎画)能登二三

映画演劇俳優養成所の真相を探る

時代巷談

艶色晝夜帯

緑猛比古(今幾久蔵画)

お立女アパート火遊び異変

(森あけら画)小島伸二

好色將軍と淫蛇女優

高橋義信(箕田京二画)

愛慾譚 呼子港の女船頭

(秋田冷光画)井口正憲

実話小説

肉体を見せた女

松谷茂(美濃村晃画)

毒婦山窩のおろく

宮内郎画 笠置良夫

抱合い心中死体 川端芙美雄

大道将棋を破る法  
大橋虚士



★ 敬言 鐘ルポルターージュ ★

# 都會の魔術師

映画演劇俳優養成所の実相を  
探ぐる



俳優養成所  
映画俳優養成所  
労働大臣認可 各都府県公認  
11都府県に設置 合計11校  
11都府県に設置 合計11校  
11都府県に設置 合計11校  
11都府県に設置 合計11校

映画俳優養成所  
労働大臣認可 各都府県公認  
11都府県に設置 合計11校  
11都府県に設置 合計11校  
11都府県に設置 合計11校  
11都府県に設置 合計11校

映画俳優養成所  
労働大臣認可 各都府県公認  
11都府県に設置 合計11校  
11都府県に設置 合計11校  
11都府県に設置 合計11校  
11都府県に設置 合計11校







# 実態をつく

★★

## (一) 日本自由演劇社俳優養成所の乱脈……★★



### 若人の夢

終戦の翌年の事であつた  
京都市左京区鞍馬に三階建  
のビルを擁する日本自由演  
劇社、同俳優養成所が創立  
された。此処は地理的にも  
大映の太秦、松竹の下加茂  
両撮影所に近く、俳優養成  
の記事が朝日、毎日の両新  
聞に掲載されるや、志願者  
は千数百名の圧倒的な数に  
上つたのである。永い戦争  
で荒れ果ては青少年の取戻  
した夢と理想は案外甘いも

のだった。

こうして戦後第一陣をうけたまわつた、  
同社俳優養成所はその出発に於ける華々し  
さに引かえ、約半歳後の同年六月分裂解散  
のうきめに会つたのだが、その主要なる原  
因を、新聞紙上では経済上の基盤が弱体で  
あつたが為と発表されてはいたが、真相は  
同社社長唄村通夫氏（四三）の淫猥にも等  
しい行動が同俳優養成所女生徒に対し動揺  
を起させたからであつた。

以下は当時同社の生徒課に勤務していた  
吉村治郎氏（仮名）に訊ねたものである。

同演劇俳優養成所設立の趣旨は至極真面  
目なものであつた。過去のドサ廻り芝居や  
新派歌舞伎世界の持つ因習の打破と同時に  
世に埋れたる真摯なる演劇人の発見と育  
成を願目に旗挙げ。新劇演出家、多田俊平  
宝塚歌劇団演出家、堀正旗、日本舞踊家、  
蝶茂都陸平、京大教授大山定一、山本修二  
外に沢村友井の両西洋舞踊家を講師として  
迎え、現在のインチャ短期大学など到底足  
もとえも寄れぬ豪華メンバーで、教授内容  
も、俳優学、演出学、メイキャップ法、教  
養学科、演技実習等、俳優に必要な凡ての  
学科を毎日午前八時より午後四時まで、六  
ヵ月間の厳しいものだった。

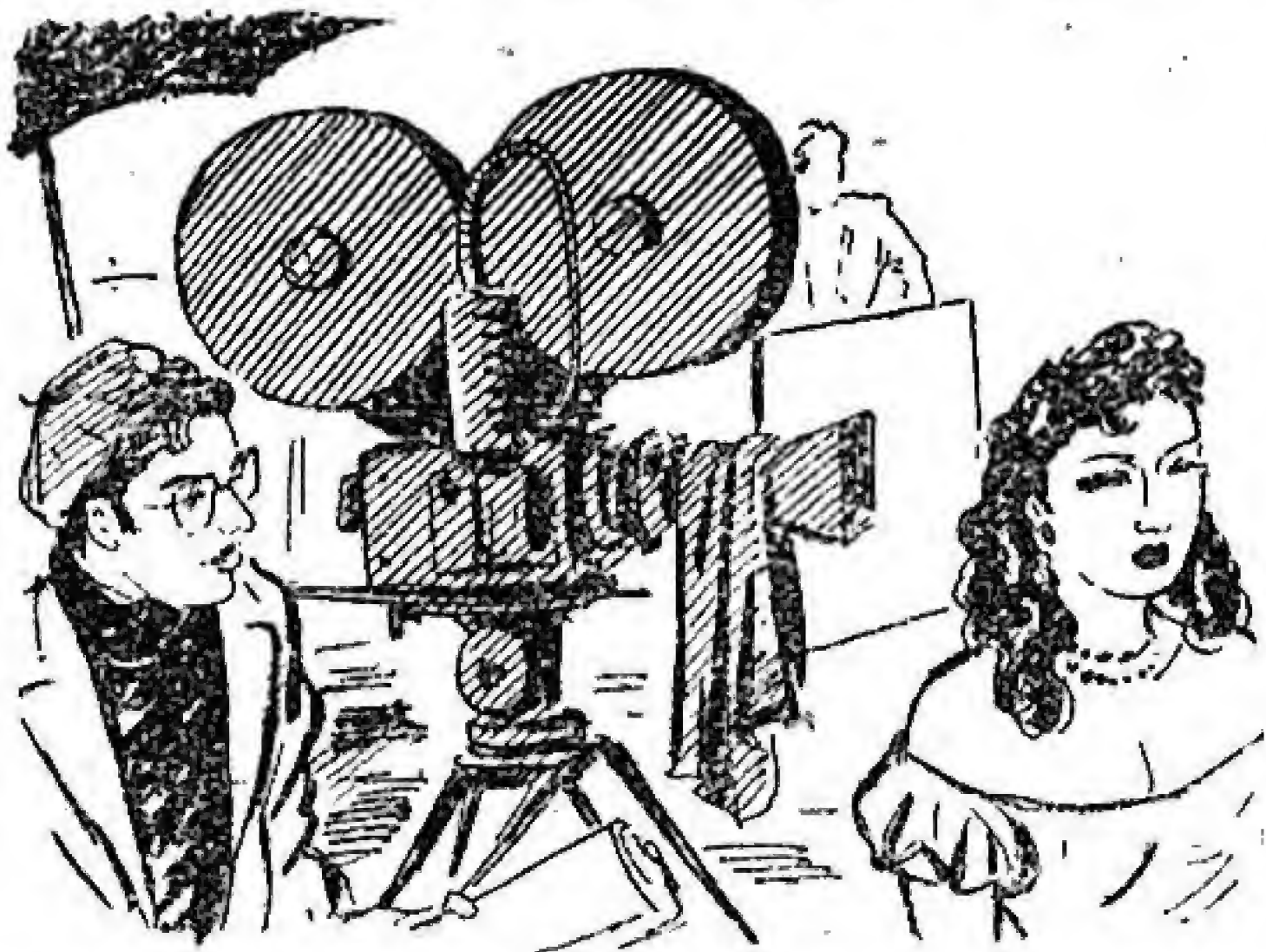
千数百名の中より再度にわたつて実施さ  
れた厳正なる審査の結果第一期生として男  
子五十名女子四十八名の入学が許可された  
月謝、入会金等は一切不要、卒業のあかつ

きは同社専属芸能員として給料まで支給さ  
れる特典があり、研究生達は前途洋々たる  
希望に胸膨らませて訓練に熱中、技倆の修  
得に余念がなかつた。この表面、何事もな  
い平和な演劇学園にも、そろ／＼好色の毒  
牙が迫つていたのである。

### 好色魔社長

同演劇社、社長兼養成所長の唄村通夫は  
終戦成金で其の財数千万円を所有すると囁  
され、大阪郊外牧方に豪華な別荘を所有  
する実業家で、もと／＼劇関係の仕事に興  
味を抱いていた折しも、前記講師の一部の  
者から出資の  
相談をもちか  
けられ、百万  
円出資、社長  
の椅子に坐つ  
たのだつたが  
社長唄村の本  
心は講師連の  
演劇の理想な  
どどうでもよ  
かつた。外の  
事業では到底  
真似の出来ぬ  
役得が当然あ  
るものと計算  
の上だつた。

役得とは？



同養成所女生徒の貞操をかたつばしから奪  
いとる事である。

今かりに芸妓一人を身受けしたとしても  
十数万の金はいる、いや、水揚げ料とし  
ても一人について二三万の金は取られる、  
それも友人は信用ならぬし遊里の巷で遊び  
あきた彼には、友人の肉体よりも、純情無  
垢な、処女の肉体を思ふ存分味つて見たか  
つた、びち／＼張り切つた乳房を持つ美し  
い娘、千数百人の中から選りすぐつただ  
けあつて、みんなそれぞれに美点を持つて  
いる、これを逃してなんとしよう、全員な  
で斬りにすれば百万円の投資も決して高い  
ものではない、彼は腹の中でひそかにこう  
呟き、時来るのを舌なめずりしつゝ、待ちか  
まえていたのである。

無月謝、入会金不要、一流  
講師陣、生活の保証、これだ  
けの膳立が揃つていたのであ  
るから流石の芸能関係者達も  
新興会社自由演劇社に注目し  
たし、研究生の保護者連も、  
絶大な信用を社長唄村通夫に  
抱いたのは無理からぬ話であ  
ろう。

ところがこゝに微妙な問題  
が横わつていた、それは地方  
よりの応募者で通学するには  
下宿するか、養成所の寮へ入  
れて貰わねば到底、勉学の出  
来ない連中が、女子に十六名  
男子に五名あつた。審査員の  
講師連は原則として通学の出



# 映画・演劇俳優養成所の

## 伏魔殿壊滅

来るもののみを採用すると  
の立前から、彼等に一旦不  
合格を宣したのだつたが、

或る夜の事である。

社長唄村は「よし候の別荘  
へ皆んなやつて来い、宿泊  
料も何もいらぬ」、彼等を  
枚方の別荘へ置いてやると、  
表面気軽に引受けたものだ  
俳優になりたい一念、測  
るゝ者は顔をも掴むの例え  
通り彼等は社長のこの好意  
に歓喜し、社長の為ならど  
んな事でもと誓つたのであ  
る。色魔は焦らない毒牙を  
ゆつくりと磨き澄まし、に  
たく／＼ほくそ笑み乍ら、擬  
てどいつから料理してやろ  
うかと、女子研究生の肉体  
を穢めるように検分し始め  
たのである。

唄村が研究生の某女を同一の手で誘惑、  
自室に於て暴行中、社長の毒牙にかけられ  
た女子研究生の某女(二一)が彼の醜行と  
嫉妬に狂つた挙句、台所より持ち出したサ  
シミ庖丁で突然暴れ込んだが、社長にまん  
まと云い含められ、また泣く／＼以前の関  
係に戻つてしまつた。

女子研究生達は互いに心の中で反目、嫉  
妬し合い乍らも、虚榮と売名の為に、淫猥  
鬼、社長の厭みものとなり、墮落して行つ  
た。

男子研究生の中には、社長の手先となり  
ボン引の行動を取り、女子研究生の通学途  
上を待伏せし、社長別荘宅へ誘い出し、謝  
金を受け取つ  
ていた者もあ  
つた。

だが此の間  
題は互いの名  
譽の為に、な  
かなか表面化  
しなかつた。  
四カ月経つ  
た。一応基本  
訓練期間が終  
了し、第二期

生の募集と同時に、第一期生は、演技訓練  
として、それ／＼の特色により、劇団に編  
入される事となつた。

一班、二班、三班と分けられ、一班は新  
劇、二班は大衆劇、三班はショー中心の舞  
踊団として発足、愈々實際活動が開始せら  
れる運びとなつた。が芸能界の人々を招い  
て開かれた試演会の結果は惨憺たるものだ  
つた。

技術未熟、徒らに高踏的で観客と遊離し  
てしまつてゐると、招かれた興業師達は口  
をそろえて売物にはなりまへんとの返事だ  
つた。

教授連は養成期間が何分にも短かすぎる  
せめて後半年みつもり訓練しなければと社  
長に申入れを行つたが、社長唄村は、理想  
と現実の違いは、もうあんた方には任し  
ておけんと、独裁主義を切  
替えた。

教授連と社長一派の激し  
い対立が表面化した。研究  
生百名はその争ひの埒場の  
中へたつ／＼き込まれた。

彼等の中の或る等は帰郷  
とか転向とかの名目で地方  
廻りの劇団や芸能社と交渉  
し、群集役者として商業演  
劇の泥沼の渦中へ身を落し  
て行つた。

同時に社長別荘に於ける  
女子研究生間の愛欲の争ひ  
は、その極に達し、社長を  
めぐつて七八名の女が、絶

えず嫉妬し合い、果ては暴行事件までも  
し出されたのであつた。

昭和二十一年八月下旬、社長唄村は何れ  
かへ逃走、一部残された真面目なる研究生  
達は自由劇団なる新劇団を結成、公演の準  
備に奔走したが財力なく、渋谷天外(現在  
松竹新喜劇)が新家劇団に加入、俳優とし  
て余命を保ち得たに過ぎない。

戦後第一の狼火を挙げた、自由演劇社俳  
優養成所は、その目的の真摯なるにもかゝ  
わらず社長の好色無軌道なる行動に呆気な  
く壊滅してしまつたのであつた。

其の後、四五、群小養成所が、京阪沿線  
守口、関急沿線生駒、大阪市内今里等に開  
かれたがこれ等は全くお話にならぬインチ  
キで、応募者も殆んどなく、自然消滅して  
しまつてゐる。一昨年大阪の今里に松原映  
画プロダクションなるキノドラマ映画撮影  
所がニューフェイスを募集したが、殆んど  
応募者はなく、此の種、映画、演劇俳優志  
望者が如何に売名的であるかが認められる  
ところが終戦後六年経つた去る七月、また  
／＼大阪に於て稀大のインチキ映画社養成  
所幹部が一網打盡検査される事件が発生し  
たのである。

(東宝マークに似せた日映マーク)

東宝

日映

源氏久光





## (二) 日映株式會社友の會事件の全貌

去る七月十二日正午、NHKの録音ニュースは、大阪市天六京阪ビル四階に事務所を持つ、日映株式會社映画俳優新人養成所の幹部を一網一打尽検挙、社長多田公共(二一)専務多田光房(三六)庶務課長仲山真三(三三)をそれ〴〵詐欺罪で送府する事となつた。本事件による被害総額は目下の所、計五百数十万円にのぼるものと推定され、全国各地より日映友の會に入会、将来スターとして就職出来るものと信じ、中には早計にも貞操まで捧げた女子志願者もあり、怖るべき乱脈と顛廢が世の明るみに曝け出される事となつた。と、アナウンサーはやゝセ

ンセーショナル口調で二度くり返し放送した。

筆者が特に此の三面記事のニュースに心を惹かれたのは獵奇的な氣持からだけではなかつた。かく云う筆者自身若かりし当時、二三あちこちの撮影所や劇団のめしを喰つた人間だつたからである。

早速筆者は写真班員同道天神橋六丁目にある京阪ビルへと車を飛ばしたが、既に其処には事件を物語つてくれる材料は跡形もなかつた。

以下は筆者が当時の被害者や天六ビルの関係者等より詳細にわたつて手材した真相である。

### 一、策謀と組織

を企み警察のリストにのせられているなか〴〵の強か者なのである。

戦後派青年の共通な心理は罪惡感に乏しい点であると東大の心理学教授が、日大事件の左文や、公金拐帶事件の早船等の犯罪心理を解剖した結果述べているが、日映株式會社の発起人總代である社長多田公共(二一)も御多分に洩れず罪惡感に乏しく虚無主義に犯され、信じられるものは金以外にはないと放言し一攫千金を夢みる典型的アプレ青年であつた。彼は大阪の守口にあるK商業高校を首席で卒業した秀才で、日映株式會社を叔父の多田光房や仲山真三と創立する以前にも、二三度、インチキ商売

田は地元の近くにある京阪ビルに白羽の矢を立てたのである。

幸い同ビル四階に彼の友人の第三国人勝山某が、國際タイムス社の大阪支社長として巢喰つてゐるのを頼つて訪れ、同ビル事務室の一室を借り受けたい旨話を持ちかけると、勝山は

「それは丁度よい所へ来てくれた、うちの本社から大阪支社を閉鎖しろと内命が来ていた所なので、それだつたら、このまゝ引継いで貰おう」

と二つ返事でOK、國際タイムス社大阪支店の後へ事務所を構える事となつた。

薄汚れていた壁もござつぱりと塗り変え机や椅子の調度類も出来る限り美しく粧い女事務員二名をおき(実は一名は専務多田の情婦)いよ〴〵日映株式會社の看板は掲けられた。

春のきざしには未だ早い二月中旬の事であつた。

大都會に住

む映画俳優志

望者達は大抵

眼が肥えてい

て、そなたや

すく新興會社

の宣伝に感わ

されはしない

が、草深い田

舎で日夜悶々

の情を抱いて

いる志願者達

とたやすい、彼等は其処で日映友の會なる「俳優通信養成」機關を設け主として地方の志望者を網にかける方針を樹てた。先づ全国各地の地方新聞紙上に一斉に左のような広告を掲載した。

### 映画俳優新人養成!

映画スターになる近道!

有能の青年男女諸君は一日も早く、本會に入会せられよ、小為替三百円同封申込みば案内書並に規則書を送る。

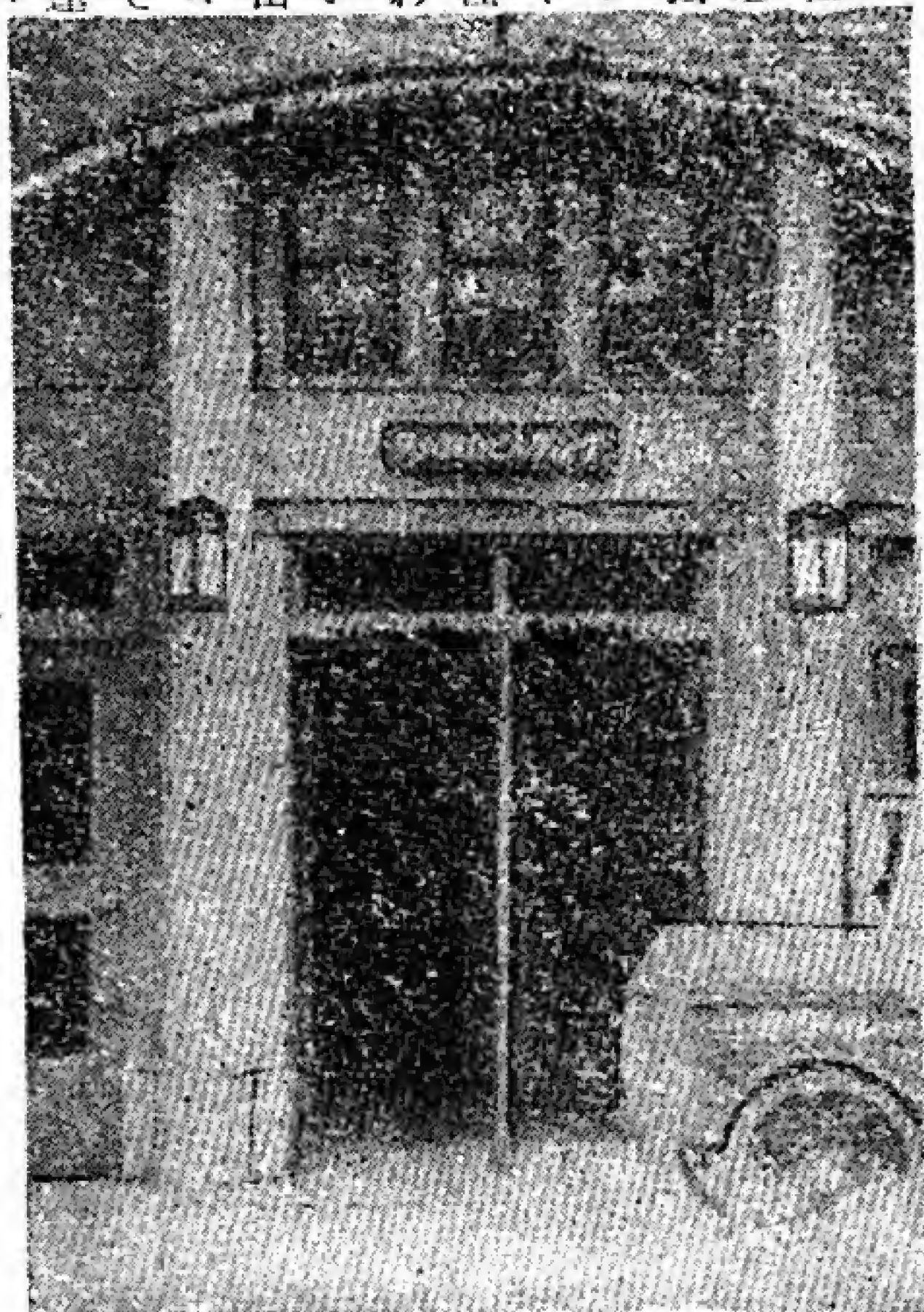
大阪市北区天神橋六丁目

天六京阪ビル内

日映株式會社友の會

### 二、網にかゝる女群

反響は物凄なものだつた。おそらく彼等達もこれ程までに殺到するとは予想もしな



日映株式會社の本據・京阪ビル



かつたであらう。

一週間後の天六ビルの郵便受付箱には、数百通の郵便物の束が投げこまれひしめき合つた。速達あり。書留あり、葉書あり。それらの申込み状は、目を重ねるに随つて夥々その数は増加する一方だつた。

ガリ版刷の規則書及俳優案内書二通で三百円也、千数百人の申込者だつたから計三十数万の現ナマが彼等の懐に転がりこんだ訳なのである。幸先よし、一同は喝采を博した。

社長多田は、りゆうとし  
たダブルの背広に二万円

もするコンピの靴を履

き、青年社長として

虚偽の賞録をいや

がうえにも高め

ていつた。

だがや

がて各地

から熱心

なスター志

願者達が大阪の

本社へ殺到して来るで

あろう事を考慮し、その対

策として日映株式会社の俳優寮を

京阪千里山線の沿線にある、花壇町と

千里山住宅地に設け、上阪した連中を一先

づ、其処へ収容する事となつた。

彼等は無論、男子志望者と女子志望者の

交渉を厳重に監視し、社の秘密の暴かれる

を極度に警戒した。

が一方、社長多田を始めとし、幹部の連中は、都会の空氣に汚れぬ地方からの美しいスター志願者達を甘言を以つて欺き、天六梅田近辺の連れ込み宿や温泉マークのいかかわしいホテルで情交を迫り、数名の処女を奪つていたのである。

### 三、友の會の事業内容

日映株式  
会社

友の  
會のマ

ークは旧  
東宝映画の

マークに酷

似させ日映

株式会社の社

名は、現在東宝

映画と緊密な連携

を保ちつゝある日本

ニュース製作の日本映

画社と同一名称で、(註)日本

映画社は通常日映と略称されてい

る)あつたから、一応映画界に詳し

い者でも深く探る氣にもならなかつたであ

らうから、地方の者にはつきり日映が友

の会を結成、劇映画の製作に乗り出したの

であらうと信じ込んだのも無理からぬ話で

あつた。其の頃また偶然の一致かどうか判別しないがニュース製作一本槍だつた日映が、東宝映画東京撮影所と協力、共同製作による劇映画「曉の非常線」池部良、若山セツ子主演のニュースキャメランとギヤングの斗争を描いた、監督、日映、松山清四郎の第一回作品を東宝系で封切つたのでます。日映友の會の運営には好都合となり、繁榮の一途を辿る事となつたのである。其の間、大阪中央公会堂に於て、映画演劇カーニバルを催し一部スターを拝み倒して借り集め、ようやく不満の両高まりつゝある。会員にお茶を濁している。

また、月一回の定例レクリエーション大会として京都にある松竹、大映の撮影所見学会を催し、スターと語る会等を行つたがそれ等に要する費用は全国から集まつた莫大な会費の何百分の一にも当らぬ少額の費用ですまされるものだつた。

数カ月経つた。寮で生活している者の中からもうやく不安な空氣が漂い始め、動揺が始まつた。

その導火線ともなつた主たる原因は、寮に生活する研究生宛にそれ々々の家郷から送られて来る書留、為替の類は総て社の連中が検閲と称して没収してしまふので金に困つた研究生の一部の者が抗議を申し込んだ所、事務多田は激怒し、

「貴様等は俺達に毎日、東京だ京都だ走り廻らせておきながら、寮でうまいものを喰つて芝居の稽古だとぬかして遊びまわつていやがつて、一体俺達を何だと思つていやがるんだ」

と大變な権威で怒鳴りつけられ、震え上がったのだが、一向に映画の仕事を与えられない訳でもなく、週三回、天六ビルの七階にある稽古場で開かれる講義も、案内書にあつた有名人の講師は皆目姿を現さず、代理の講師もろく／＼姿を見せぬに至つてはいくら映画界の事情にうとい、ぼつと出の志望者達でも疑問を抱かずにはおれなくなつて来たのであつた。

入会金三百円也、規則書及案内書、通信パンフレット代として五百円也、俳優養成所採用受験料一千円也、審査料四千円也と云う金額を収めてまで、入所しただけの甲斐があつたかどうか……。

しまつた！俺達は欺かれていたのだと、氣がついた時には、既に日映株式会社はそろそろドロンの用意を秘かに行つていたのである。

寮に在る四十名近い研究生を欺く為に、たつた一度、大映作品「赤い鍵」のエキストラとして提供、一人当り八百円近い謝金を受け取りながら、彼等には交通費、実費として、八十円也を支払つてゐるのみで、研究生を完全に喰つてしまつていたのである。

五月から六月にかけて、所轄警察署へ、しば／＼日映のインチキを暴く投書が寄せられていたが、警察の取調べにも、何分証拠が残されていない為、なか／＼検査する事が出来なかつたのだつたが遂に検査当局によつて鉄槌を下されたのであつた。

此のインチキ会社日映株式会社の友の会が斯くも莫大な金額を詐取出来たのは、全国



各地の無智な俳優志願者の弱点にうまく喰い込んだからで、最近此の事件に続いて、一千万円の日掛け金を詐欺、逃亡しようとして逮捕された近畿百貨株式会社事件（十月初旬）など、大都会には、無資本で会社を設立、善良な人々を喰い荒すインチキ商売が横行しているから、くれぐれも用心してもらいたい。



ふらふらと家を飛出し、人気俳優の山田某に甘言をもつて誘惑され、旅館の一室で尊い花を惜し気もなく散らせてしまった。

山田某の旅のつれづれの慰みものにされているとも知らず、彼女は、ニューフェイスとして監督に紹介するからとの言を信じ、数万円の貯金を彼に貢ぎ、毎日のように彼の後をつきまとい、遂に両親の知る所となつたが、その頃は既にロケーション隊も引揚げてしまつた後で、あれ程誓つてくれた山田某からは、その後何の便りもなく、欺かれたと知つた時には妊娠三カ月の身体になつていた。

#### 四、被害者の實態

#### （私は虚名の爲に貞操を賣つた）

天木てる代さん（十九） 仮名の場合。

彼女は和歌山県西牟婁郡××町の元町長の一人娘で家の財産は山林地等の不動産約数千万円を有する大金持であつたが、修学旅行で京都の松竹下加茂撮影所を見学した折の印象が忘れられず、昨年某映画社のロケーション隊が自分の町の近所へ来た時、

無論墮胎した。そして今度は夢にも忘れる事の出来ない日映のスター募集である。今度こそ！スターダムへ突入して山田をあつと云わせてやるぞと、勝気な彼女は敢然と応募した。泣いていさめる両親の言葉も耳にいらねばこそ、トランク二つに豪華な衣裳をつめこみ、嫁入つてからの小遣金にと、母親がひそかに父親にかくして蓄えてくれたあつた十数万円の預金通帳を胸にかくし、大阪へ到着したのが丁度市電の一番電車がアベノ橋を発車した夜明けだつた。

京阪ビル、どんな立派な所だろう。今日から私はスターの卵なのだ、胸腹らませて、天六京阪ビルの階段を踏みしめたのだつたが……

### 「或る舞踊研究生の告白」

ストリップ 福崎 壽江 (21才)

二十五年の七月でした。故郷の金沢から大阪へ飛出して来た私は、田舎で耳にした都会の華々しさよりも、もつとく、絢爛で妖しい夜の大阪の姿に、いつべんに魅惑され墮落してしまいました。

見も知らぬ大阪へ敢然と飛出して来たのは誰にも打明けてはいきませんでした、実はその春、大阪少女歌劇団と称する十五六名で組織された楽劇団が、私の村へ巡業に来た事がありました。平常歌劇雑誌や何かで、歌劇の踊子に憧れ、一生に一度はレビュウの豪華なステージに立つて美しい衣裳でフットライトを浴びてみたいものと思いつけていた私は、思い切つて其の歌劇団の振付兼演出をなさつていらつやる岡田亮介さんを楽屋に訪ねました。岡田さんは大変優しく親切に私の悩を聞いて下さり、大阪の話や、映画、レビュウの華やかな世界の裏話などを面白おかしく、三日間の公演中、毎晩忙しい中をさいて話して下さいました。

雪深い田舎で青春をこのまゝすりへらし、てしまふのかと悲観していた私は、親切で優しい芸術家肌の岡田さんの情熱に、ほつと救われた思いになり、こんな方と一緒に巡業の旅を楽しく続けていらつしやる踊子の方達が、うらやましくて、お別れの日、親友の横田さんと二人で次の駅まで見送つたり致しました。

いふく、列車がプラットフォームを発車し

ようとする寸前、岡田さんは、矢面に激しく、情熱のこもつた眼差しで、「大阪へ来給え、君程の美貌と立派な肉体の持主なら僕が必ず、一流のレビュウスターにしてみせる自信がある」と囁かれたのです。

その日から二ヶ月あまり、岡田さんの一言に、大阪へ飛出したくて、お茶やお華のお稽古事はてんでの上の空、追つて来る結婚式の日が嫌でく、とうとう父と口論し着のみ着のまま、僅かの小遣銭を持つたまゝ家を飛出してしまつたのでした。

名刺に書いてあつた南海本線の萩の茶屋駅で降り飛田山王町の岡田さんのレビュウ団の練習場を尋ね当たつた時には、流石に旅の疲れでぐつたりしてしまい、「よく来たね、さア腹が空いてるだろう、何を御馳走しようかね……」

と優しく言葉をかけて貰うと、思わず岡田さんの胸に身を投げて泣いてしまいました。

岡田さんたつた一人が、その時の私には頼りだつたのですもの。

ところが、日が経つにつれて、不可怪な事には大阪歌劇団の踊子の方達は皆目練習には来ないで、私と似たような境遇の人が六人、居るだけで、岡田さんは君達は第五期生で、今迄と違つた方針でショーの方を教えるからと、ジャズやスウィング調の流行歌のレコードに合せた、卑俗な振付ばかり



月一回の審査日でないとは審査は出来ないからと、審査料四千円也を納めさせられ、一応通知するまで千里山寮で待機しているようにとけんもほろゝの挨拶、それでもスターへの一念から重い足を引ずり、もう暫らくの辛抱だと我と我身を慰め励まし、一カ月、二カ月と耐え忍んだのだつたが、或る夜、幹部某から、東映の撮影所からカメラ

ラフエースのテストがあるから至急、五千円持って梅田駅へ来るようにと電話があり喜び勇んで、某と京都へ出かけ、その夜、明朝に延びたからと、四条の山海楼で、無理矢理真操を要求され、入社を条件に、彼女は肉体を許した。

スターになるかならぬかは、あなたの腕次第！九月二十九日大阪某夕刊紙に出たスター亡者垂涎の募集広告

### 俳優新人募集

新時代の映画界に活躍せんとするあなたの夢を  
実現するため奮って応募下さい  
採用人員 五拾名  
資格 年齢不問男女高小以上  
提出書類 履歴書、写真  
携行品 筆記具、印鑑  
審査料 三百円  
日時 九月廿日 午前十時より  
午後五時 二回  
撮影所公認 日本映画 関西フリーランサー協会  
大阪府東区東船場新大町前会館（市電大船場下車）

この広告を見ただけで、もうスターになった気持ちにさせられる名文句？ 十一月六日大阪某夕刊に掲載された広告、前の広告と大分文面が変わっているのに御注意！

### 俳優新人募集

映画スターへの登龍門！！

◎現職の僱待望の映画出演 研究が出来るアメリカン・テム・フリーランサー協会は目下

関西よりの新人出現に大きな期待を寄せております。

◎只今 銀幕にあなたの姿が活躍する登龍門

は開かれた、希望者は奮って応募下さい。

規定 採用人員 五拾名 締切 十一月廿日

必要書類 履歴書、写真、並法定受付け審査返信料

資格 年齢不問男女高小以上 携行品 筆記具、印鑑

審査料 三百円 提出書類 履歴書、写真

日時 九月廿日 午前十時より 午後五時 二回

撮影所公認 日本映画 関西フリーランサー協会

大阪府東区東船場新大町前会館（市電大船場下車）

まゝにホテル等で関係を強いられて、許していた。彼女は日映幹部検査の日、千里山の寮を飛出し、近くの千里山住宅地の某方に下宿していたが最近夜の女に転落してしまっている。

### （僕はスターの夢

### 破れ風呂屋の三

### 助になつた）

浅田鉄夫（二十五）

仮名の場合。

彼は名古屋市中で愛知時計株式会社の外交係を勤めていた

が、将来劇関係の業務に一度は携つて見たいものと念願し

ていたその矢先日映の募集で

ある。愛知時計の給料七千五

百円を、惜し気もなく棒にふる

り、大阪へ飛出して来たまで

はよかつたが、見事インチキ

にひつかかり、現在、千里山

り教えられ、おかしいなと

皆んな気がつき出した頃に

は、もうどうにもならない

破目に陥つて

いたのでした



「ねえ、ねえ、僕にこれ位の礼を返してくれたつて文句はないだろう……。」  
淫獣魔は、あゝ何と、信じ切つていた岡田さんだつたのです。  
「踊子の本当の魅力が出るのは、男の味を知らないうちやア駄目なんだ……」  
寿江、今夜は僕が、最後の仕上げをしてやるんだから、一寸苦しいだろうが辛抱するのだよ」  
と無理矢理、私はあつと言ひ聞に二十一才の尊い処女を散らされてしまいました。

後悔先に立たず、今更どうしておめく」と故郷へ帰つて結婚など出来ましようか、そして二ヶ月間の簡単な訓練の後、私達七人の家出娘達は仮面を脱いだ冷酷な岡田の手によつて、怪し気なナイトキヤバレーのストリップガールとして、稼がされる身になつてしまつたのです。  
時には、お座敷で金ストまでやらされた。私は、私達はそれでも岡田の手から離れられないのです。一度誘惑の淵に陥ちこんだ女の辿る道はみんなこんなものではないでしょうか……。

醒をうながしたい。

この外に、長崎県で小学校教員をしていた野村道子（二三）広島県の準ミス某女（

二三）元某劇団員、ダンサー等、家郷に帰るに帰れず泣く泣く、夜の巷に媚を売るようになつてしまつてゐる。

怖るべきは、スターへの無暴なる憧れであり、インチキ養成所の濫立である。

生傷がつくのであるから、アブレ娘達の覚

で後難のうれいはないが、女の場合は、一

男の場合は、これくらいの被害ですむの

はよかつたが、見事インチキ

にひつかかり、現在、千里山

り教えられ、おかしいなと

皆んな気がつき出した頃に







つて受付の人が洩らしては  
りましたがね」

「愚からもう何人ぐらい審  
査を終つてゐるんでしょうか  
？」

「何だかよう僕には判りま  
へんけど、女の方が長  
うかゝつてゐるようですわ」

男は妙な笑いを浮べてそ  
う云つた。記者は一寸氣に  
なつた。もし裸体にでもさ  
れたら、大変である。その  
時は逃げ出すまでと、度  
胸をきめて順帯を待つ。約  
四十分待たされる。

ようやく女事務員が、どうぞこちらへと  
隣室へ案内してくれる。

つい立を隔て、何か短かいセリフを聞  
説する声が入り乱れて聴えて来る。関西ナ  
マリのセリフは聴けたものではない。記者  
の一番先の受験者はそれでも熱心に、渡さ  
れた活舌法の練習を小声で必死になつて繰  
り返している。

北浜あたりの女事務員らしく服装もそう  
派手ではない、容貌は普通、何故こんな場  
所へ三百円也を捨てに來たのか不思議だ、  
向うもそう思つてゐるかも知れないが。

「貴女映画の御経験おありになるの？」

と一寸おじやまさせて貰う事にした。

「ええ、俳優クラブ（梅田の某寺に事務所  
がある由）の研究生の時に東映の燃え上る  
情熱に出演しましたの、でも、封切をまし  
みにして梅田劇場へ皆んなで観に行きまし



たら、後ろ姿  
ばかりで顔が  
映つてないん  
です、それで  
もつと勉強し  
直してからも  
う一度映画で  
使つて頂けた  
らと思いまし  
て……」

「此処を卒業  
した方で、映  
画界で活躍な  
さつてらつし  
やる方を御存  
知？」

「私くわしくは知らないんですけど、何で  
も青い山脈を撮つた藤本プロと提携してい  
るとかつて話ですけれど」

「もし採用になつたら会社おやめになるの  
？」

「ええ、勿論、どんな苦しい目に会つてもや  
はり抜く覚悟でございますの」

あまり、しつこく聞くと交に思われるの  
で、質問を打切る。と、つい立の向うから  
二人一緒に番号を呼ばれる。女事務員は手  
術室へでも通入つて行くような緊張した足  
どりで審査室へ！記者も一寸そんな素振を  
装つてみる。なか／＼演技力のいる仕事だ

小学校の教室程度の広さの部屋に凸字形  
に机を並べて五六名の審査員が一斉に記者  
の方を見る。一瞬キンチョウする。

一番手前が総務課長、その次が講師、元  
監督、吉林某、俳優星光一、花岡菊江、外

に助監督風の男三名、映画界のダニ見たい  
な奴ばかりだ。所長の張り紙がないのは、  
所長など名目だけで実在しないのだろう。

いよく厳肅なる審査が始まる。一番最  
初は活舌法だ、これは発声と舌の長短を驗  
べるものらしい。軽く合格、次は短かい簡  
単なセリフの朗読「愛染かつら」の一節を  
やらされる。審査員諸氏は尤もらしく各々  
の得点表に採点してくれている。合計点が  
何点か以上あれば合格者なのだろう。三百  
円の審査料の手前、しんどい事をやるもの  
だ。

監督氏の前へ来た、口頭試問だ。女に甘  
い男らしく、にや／＼している。

「現在職業は調査表では無職となつていま  
すが、何方かに扶養されている訳ですか」

「ええ」出来る限り純情そうに答える。

「貴女は学校も出ておられるし、才能も磨  
かれ、ば立派になろうと思ひますが、規  
約書にもあります通り一年間相当経済的な  
負担がありますが、それでも続けて勉強出  
来ますか」

「さあ、それは一寸」  
わざとつむいて答える。

「いや、なに、もし月謝などでお困りにな  
つた時には、養成所の方で適當なアルバイト  
の口をお世話する事になつてはいますか  
ね」

「アルバイトと申しますと」

「まあ最初は演技力も何も備つてはないん  
ですから、キヤメラの前へ立つと云つても  
エキストラ程度で、辛抱して頂くんですが  
……」

一応、家庭の状況、健康状態を形どおり  
訊ねられ、近目中に御通知しますと態よく  
追払われた。

## 俳優學校は

### 儲かる商賣だ

潜行受験の結果は無論、合格、入所費、  
月謝雜費等を前払いで払つて頂きたいから  
此の書状受取り次第至急御來社ありたしと  
御丁寧な通知状が來た。注意として一週間  
以内に入所費未納の者は採用を取消します  
と書いてある。一名に就いて一カ月一千元  
の月謝だから五十名なら五万円、新入生の  
募集は毎月行われるのであるから、ざつと  
少く見つても、二十万円は寝ていても  
懐へ入る勘定になる。

その内、講師連中への謝礼として、一人  
当り月三千元、大概講師は週一回來るか來  
ないかだから、五人來て貰つたとしても一  
万五千元ですむ訳だ。無論養成所のインテ  
キに氣づいた連中はどん／＼去つて行つて  
呉れるのだから、新しい連中の為の教室  
は何時も、用意が出來ている事になる。

養成所の家賃は、月二千元も払えば上々  
だろうし、それにエキストラに研究生を送  
つた場合には撮影所から、一人当り一日八  
百円の目当は出るのだから、そのサヤも取  
る。これでは損失の招きようが無い。

それかあらぬか其の後の各地の新聞紙上  
を注意していると、俳優養成の広告はあと  
を断たない。

最近、俳優、監督、カメラマン養成の  
講義録を売りつける広告を出している所が  
あるが、講義録なんかで俳優や監督の卵に  
だつてなれないことはわかりきつた事であ  
るが、それにさへ迷わされる幸の如何に多  
きことか――。



# ☆イミテーション では駄目だ

一休、自己の才能とか容貌に人一倍、うぬぼれの強い人間性、此の種の職業に憧れを抱くもので、顔さえ美貌であれば、スタイルさえ整つておれば、いや声さえ魅力があれば、後は何とかごまかしてやつて行けると、本人のつける自己評価は全くお話にならぬものだが、どうい世間はそう甘くない。

今かりに美貌であり、教養があり、実力が備つていたとしても、長谷川一夫や三船敏郎、原節子や田中絹代のイミテーション的な感じの人だつた場合には、悲しいかな、映画、演劇界はその人達からはそつぽを向いてしまふにきまつてゐる。長谷川一夫を原節子は一人で結構なのである。が哀しい事には、俳優を志願する大部分の人達は、俺は村で若原雅夫に瓜二つだと囁かれたとか、私は乙羽信子にそつくりでしようとか、まるでイミテーションである事によつて大スターになれる資格を有してゐるやうに錯覚してゐる人が多い、全く以て笑止の沙汰だと思ふ。現に原節子にそつくりだと宣され、またよく似てもいるが、東宝から売り出した岸旗江は、決して原節子を抜く事は出来ず、彼女もイミテーション女優の汚名から

# 帖心得者願志優俳

起ち上ろうと、必死に演技力の練習に心懸けた甲斐あつて、ようやく今日その地位を保つてゐるに過ぎない、彼女の場合など、原節子にそつくりだつたと云ふ事実が却つて禍を招いたやうなものなのである。また大阪の新世界の演劇場に時たま姿を現わす、大河内某なる、丹下左膳を流物にする俳優は、大河内伝次郎に何もかもあまりに酷似せる為に、却つて真実感より先に滑稽感が滲み出てしまつて、彼が舞台の上で、伝次郎をそつくりの演技をやればやる程、観客の笑の止まらなかつた事を記憶してゐるイミテーションは所詮、猿真似の域を脱しない、俳優としての重要な条件は、強烈な個性を有つ事である。

## ☆誘惑の魔にかゝらぬようにするには

### ぬようにするには

もし貴女が今仮に俳優を志望したとする、先づ困難をおぼえるのは、どんな所で勉強し、そのチャンス如何にして掴むかと云う事である。幸い巷には種々な養成機関はたくさんある。だが折角其処を卒業しても大部分の人達は、目指す撮影所なり劇団で俳優として活動出来ないのが現状だ。そこで貴方は芸術的欲望と青春の夢の實現出来ないのを嘆く日々を送るにきまつてゐる。そんな時、俳優養成所で知り合つた、講師の助監督とか俳優、宣伝部員の男から「君ほどの美貌の持主だつたら僕が絶対太鼓判を押すから撮影所の係へ一度話してみよう」とか

「劇団の座長と心易いから、推薦して上げよう」とかの甘言で囁かれると、余程しつかりした心の持主でない限り、もしやスターになれるのだつたらとか、貴女は何時の間にか自己陶醉に陥り、その男を信じてしまふだらう。

誘惑の魔手はこんな際に、ぐつと伸びて来るのである。カメラフェースのテストだとか、ロケーション先の監督に会いに行こうとか、その男は陶酔してしまつた貴女を赤子の手をねじる如く、易々と、旅館や、養成所、自宅の一室で、誘惑にまんまと成功するだらう。一度貴女の肉体を征服してしまつたその男は、もう二度と貴女の願いを聞き届けてくれるどころか。



「ふん、もう一べん鏡を見直したらどうだい」と毒づくにきまつてゐる。既に後の祭りだ。現在の映画演劇界には、そんな紹介制度では殆んど入社を許可していない。例え有名監督、有名大スターの紹介であつても撮影所の場合は、俳優組合全員の承認なしには入社出来ない現状である。結局、こんなつまらない魔手にかゝらぬようにするには、自己の實力をしつかり確認し、万一こんな甘い話が出た場合には、保護者なり、信頼のおける友人によく相談し、相手が金品を強要したり貴女と二人つきりになる機会をつくらうとする、言語が見えた時には、きつぱりと話を打切つてしまふ事である。美しい薔薇には刺があるの例えである。

## 関西にある俳優養成所の紹介

インチキ養成所ならいざ知らず、真にまじめな養成機関では、募集人員は極く少人数で大概十数人を限度とし、原則として入会金、月謝等は不要だし、撮影所直系の養成所では研究生期間の手当として交通費別



今般貴社京都撮影所新人スター募集の記事、一昨日××夕刊紙上で拝見、胸も踊らんばかりの感激に早速応募の手続を致しました私は当年取つて二十五才のうら若き青年であります、別紙履歴書にも詳細に書留めました如く、願ひますれば四才の春、芝居好きだつた父の背に負われて、村芝居の国定忠治赤城の子守唄に、板割の浅太郎の子として初出演、大好評を博しましたのがそも／＼芝居道への出発点とでも申しましようか、以来現在に至る二十年余の永い年月を、草深き香川県丸亀町の片田舎で、

一年一回の夏祭りに行われる演芸会では、ずつと主役を勤めて参つた者であります芝居は未熟かも知れないでありますし、映画俳優になりたい情熱は誰にも、ひけを取らないつもりであります。

所長様、是非／＼私を貴社のスターとして御採用あらん事を切に／＼祈つて止まないものであります。

同封致しました写真決して上原謙氏のブロマイドではいけません、私の素顔そのまゝを友人に撮つて貰つたものであります。如何でありますか、横に恥ずかしそりに立っている妙麗の女性は、私の恋人有原春江であります。

彼女も私同様応募する決心でいますから、何卒私達兩名を揃つて御採用、二人を一日も早く結婚させて戴けます様、伏してお待ち申しあげます次第であります。(以下略)

読者は此の一文を手にした係員の顔が想像出来るだろう。しかし本人は至つて真剣そのものなのであるから腹を立てる訳にはゆかない。ついにもう一つ、これは新制高校を出たばかりの娘からの便りである。

ニューフェイス募集係様へまいる。

一面識もない貴方様へ突然このような無頼なお手紙差上げました無礼をお許し下さいませ(以下中略)

## 応募者の嘆願書公開



按、教養、体格検査等を嚴重に実施し、合格の最大条件として、嘗ての容貌第一主義を攻め、個性、教養、演技の観点より、決定するようになってゐる。

だが折角、数千人の中から選ばれながらも、あまりの訓練の厳しさに耐えかね、途中で逃げ出す者がかなりあるやうだ。

また研究生期間中に恋愛、妊娠、折角の幸運を泥沼の中へすて、しまふ愚かな女子研究生もある。

三船敏郎の妻君は、彼が東宝の養成所で審査員の貴方様に恥をしのんでお打明け申しますと、私は在学当時ふとしたあやまちから、図画を担当して居られた某先生と肉休關係を結んでしまいました。私も絵画に興味を有して居りましたものでございませうから、夜の更けるのも知らず、先生の宿で芸術の話題に熱中致して居りました或る夜の事でした。先生は突然、それこそ不意に私の体を、ぎゅつと思ふくくなる位、強くお抱きになつて、「ねえ貴美ちゃん、許してくれてもいいや、君にはとつてもセックスアピールするものがあつて、たまらないんだよ、学校の職員室でも君の肉休の事で話が持切りなんだ」

と意外の事を悪い吐息とともに囁かれ、うつとりしてしまつてゐる間に、私は先生に大切な最後のものを捧げてしまつたのでございませう。(中略)同封の写真で御覧になりますと、私の顔はせいぜい十人並程度かも知りませんが、私の肉休を知つてゐる人達は皆んな口を揃えて、貴美ちゃんには物凄い性的魅力があると褒めてくれます

訓練を受けていた当時の同じ研究生だつたが、彼はスターになるまでは、はしたない真似はしなかつた、スターになるには、これは何の商売でも同じ事だが、信用を得る事が大切だ。

劇團関係の養成機関で推薦出来る所は、文学院、俳優座、大阪では制作劇場、青猫座京都では、くるみ座、喜劇座等で、放送関係では何と言つても老舗のNHK放送劇団である。

先生、女優として大成致しますには、顔よりも演技よりも、性的魅力が大切だと映画俳優説本にも記してありました。私は木暮実千代さんや京マチ子さんには絶対、ひけを取らないと自信を持つて居ります。(後略)

いやはや狂気の沙汰ではあるまいが、狂気の沙汰と云えば、撮影所宛に當時送られて来る俳優志願者の嘆願書の中には、まるでギャングか暴力団の脅迫状としか思えない物騒なものや、小指の先の肉を切つて同封してあるもの、血判を押してあるもの、中には如何なる奇妙な心理からか陰毛らしきものを同封して来るもの等、すさまじき限りである

ニューフェイス募集係たる者、よほどの覚悟と心臓を持つて、事にあたれば気が変になつてしまふ。

無論、この手合ひの応募者は書類審査のみで不合格となるのは絶対確実である。ゆめ／＼ちやちや自己宣伝をすべきでない。

(松竹大阪本社某宣伝係員の談話)





# 園房の木乃伊

田波太郎

七枝多玲子 絵

## 一、仕か けたワナ

S温泉での新枕以来、大月が精魂を傾けた夜毎の指導によつて、新婚三カ月になる此の頃では、晴子の姿態は、三十女も及ばない奇妙な爛熟を示していた。まだ二十才にしかならない新妻が、彼の特異な訓練に次々と新妻の妖花を開き始めるとあの夜、此の夜と新妻の上に思いを走せる大月は、居並ぶ同僚などは路傍の雑草にしか見えず、のべつに忍び笑いをやっていたらしくであつた。

大月は社内でもドン・ファンを以て自認する、厚かましい仲間の一人である。三十はとづくに過ぎ、晴子は二度目の妻であつ

た。無粋者の唐変木が初めて知つた女の味といふでもない、彼の痴果面に、同僚達も初手こそ月並のひやかしを進呈していたが、余りにも度が過ぎると愛嬌も鼻持ならず、馬鹿馬鹿しく、よい加減にしろよと怒鳴りたくなる有様であつた。

「女なんて結局同じだよ。下の御面相は一つさ」

などと高言を吐いていた彼が、自己が仕掛けた罠、蟻地獄ならざる色道地獄に陥ち込んだというか、木乃伊とりが木乃伊になつたというか、かような全くだらしないドン・ファンとなり終つた原因、つまり彼の仕掛けた罠とは、さてどんな効驗あらたかなものであつたか？

## 二、賢妻受難

大月が最初に結婚した相手は、女子大出の所謂賢妻であつたが、彼にとつては良妻でなかつた。彼の女性哲学、下の御面相は一つ、もうどうやら賢妻には通用しないらしく、彼と賢妻との間は、家計から趣味娛樂に至るまで万事に就て、男女同權を地で行く討論の連続で、いささかうんざりした上に、此の道ばかりは問答無用と、腕に縊をかける園房秘戯にも、賢妻は一向に乗つて来ぬばかりか、嫌惡の情をさえ示す有様であつた。

一口小言を呈すると、数倍になつて跳ね返つて来る。勢い腕力に訴えと、泣き喚

いてひつ掻きでもすれば、まだ可愛いところがあるが、つんと澄まして顔色一つ変えないのみか、

「こちらの頬もお打ちになつては如何？」

と右の頬を出す仕末、賢妻は暴力が非民主制であることを、家庭内でも強張するつもりらしいが、かりそめにも一家の主人である大月には、小馬鹿にされたやうで面白くない。男の面子を封じ込められたいまいましさが、積り積つて落ち行く先は、言わずと知れた赤い灯、青い灯。酔い痴れて終電車の常連となる。帰宅しないことも度々麻雀に熱中する。賢妻の生活設計は勿論、減茶減茶である。

大月の愚夫ぶりが原因であつたか、賢妻の賢婦ぶりが因となつたか、おそらく両者が相関関係を繰返したのであろう。大月初婚の末路は型の通り離婚となつた。

その当時関係が出来たのがバーハレムのマダムである。どちらも何人目かの彼氏彼女であつたが、蜂蜜に漬けたメロンのやうな、一寸得難い味はよいのだが、マダムには先天的破壊性慾症、マジズム、嫉妬の變態性、こんなのが一緒になつた。例えてみれば吉田御殿の千姫型の恐ろしい性格があつた。

## 三、見かけに

寄らぬ代物

大月と晴子が見合といふことになつて、選ばれたのが石神井公園であつた。

武蔵野台地の一角に湧出した自然水は、鹽地に溜つて瓢箪型の池となり、池の東西の丘陵には、櫟が密生し、北側に一段と高く盛り上つた円丘には、杉の老樹が鬱蒼と



茂つてゐる。狭く縫れた南面は木がまばらである。冬には野鴨が群棲するほど、野趣に富んだ公園なのだ。流石に大月、グアギナの古里に帰つたような興奮を覚えながら、天地創造の妙に感心してゐた。

待つ程もなく、黒明石の単衣に絹縹の単帯をきちんと締めた五十年配の婦人と、仲人役の大月同郷の先輩に、附添われどといふよりは、従えてといふ表現が適切な、花嫁候補晴子が現われた。

彼女は五尺三寸。十四貫、堂々たる当世娘つぶりを、ゆつたりと包んだ、平凡な仕立の卵色の麻のツーピースは、癖のない人柄を示し、白のサンダルに割と小さな足がスマートに納つてゐる。薄いピンクの肌は健康そのものに輝き、澄んだ大きき瞳が、敏捷に動く丸顔は、肉体の成長に似ず可憐な幼稚さを湛えてゐた。

何物の誤魔化しも許さない厳しきで照る太陽の下で、憶した気配は微塵もなく、軽く会釈して立つた晴子の姿は、武蔵野という自然のバックグラウンドに、素晴らしくマツチしてゐた。

派手にアップした頭髪、描き眉、附睫毛濃いアイシンシャドウ、肉感美の媚情的価値に重点を置く、薄いドレスのサロンの淑女達が、女であると思得る習性が身に就いてゐる大月は、こんな美もあつたのかと、彼の審美眼はちよつと途惑つた。

晴子の無邪気さが醸し出すアプレ的雰囲気に、彼女の母親はそつと腋の下の冷汗を拭いたが、こいつ見かけによらぬ代物かも知れぬわいと、大月は興味の穿鑿眼を光らせてゐた。

「君達いつまでもこんな所に坐つてゐては退屈だらうから、その辺を散歩でもしては

？」

掛茶屋で葛餅と餠饗という極く簡単な組合せの後、先輩氏が定石通りの提案をする晴子の様な生娘と、散歩をするなど絶えて無かつた大月、満更悪いものではない。

「では暫くお嬢さんをお預りします」  
神妙な言葉を残して、晴子と肩を並べた彼に、一緒について行きたげな風情の母親が

「この娘は御覧の通りの大柄で、知つたよなことを申しますが、ほんにまだねえなんで御座いますよ」

「又お母様のいつもの悪い癖、晴子お見合してゐるのよ。小供じやないわよ。ネ小父様」

晴子は先輩氏と大月に、同意を得るやうに微笑を送つた。

天真爛漫全くあどけない。大した代物でも代物違いだつたかな？

「アハハハ……では行つてらつしやい」

先輩氏の哄笑に、二人は弾かれたたように歩き出した。大月に寄り添つた晴子は、何の不自然さもなく、彼に腕を託した。

「フーム」

心の中で唸つた大月、彼女の慣れ切つた様な態度に、彼女の正体が又解らなくなつて来た。アヴァンとアプレの相違かなとも考へた。

彼等の会話は武蔵夫人から始つて、チャタレー夫人、ボヴァリ夫人と、夫人ものを一巡して、恋愛、姦通、ボーイフレンドは果して存在し得るかの問題から、産制にまで及んだ。晴子は近代娘としての教養は一通り心得てゐたが、

「男の方とダンスをしたり、御馳走になつたり、温泉へ行つたりすれば、お金が沢山

貰けるなんて、こんな素晴らしいアルバイトつてないじやありませんの。だのにどうして誰もがないのかしら？」

と彼女が不思議がつた時に於て、彼女の正体ははつきりした。晴子の表面からだけ受ける印象は、会社の女事務員などと少しも変らない。珍らしくもないアプレ嬢である。のみならず、セックスの問題などは、一つ一つの言葉の持つ意味が、彼女の頭の中で消化されてゐないが為、荒恥の念が起らないらしく、何の躊躇もなく口外する言葉は、本物のアプレ嬢の様に緩がなく、直截的で、ヒヤリとさせられるが、彼女の母親の言葉は謙遜でも何でもなく事実であつた。

「ハハハハ……」

思わず吹き出してしまつた大月は、この清純な処女が、彼の腕に抱かれて女になる時の姿を思うと、加齢的な歓喜を伴つてジンと彼の全身は戦慄した。

彼は晴子の歩行に従つて、ユラリと左右に波動するスカート、豊かに盛り上つた乳房の上下動、大月のような男には何万金を積んでも得られそらない珠玉の躍動に、今更の様に目を見張つた。

#### 四、ニヤニヤ居士

ベテラン大月と純情無垢な晴子との組合せの妙は、造物主の広大無邊の慈悲であるのか、悪戯であるのか。

「スロー、スロー、クイック、クイック。上げて、下して、静かに廻して、右へ、左へ……」

まるでダンスかバレエの教習のやうに、大月の号令に従つて、晴子の姿態は操人形

の様に動く。基礎練習が済む頃には、晴子からも号令が飛び出し、官能の反応は逐一口外するやうに操りけられた晴子のメゾソプラノ、誘導する大月のバス、一定のリズムを伴つた寝室のざわめき、この三者は渾然一体となつて、濃艶凄絶な交響楽を奏でるのだつた。

これが房中ノーマルな作法であると思つてゐる晴子は、全く真剣である。若さとはちぎれんばかりの体力を以て、夜を待ちあぐむ彼女は、日一日と円熟味を加えていくに反し、先生であつた大月は、最近では受太刀に息が切れる有様、死んだ鯉魚のやうにだらしない、ニヤニヤ居士の屈行燈先生となり下つたも無理からぬことであつた。

#### 五、悪友會議

一方社内内の若年寄連中の間で、大月に關して緊急動議が提出され、且つて大月が夜毎とぐろを巻いたバーハレムで密議が凝らされてゐた。兎にも角にも大月は、長年の閨友となく夜となく、労苦を共にして来た迷友である。

大月をかくもだらしない夢遊病者たらしめた根源を、とくと調査して後対策を構ずるが至当である、という事に話が一決した「ね、マダム。君も随分大月には思召があつたんだから、何かいい智慧を出してくれよ」

中の一人が、冷めたく澄ましているマダムに助太刀を求めた。

マダムは籠を与えた男を、彼女の方から何人か捨てたことはあつたが、大月のやうに、男の方から捨てられたことはなかつた。宝塚から映画女優と、且つては相当騒がれ



た彼女のブライドが、小娘のような素人女のために踏みじられた蘭蕙の炎に、身を焦していた時だつたが

「そうね、明晩でも、大月さんを開んで夫婦和合の秘訣を聞く会でも催したらどう」とさり気なく提案した。何分大月の迷友達のことさ、早速助平根生を出して、マダムの案に衆議一決した。

皆が引揚げた後に残つた石山、彼は何回となくマダムから肘鉄を食つた、言わば大月とは恋敵の間柄であつたが、その夜は例にないマダムのサーヴィスを受けた後、何事かヒソヒソと策を授けられている様子であつた。

## 六、マダムの陥穽

翌朝、腰の落つかぬ大月を、凱旋將軍のように取り巻いた連中の歓声で、紫煙の渦にどよめいていた。ブルーのドレスを着たマダムが、大月の首つ玉にかじり付き、盛んにウイスキーを勧める。いつものイミテーションとは違つて、本物の十三年物らしい。彼が一寸トイレットに立つてもマダムがついて来て世話をやく。ボックスに腰を下すと膝に馬乗になる。

「おいおい、こんな場所で興義の興演をするつもりかい」

こんな野次が飛ぶ頃は、いささか酩酊した大月が、秘伝の公開をほつほつ始め、喜ぶ迷友連は

「晴子夫人のために乾杯」

とあげるグラスが何回となくカチカチと鳴つたが、マダムの目配せでそつと席を外した石山には、誰一人気付かなかつた。

石山がハレムを出したのは八時過ぎであつ

た。目指す大月のスイートホームは、西武線沼袋駅から徒歩で十分という郊外にある空はどんよりと曇つて初冬には珍しく生暖かい夜だつた。月があるので思つたほど暗くない。恋は盲目と言うが、石山が決行しようとしていることは、全く無茶な話である大月が留守の間に晴子を口説き落そうというのである。場合によつては家宅侵入並び強姦罪になる公算が大であつた。今様千姫の正体を現したマダムが大山を使つて恋の意趣返しをした上に、あわよくば晴子を捨てた大月を、再び彼女の胸に抱こうという謀計であつた。脳に鐵がない。少々馬鹿だという意味で、脳ツルさんの異名を持つ石山、成功した時はマダムの寢室にノウノツク権利を与えるとの約束に、一も二もなくオーケーと来たわけであつた。

大月の家は戦後十二坪制限中建てられたお粗末至極なものであるが、兎に角独立家屋で、隣家との境は檜の生垣になつていて丹田に力を入れて深呼吸を一つした石山は表戸に手を掛けたが錠がかゝつていゝらしい。何故かほつとした気持の石山は、戸を叩くことを躊躇して、暫く立竦む彼の耳に、屋内から女の声が漏れて来る。大月が帰っている筈がないかと、生垣の蔭を利用して窓辺に忍び寄つた石山は、全神経を聴覚に集中した。

ローズ色の柔い光線が、グリーンのカートテンを通して、ほのかに洩れて来る部屋、それは大月夫婦の寢室であつたが、官能の痺れを刻々と喋る女の声が、或は高く、或は低く、咽ぶが如く翳々と続き、ゴロゴロゴロ……、地獄の釜がたぎる様な気味

悪い呻きが、合の手に入る。

さては先を越されたか？ど奴であろうと迷友連の誰彼の顔を思い浮べた石山は、どじを踏んだ口惜しさに、地団駄をふむ思いであつたが、そんな怒りは世にも妙なる秘戯の前には、白眉の月のように淡く消え失せ、いつの間にか自らも熱い血潮をたぎらしながら、一心に耳を傾けているのだつた。

丁度その頃千鳥足の酔客が、沼袋駅の改札口を出ていた。石山が事を済ましてしまつた後では効果薄い。成るべくなら仕事の最中に大月に帰らせたいと時間を計つていたマダムが、引とめる悪友連をどうにかおさえて、大月を開放したのであつた。

## 七、ハッピー・エンド

毎時計の上  
りに正確な大月  
の帰宅が、どこ  
で狂つたのか九

時が打つても帰つて来ない。夜毎の愛を囁きあう時間であつたから、燃えたつ晴子の





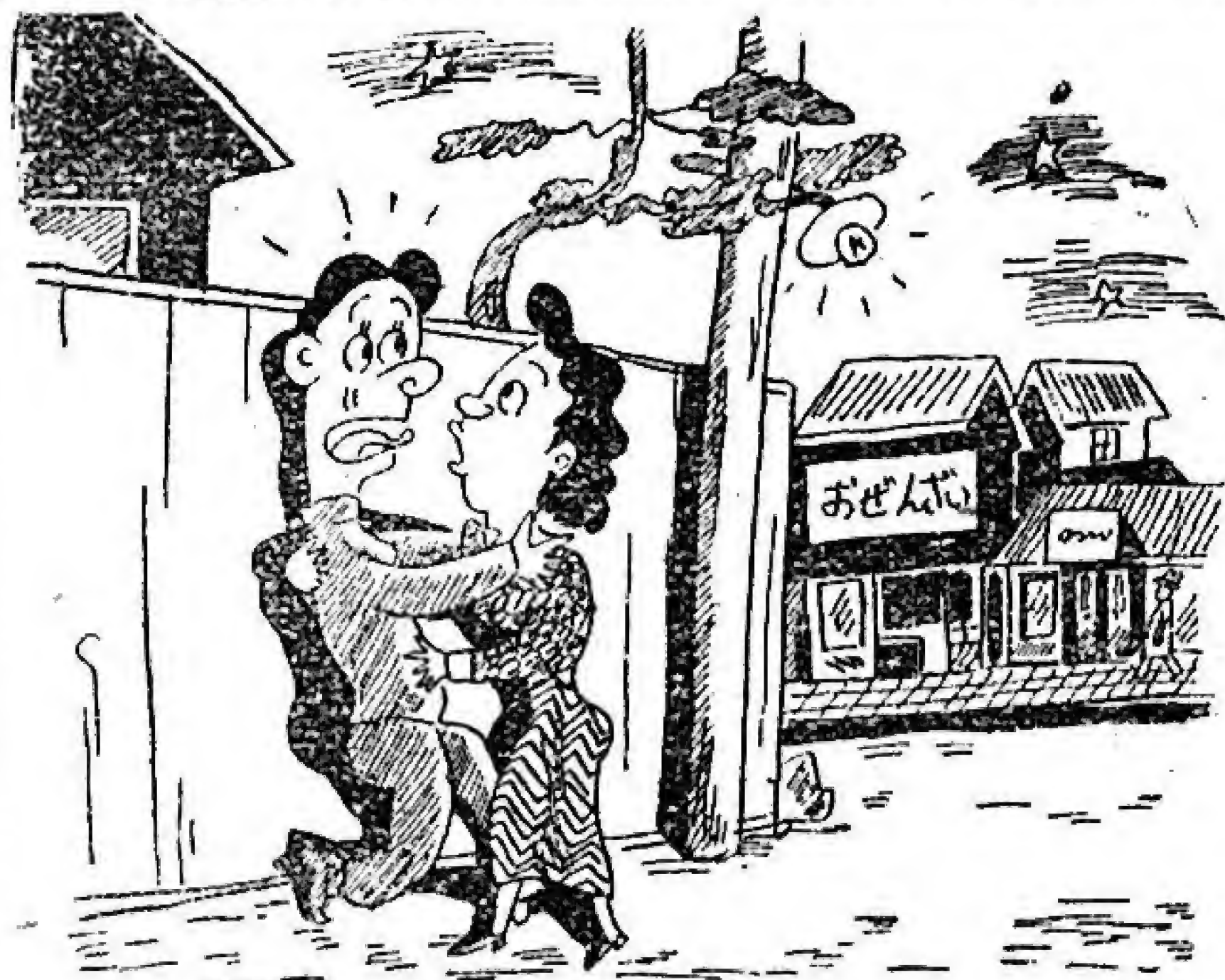
肉体は、充されぬ空虚に悶えていたが、やがて十時が打つた。火の気のなくなつた火鉢を、抱くようにして雑誌を読んでいた晴子は、

と首を縮めて立上ると、羽織を脱ぎ、紅の扱帯一つになつて蒲団に潜り込んだ。一日と柔らかな味を増した腰の紐が、チラツと覗いた蹴足の、滑らかな白さにもうかがわれた。

## 漫画と小話の扉

キツスの味 (さかろ・ますを)

彼氏「ねえ君、キツスでほんとうに甘い味がするね……」  
彼女「あら、わたし今おせんざいたべて来た娘なのヨ」



## 地 震

夜明け方に地震あつたので、宿屋の女中、二階から降りてきた都会の若夫婦  
「明け方の揺れにはお驚きになつたでしょう」  
と云えば、顔も紅くせず  
「気がつかなくなつたよ、僕たちも揺れていたンで」

## 普通すぎる

田舎出の花嫁と花婿が新婚第一夜を或るホテルで明かし食堂へ出ていく時  
「新婚に見えないよう、普通に振舞うンだよ」と花婿が注意した。  
テーブルにナフキンがあるのを見て、花嫁こゝそと  
「あんた、これ晩に使えるわね」

## 煙 突 ？

ガラ空きの三等船室で、或る男が大の字に寝ていた。それを見つけた坊や  
「母ちゃん、あのおぢさん、エントツ立ってゐる」

## 死んでまで

水死女の屍体を始めてみた男、感じ入つて  
「足をひろげて上むいて……成程ねえ」

彼女は小説の読みさしに暫らく目を通していたが、間もなく騒動に引込まれたように、彼女の首がガクリと派手な花模様の枕の上に落ちた。その時何処から現れたか、音もなく硝子の寝姿に忍び寄つていく真黒い影があつた。

それから小半時、石山が窓辺に忍び寄つた時は、あの陶酔のコーラスが始つたばかりであつた。

態々舞合は大詰に近ずき、女のはく息が長く尾を引き始めた。

「畜生！畜生！」

と呟く石山が、握り締めていた生垣の枝が、ビシツと折れたその音に、ハツと我に返つて、近づいて来る乱れる靴音を聞いた

あわてて身を縮めた石山が、生垣の隙間から覗くと、靴音の主は大月ではないか。

マダムとの約束では、十二時までは決して大月を離さぬからとのことであつた筈である。石山は混乱した頭でいくら見直しても

大月に間違いない。靴音は正しく大月の家の前で止つた。背筋にゾツと寒いものが走つた石山、起らんとする事態の重大さに身震いしたが、流石に脳ツルさんだけある。

彼が犯しつゝあつた背徳行為はケロリと忘れて、妻を寝取られた大月が急に哀れになつて来た。

「大月君、おれだ。石山だ。静に静に」と囁くと大月の腕をとつた。闇の中から湧き出たような男の姿に、ギョツとした大月、暫らく酔眼を見据えていたが、

「アリアツ！君か。又何しに此処へ……」

と頓狂な声を出しかけるを

「シーツ」

と制した石山は、大月を窓下に引張つて行くと、窓の扉を目で指し示した。

大月の狐につままれた様な顔が、一瞬緊張したが、クライマックスらしく、鼻にかかつた硝子の台詞は、大月が聞き慣れたものである。酔気忽ち吹つとんで、大月の蒼白な顔面は引き釣つたように凝縮した。

「おい手伝おう」

悲壮な石山の言葉など聞える筈もない大月、騒動者への憤怒に、殺気を孕んだ呼吸も荒く、ツカツカと勝手口に進み寄ると軒下に積まれた薪を掴んだ。大月の勢いにつられた石山も薪を握つていた。勝手口から侵入した物凄しい形相の二人の男が、寝室の襖をサツと足で開いた時、彼等の目に写つたいとも平和な光景、それは仮寝の美女の胸上に蹲まる一匹の黒猫の姿であつたあの気味悪いゴロゴロは、猫の喉から出たものであつた。

唯ならぬ物音に目を覚ました硝子は、異様な二人の姿を、胸におちぬ眼で眺めた。大月のこれ又胸におちぬ眼と暫く絡み合つていたが、

「あたし夢を見てたのかしら……」  
と彼女は呟くと、急に恥ずかしく、蒲団を被ると

「フフフ……」  
と含み笑いを洩した。急がしくて思考を整理していた大月、勢いよく薪を投げ捨てると、

「硝子！」  
万感の叫びと共に、彼女の上に身を投げかけ、顔一面に接吻の雨を降らせた。驚いた黒猫は、茫然と突つ立つた石山の足元に飛びのくと、ピンと耳をたてて、不思議な人間の世界を見詰めていた。

いきなり猫を蹴とばした石山は

「チエツ、馬鹿にするな」  
と力なく呟くと、朝霧のように足元から立昇つて彼の胸奥にまでヒタヒタと忍びこむ寂寥の影に、追いたてられるように外に出た。



世相諷刺奇譚

社用族候補生

能の登一三

曾根三太郎画



三太郎

一、ヒズ女史の深情

サラリーマン生活というやつは、ちよう

どヌルマ湯の風呂につかつてるのと同じことだ。じつとがまんしてりや尻の下あたりがボカ／＼温かいが肩が寒い。といつて目

優秀なのは次々来て、次々オサラバしてしまふから、十年も机にかじりついて野郎どもと来たら頭も度胸もないクセに、上役のキ

的も立たないのに思いきつて飛び出したら、とたんにハツクシヨンと風邪をひく。だからすこし骨の硬い、頭のいい男なら、はじめからサラリーマン生活なんか足をつゝこみやしない。だから、甲斐性なしの、意気地なし、頭もニブけりや、腕もない男のカスの掃き溜めみたいな卑屈な世界である。学校を出て、入社した当時こそ、月給なんか安くてもエエ、フンコツ碎身、もつて社業の発展を計るツモリだつたが、さて、二三年もたつてみると、重役にまで立身出世できる好運にあたるのは宝クジの百万円をせしめる夢に等しく、部長になるには、ヨッポド社長に血縁の濃い間柄じやなかつたら望みはもてん、まあ、精励格勤二十年もしたら、平の課長のドンジリぐらいになれるかも知れん、エ、とこで係長かな？、主任で停年になる連中だつて多いんだから、と判つてくる。そんなアホな一生が送れるかとい見限つた氣骨のある男なら、辞表一本、ボンと叩きつけて出て行つてしまふ

ンタマを握り、なるべく仕事の責任はかるく、もつばら月給とボーナスを同僚とくらべて一円でも多からんことを乞ひ願うという要領を本分とする。

で、わが親友金田クンも、年令二十七才だが、その意味においては実にモハンのサラリーマンなのである。朝と晩のタイムレコーダーを捺すに一分の遅刻も早引もないから、人事課の考課表はいつも百点満点なんだが、かんじんの仕事をズルケル点について、所属の経理部のナンバーワンの豪傑である。ソロバンはじいたり、伝票めくつたり、やゝこしいこまかい数字をつけることはモトモト不得手で、自分がやつたならボロの出ることはうけあい。だから隣席の水島さんになんとかかとか上手に押しつけちまう。この水島さんたるや、会社の中ではニツクネーム出目金。十九で入社して二十八才になるまで、処女を守つていた、いや守らざるを得なかつた残れ残りのヒズ女史である。背が低くて胴まわりが太く、鼻がひくくてひどい近眼、縮れつ毛で唇が土人のように厚いてんだから、なんぼタデ食う虫は好き／＼といつたつて、この出目金女史をクドク物好きな野郎はいない。わが金田クンが冗談に一ベン喫茶店へつれてゆき、二ヘン目に映画館へ案内したら、出目金女史、有頂天に感激昂奮、談る金田クンをムリヤリに公園の松茸料理をふるまつたんだが、その料理たるや、松茸が火傷するほど鍋の湯が沸つていたのおどろいたさすがに、会社では同僚の手前、氣取られぬように注意してゐるんだが、なんしろ、机を並べてゐるんだから、出目金女史、隙さえあれば脚をからんだり、手をぎつたり太股をつねる。他の女の子とチョツと立



話でもしたら、たちまちキリリと眉を吊りあげ、怒めしそりに横眼でニラムんだからやりきれない。

その代り、仕事の方は金田クンの分まで二人分、出目金女史がサツサと片づけしてまわってくれる。で、金田クンは、もつぱら課長室と部長室へ、さも忙しそうに帳簿を小股に、ペン軸を耳に挟んで、ウロウロと出入りしてデモをやる。上役なんでもんは盲判つくだけで仕事のからくりなんてテンデ知らなくて、いゝから、話し相手が欲しくて仕方がない。「どうじやな、金田クン忙しそじやな」

とすぐ目をつける。しめく、早速、椅子を引きよせて、もつたいぶつて、帳簿をテキトウにどのページだつていゝ開けて、「ハイ、わが社製品の売行は毎月非常によくなつとりますな、現金の回収率はこのように良好でしてな、ハイ」

「アハハ、そそじやろ、そりやわが社製品は業界で一番評判がエ、からのう、まあ、忙しいやが一つ頼む、ときにどうじや、金田クン、今日の南海と太平洋の試合はドツチの勝じやろうね？」

とこうなればシメタもので、喋々とプロ野球の話で一時間や二時間はフットブ。課長の趣味は野球とスモウと俳句、部長の方は芝居と浄瑠璃と謡曲。エロ話ならどつちもエ、年して夢中だから肩がこらない。ツマリ、クソマジメに仕事するより、部長や課長の話し相手に時間をツブすに限る。そ

**脂粉の香りにむせるような美人にとりまかれて此の世の歡樂の限りをつくす  
キヤバレー、料理屋、お茶屋か闇屋のお株を奪つた社用族がのさばる歡樂境に  
現れ出たる社用族候補生金田クン行狀記。**

して、トキドキは、用があつてもなかつても、残業を一時間ほどやらす。それも、ハチマキでもして、ワイシャツの腕まくりせいゝ机の上を乱雑にとり散らかすのがコッだ。

「ホホウ、熱心じやのう、金田クン、御苦労じや」

とタチマチ部課長会議で、タノミもせんに昇給候補者の噂に入れてくれる。サラリーマンの要領たるや万事この調子。どこかの会社でも上役のお氣に召すモハン社員つて野郎ぐらい、ハツタリ性とオベンチャラ性に富んだイヤな野郎はないンデアルノ。

## 二、月給は丸残り

ところが、わが金田クンほどのモハン社員的能力にめぐまれていても、経理部だの総務部だのにウロツいてるかぎり、(お役所とか銀行は別だが)ふつう商品を生産販売してゐるいわゆるメーカー、商社や、世の行先が見えてゐる。なんといつたつて金を儲ける方の部課、つまり営業面の販売課とか貿易課とかで活躍しなきや、なかゝエエ地位にはのぼれない。商売の会社なら商売の方に働くことがいちばん早くお偉方方の注目するところになる。

月給は一万円のクセに、バリツと三万円ほどの純毛のセビロを着て、五千円のクツ本皮のカバンを提げ、会社の金で、大いに食い、大いに飲み、大いにきれいな女と遊べるナンテ、まか不思議な手品を誰ハバカラズにやれるのは営業部勤務に限る。一ヶ

月のほとんどを出張してりや、食うのも泊るのも会社の金、かんじんの月給は丸残りの上に、一日あたりいくらという出張手当の加算される。

旅先で旅費のピンを行く手はお茶の子サイサイ。汽車や汽船はモツバラ三等の普通に乗る、会社への伝票には二等の急行として計算すればいいし、できるだけ親戚や友人の家にころがりこんでロハで食わせてもらい、会社へは規定通り、一級旅館三食つき一泊金千五百円也の請求を出す。一ヶ月ウロウ地方をまわれば月給の他に三万や五万のカスリはちやんと取れるという合法的荒稼ぎは、どこの会社でも公然の役得だ。純毛のセビロで、スバ／＼と洋モクを吹かすぐらいは尻のカツパ。裏へまわればもつとエエことが山ほどできる。

「うーん、営業部の野郎、うまい汁を吸つてケツカルノ、ようし、オレも一つ、経理部から営業部へクラガエしてこましたろ、ウルサイ出目金と手を切るにもエエ機会やノ」

金田クンは胸を組んで考えた。出張員の出金伝票と清算書は、一まづ経理部へまわつてくる。金田クンとてサスガに、臭いぞ？と感ずいた。ハハア、営業部の野郎、こいう風にして旅費をチヨロマカセやがるんだな、とカラクリを見破つた。ところがむつかしいのは他の部へのクラガエだ。会やが大きくなればなるほど、各部の対抗意識が激しい。いわんや内勤

の経理部と、外勤の営業部とは犬と猿みたいな仲がわるい。片つ方は、「会社の金庫のカギを預つてゐるのはボク等やぞ」

といばつてゐるし、片つ方は、「カマボコみたい機にへバリツイテル腰ぬけが何をぬかす、ボク等が稼いで、内勤のヤツを養つたつてゐるのやぞ」と鼻息が荒い。部長同志のケンカも始終のこと。

「コナイ六ヶ月先の手形みたいなもんで集金してくれたら、どの銀行へ持つて行つたつて割るにも割れまへんで、会社の世帯は毎日何十萬という金を支払うて行かんなりまへんねんさかいにこまりますがな」

「アンタに商売の難しさがわかりまつか！第一や、出張費をケチ／＼しなはるし、交際費は締める、ソナナことで、他社の出張員と競争さゝれたら、ウチの出張員が負けろのはあたり前やおまへんか！」

と両方がハゲ頭にボツボツと湯氣を立てゝ年がいないケンカである。

「マアマア、両方とも待ちなはれ、どつちも会社の利益をおもつて、仕事熱心のあまりやさかいに」

社長や重役がおどろいて、留男に入るまでこのケンカは治まらない。そんな仲だから、いくら金田クンが営業部へクラガエしようとして虎視タタンと狙つても、その機会をつかむことは甚だむつかしい。ウツカリ営業部へまわしてほしいなんて経理部長や課長に洩らしたら、とんでもない悲劇がもち上る。

「ハハア、金田クン、わし等にタテツいて敵の陣に白旗を掲げようちうのかね？、よろしい！、今日限り経理部どころか会社を





え三太郎

長をクドイて貰う他に手がない。

「……エエと、どないしたら？、そや、将を得んとすれば馬を射るちう謠があるのやな、社長の二号さんブツカツてみたれ！」

社長の二号さんは、曾根崎新地で、小粋なスタンドバーをひらいてる。以前、曾根崎で左横をとつていたのを落籍して、昔なら黒板際に見越しの松というところだが、道修町きつてのチヤツカリ屋で鳴る社長、毎月のお手当にアホな金使りのソロバンが合わんと考えて、

「どうや、三三百万円資本を出したるさかいに、酒場をひらいたらエ、がな、お客はウチへ来る得意先を紹介したげるさかいに毎月会社へ集金においで。一現のお客が人つたらその儲けはソツクリあんだの程らしに

使うたらエエ」

ころんでもタダは起きない、馬糞でも拾うたら持つて帰つて、オモトのこやしにしようか、というぐらゐの社長だから、二号さんを養うのに会社の金を払わせるぐらゐすぐに知恵が出る。この社長の二号さん、毎月末になると、シヤナリと会社の経理部へ御集金に見える。朝鮮の特需をあてこんだのがサツペリわやで、税金もエライ

滞納してゐるんだけど、社長のお声がかかりの二号さんには、きちんと金を払う。ときには、経理部長の命令で金田クンが金を届けにゆくから、二号さんとは顔なじみだ。この機会のがすべからず！

「まあカーさん？、おいでやす、いつもエライお世話さんどすな」

マダム二号さん、昔のクセのぬきえもんニツコリ迎くれた。お茶代りにと出されたあつい特級酒一本にホロリと酔うて、

「マダムはいつ見てもきれいだなあ、……どう？ボクと一べん浮気してみないかい」

と白魚のような手をぎゅつと握つてみたら案ずるより生むが易しで、モジ／＼して

「……でも、社長さんに知れたらこまりますわ、カーさんがキライじやおまへんのですけど」

と悩ましく肩を落した。しめた、もう一押しで陥落大丈夫と、

「ちよつと話があるんだけど、店先じゃねえ」

とカマをかけたたら、玄人女は悟りが早い黙つてバーテンダーの下のクグリ戸を、金田クンにクグラセ、奥の自分の居間へ案内した。

居間のナニもええもんや、出目金のワキガ臭い味とちがつて、マダムの味は格別やアレ／＼、社長とこれでナントカ兄弟になつてしもたわけやな、と、シヤツ一枚で、

乱れた髪にクシを入れながら、

「奥はねえボク、営業部で活躍したいんだがなあ……」

とひとり言のようにつぶやいたら、マダムも指をしめながら、

「まあ……それホンマどすの？、指切りしてくれはりますか」

と、ペタンと横坐りになつて、しなだれかゝつてきた。これだから、つまみぐいの味は忘れられない。

「金田鉄太郎、右の者営業部販売課へ転勤を命ず、×月×日、社長」

社内告知板にベタリと貼りつけられたのはそれから五日目。どんなもんや、わが奇製作戦の効果を見よ、とは自分の胸の中だけの凱歌で、経理部長が

「金田クン君のような優秀分子を、営業部に引き抜かれるとは、ワシはくやしくてたまらんが、しかし社長の命令じや、致し方があるまい……まあ営業部へ行つたら、わが経理部出身ちゆう名譽にかけてもジヤ、うんと活躍してくれにやイカンノ」

と告別のアイサツをしてくれたとき

「ハツ必らずみなさんの御期待に添うべくフンレイドリヨク、以つて国家の……」

といふかけて、アツしもた。これは、八年前、学徒出陣の赤紙が来たとき、隣組の連中の前で一度ブツタ応召の言葉とおんなじやがな、とテレ臭くなつた。

### 三、旅費は會社持ちの

#### アルバイト

「社長から、特に君を推薦するちゆう話でな。営業部はわが社の第一線前線部隊、やりがいのある仕事じや。大いにがんばつてくれたまえよ。エエかな、経理部みたいな



インキョ仕事は、君のような優秀な青年には向かんと、ワシは前から君に眼をつけつつたわけじや」

営業部長の石川さんもエエ加減なお世辭をならべる男だ。社長の二号さんに一発巨弾を放したら、二号さんの寝物語りで社長は即座にOK、一枚の半紙が告知板に掲示されたら、社内中、わが要領居士金田クンを社長の名ざしの優秀なモハン社員として羨望と嫉妬の注目を金田クンに集める。これがサラリーマン生活哲学かも知れない。イヤハヤ、ばか／＼しい限りだ。

受持区域は四国の香川、徳島、愛媛、高知四県、はじめて問屋へまわるんだから、というので、つきそつてくれたのが、平山という主任。恒例というんで、旅費の仮出金金五万円也。途中で不足したら、電報ガワセですぐ追送してくれるという有難い話わが社の名譽を傷つけんようにとかで、さつそく心齋橋の一流洋服店を呼んでくれて、パリッとしたオーダーメイドの背広の仮縫い、ワイシャツやネクタイは北浜の有名洋品店、コードパンの靴に、ぎゅつと鳴る牛皮カバン、散髪してこい、ヒゲは毎朝剃れ、と馬子に衣裳どころのさわぎでなくまるで結婚式の花むこみたいになきわりがよつてたかつて身ごしらえしてくれる。

これが頭の先から足の先まで会社の金。軍隊なら官物の、員数のとやかましいが、会社の金で一切新調してくれて、そつくりそのまゝありがた私物になるんだから、ありがたくて涙がチヨチヨ切れる。あゝやつぱり営業部に限るわい。スフ入りサージの服のヒヂを光らせ、うつとしい黒い袖カパーをハメて、ソロバンなんかハチいていたら一生ウダツはあがらんわい、眼がさめ



私が一昨年暮から今年四月まで北海道函館の巴座という常打ちの芝居小屋に、いた時の出来事である。

私の幕中生活は随分長いが元来私は楽屋風呂というのがいやで、大森浜近くの津軽湯という銭湯に毎日出かけた。

こゝの番台女に三十七八のキンさんと言う女があつた。

そのキンさんが突然、情夫である男の急所をナイフで一突きにして殺してしまつたのだから驚く外はない。

キンさんが番台に座る様になつたのは今から十四年前、二十五の時であつたというそれまで、遊廓はなやかなりし頃吉原の娼婦として働いていたが、感ずる所あつてかたぎになり、かたぎのふりだしが突に銭湯の番台女であつたというのである。それから流れ流れて、この北の果て北海道までやつてきてしまつた。十四年間も番台女を廻けるというのは容易な事ではない。それも数限りない無数の銭湯を歩いたというのである。

娼婦あがりだけに、ぼやつと番台に坐つていたのではなく、かたぎになつたというものの元来が商売上りだけにその方には関心が深く男の肉体を誰はかする事もなく商売上見る事が出来るのがなんとも言えぬた

## 男湯を覗く番台女

潮

マ

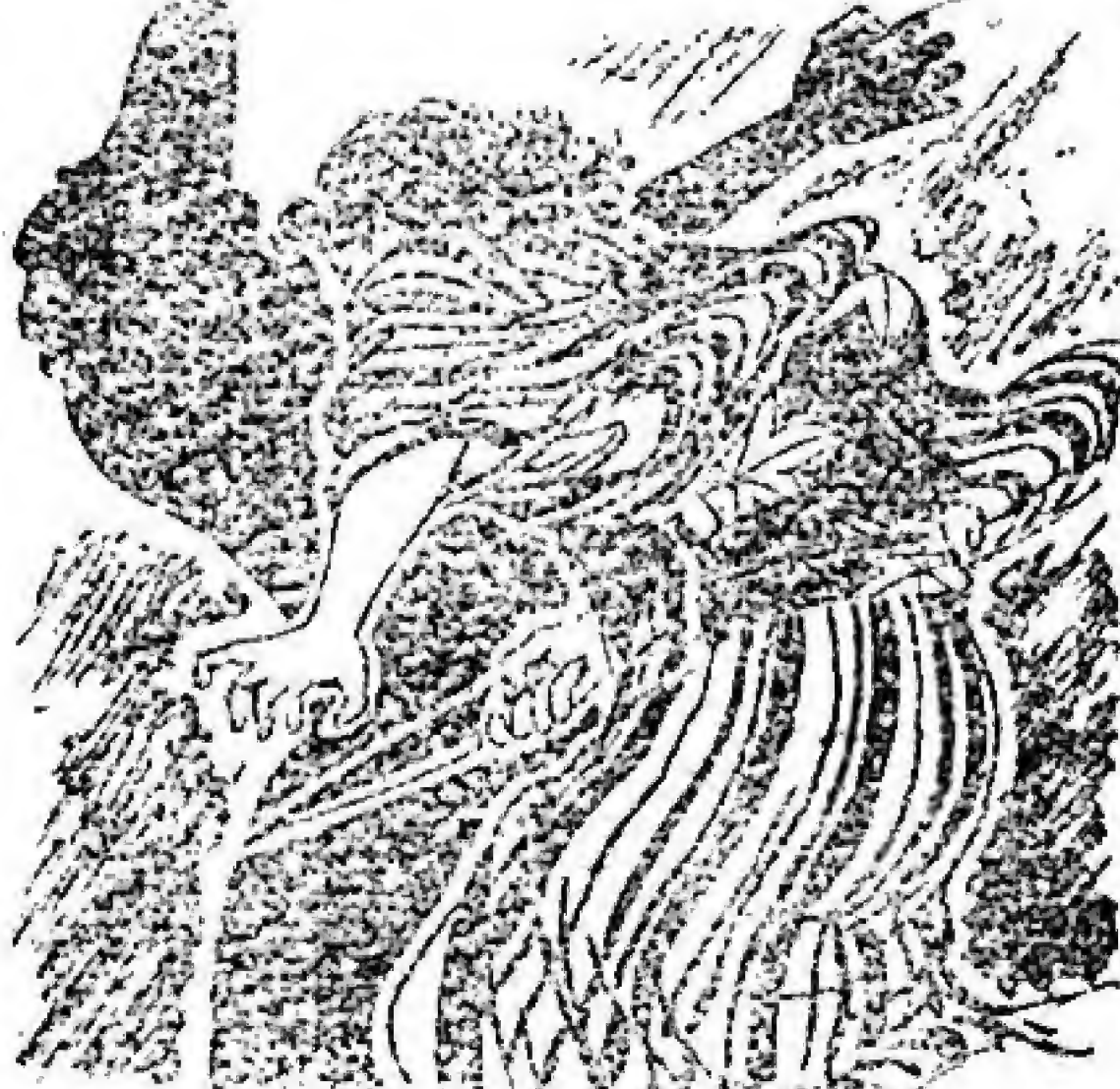
リ

のしみであつた。

どこへ行つても銭湯だから数限りない男がやつて来る、体格のいい、屈強の男、やせた男、きれいな男、ぶ男、さまざまである初めキンさんは浅草田村町のよしの湯という銭湯の番台に坐つたのだが、間もなくこゝでキンさんは中村という二十一の若い人好きのする男と知りあつた。中村はこれも十四年も前から軽演劇はなやかなりし頃の六区の軽演劇役者であつた。

人間裸にすれば誰も同じ、キンさんがこの中村なる男に惚れたのは言うまでもなく顔や職業ではなく、その代物であつた。

五年もの長い間娼婦生活をしてきたが、ついぞ、これ程男らしいたくましいのには通つた事がなかつた。それにすつかり惚れ込んでしまつたのである。



キンさんは間もなく中村と同棲生活に入つた、その喜びに正に絶品、天下無敵！今迄、数え切れない程の男を抱いたがこれほど女の肉体をかきみだして身も世も忘れて天国へ登る様な気分になつてくれる男はいなかつた。キンさんは夢中になつて、もう一生この男をばなすまいと決心した。だが相手は役者、女出入りの多い彼の事であるからあたら娼婦上りの番台女などに何時までもうつゝをぬかしてゐるわけがない。

彼は突然浅草から姿を消してしまつた。彼女と別れる手段として旅に出てしまつたのである。キンさんは頭も狂わんばかりにいきりたつたが何時までたつても彼はもどつてきはしなかつた。

「畜生！どんな事しても探してやる」東北方面をずつと旅してあるいと風便りに聞いた。中村をさがし求めてキンさんも旅に出たのである、だが女一人で生きて行けるわけがない。その中に大東亜戦争が、おつぱじまつてしまひ、役者も殆んどが召集されたり慰問に出かけたりして、その消息はわかるわけがない、キンさんは半ばあきらめて、又前と同じ番台生活に入つたのである。それというの中村とのあの夢の一夜がわすれられず、あの喜びを再び得たいものと役得を利用して、誰でもない、私を夢中にくれるたくましい、人一倍すぐれた男はないものかと血まなこになつて探したしたのである。



た。

山陽線で宇野へ、連絡船で高松着。一ヶ月ほど田舎の間屋まわりをしたが、商売の話など十分か十五分。あとは、アイサツとかなんとかで、もつぱら、間屋のおやじや番頭と、ホドよい料理屋、バー、待合で飲んだり食ったり、女とふざけたり。なるほど、営業部の野郎どもはミソナでつぶりに、顔色がいゝはずだ。内勤みたいに、ウツトシイ出勤時間なんてものはないし、天気の良いノンキな四国まわりをしていれば月給になるとはありがたい。

平山主任はまだ三十三、若くて主任になるんだから会社では敏腕家で鳴らしてゐるんだが、さて、こうして一緒に旅行してみると、とんでもないインチキ野郎だとアツケにとられる。三等に乗って二等の汽車賃をかせぐなんてミミツチイことはやらん代りに、もつとエゲツないことをやつてやる。

一日間屋をまわつて、夜に旅館で出張報告を書いて本社へ送るんだが、平山主任のさかんに書きとばす報告は、アレアレ？かんじんの本社あてより、他の商売敵の会社あての方が多いじやないか。

「金田クン、君かてボヤ／＼してたらあかんで、ウンと自分も儲ける手を考えや、つまりこんな田舎まわりしてたら、ウチの会社の商品より、ヨソの会社の製品の方に欲しがつてるもんが多いことよりわかるやろ？」

「それは平山さんの応待をわきで聞いててよく判りますよ」

「さあそこやがな、ヨソの会社の商品かてえんりよせんとどん／＼注文とるんや、品物はヨソの会社から間屋へシカに送らせる

だからキンさんは始終魔物に取りつかれた様に男の脱衣場ばかりにながし目をおくり決してこれはという男はのがしやしなかつた。帰りがけにそれとなく話しかけ、男に有無を言わず約束を交わした。そして風呂屋が終つてから、旅館なり待合なり公園へなりしけこんだ。

それからその男にあきると又別な所について又番台女になりすまし、男をみつけた。流れ流れて正に流転稼業、肉慾の虜であつた。子供の出来る度に墮胎してしまつた。

それにしても天下広しといえども、浅草のみよし湯で始めて探したあの中村ほど彼女を夢中にさせる男はキンさんの前に一人も現われなかつた。

その中村なる男が函館巴座、私の小屋にたずねてきたのは吹雪のはげしい今年二月十六日の風すぎであつた。

女房だという見るからにあでやかな年増女と二人でやつてきて

ねんさかい、ウチの会社には全然わかれへんやろ」

「それじや、ヨソの会社が儲けるだけで、平山さんの儲けは？」

「アホかいな、誰がロハでブローカーするもんかいな、ヨソの会社へ注文を仲介したら、口銭の五分はちやんと手数料がもらえらねんでいゝ、二百万や三百万の仲介は毎月ヘイチヤラや、間屋へおろす口銭は二割がふつうやさかい、かりに三百万円仲介したらヨソの会社の口銭は六十万円、ボクの手数料はその五分、つまり三万円入るわけやがな、金田クンかて、これから田舎の間屋まわりをしたら、オモロイほど内職か

「なんとかこの小屋で働らかしてもらえないだろうか、たゞ食べて行ければよいから是非お願いしたい」

人はありあまる程いたので、私は生憎ながら断らざるを得なかつた。神ならぬ身のがこれキンさんの探しもとめていた中村であるとはつゆ／＼知らぬ私である。知つていたらなんとか親身になつて骨折つてやつたのであろうが――

実に運命というものはいたずらである。モシなんでしたら、こゝへ行きませんか？私はアサヒ座という劇団を紹介してやつた。

なんでも彼の話しでは、目茶苦茶の御難にあい、青森で一座を解散してしまひ海を渡つて函館の巴座に來たら、常打の小屋であるし、なんともなると思つてやつて来たというのである。

今考えて見るとキンさんと別れてからはずつと病氣していたものらしいのである。

習日この話をなげなく私がキンさんに

せぎができるんやで、アハハ」

こんちきしやうめノ役者にはナンボでも上手があるもんだ。ウチの会社の仕事でロハの出張旅行をやらかせ、ついでに、タンマリとアルバイトかせぎをしてやがるノ

ようし、ボクかて、やつたらな損や、金田クンは寢床へ入つてからも、頭の中で千円札が何十枚、何百枚とヒラ／＼宙に舞うユメをみて寝られなかつた。金、金、金、世の中は金さえ握つたら勝ちだ。ドコからみたつて女が惚れそらない狸のパケモノみたいな社長が三十も年下の二号さんの肉体を占領できるのも、金の威力なのだ。金だ、金だ。出目金女史のシッコイ要求だつ

してやると、キンさんはともかく会つてみたい。最初の旅の土地はどこだというので小樽だと知らしてやつたが、キンさんはすぐあとを追いかけて行つたのである。それから二日目である。私は巴座の楽屋裏部屋でなにげなく新聞をひらいて驚いたのである。

――鐵奇事件、番台女、情夫の男の急所をナイフで一つきに、殺害し、云々――という意味の地方版の記事であつた。どんないきさつがあつてキンさんが中村を殺す破目になつたのか、それ以来私はキンさんにあつていないから真相はわからないが、おそらく中村に奥さんだというあだつぽい年増女がいて、再びあんなに待ちのぞんでいたのによりをもどせなかつたからであらうと思う。

X X X X X

て手切金を叩きつけられればそれでしまひだし二号さんをめぐつて社長とナントカ兄弟になつてなくても、金さえ握つたら、どんなきれいな若い女でも自由に征服できるぞ。ようし、この平山の野郎の上を越すくらい手荒く儲けてやろうノ

#### 四、社用族御誕生

「やあ、ご苦労じやつた。平山君の出張報告を讀むと、初陣の君も大いに活動してくれたそりじやなあ。はじめて間屋まわりをして、一月に三百万円も注文をとつたのは大手柄だ。アツハハハ、やつぱり、ワシが見こんだだけある。大いにやつてくれたまえ。ついでには今夜は君の慰勞会を一席設け





よりかな。アハハ」

金田クンに花をもたせてくれるために、平山主任は出張報告に大分デタラメをならべておいたらしい。たゞし、自分のアルバイトの方の儲けもチャツカリせしめたのだから、それぐらいの仁義はヘイチャラだろう。

その晩、道頓堀のキャバレーへ、石川部長のおともをしたのは花岡課長、平山主任と金田クンの三人だった。

「あら、イーさん、お久しぶり／＼ハーさんとヒーさんもおそろいなんですのね。……このごろはどちらで浮気なすつてらつしやるの。長いことお見限りね。お飲物は何になさいますの？ ウイスキー、お酒？」

立てつゞけに雲雀のようにしやべりながら、一人の女給が、四人のボックスへ大きな尻を割りこませてきた。三千人ぐらいいゆつくり収容できる大キャバレー、下の舞台では専属の楽団が賑やかなオーケストラを演奏していた。外の街はまつくらな停電つゞきなのにこのキャバレーの中は、自家発電のため、夢のように美しく輝いている。「あたし、アケミといふますの、どうぞよろしく」

金田クンに名刺を渡した女給は、よつぽど部長や課長となじみが深いらしい。そろ／＼次々ボックスへやつてくる女給、部長たちを見つけると、わつと歓声をあげた。「アツハハハ、よう、お嬢さん方がそろ／＼

×つたな。おい、アケミちゃん。白粉代だ一枚づつプレゼントする」

「あらいつもすみませんわね。ありがとみなさん、イーさんからよ／＼」

石川部長がボンと卓上にほろり出した分厚いドル入れ。アケミは心得たもので、その中から、千円札を一枚づつぬきとると、われもわれもと駆けよる同僚の女給たちにむろ／＼にバラまくのだった。二十人ぐらいに渡つても、ドル入れは、さほど減つたらしくもなくボックスリと膨れている。いつたい、千円札が何枚入つてのだろう？ 経理部勤めで、札束を扱いなれた金田クンはさす三百枚ぐらゐは大丈夫と睨んだ。百円や二百円の出金伝票でも係員から社長まで

えろ、アハハ、酒が強くならんけりや、エエ商売人にはなれんぞ」

アケミの体をかかると膝の上に抱きあげながら、石川部長はふうつと熟柿のような息を吐いていた。

「たゞしだな、金田クン、得意先とか役人をこゝらへひつぱりこむときには、こんな調子に飲んじやダメだぜ。取引のときには先に酔うた方が負けだから、ビーンと神経を張つてね。こつちが酔わずに相手を酔わす作戦が要るんだ。むつかしいぜ。会社の金で飲むのも」

温厚そうだが、なか／＼油断のできないつらがまえの花岡課長がニヤリと苦笑を浮かべた。

「そうじやとも、花岡クンはその道じや苦勞しとるからのう……どうじやい、平山クンも例の方はぬかりなくやつとるじやろう？」

入つの検印が要るのに、こゝでは女給のチップに千円札が羽根のように軽くまかれてゆく。評判のケチな石川部長が、まさか自分の月給でおごるはずはない。きつと会社の金にきまつている。

金田クンは、いつもいまの税金に大きな不審を感じる。交際費という得体の知れぬ莫大な金が、事業の必要経費として、税法上、ちゃんと大びらに認められているのだ。純益を多く出せば税金を目的とび出すほどしぼられるから、どこの会社でも、交際費だの、機密費だの、宣伝費にかこつけて、できるだけ必要経費の支出を多くする。こうして、ムダな金をバラまくのでなければ、税金が安くならないのだ。こんな珍妙な税金迷れのアブク金のおかげで、社用にかこつたこんなダダラあそびが出来る。庶民住宅は遅々として建たないが、ダンスホールやキャバレーや映画館などはど／＼貴重な鉄やセメントを使つて立ち、工場は停電つゞきで生産はガタ落ちのくせに、こんなキャバレーの中は天国のように照りかゞやいている。

「おい／＼、酒や料理をもつとど／＼運んでこいよさあ、金田クンも男じや、こんなところでえんりよせんでもいい。若いうちは底ぬけほど飲んで胃袋をきた

花岡課長はちよつと顔色を青くしたし、平山主任はうつむいた。

「アハハ、なんでもない。みんな一ぺんは通る道じやよ。あんまり眼ざめのエエことじやないがなあ、まあエエ……金田クンもそのうちに同じことをやるじやろう。」

どうもやつぱり、どこの会社でも、営業部の連中の方が、内勤の方より人間が一枚上だというのは本当らしい……。

「ようし、もう、スツ裸になつた気で、今夜は飲んで飲みまくつたる。部長や課長に介抱させたら／＼」

あつぱれ、社用族候補生か、金田クンはニヤツと笑つて、コップに熱い酒をなみ／＼とつぎこんだ。





# 永田町界限

## 三四郎

### 一、憧憬の崩壊

そろう代議士の秘書なんかやめようかしら。……

議事堂裏の議員会館の一室で、きょうも柳子は、堆高く積んだ書類の整理に手もつ

けず、暮れなずむ赤坂台の茜雲を、ぼんやり眺めている。

大山口シズエ……小松谷天光……今中山マサ子……昆蟲つる子……等々。

柳子の理想は、この女史たちを含めた、一連の女代議士であつた。

だが、彼女の政治女性としての憧憬は、

醒めては天下の權を握り、酔うては美人の膝を枕にする。あゝ、これは誰が言ぞ。國政審議の殿堂國會議事堂に於ける大臣、代議士、女秘書の愛慾葛藤を描く暴露小説永田町界限

秘書パツチをつけて、五カ月も経たないうちに、はかなく崩れていった。かねて抱いていた。杞憂の通りであつた。

しかも柳子の憧憬が無残に崩れたのは、この女史たちの或る者が、いわゆる本能的な聴聞を世間に暴露したというやうな、単純なものではなかつた。

そんなことであるならば、世間に現われると否にかゝわらず、柳子自身が秘書パツチをつけるまで、いや、つけている今でさえ現に経験していることである。

土建、運送業大瀬乃新八代議士の女好きは、選挙区でも隠れない事実で、本妻の妹二人を二号、三号にもち、人妻、娘、未亡人を問わず強引に關係をつけ、ボンと札束で後くされを解決してしまふ。

一年間に百人以上の違つた女を経験すると豪語する、新八代議士の秘書となつた柳子も、そうした未亡人のうちの一人であつ

たから、男女いずれの軀にも潜む、もう一人の男や女が、どのような営みをしようとも、それを寛大に許容する習性を身につけていた。

あの本能が「真、善、美」へ近づく哲學のためのものでなく、形而下的「春画、猥本」の、單なる復習であることは、もはや当代日本の常識であつて、天光女史が、「げんしゆくなる事災」を絶叫したものも、無理ではないと、柳子は心の底から思つていた。

女体にしる男体にしる、肉の鋭敏なる箇所が抱擁昂奮絶倒の際は、相手が有婦の夫であることも、代議士同士であることも、忘却夢我の境に浸るのが本当であるからださつきまで、倒せばベッドになるこの長ソファで、柳子も新八先生とその境地にあつた。(男女七才にして席を同じうせず、ちゆうのは、裏を返せば実は、我々の祖先が如何に助平であつたかを告白している) その祖先の榮光を傷けまいとするのが、大瀬乃新八代議士の色道要諦であつた。

だから——その代議士の秘書である柳子にしてみれば、女代議士たちが、どのように自分のもう一人の女に、私的生活に於て忠実であらうとも、問題でなかつたのであ



る。だがその表裏たる政治活動からも、何等學ぶところがないという数々の事実に接した今では、一連の有名女代議士への憧憬を持とうにも持てなかつた。

新八代議士を踏み合にして、愛欲のほかの、もう一つの女の世界……真実の政治を知ることの可能な世界を、三十二才の柳子は、純粋に憧れたのであるが……そしてそれは、代議士としての大瀬乃新八氏を始め多くの国会議員の、政治的醜怪さに愛想が尽きた結果……の柳子の女代議士に寄せた最後の希望だつたのであるが……

今やそれも失つた彼女は、良人の戦死を知つた時の虚しさ、一人の子供が病死した時の虚しさ……あのうつろな眼差しを、自分の人生に向けなければならぬのであつた——コッコッ。

ドアを叩く音がした。

「どうぞ」

入つてきたのは××常任委員会の専門員有松久太である。

## おもてげい うら うら 二、表裏の裏の裏

一般的には知られていないが、この専門員こそ、国会の裏側の大変な存在である。

あんな男が代議士に出て何をするというのだろう——たとえばこの新八代議士の如く、戦前は馬車曳きの八公であつて、敗戦の下サクサに旧軍港のトロッコ一台をかすめたのがきつかけでありとあらゆる資材を何とかしてしまい、忽ち数千万、一億を超

えるともいわれる金をかき集め、この力で当選して、どうしても署名しなければならぬ或る書類に、大瀬乃新八の瀬の字が、せでなければ書けず、戸籍がそれならばいいですと、相手に笑われたような男——

それが国会へ出て一年も経つと、曲りなりにも政策らしきものを論じて、うむ、やはり代議士になる奴は、無学でもあすこまでになるんだなと感心させることが世間で聞々ある。

そうした代議士の裏には、必らずこの専門員というものがあつて家庭教師の如く、手にとるように仕込むのである。

試みに、衆議院公報附録の「主として議院との関係に於て、必要と認める官公庁の主要職員抄録」というのを開いてみると、全国の知事副知事は最終頁だが、この専門員の名は、議長副議長、各常任委員長の次ぎ、第二頁に内閣専門員から決算専門員まで、ずらり顔を出し、この名簿に限り「内閣総理大臣吉田茂」などは、五十数頁中、第六頁に載つてゐる程である。

衆、参議院には廿二つづつ常任委員会があり、専門員は両院とも百名前後ゐる。

坂西志保、(外務) 円地与四松(経済安定) など民間から入つた筋金入りもゐるにはいるが、それは極く小數で、大抵は各省の、局長、部長、課長級のより、つまり行政の奥地に於ては、それら官僚のエキスパート、この専門員が自ら代議士に打つて出て当選すると大抵、その党の政策調査会長が幹部になる

そんな朝氣のないものは、専ら金權無能

代議士の養成係になつてしまふ。

いま入つてきた有松は××省の元課長で養成係の方だ。

「暗いですね。点けますよ」

すっかり暗くなつていたのを、物思いに沈んでいた柳子は気が付かなかつたのである。

有松は、入口のスイッチを捻つた。

パツと部屋が明るくなると、緑色のクッションのいゝベッドに、毛布と枕が乱れたまゝになつてゐるのを柳子は、あわてゝ片づけた。

同じ緑色のソファが三つ、電気ストーブを囲んでゐる。豪華な机、電気時計、電気スタンド、書類戸棚、卓上電話、入口を仕切るどつしりしたカーテン——この調度は、毛布と枕をのぞきみな国民の税で賄われたものである。

九千万の国民から、選ばれた四百六十六名の代議士が、ひとり／＼政務を勉強するように、当てられたものであるにもかゝわらず、その幾割りか、馬削道鏡、平清盛等の荒唐の歴史の復習に余念がないのだ——

「例の相良半島観光ホテルの件ですが、民由党野党派の小石よしえさんが、明日の委員会、反対をぶつらしいです。電話で渡れるといけないので、やつてきました」  
「そうですか。またいくらか要りますね。三万円も、持つていきましうか」  
「さあね」

相良半島観光ホテルはゴルフリンクを併設して、国際観光客を誘致するというので

事業資金の半分一億一千万円を見返り資金の中から出してくれと、新八代議士が紹介議員で請願してゐたのである。

社民党、共産党が反対だつたが自民党は民由党を抱き込んで採択を承諾してゐた。その民由党の小石よしえ代議士が、明日の院内委員会、反対演説をやるといふ。

柳子の手から五万円渡したのは先週である。もつともよしえ代議士直接でなく、その男秘書にであるが、昨日も院内廊下で、女彌次將軍にふさわしくない微笑を、行会つた柳子に見せたのは、札束を懷にした証人である。新八先生にも報告して置いた。第一、あのリーゼントのツバメ秘書が、雷の如きよしえ女史に、毛じらみ一つ隠せる度胸はない。

——それが一日にして引つ繰り返つたのである。

だが、有松もおかしいではないか。

あの計画は、ゴルフリンクの設置費に秘密があり、それが分らなければ、反対論の根拠はないので、その秘密は、諸議員の会社と、紹介議員の新八代議士、秘書の柳子以外は、有松だけが知つており、誰れが反対しても問題じやないと云つてゐたその有松が、よしえ代議士の寝返りを、さも重大らしく、今ごろ云つてくるとは——

専門員の両股膏藥は、絶対に専門員自体のマイナスになる。まして有松は大瀬乃の金縛りになつてゐる。資料を先方へ売込む筈はなかつた。

もう三万円小口よしえ代議士にぶつつけようかというのに、(さあね)と流る有松



を、柳子は訝かしく見直した。

この請願が採択されたとしても、見返資金交附は、年改まつてからなので、新八代議員も自党の委員には約束の半金位しか、やつてない。

それでもキヤツシュ二百万円は、疾うに費つてゐる。

なるべくこんなことで新八先生の預り金を使い込みたくない柳子だから、実は、小口女史への追加三万円も今夜は出したくないのだ。

——急に、有松が柳子の耳に口を寄せた。小口女史は今度の議員団に加つて米国へ行きたくなつたんです。森島外務専門員に卅万円出せば、民由党の派遣代議員二名追加のうち、女史は入れて貰えるらしい。

柳子は呆れて卓上電話を取上げた。とても一存ではいかなので、新八先生に連絡のためである。

「……以上の諸事由により本請願は、外貨の獲得を増大促進するものと認められる、依つて本委員は、この請願の採択に賛成するものであります……」

翌日、院内第十委員室で小口よしえ委員は、こゝろ演説を結んで自民党席の拍手を受けた。

### 三、大臣を戀う女秘書

（横山××相が、離れにでもベコ／＼腰を曲げ過ぎる……と首相が洩らしたそりだ）

これは自民党代議員、特に幹部級で大臣

や次臣になれなかつた連中にとつて、一大

ニュースであつた。そんな或る日——

「柳子、君、少し佐々幹事長に付き合つてくれんか——どうも、君に目を着けたらしい」

新八先生が、相良半島視察の帰り、六ッ浦のホテルで、風呂から出ると云つた。

「誰れがこんなおばあちゃんを——」

「ばか！ちりめんのきんちやくは、金を入れる度に恰好がよくなるんだ……柳子のきんちやくは、日本一だよ」

三日に一度は、新しい女と経験する新八代議員がこゝろ太鼓判を押すんだから、柳子は、自分の持ちものを、この頃では少しうぬ惚れている。

ベッドで、そのきんちやくに、もう手をかけ乍ら

「おれも少し気にかゝるが、佐々と付合つてもきんちやくから、抜き出すとき、スツボンと〇〇〇〇〇〇品物は、そうザラにあるまいからな。お前が芯から、浮気しないと安心するよ——」

「バカねえ……佐々先生と、お付き合いする、あなたはどうか？ 次官？××委員長？」

「うんまあ、その上は大臣だから、馬車曳きの八公じや、次官位が、出世の天井だな」

「私をつけた上に、幾らかゝる？」

「安いんだ、百万……」

「私をつけたければ……」

「百万円とられつ放しだらうな」

「私はどうなるの、あなたが次官になつた

ら」

「おい……急に腰を〇〇くなよ……どうつて、お前の好きなことをさしてやるさ……」

——内閣改通の噂は間もなく実現して横山××大臣は辞職、それに伴つて次官も變つた。

××政務次官大瀬乃新八氏が出来上がったのである。

「××政務次官、××政務次官の自動車は正面玄関へ廻つて下さい……」

国会衛視室のマイクが、自動車広場に高らかに響く。——百万円の党献金。それも議事堂内外に伝わつていく、日に何十回のこのマイクを聴くだけでも新八先生は満足であつた。

広場の一隅には全国から上京したオラガ代議員先生に面会する者が群集する面会所がある。

新八先

生を見送

つた柳子

は、議事

堂から議

員会館へ

出る石廊

下で、こ

の人群れ

を唇を噛

んで眺め

る。——

——佐々英

造代議員も××大臣になつた。

新八先

生と較べ

ものにな

らない彼

の政治的

なセンス





とスケール。無知と厚顔の政界ジャングルを突き抜けてきた、インテリのみが知る苦役を、ほのかにその白哲の両顔に刻んだ男振り。

新八先生の指示で、佐々を待合へ呼び出すことには成功したが

(いや、大瀬乃君の熱心さは分つたよ)

と、そのまゝ、柳子の手も握らず、待たしてあつた自動車で、さつさと帰つた心憎くさ。

その後ろ姿を、女竹を対込んだ離れ座敷の縁で、ちつと見送る自分の心に、新しい水脈を見つけた泉のような、激しい恋を感じた柳子であつたが。

いま晴れた冬の陽の中、議員面会所に溢れる群集を見下し……この群集を足場として、一体いくたりの代議士が、誠の選良なのであらうと思ひやつた。離れかの膝に突つ附して、わつと泣き出したい衝動に駆られた。

疑問！憤懣！哀愁！乳首で自慰を激しく求める、あの奔流のような思ひが、ぐんぐんこみ上げてきたのだ。

そのまゝ議員会館へ走り出した。

受付で鍵を受取り、大瀬乃新八と名札の掛かつている部屋へどんな恰好で飛び込んだか分らない。

内部からの指し込み鍵も忘れ、夢中で電話をかけていた。

「大瀬乃政務次官の秘書です、××省、自民党本部、どこかで佐々先生を、佐々××大臣を探がして下さい！」

佐々英造！佐々英造！

かきむしられるようなこの情感は、あの男に抱かれることによつてのみ鎮まる。

柳子は、そう命ずる自分の本能に、全身の毛孔から油の汗を滲ませ乍ら、とりすつていた……

二時間近く、交換手を奮励し、外線につ

ながせて自分でも……懸命に、佐々の所在を調べたが、首相官邸、国会議長室、党本部、××大臣室、その他、廿数カ所……何処にも佐々はいなかつた。

ぐつたりと、柳子は、ソファに仰向けに崩折れた。

青白い額の汗が冷えていく……。光琳の小菊模様の、着物の裾が、太もものあたりから乱れている……

音もなく入つてきた専門員の有松が、いきなり、その乱れたあたりに、顔を伏せるようにして、突き入れた。

数分後、

「佐々先生……あゝ佐々先生！」

——有松を横に抱きしめた柳子は、低くうめきつゞけていた。

## 四、女秘書追放ならず

「委員長よろしいか、バカヤロといつても

よろしいか！只今、小林君は、本員をバカヤロといふました！委員長よろしいのか！

国会議員が議事堂内で、バカヤロ！と他の議員を咆哮してよろしいのであるか！委員長！よろしいか！」機関銃の連射に似た耳を覆いたい大声である。

衆院議長応接室で、議院運営委員会が開

かれている。今日は議事日程の他に、社民党から議員会館の使用制限や、不品行女秘書追放案が出るというので、新聞記者、カメラマン、これに出席委員(代議士)の秘書など、特別傍聴者が赤い絨氈の廊下まで溢れそうであつた。

今の騒ぎは共散党の一委員が、(お前ら)と民自党の委員にいわれて(何を云つてやがるバカヤロ!)と捨て台詞を渡らしたそれを捉えての応酬で、子供の喧嘩さながらであつた。傍聴席の柳子は、そつとあたりを見廻した。

一般傍聴人は、こゝには案内されないと思ひ、殆んど国会関係のバッヂをつけた者ばかりなので、ホツとした。

「まあ石田君、正規の発言でないのだから……次に篠村弘一君より発言の通告がありますので、これを許します」

老巧な元大臣の増時委員長が、秋田犬と名のある自民党の若手代議士をなだめて、社民党の委員の発言を促した。

それつという風に場内は一瞬静まつたが委員中たゞ一人の女代議士、小松谷天光光女史の眼鏡をかけた白い顔に集中した視線が、小波のような声が拡がると、今度は、傍聴席の柳子の方に集まつてきた。

(何だというの!)様子は腹の中でそう反響しながら、身じろぎもしなかつた。

ジー／＼と各社の録音撮影機が、場内の各所に向けて、間断なく音を立てている。

スポットライトが仰々しく当るあたりがえぐり出されるように明るくなる。

「……この上とも不幸にして、秘書諸君の

規律ある行動が期待できぬとすれば……一層その必要を認めざるを得ない……」

篠村委員が議員会館使用規則変更と国会法第百廿三条の秘書任用規定改善の論じてこゝまで去つた時、スポットライトは、傍聴席の中ほどの柳子にあてられた。

彼女は更然と微笑さえ浮かべてその強烈な白い光の照射に対した。

(大瀬乃新八は女秘書を献金代りにして次官になつた……)

(大瀬乃の女秘書は淫乱で、特別の器械をもつてるそうだ……)

(佐々英造を追駆け廻して色気狂い振りを発揮している)

(大瀬乃の部屋にはコンドームや例のクリムが沢山あるそうだ)

(大瀬乃の部屋へ入ると、なまぐさい匂いが、いつでも充満していると給仕が云つていた……)

(自民党の幹部は全部彼女と関係があるそうだ)

柳子は、この頃の自分が、このような影口で、屏風のように取巻かれているのを知つていた。

この噂に、真実もちよつぱりはある。だが大部分の憶測に尾端がついたものだ。

しかも、今日の篠村の提案は、結局は議員自体が自衛して国民の疑惑を受けないようにしよう。秘書に非行ありとばそれは当然その議員の責任が、提案のような規則の改訂は、議員自身の不規律不品行を証明するようになるから、論議しても何等の結論は出ないという——委員会の幕切れ



まで見透している様子であつた。

これが問題になるなら、眼鏡の下から大きな黒瞳で、深淵な思いを堪えているように見える小松谷天光女史が、第一だまつていない。

(このニュース映画を明日あたり日劇地下劇場で観てやろう)

柳子是不敵にこう思つた。

篠村委員の発言が終ると。果然共做、社民を除く保守二派が

(頼が自分の足を食うような考え方では國の政策を論ずる代議士ではない)

(篠村君は、女学校か、女工寄宿舎の舎監と同じような考えを持つてゐる。国会議員には惜しいぞ)

(社民党にも議員を秘書が酒の上で元気な所を見せたという実話がある)

(このような詰まらぬ提案は一笑に附すべきである)

喧々と篠村案を賛成立て採決すると問題なく却られた。

## 五、双頭の龍柳子

——暗上舗道を霞ヶ関から日比谷公園の方へ歩いてゐた。冬の宵風に時折り小さく舞い上がる銀杏の葉が、行き交う自動車のヘッドライトに映し出される。

柳子はたゞ一人歩いていた。

議運委員会の結は思ひ通りだつた。

あの提案が単に柳子や「げんしゆくなる喜笑」を発表した小松谷女史のみの事で成されたものではない。

広い国会で赤い絨氈が、思いも寄らぬ小部屋にまで続いていて、そこで数々の男と女の絵図が見られるようになった——国会議員、秘書、二千に余る男女職員、最近の風潮を、実は、各党の硬派が共同で、牽制しようとした現れであつた。

それが一応、否決となつた。

だが柳子の胸に、勝ち誇ることの出来な何かゝあつた。

(これでいゝのか!) 国会を構成するあらゆる要素に対して、柳子の正しいも一人の女が抱くの依然たる(疑問)であつた。公園の入口まで来た時、一台の自動車は彼女の傍に急停車した。

「柳子さん! 永田町の党本部へ引返して下さい」

佐々英造の秘書大津紀が、ドアを開けてニコ／＼笑つていた。

彼女は今夜、自民党幹部議員の秘書懇談会があつたのを思い出した。

出席すれば男では大津、女では柳子が花形になることは分つていた。まして今夜はあの議運委員会の後である。彼女の出席が大いに待たれてゐるに相違ない。

だが、いつもの嬌慢に似た自信がない柳子は、とても出席する気になれなかつた。

「私、今夜は失礼したいの」

「貴女の忙がしいのは分つてますがね、貴女が出席しないと、みんなの御馳走が半分に減つちやうんですよ」

「どうして今度に限つてそんな——」

「きよりの議運が自派の申合せも出来なかつたのを喜んだ大瀧乃先生や、ほかの先生

方から、貴女あての寄附が秘書会へ沢山来てるんです」

あり得ることだつた。

秘書会が懇談会をやる時には、各自の先生が平均二千円位の寄附をする。それが今夜は柳子の肉体崇拝者が多額の献金をしてゐるといふのだ。

「いゝじゃないこと、私がいなくとも皆さんでお使いなさいな。」

「いやそれにねうちの先生も、みんなに挨拶して置きたいことがあるつて、ちよつと



お見えになるんですよ——」

「えッ! 佐々先生が」

「え、今、先生を迎えに行く途中で貴女を見かけたもんだから」

……

なぜそれを先きに

云わない! 彼女の眼は見る／＼輝いた、

佐々英造がわざ／＼

出席するといふ、その秘書会なら、足を折つても飛んでいく柳子ではないか。

——無量りの大雇用高級乗用車は永田町へ疾駆した。政治と愛欲に身悶えする双頭の龍の如き未亡人秘書を乗せて。

(この項おわり)

(柴谷幸二郎書)



# 抱合心中死体

川端 芙美雄

市を離れた静かな郊外の雑木林の中で、若い女と学生風の男の屍体が、一人の通行人によつて発見された。言わずとも、例によつて例の心中死体と、一目でわかる死に様である。

発見者の報告を受けた村に一つの交番の巡査は、取敢えず市の警察本部に報告をすますと現場へ急いだ。現場には早くも物見高い彌次馬が人垣を作っている。押分けて入つた若い巡査は既に冷たくな

りながらも強く抱合つている男女の屍骸に眼をやりながら、一チエツと軽るく嫌味な舌打をした。男の掌に強く握られているアドルムの空壕、少し萎れた艶めかしい女の姿態、草の上に散らばつて

いるハンド・バックに半開きになつた雑誌。死んでいる女が美しいだけに愛嬌に似た感情で眺めた巡査が、猥らな空想を働かしている最中に本部から数名の係員が自動車で到着した。

その中には、今木警部の顔も混つていた。係員の検屍は順調に進

と、不意に一巡査の強い声に呼ばれて狼狽した眼を見せて振返つた時、眼前に突き出された一枚の封書——表はたしかに今木徳三郎と警部宛である。

「女の方の懷中から出て来たのですが」

警部は、仕事に暇があつたので、時間過ぎしにと一行に加つて来たという気安さから、いつもに似ず皆と一緒に屍体に手を触れようとはしなかつた。

澄渡つた青空に視線を移して取残されたような気楽な思ひの中で今木警部は何やらモソモソと呟やいていた。

——馬鹿な奴等だ。心中する位なら、何故もつと強い団結心で、周囲に渦巻く二人の愛情を堰止めようとする流れを、抜け出さなかつたのだ。若いものだ親の反抗が何だ。恋愛は自由であるべき筈だ

この二人の親も親だ。親莫逆チヤンリンとはよく言つたものだ。娘や伴がこんな醜い浅ましい姿になる迄、ノホホンと涼しい顔をして

いるんだから、親達の間抜け面も笑止の沙汰であるわい——

「警部！」

## 赤い風船

京子は今夜も赤い風船を売つて

いる。赤い風船が夜風に軽く流れて、眩しい裸電球の反射が燦めいた。俊次は後から京子の足首に人眼を憚る信号を送つた。京子は待つて、ね々と、明るく嬉しさを含めた瞳でうなづくと、人波の中へ流れ入つた。幼ない頃の想い出を誘う切ない巷の哀愁に満ちた夜店風景だつた。

俊次は「今夜こそは——と、心の裡で呟やく。瞬間、京子の愛くるしい顔、その顔に連なる未知の肉体へ、燃える火に似た情欲が走る。人影のない平野川の畔にたゞずむ彼の耳に、虫の音が冷ややかな秋の静けさを匂わせて聴えてくる。

「——待つた？」

小さな声と一緒に、彼の横へかぐわしい女体の芳香を一杯に、京

言われた言葉も諸の空に聴きながして、裏を返せば——礼子——と遠慮な二文字。最早、疑いもなくそれは一人娘の礼子からの遺書に違ひなかつた。仰いだ青空には白い雲が浮いていた。

子がしやがんだ。沈黙の裡に、堰を切つた奔流の如く京子への愛情が、俊次を狂人の境へ踏込ませた。俊次は後から二人の情熱をかき立てた。いつにない京子の激しい嬌態——。

京子には鳴く虫の声も、高く冴える秋の月もなかつた。男の首に廻した夜目にも白い腕が、俊次を強く抱き締める。

——十日後——俊次は夜店の人波の中でハッとした。京子がい

ない。赤い風船が、何時もの場所に穴を明けように見当らなかつた。彼は不安な念を抱いて立ちつくした。その彼を認めた彼女の隣に何時も店を出している玩具屋の女があわて、彼を呼んだ。

「あゝ、これ京ちゃんからね、あなたに渡してくれつてさ——」

「え？ な、なんですつて。京子が

「つい先、来たんだけど、あわて帰つてしまつたよ」

「帰つちやつた。どうして——」

「さあ、ね」

女はそんな俊次を、京子の何だろろと見つめた。彼は手渡された紙切れを握り締め、下宿へ送るやうに走り帰つた。

俊次は風の目の揺れる電線に似た心で、その紙を破りほどいた。赤い風船が秘やかに包まれていたそのシボんだ饅頭の風船に、何か書いてあるように見えた。俊次は弱い溜息を吹きこんだ。ふくらんだ風船の表面に、京子の悲しい告白が女の想い込めて記されていた。

——家の為に愛するあなたを離れて嫁いで行く私を、弱い古い女とさげすんで下さい。私はあの夜のことを胸に抱いて生きてゆきたいと思ひます——

電灯の明りを受けて光るゴムの表に、あの日、咽びうめいた京子の白い肢体の惱ましい躍動が、風船の動きにつれて現われては消えていく。京子への激しい愛情が、俊次の胸に赤い風船のそののよらに、ふくれそして揺れ動いた。



# 繪圖掛要張

一、木、漆、磨、須、給、様

1

奥の間の、老主人の居間へ、茶を淹れて、出入の白鶴堂から貰った落雁を持つていつた芳子は、台所へ戻つてくるなり、お茂さんの前で、アハアハと、笑いごえをあげた。

「アハハ……、驚いたわ、びつくりしちやつたわ、うふふふ」  
とエプロンの袖で、口をおさう。  
お茂さんは、芳子のそのさまを見て、不興げに眉を寄せ、苦笑いする。もうこの家に奉公して三十年にもなるお茂さんには、芳子になぜ笑っているのか、聞かなくても察しがつくのだ。彼女が夫に死に別れてか



らこの立花家に女中奉公するようになった二十七才の暮や、はり偶然主人寛五郎の居間で、寛五郎の秘密な趣味を見てしまつた時、顔から火が出るような恥かしさを覚えて、部屋から逃げ出してきたものだ。あつたとき、むろん自分は生娘ではなかつた。それに引換え、嫁入り前の芳子が、あられもなくあはは笑っている。お茂さんには、多少の感慨無きを得ない。

立花寛五郎は、又の名を「シブ寛」と呼ばれ、近在で誰知らぬものはない。しづちゃん、しみつたれ、けちんぼ、各ん坊の意味の「シブ」を、陰でつけて呼ぶのである。もとより本人にも、その名は耳についている。が彼はちつとも動じるけしきがない。ひそかに恃むところがあるのだ。農地解放であらかた田地を手放すまでは、屋敷から五丁離れた汽車の駅へ、「わたしや他人の地所を踏まずに出られますんや」と自慢した程の大地主であつた。それが村で小学校を建て、さて運動場の敷地買収に、誰も田を手放したくない風情を見せた時、まだ三十五才であつた立花家の当主寛五郎は、「よろしおま、わたしが寄附しまよ」と、ボンと氣前よく無償で投げ出した。その時、村びとはあつと驚いた。誰も

が「シブ寛々々」と呼び、實際事ごとく持てるものの汚さを見てきていた村民は、初めて寛五郎に対する觀念を修正しなくてはならない必要を感じた。  
この時以来、もう誰も彼をシブチンとは思わなくなつたが、「シブ寛」と呼び名だけは改めなかつた。もはや本来の語原を離れて、略称でなければ愛称になつてしまつて

いたのである。小学校の運動場には、彼の名を彫つた御影石が、いくらか風雨に錆びて建っている。

その寛五郎も、むかしお茂さんを赤面させ、いま芳子を艶笑させる一風変つた耽美癖を改められない。白鶴堂の手を通じて手許に蒐集した掛図が四十八本、それも南画とか北画とか、風景画とか花鳥物とかいうものでない。強て名づけければ浮世絵に類するものだが、困つたことに、それは大ッびらに人に見せられる代物でない。鬚を結つた男と女とが、ある種の行為的ポーズを取つておる図なのだ。

思えば、それはもう三十有年来の趣味である。いまではすつかり頭も禿げ、六十の一の還暦を迎えた歳であるが、その癖は止まないのみか、近來益々昂じてくるようだ。

一部屋を閉め切つて、日によつて好みの一卷を選び出し、床の間に掛けて、じつと腕を組んでその前に坐り、ためつすかめつして、時間の経つのも忘れ、ある時は大きな目玉を剝いてぐつと睨み上げ、片手で顎をまさぐつてゐる。かと思ふと、お寺参りして説教を傾聴するように小首を傾けてじつと目を閉じ、沈思黙考の形をつゞける。掛図の絵は、そんな持主の姿に閑知せず、聖人ぶつた人間の不自由さをかなぐり捨て、悠々と赤裸々に艶福濃厚な行為に及ぼうとしている。それは、一幅の静止した絵にすぎないが、その絵の行為に至る前と、その後の行作は、容易に一つに繋がつて見るもの、頭にはおぼろずにはおかない。  
誰の目からも秘匿せられてゐるその行為が、実は誰にも最もよく理解されてゐるとは、人間中々悟りがよいと云わねばならな



いと誰かが皮肉つたが、芳子は、処女の勤  
の鋭さで、びつくりして振向いた寛五郎の  
表情から、ちらりと目をやつた床の間の軸  
の意味を余さず汲み取り、急いで茶托を置  
いて、外へ出てから可笑しさがこみ上げて  
きたのだつた。「やらし。あんなもの見て  
喜んでるんやわ！」

2

芳子は故郷で失恋し、お茂さんを頼つて  
やつてきた。何でも芳子は、いずれは自分  
と結婚するもの  
と思つていた相  
手の男が、抜打  
ちに他の女と華燭  
の典を挙げてのけ  
たので、いたゝま  
れず親にも無断で  
ポイツと飛び出し  
五十里離れた母の従姉  
に当るお茂さんの許に  
一時仮寓して、いづれ  
はすぐどこかへ住込み  
で就職するつもりでい  
た。芳子がとくに選ん  
でお茂さんを頼つたのは、親戚中  
でお茂さんが自分の家を持たず不  
仕合せ者とされていることに、親  
近感を抱いたからである。お茂さ  
んは恐る／＼寛五郎に許可を求め  
た。寛五郎は快く承知した。たか  
ゞ一人である、それに相手は若  
い！

お茂さんが始めてこの立花家に  
奉公に上つた当時は、きれいな奥



様の存命中で、興入つて来られてもう二  
年にもなるといふのに、主人との仲は新婚  
当時のように甘く「おミチ、おミチ」と、  
「シブ寛」の名にふさわしく、物を買つて  
やるということはなしに、たゞ声と仕料で  
可愛がつていた。奥様も別に流行を追う風  
はなく、一切物ねだりはされなかつたよう  
であつた。

また時とすると、若い主人御夫婦は大変  
朝寝坊することがあつた。使用人は、執事  
格の標さん(五七)、作男の太郎七さん(三  
九)吾市さん(二四)、女中頭のお京さ  
ん(四二)下働きの初さん(一七)そ  
れに新入りの自分という大世帯だつたが

奥様はさ  
すがに、  
そんな朝  
は遠慮し

て控目に振舞われはしたが、別に見えすい  
た言訳はされなかつた。主人はその後まだ  
と日が高くなつてから、げつそりと寝とほ  
けたような様子で、目のふちに隅をつくつ  
て起き出てこれられ、奥様のお給仕でしゆ  
んの外れた朝御飯を一人で食べ、そのあと  
山茶花の咲いた縁側で新聞をひろげながら  
鼻毛を抜いておられる。標さんは外出、太  
郎七さんに吾市さんは夏の土寄せ、お京さ  
んはお初さんを連れて街へ買物、などとい  
うことで時とすると使用人では自分一人と  
いうことがある。けれども、そんな主人御  
夫婦を眺めていて、少しも淫がましい気は  
しないのであつた。

お茂さんには、亡夫との短いながら妖し  
く楽しかつた思い出が、頭の中にこびりつ  
いている。主人らの睦じさを見ると、自分  
と夫とのさまを目の辺りに再現する思いが  
してくる。奥様は

自分と余り年の違  
わない二つ年下の  
二十五歳だがこ  
の自分に引換え  
何とそれはお仕合  
せなんだらう――  
夫を殺した病氣  
は、肺結核であつ  
た。気がついた時  
は、病勢は引返す  
ことの出来ぬこ  
ろまで進んでい  
た。

奥様は、次第々  
々に瘦せてこれれ  
た。朝遅くまでお  
顔を見せられない

回数が増えた。そのことで、何か淫ら  
な冗談を云つてお京さんと太郎七さんが笑  
つたのを、ちらと見たことがある。そんな  
ことがあつて、お茂さんにも、主人夫婦の  
営みに、気になりだすものが見えてきた。  
そりう目で見ると、なお一層そり見え  
くるのだつた。

何事か標さんに相談なさつて、二人づれ  
で汽車に乗つて朝早く出ていかれた夕方、  
気のせいかいつそり寝れてお帰りになつ  
た。そしてその夜、お京さんの口から、奥  
様は手術せねばならないほど悪い、とい  
うことを聞かされた。

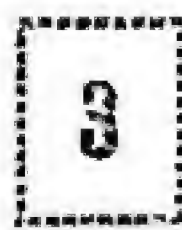
卵巣浮腫という病氣だそうで、これは放  
つておくとどん／＼お腹が大きくなつてく  
くる。早いこと腹部を切開して、二つある  
中の腫患している片一方を、摘出せねばな  
らぬということだつた。

確か十日間ほど、街の大病院で入院され  
ていたと思う。附添には、奥様の御希望で  
お初さんが行つていた。御主人は、向うで  
宿屋泊りをして病院を見舞われ、その間、  
ほんの一二度しか帰つて見えられなかつた  
退院後の経過は、当然日増しによくなる  
ものと思われていた。それがあつてけなく他  
界されたのを見て、今更人間の命の儚なさ  
を、再び味わせられた。きつと大手術の後  
の血の気の少さで、こゝろも脆く亡びられた  
のであろう。主人はずつと、泣き通され  
た。その涙は、自分の残酷な記憶を刺戟し  
て、身につまされて貰い泣きした。初七日  
がきて、まだ主人は、仏間にこもつて泣  
き切りである。御飯はろく／＼あがられ  
ない。男の御身でありながら、少し程度が  
がひどすぎるように思われたが、間もなく  
その疑問が解かれた気がした。涙は、単に



思慕の情のみに止らず、ホソを囁む儚い思いが加わつていたのである。何か重大な失策が余儀なく奥様を死に至らしめたのに違いない。いつものように、御飯を神様に供えようと部屋へ入りかけた時、泣きどく声がした。

「おミチ、わしがわるかつた！ 医者の云付を守らなかつたわしが、バカヤロウやつた！」



立花寛五郎は、以来独身を遁してきた。後添をしつこくすゝめる者もなくはなかつたが、彼はその度にきつぱり断つた。

彼は、亡妻に貞節を尽してきた形になっているが根本は、当時の誓いを守り通しているのである。彼は自分の淫欲がのろわしかつたのだ。劣情のために、あたら女房を殺した。出来ることなら、その根元の品を切つて捨てたかつた。彼の敵は、自分の股間にあつた。彼はそれと戦つてきた。触れ、げ容易に折れるだろ、距離に、お茂という女氣も附纏つたが、彼の目附に淫猥さはなかつた。

謙嚴な、見上げた御主人、というようにお茂さんには映つていた。が、酒もきつぱり止められた主人に、午後三時の点心に汁粉を持つて奥の間へ入ると、朝から顔切り切りの部屋に、主人はびつくりして振向かれた。その時はすでに遅かつた。男の逞しい握り拳ほどある物が、後ろから抱きかゝえた相手のところへ、正に締結されようとしている、そういう絵の巻軸が、正面に掛けられていたのである。

お茂さんは、頬が熱るのを抑えられなかつた。汗粉は、鏡の縁から盆へとぼれた。台所へ引返しても、動悸は止らなかつた。信じていた男の高貴さが、泥の中へ落つてしまつた。人間というものに対する失望感である。これで、出入する骨董屋の白鶴堂親父の意味も、呑み込めてきたわけである。白鶴堂は、主人より少しばかり年のいつた若衆の親父だつたが、「こんな珍品を掘出しました」とか、「この型がありま

せんので画家に描かせました」などと主人と声高に話し、風呂敷包みの中をすぐ自分で表装し直して届けた。今まで何気なしに迎えていた白鶴堂も、途端に下町っぽく見えてきたのだ。

が、主人に対するいやらしい思いは、日とともに薄れていつた。様さんやお京さんも、まさか主人の近ごろの趣味を全然知らぬはずはないと思うのに、そつと主人のそんな日常を察さないでいる。主人が部屋を出てきて若い女の自分やお初さんを見る目は、相変らず清く澄んでいる。

執事格の標さんが卒中で亡くなられてから、家事は直接御主人が采配されるようになった。長い戦争に突入して、吾市さんは海軍に、太郎七さんは呉工廠の軍需に、そしてやつぱり兄弟が兵隊に取られて男手が父親一人になつた奥家へお初さんが暇を取り、あと自分と二人きりの使われ人になつたお京さんも、退院して傷痍軍人の片輪となつた息子さんと暮すために辞め、結局自分一人だけが、クロ（犬）やマリ（猫）と一緒に主人寛五郎に仕えることになつた。もうその頃は、戦後の小作人解放の無血革命時代で、田地山林は手放し、あとの家屋敷の切盛りで大して人手は要さなかつた。その後、また何事か平穩な日がついて

五十七歳になつたお茂さんのところへ煙の芳子が頼つてきたのである。

「うち、あんな掛図見んの初めてやわ、よう云わんわ、うふふ……、伯母さん、あの人いつもあんなもの見て、喜んだるの？ いやらしいなア……」

「あんまり、そんな口を利くんじやありませんよ。仮りに、この家の御主人ですかね」

「古いわ、伯母さん。封建主義そのまゝね。だから、三十年も、こんなところに宮仕えしてくすぶつてられたンやわ。ほんまに、男ッていけ好かん、若い者も年いつた人も、すぐほかの女に氣イ移すか、そやなかつたら、よだれ垂らしてストリップ見てるんやわ」

「あなたはそういうけど、男にはまた男の世界ッてものがあるのかも知れせんよ。一概には云えないわ」

食器を洗つて布巾かけをするお茂さんはむすめであるはずの芳子の挙措に、反感が湧いているのである。それからまた、しんじつ寛五郎に、芳子が感じていようような吐き氣は備さないのだ。

「でもね芳子さん、男ッてものを見るのは、その言葉遣いでより、振舞で見るのが本當だと思わない？」

「むろんやわ。せやからあのお爺いちゃん伯母さんには御主人かも知れないけれど、やらして仕舞ないの。春画掛図を掛図に仕立て、悦に入つてるんやわ。これ以上の助平、有るか知らん？」

「助平が知ら、ほんとに？ 御主人は、奥さんを亡くされてからずーッと今まで、女氣には全然触れずに過ごされてきてるのよ」「へーえ……？」

「ほんとなの。それは保証出来るの。この一事で、あの人の評価が決まるのじやないか知ら？」

「でも解せないわ。そんな精神の氣高い人なら、なぜ選りに選つて、あんな絵を楽しむでられるン？」

「そこなの。——それはつまり、普通の者なら、あゝいうワイセツなもので、そういう氣持を挑発する具に用いるのだけど、御主人はそういう氣持を抑制する別なハゲ口として、座右においておられるんじやないかと思ひの」

「そうか知らん、そんな見方も出来るかなア？」

芳子は納得出来かねる風情だつた。それ以上、お茂さんは自分の所信を披瀝しなかつた。後は生娘などの知り知らぬ世界ではあるまいか。——御主人はきつと、様々な絵の仕料から、在りし日の、今は亡き奥様の数々の密房中の思ひ出を、あれやこれやと偲び返していられるのではなからうか。御主人が男の身で、三十年間孤獨を保つ奇蹟を演じ、奇しくも亡き夫人に貞操を全うされる形を示されたのは、あの「猥褻画」と呼ばれている一連の絵が、こゝろの支柱となつて寄り添つてきたからではないのだろうか！



主人寛五郎の人間を、氣高いものに信じていたお茂さんは、だから主人と芳子とを残して立花家を留守にすることに、もつとも氣懸りは持つていなかった。彼女は十日間の休みを買つて、亡夫の墓参りを済ませ序に芳子の母親とは別の妹夫婦を九州へ訪



ねることにした。その留守に、思いもよらぬことが起きたのだ。

芳子が夜中目を覚ますと、頭の上に点けていたはずの豆球が消えている。すーすー冷えた空気が揺れている気がする。襖が明いているのだから。廊下に点いているはずの灯も消え、広い家の中がぬば玉の真ッ暗がりだ。すぐ芳子には寛五郎のことが頭に來た。芳子は枕許の人の氣配に起き上ろうとした。その時、まるい懐中電燈の灯が、頭の上から冠さつた。そして両腕を背へねじり回され、すぐ猥褻をかませられた。

「ねえちゃん、音無しくしていな、ちよつと手と足を括らして貰うがね。命は大丈夫保障するから、心配せんでい。」

— 七 —

そう云つて乱暴に芳子の帯で縛り上げた。始め両手を背後で括り次に両足の踝を背中へ引上げて手足を一緒くたに男の馬鹿力で締め上げる。芳子は、思わず痛々たつと声を出す、それは、口の中へぐつと押し込められた布で、掻き消されてしまふ。賊は芳子を柱へ縛りつけ、猥褻を緩まないように締め直して、懐中電燈を拾い上げて出ていった。

それより先、寛五郎も奥の間で、ひどい目に逢つていた。口と手足の自由を奪われた彼は、布団の上に寝ころがされて、徒らに賊が手文庫の中を掻き回すのを見送つてゐるばかりだ。懐中電燈の光を凝ねて、文庫の蓋に飾られた鍔鉤が、怪しい五色の色

にくるめくのを、寛五郎は忌ま／＼しく眺めてゐる。その内にも、何とか賊の特長をつかもうと、声色、言葉遣い、習志、年恰好と記憶に刻み込もうとするのだが、身から下を布で隠しハンティングを真深に窺つた容

持ツちよる。うふふふ……。話せるぞ」それから又一本の紐を解いて、「おッこれもか。太えな、これは……。待て〜」

一本々々ほどこいて、明るい光の中で、賊は痺らず慌に入り出した。「えらい又じい、どすけべやのう。……それにしてもより書いちよるなあ。……金と聞のある奴の癖味は違うテ。……うわーあ、たさらねえや。……氣持ちよさそうにしてやがるッ」

二十五本を、全部見終つた。寛五郎の蒐集したのは四十八本だが、後は長持に藏つてあるので、賊の目に觸れる難は免れた。「こいつアおれも惜しだ。罪なものを見せやがつたな。じい。よいしよ」

もつさり片膝立て、立ち上ると、又部屋を出、どすん／＼、縛り上げた芳子を抱えて戻

つて來た。

「こらどすけべのじい、こんなものを見やがつて、この女子をてかけにして、ちんちくりんやつてやがつたな。見とれ、おれがちよつとこのモデルを借りて、絵でない災演見せたるぞ。さあ所望せい、このうち

の絵の、どの型でいつて欲しいんじや」寛五郎は面を背けたかつた。せめて口が自由に利けるなら、何とか思い止らせる交渉も出来ようが、今はたゞ身もたえするだけで、芳子の救援など思ひも及ばぬ。彼は口中に詰まつた足袋を噛んで、おのれ／＼と雨ざしりするばかりだつた。

5

お茂さんが帰つてきた。「留守中、なんの変わりもありませんでしたか？」と訊くのに、芳子は、寛五郎から口止めされているまでもなく、かぶりを横に振るのだつた。「いゝえ。……それより、伯母さんの方、道中大変やおまへんでした？」

「すつかりゆつくりさせて貰いましたよ。お春の方すつかり商売が當つて、中々の長氣だね。もつと泊つて雲仙の温泉へも行つてきなさいというのを、そんなにお邪魔しては悪いッて帰つてきたの。みんなお達者で肺炎患つたという長男の子も、びん／＼していたわ。それから、あんたに、一度遊びにお出でッて。氣持取り直して、早いところどこかへ嫁入りせんと、残れ残る心配があるとも云つてましたよ」

忘れようとしても芳子には、寛五郎の目の前で辱められた屈辱が、無念の炎となつて燃り出た。

白鶴堂が、又忙しく出入りし始めた。しかしお茂さんは、その雲行が以前と變つてゐるのに氣がついた。白鶴堂は手ぶらでやつてきて、風呂敷に軸を包んで帰るのである。

寛五郎は、二本三本と秘藏の巻物を手放し始めた。どんな主人の心境の変化かと、





お茂さんは怪しんだが、もう御主人も齢なのだ、と思いつた。

二十本ばかり、芸術的価値のある作物を人手に渡し、他は庭に火を焚いて焼き捨て、終つた。一手々々な違ひ、と賊を感嘆させた図は、四十八本とも身辺から薙つたわけである。三十年来の耽溺はここに終りを告げ、再び復活を見ることはあるまいと思われた。

寛五郎には、赤く焼付いた芳子辱しめの図が、片刻も脳裏から去らないのであつた。賊に軸物を囁かれたばかりに、賊の欲情をそゝり、無垢の芳子を犠牲に供した。猿轡をかまされて、苦痛に歪んだ芳子の顔それに引換え、何と賊のいんわいで好色な一挙手一投足であつたことか。

賊は悠々と、芳子の肉体をあちらこちらからしやぶり喰つて、初発に間に合うように引揚げていつた。寛五郎は、体をころがしながら、ぐんなり伸びている芳子に近づき、芳子の体に口をすりつけて猿轡を外し口の中の足袋を芳子の歯で引出して貰い、彼女の後へ回つて自分の口で芳子の縛めをとき、彼女の手で自分を解放して貰つた。しかしその後は、寛五郎は警察に届け出る当然の手段をなぜ取らなかつた。

その日の夜、寛五郎は芳子を自分の寝所に引入れて寝た。彼はじつと、芳子の体を抱きすくめて寝た。肉体的な交渉を持つのではない。芳子に自殺の惧れがあると思つたからだ。

翌日から、芳子は元の部屋で寝た。賊が侵入して来た天窓は、嚴重に封鎖し、多分二三日前から牛肉か何かで手なずけられていたのだから一声も啼かなかつた老犬のクロは、頭をはつて、いずれ番犬の資格を剝奪することにした。

帰つてきて数日後、お茂さんは、主人の部屋に呼ばれた。

「お茂さん、突然やがなア、わし、結婚しようと思ふね」

寛五郎は、お茂さんの顔をじつと見て、



ホ、ホ、ホ、わたしの前身ですつて、娼婦ですよ。身寄りのないわたしには、娼婦になるより外、道がなかつたのです。

娼婦になればもう住居の心配はいりませんし、食べるのも据置ですからね。毎晩々々赤い着物を着て遠く殿方を抱いて寝てさえいればいいんですから、どんな馬鹿だつて女であれば出来る事です。

いいえ、男の人だつて器用な方は、わたし達より上手に殿方の御機嫌を取る人が居ますからね。そりやあ、沢山のお客の中ですからいやな方もありますよ、だけど「いやな男だ」と思うと、ますますいやになるものです。そんな時には、まあ、お金と寝るのだと思うと、それ程気にも掛りません。お金は古いのも、新しいのも同じ値打ですからね。

それから俯いて云つた。お茂さんの胸中は愕き、ふいに騒ぎ出した。

「まー……。さいでございませうか」

「ふん心境の変化という奴でな、どうやら？ お茂さん、あんたはどない思ふな？」

## 娼婦時代の思い出

染岡銀子

娼婦だつたわたしが、こんな気楽な暮らしの出来る様になつたのも、皆いまのダンナのおかげですよ。ダンナに会つていなかったら、まだ中々娼婦生活から抜け切れなかつたと思います。

うちのダンナは平常は別に交つた所のない無口な紳士なんですが、性的にはまあ、俗に云う変質者ですね。奥さん無くしてから、ずつと一人暮らし、お子さんもなく淋しかつたのでしよう。だから時々新地の方へおいででした。後添を貰うにしても、もう四十八にもなりますと、処女を貰う訳にはゆきません。無くなつた奥さんは処女で何にも御存じなかつたので、男と云うものは、皆こんな者かとダンナの変質的な事を知らずに成すがまゝになつて死んで行かれたのでしようが今度はそんな訳にはまいりません。一度でも男の味を知つて居る人を貰え

相手はどなたでございませうか、とお茂さんは聞くことが出来ない。「結構でございませう」と、やつと答えた。

「それで一つ、芳子さんに訊いてみて呉れんか？ わしが深い愛情を、芳子さんに持つてゐるということを忘れんように云うて

ば、どうしても自分の変質的な事が知れてしまいます。それがとてもはづかしくて、普通の家庭の人を後添に貰う気がしなかつたのだそうです。それで、度々新地の方へ来て居られたのですが、今年の五月頃でした。はじめて、わたしが働いて居りました夕月と云う家へ来られて、わたしを名義しで上がつて呉れました。わたしはお世辞にも美人とは云えないお多福ですが、肉体的には、誰にも負けないうボチャ／＼とした体をして居りますので、それがダンナの眼に付いたのだと思ひます。

二階のわたしの部屋へ行つて、二人でベットに並んで腰掛け、いろ／＼の事を話しましたが、話しながらも、ダンナの手は始終、わたしの腰から尻の方をモゾ／＼動き廻つて居りましたよ。わたしは何時もの様に立つて服をぬぎはじめます



なア」

「まあ、相手は芳子でございましたか？」  
「さいや。……可笑しいかな、厚顔ましいかな？……ま、どっちになつても、あんたが伯母やから頼むね。芳子さんをわしに呉れまいか？」

「え……。一度本人にうかゞいまして」「そうしてエ」

お茂さんの胸の中では、三十年慕つて来たものが、すっかり離れ去つた思いがした。年甲斐もなく「結婚したいと思うね」と打明けられて、自分の胸は騒いだ。それが事もあろうに、姪の芳子が相手だつたとは！

芳子はお茂さんの話を聞いてから、  
「うち……うちのようなものを貰つて下はるなら、別に……不服あらへん」

これも意外な返事であつた。主人寛五郎が所望し、芳子に異存がないとすると、お茂さんは初めて二人のために尽す気持になつた。それは淋しい、しかしお茂さんには三十年来慣らされて来た犠牲心であつた。

ワイセツな絵に没入されていた主人。それを垣間見ての恥辱感、間もなくそんな主人を寛容出来る様になつた自分、それから何十年の慣習を一変して、あの珍重した一切の巻物を放棄し、その結果が再度の主人の新婦であるとは、いま自分一人だけが老いくちで取り残された気がする。

噂はすぐ村中に広まつた。  
「シブ寛がなア、何と見い、若い女子と、老いらくの恋じゃ！」

× × ×

と、ダンナは

「わしがぬがしてやるから、そこへ立つていなさい」

とまるで命令する様に云つてシユミーズから、ズロースまでぬがせて呉れました。そして立つている全裸のわたしを舐める様な眼でジロ／＼眺めて居りました。その日は別に外の殿方と変つた事もなく、時間が来ると、さつさと帰つて行かれました。

それから二三日して十時頃に、ひよつこりやつて来て

「今夜は泊つて行くからね」

と云つて一人でドン／＼わたしの室へ入つて行かれました。そして二人切りになると、ドアの鍵を掛け窓をみんな閉めきつてやつと安心した様にわたしの傍へ坐りました。そして

「ねえ、今夜は二人共裸で居ようね、アダムとイブの様に」

と云つて、まるで、お風呂へでも来た様に、無造作に全部をぬぎすて、わたしの所へ来ると、此の間の様に一枚一枚ぬがせて、そつとベッドの上へ寝かせて呉れました。

ダンナは、こんもりと盛り上つたわたしの乳房を両手で愛撫しながら、首から胸、胸から腹、腹から太股へとベロ／＼なめはじめました。まるで蛇のその様によく動く舌で……。

わたしは、生れて始めて経験する様つたさに身悶えしながら、ベッドの上をこ

ろげ廻りました。媚婦と云うものは余り昂奮しないものなのです。なぜつて、毎日毎夜の事でももの、自然と慢性的になつて感じなくなるのですね。それに、そういち／＼昂奮していた日には、体が幾つあつてもたきませんよ。

ダンナはわたしがだらしなく開けた両足の間に坐つて、何かモソ／＼やつてい



る様でしたが、わたしはじつと眼をとじて、次ぎにどの男でもするあの事を、この人は、今日どんな風にするかしらと、気持よくしびれた様な頭の隅でそんな手を考えて居りました。

その時です。わたしは思わず、あつと小さな叫び声を上げた程異様に冷たいものを身体の一部に触れたのを感じました。わたしの昂奮していた全身の熱を取り去る様に、一定の時間をおいて又新たな冷たいものを感じます。わたしは何か

見てはいけなげな気がして眼を閉じたまゝで居りましたが、余り何時もと違ふ感じのものが、不思議で薄気味悪くなつて来ましたので、そつと薄目を開けて自分の足の方を見ました。ダンナは口をモグ／＼させながら何かを喰べているのです。わたしは息をこらして、その様子を見て居りました。

ダンナは夢中なのか、わたしが見ているのに気が付きません。傍の折箱から薄桃色のグニヤ／＼したものをつかむと自分の口へ運んでいるのです。わたしはその薄桃色のものが何であるか、たしかめて見たい好奇心にかられて、急にムク／＼と起き上りました。ダンナは口をモグ／＼させながら、あわててかくそつとしました。わたしは素早く折り箱をダンナの手から横取り致しました。

なんと折り箱の中にはマグロのサシミが三切れ残つて居りましたよ。ダンナに云わせると、何とも云えない味が出てとてもおいしいそうですよ。一度おためしになつたら、ホ、ホ、……え、今でも時々あたしと水人らずでお酒を上る時にはね。

まあ、もつと聞かせて呉れて、そりやあ、まだいろ／＼お話はありますけど今日の所はこれで堪忍して下さいよ。それにもうダンナが帰つて来る時間ですしねえ、ダンナの顔を見ても吹き出さないで下さいよ。アハ、ハ、ハ。(おわり)



# マダムのかけしろの賭代

## 1 性のめざめ

信次は待つていた。しかし、いくら待つても女は来なかつた。

夕陽が山の端に沈み、夕陽が眼下の川を真赤に染めた。彼は老松の幹によりかゝつて女とは、あの様に赤く、生々しく、ときめいているものだろうか、と想つた。と、息が止まるほどの口づけと、脂粉の匂いがよみがえつてきて身内がもえた。経験もなく、教えられることもなく、性にめざめ始めた彼は、それをどうしていいのか全くもてあましながら女を、自分よりもけるかに年長の幾代を待つた。

川面が鉛色になり、風が急に肌寒くなつたが、彼を信じていた。あれほどきつく抱き、あれほど幾度も誓つたのだもの……

## 2 賭 機

その頃幾代は、自分の店カツフエ三好の奥でマージャンをしていた。相手は久子、信子、まさみで、いづれも新年の時間と、肉体の暇をもてあまして色香の多いマダム連であつた。

店のレコードがジャズからゴセクのカボットに変つた。又学生達が来たのだな、と思つと、女達の心の姿勢は更に崩れた。崩れを持ち直そうとする。賭けてゐるからである。金ではない。賭代、賭けてあるものはそれぞれの胸にあつた。互いにそれが何

であるかわからない。ちよつと面白い趣向ではないか、と幾代は自分の発案に内心得意であつた。

店から男のバスがつつ抜けてくる。偽学生の高峰だ。彼がわざとらしく幾代の妹珠子に話をしかけてゐる……が、それは奥の幾代への呼掛けである。幾代はパイを授けたい衝動でむづむづする。高峰をさらつてゆこう……と、松の端で会う約束をしておいた高校生の信次のことを思い出した。——毛も生えかけの、白砂糖のような——まだ子供だ。よし、あれを賭代にしよ。きまつた。あの雛つ子は久子達の誰かゝ獨り賭の幾代。ニヤビや脂肪にあきっている彼女達だから、いいだろう。負けてやれ。と

「ボン。」

まさみだ。幾代はクツと笑ひそうになつた。

まさみは町の開業医でヒロボンを大量に操作してゐる。ポンは手のものである。

点数を、まさみが一人で掻き込んでいた。次が文子だ。幾代は最初から勝負を授けていたの

淫女マダム狂騒曲

賭

かけ

にえ

狂花

で話にならない。信次は幾代からさそつた。クチーフに出てきている。話せる。たゞ學——機である。しかし、高峰は、男からア生面さえしなければ……。それで一ぱし色





事師と思ひ込んでゐるらしい様子だから可愛いいところがある。だが、彼の勝つて彼の下宿へは行くまい。その時の眼色が何ともいやらしい。この直感の外れたことがない。と、幾代は、その直感を誇る。男の賢るところへ行つてはダメだ。とつちがさらつていかなくちやあ……。

勝負が決つてパイが振きまぜられた。やはり信子の敗北で、彼女が文子に与える賭品は高峰だ。信子が高峰と今夜を約束してある。それは文子のものである。幾代は顔が紅らんだ。思ひぬことである。学生を嫌つてゐる様子の信子の目頃である。嫌うと言ふことは怪しい。案外学生を喰つていたのかも知れぬ。何故そこに気付かなかつたのだろうか。と、幾代は鼻をかんだ。

と、まさみが幾代に手を出した。幾代は女医の小さな白い掌を見た。信次がこの手に掴まれる——高峰を失つた彼女は、信次が惜しい気がした。しかし、思い切りの悪いことは彼女の性分に合わない。

「松の臺に置いてあるよ。」

「意味深だね。」

パイは収められた。まさみは、三好の裏通りに止めてある小型自家用車に乗つてハンドルを取つた。

文子は店に出て高峰と陽気にグラスをあけてゐる。高峰がしきりに文子が彼の下宿に行くことをすすめてゐる。考古学の調査にこの地に来て、もう大分資料も集つた、それを見てくれ。と言うのだ。嘘にきまつてゐる。

「あいつ、結婚サギの疑いがあるんだ」

と、信子が煙草の煙を輪に吹いて、店を眼で指した。

「紡績女工でも女学生でも洋裁学院の生徒でも、片つ端から引つかけてまさあげてゐるらしい。久子に結婚談はもしないだらうが色の方はお互いさ。欲の方もお互いさ。で、幾代はまさみに何をやつたのさ」

「白砂糖。」

「ふしん。カルシウム氏じやなかつたの？松の臺であつた、カルシウム氏と出来たんでしよう。」

カルシウム氏は、画家の、幾代の夫俊郎のことである。幾代が三好を経営し、ヒロポンを流し、それでアトリエが建つた。モデルも彼女が拾う。若い女の画家志望がアトリエに寝泊りして、カルシウム氏の身のまわりの世話をしている。勿論、彼女が見出した少女である。心の奥では彼女の大成を切にねがつてゐる。しかし、表面は、ふん、と鼻であしらつてゐる。信子等はその彼女の心を見抜いてゐた。

「まさみの奴、何を賭けていたのかしら」

「わからないね。案外、ボンだよ。」

「文子は何だつたらう。」

「犬さ。つまらない。文子には命の次かもしれないけれど、私はごめんだね。早速犬殺しにくれてやるよ。」

「ふーん。よくね。犬と一しよに寝てゐるつて言うじやないか。その犬はきつと、のこのこふとんの中にもぐり込んでくるんだよ」

「雄だね。爪は切つてあると言うが、文

子の時々のみみずばれば、御事主のじやないね。よかつたよ、敗けて。その犬はなにを心得てゐるんだよ。寝てゐる間に、犬にだぶられてごらんよ。」

「よししてよ。汚らしい。むづむづするやないか。」

幾代は全く気分が悪くなつてゐた。信子の眼がますます意地悪く幾代の肢体を眺めまわす。彼女はふいつと立つて店に出た。文子と高峰はもう居なかつた。信子は小指で珠子を呼んで、彼女の手に乳環を握らせ何事か耳打ちした。

### 3 身代り女

信次は、銀色に輝き出した川を哀しく眺め下してゐた。(幾代は急病になつたのかもしれない。それでも来ないことはない。あんなに固い約束をしたのだもの。)

女の聲音が近付いてきた。彼の胸に破れる程高鳴つて、声のどこにからまつて出なかつた。(来たのだ。やつぱり来たのだ。)

彼は、このような時、喜びの声をあげればいいのか、うらみ言を言うべきか、怒るべきか、全く度々を失つて、松の幹から離れて夢遊病者のように歩いた。

「来た、やつぱり来てくれたんですね」

し、女は信次を制した。しかし、信次の耳にはそんな声は入らない。自分の言いたいことだけで一杯なのだ。

「もう、帰ろうと思つていたんです。」

「……………」

「でも、もういいんです。来てくれたん

だもの。」

「……………」

女は黙つて彼の肩をかゝえて坐らせた。

「僕は、今夜あなたが来なかつたら、明日の夕方までここに待つていようと思つてゐたんです。明後日も、そして正月中いつまでも」

女は大きく背いた。と、蛇がからむように少年を巻き込んで深々と、彼の口を吸込んだ。彼は身願ひした。女の冷たい手が自分の身体を這いまわるのを意識した。彼は燃えたつた。部分が自分の肉体と思へぬほどに……女に、深く、すつぱりと包まれて彼は喘いだ。

「明日も、明日も……」

信次はその言葉を、自分が言つたのか相手が言つたのかわからなかつた。

その時まさみの頭にひらめいたのは、その名も知らぬ愚直な子供を明日の賭代にしようと思つたであつた。彼女は簡単に起上つて、呆然と芝生に転つてゐる信次を蔑して、さつと自家用車に乗込んで走り去つてしまつた。

### 4 ニセ學生

高峰は明るい電球に変えると、下宿の二階で自分の両手の手首を重ねて文子に縛らせた。そして、その腕の輪の中に、尻を軸に中心を取りながら巧みに両脚を入れてみせた。トランプの手品の種明しから、新しい手品に移つたのである。縛られた彼の両手はそのまゝ尻を通つてするつと背にま



わつた。と、いつの間にか、その手にスベ  
ートのAがあつた。それを又前にまわし、  
輪から両脚を抜く、とカードはハートのク  
インだ。

「教えましょう。」

彼は、文子の縛つた手拭いからすつぽりと手を抜いて、その手拭で文子の両手を無  
雑作に縛つた。文子は、氣味悪くなくもな  
い。しかし、何となく面白そうでスリルが  
ある。新らしい手品で仲間をあつと言わし  
てみたい虚榮もある。文子の豊艶な肉付き  
の脚は腕の輪の中になかなか入らなかつ  
た。文子はクツクツと笑つた。

「寝転りなさい。そうすれば入ります」

文子は彼の言うように仰向けに寝転り、  
あられもなく両脚を高くあげてやつと腕の  
輪の中に入れた。

「さあ、こゝにハートのクインがありま  
す。いいですか。」

高峰は真面目くさつた顔で、カードを指  
ではじいて見せた。

「何でもないことです。」

彼はカードを襟にはさむと、両脚を両手  
で抱えた恰好で仰向けになつてゐる文子の  
ズロースを、何か獣の皮でもむくようにひ  
きむいた。文子は、はつと笑いを引いた。  
と、既に男の重量がづつしりと彼女の上に  
あつた。

「どうです。」

ニギビ面は憎々しいほど落付いて、まだ  
彼女の全く経験もしたことのない変態であ  
つた。

文子は息を引いた。生命が燃えて、助け

を呼ぶ等の声は重い呻きになつてもれた。

## 5 カルシユーム氏

その頃信子は、魔睡薬で正体もない幾代  
のすべてを——靴下から、シユミーズから  
すべてを剥ぎ取り、身につけ、幾代の裸身  
の上に乱雑に自分の脱ぎ捨てた服を投げか  
け、三好を出て行つた。彼女は、今夜こそ  
カルシユーム氏の肉体をわがものとしよう  
と意気込んでいた。彼女は、カルシユーム  
氏が匂いにまで神経を使つてゐると云うこ  
とを聞いていたので、香水も幾代のを使つ  
た。

アトリエにはまだ灯が点いていた。勝手  
を知つてゐる庭であり家である。信子は家  
へ入るよりまず、彼のいつわりない赤裸々  
な姿を見たいと思つた。そしてアトリエの  
窓の下へ足音を忍んでいつた。と、こゝに  
住込んでゐる十七、八の由美と云う画家志  
望の少女のことが頭に浮んだ。いざとなれ  
ばりまく追払つてしまえばいいが、今頃、  
カルシユーム氏の前に素裸になつて横たわ  
つてゐるのかもしれない。或いは、（何を  
してゐるのかわかりやしないさ）

彼女はやつとアトリエの内部をそつとの  
ぞくことが出来た。彼女が期待してゐたの  
は少女の恥しげもない全裸を彼の前にさら  
してゐることである。そして、彼女自身が  
もつと奥深いところで熱心に求めていたの  
は、二つの肉体がからみ合い、愛の呻きと  
リズムをむきつけに見ることであつた。そ  
うなれば、あのとり澄した由美を叩き出す

ことも出

来る、カ

ルシユー

ム氏をと

つちめて

自分のも

のにする

ことも出

来る……

で、彼女

は見た。

彼、カル

シユーム

氏が赤裸

々な姿で

もモデル

台に立つ

てゐるの

を、由美

が大作の

最後の仕

上げの筆を振つてゐるのを――

信子は頭がくらくらした。

全く思いがけなかつたのであ

る。信子は、幾代が彼をカル

シユーム氏と称ぶ理由がやつ

とわかつたのである。服を着

てゐる時とはまるで違ふ、外

人のように肌白い肉体。ふさふさと漆

黒に輝いてゐる毛、瘦せて骨ばかりで

あるからのカルシユーム氏ではないの

である。

彼女はすつかり間諜付いてアトリエ





から隠れた。何しにこゝまで来たのか、わからなかつた。(一番貧乏くじを引いたのは私かもしれないぞ)と思つた。と熟睡してゐるであらう幾代にさえ嫉妬を感じた。何かで取返しをつけたいと思ひながら街を歩いた。

と、突然、一人の少年に呼止められた。

「幾代さん。」

「えい？」

「やつぱり幾代さんですね。洋服がそうですもの。さつきは夢中でよくわからなかつたけど、どうして逃げちやつたのです」

正月の夜の街はまだ賑やかであるのに、少年は周囲に一向お構ひなしなのである。

「珠子さんは寝てゐるつて言ひんです。嘘に決つています。寝てなんかいられやしません。僕をまだ子供だと思つてからかつてゐるんです。きつと、」

信子は、黙つぽく喋りつづけるこの名も知らぬ少年を持てあました。そして、その腕を捉え、すぐに露路へ入つた。

「僕、お金持つてゐるんです。これで、泊りましよう。どこか。僕、家の方はいんです。」

正月で、友達の家泊るつて言つて来たんです。ね、どこか……。」

(どこかなら私の方がよく知つてゐる)

と信子は苦笑した。が、この少年が何者であるのかまだよくわからなかつた。少年は、一人前の顔をして、先に立つて安ホテルへ入つていつた。

(ふん、シヤラクさいぞ。)と、まだ成熟していないひよろ／＼のその後姿を眺めて歩いている信子に、少年が言つた。

「明日もきつと、松の崖へ来て下さいね」

突然信子は悟つた。この少年が幾代の賭代なのだ。そして、まさみを幾代と思込んできつてゐる。そして私も……この少年は盲目かもしれない。面白い。幾代になりすましてやれ、顔を見られるとまづいな。まあ何とか誤間化せ。この少年は幾代を自分のものだと言ひふらすだらう。カルシウム氏と幾代との間にトラブルが起きるかもしれない。やれやれ。面白いぞ。

信子は終始壁に向つてゐた。

「どうしたんです。ねエ、幾代さん」

「恥かしいワ、電燈消して。」

「なあんだ。」

信次は電燈を消すと、背後から信子の乳房を抱えて、彼女の頭にきこえないキスをした。それからどうしていいのかわからぬのだ。と彼の手が女の手に掴まれ、からみ合つて倒れた。

## 二 恥 丘 の 刺 青

### 1 流れた麻雀

文子が来なかつた。でマージャンは出来なかつた。店からゲストを呼べばいい。が、それもわずらわしかつた。

幾代は店へ呼びかけた。「お店、忙しいのよ。」

つて今朝アトリエを出た。そして、飯も食べていなかった。お腹が空いて膝ががくがくしていた。彼女は少年の傍にべつたりと坐つた。

「いい処ね。」

まさみはちらつと幾代を見た。幾代はまだ高峰に未練を持つてゐた。ちよつと太々しくて、気味の悪いところはあるが、この辺りの男達にないある異様さがあつた。単純にはもうあきあきしてゐる彼女である。新しい氣晴しはないか。カルシウム氏と由美とが恋愛でもないかなア。

彼女が、まるで兄弟でもあるかのやうに信次に話かけた。が、強烈な生の享樂を知つたばかりの信次は、幾代が来るのが待遠しくて、そんな由美の言葉は耳に入らなかつた。

まさみはヒロポンを十箱幾代に渡した。それを幾代が然るべく売るのであるが、彼女はまさみが俊郎にヒロポンを売付けてゐるのを知らなかつた。アトリエの二人、俊郎と由美子は毎日ヒロポンを打つてゐた。

由美はひろ／＼しい眼望に眼をすえた。「こんないいところで死にたいわ。」

俊郎は、ヒロポン代として週に三晩まさみに身体を任してゐた。由美は俊郎とまさみの關係を、就中まさみを憎悪した。しかしどうにもならないのである由美はヒロポンを打始めてから、大作を描上げたら死のうと思つてゐた。

信次はどきつとして起上つた。この女は本当に死ぬかもしれないぞ。と、何だか惜しいやうな氣がした。が、何か惜しのだかはつきりわからなかつた。

由美は静かに膝の上にスケッチブックを開いた。(薬の方がいいかしら。それともパレットナイフで胸を突こうかしら。この少年、私と一緒に死んでくれないかなア、そんなこと聞いたら、驚いて逃げちまうわ。この子)

夕陽が彼女の全身にさした。信次は何が惜しいのだから、この時急にわかつた。彼はいきなり少女の背後から胸を、しつこりした乳房を抱いて、彼女の頸筋に唇を押しつけた。と、鋭い痛みを感じて、あッ、と飛びのいた。パレットナイフが由美の頸動脈を見事に突切つて、彼の頬を裂いたのだ。血汐が鮮やかにスケッチブック一杯を染めて、由美はがつくり首を垂れた。

### 2 モデル由美の死

信次は待つてゐた。太陽は山の端に沈もうとしてゐた。そこへ、蒼白い顔をした十七、八の少女が来た。彼女はスケッチブックを持つてゐるだけであつた。それは由美であつた。

彼女が、心の恋人の裸像を精魂こめて描上げた。それでも満足であつた。彼女は疲れたから氣晴しにスケッチに行く、と言

信次は手拭で頬をおさえて、がくがくふるえながら逃げ去つた。



### 3 謎の刺青

その頃文子は、昨夜のまゝの姿勢で横に転つていた。たゞ違ふのは、全く何も、いや手を縛つてある、手拭以外一条も身にまといつていないと言ふことである。乳房や肩や、腰や至るところに強いキツス、と言ふより、血を吸つたあとがあつた。火鉢には炭火がかんかんにおこり、薬籠には湯がたぎつていた。

高峰は刺青の下図を書き終えて、惚々と文子の豊かな肢体を眺めまわした。

「やはり、又、一寸眠つてもらいましょうね。何ね、又毛が生えますよ、前より一そうふさふさとね。そうすればわかりやしません。」

奥さんのは濃いですからね。わかりませんよ。

え、奥さんで三十七人目です。どこにも刺青のあとが見えない。知つてゐるのは奥

さんと私だけです。ええ、黙つていますよ、絶対に秘密を守ります。奥さんが自分で喋らなければ永久に誰にもわかりやしません。

趣味でしてね、そこに刺青するのが……

何とも言えずに楽しいんです。勿論年月日と私の名前は入れてありますよ。芸術的にねあとでゆつくり御らんになつて下さい。

幾代夫人ですか、あの方もいい体をしていすな。いづれ又、別の方法で存分に遊ばしてもらつてから刺青を入れさしてもらいますよ。間違ひなくね。まさみ女医さんも、信子さんもね。珠子嬢はちよつともすきがありません。しかし女なんて、わけありませんよ。千人なんて言いません。百人でやめときます。百人ね。

奥さんには今夜お帰りになつていただけます。服は着ていらつしやつてもいいのですがやはり裸はいいですな。とくに奥さんの乳房は食べちゃいたいようですよ。ほめてゐるんですよ。一寸失礼。

高峰は文子の腕に手慣れた仕草で注射を打ち、再び手拭いを解いた。文子の四肢は投げ出されたように彼の前にひろがつた。

### 4 肉体遊戯

マージャンはとうとうすることが出来なかつた。幾代は、高峰を訪ねてみようかなと起上つた。まさみは、今夜は俊郎と、例の肉体の遊戯をする夜であることを想い出して、マージャンが不成立に終つたことを喜んで、そんなことはおくびにも出さず、何喰わぬ顔をして自家用車に乘込んだ。

信子は昨夜の少年の真剣さが吐にしみてどうしても松の雄へ行つてやらなければならぬと思ひながら店を出た。

二人の女友達が去つてしまつと、幾代の心は何となくのびのびとした。訪ねるのが嫌になつた。すると、元日以来顔を会わしていないカルシウム氏が恋しくなつて、アトリエへ行こうと言ひに氣なつた。そこ

へ当の彼女のカルシウム氏が蒼い顔をしてやつてきた。珠子が彼の顔色を見て驚いて声を掛けた。彼は心配そうに答えた。

「由美さんがね。今朝スケッチに出たまゝ帰つて来ないんだ。こんなことは一度もないんだ。おそくとも一時頃までには必ず帰つてくるんだが、店に寄らなかつた？」

幾代は素早く身仕度をする、珠子に、たのんだわよ。と声をかけて、彼カルシウム氏と腕を組み、連れだつて店を出た。

まだ陽は山端に落ちたばかりで、黄金色の雲が棚引き、川が真赤に染まつてゐる頃である。彼と彼女は、松の雄と云われる崖の上でその赤い燃ゆるような川を見下しながらどつちからともなく結ばれていつた……

丁度そのことを二人は別々な感慨の下に思い出しながらよりそつて歩いてゐた。土色の顔をして頬を手拭でおさえた少年がよろめくように二人の傍を通りすぎたが、幾代はそれが信次であることに氣が付かなかつた。

(終)

### ばいしゅんじむいん 賣春事務員と逢曳女学生

### 椿 昭彦

大阪の新宿ともいふべき、近鉄と、軒を並べて屋台店が繁昌してゐる。関東煮、トンカツ、どて焼、アペノ界隈は、梅田から地下鉄で十五分。附近には、南の盛り場新き、ホルモン料理、お好み焼。手で行く、飛田新地へのいたちの道世界と、天王寺公園が眼の前にひろがり、名代の色街飛田新地も、突込むと、牛の内臓がコロモをかこゝから徒歩で二十分とかゝらなぶつた、二串五円のフライがあつた。こゝで五円のフライを十本ば

「オッサン、ええ、奴世話してんか」  
と、はつきり水を向けてくる客は、一晩のうちに二人や三人では、一〇〇%のホルモン料理を食つて、きびしい取締りの眼を潜つて、公認の女郎衆の上をハネる、三割引ホルモンの消耗をはかるのは、至極とら然の擧げであるが、なかに、俗にいう高級パンパン嬢となつて、屋台店で一杯やるうちに、女ると、教養の程度も高女卒とい



# 女をめぐる電話公衆

のがザラにあり、それ／＼プライドを持つてゐる。したがつて、彼女たちの収入方針は、根本的に一般の街娼と異つており、公園のベンチやビルの裏手で、あまたしく取引する青かん営業とは段ちがいである。

屈は会社の事務員として働き、退けると約束の場所へ逢つて、貞操と報酬の交換をやるのである。で、その逢曳の連絡をするために、彼女たちは夜になると、公衆電話に集つてくるのだが、こゝでお茶を挽きそうになると、手ごろなカモを物色するといふ算段なのだ。

二十分ばかり、幾人かの男性を見送つて、ちやうど、それらしいタイプの女が、電話室の中に入つたところを、うまくとらえた。

二十四五才。相手の名刺をハンドバックから取り出した時、指の先の赤いエナメルが淡い電燈にキラツと光かる。体つきが、しつかりしまつた熟れきつた四肢。特に上半身のスタイルがよく、整つた乳房の先端が、グツと胸の線に強くあらわれている。

「モシ／＼、北の三九四番？あのウ、深島さんまだいらつしやるでしようか？ え？では、恐れ

入りますが、チョット電話口まで……はい、おねがいします」表面はいとも神妙であるが、当の相手が出てくる、ほんの一二分の間に、彼女たちは、今夜の作戦を練つてゐるのだらう。ハンドバックの口金を開けて、次の男の名刺をひねくりながら、ニンマリと大胆な笑みを浮かべる。

やがて、通話がはじまつた。

「深島さん？ 妾よ、判つて？ フツ、フツ。今ね、近鉄アベノに

んのよ。お仕事の方おすみにならないの？ え？ あら、そんな意味でいつたんじゃないワ、ずいぶん皮肉ネ、おぼえてらつしやい」不敵に鼻さきで嗤い、美しくマニキュアを施した爪先で、ピンツと男の名刺をはじく。

「ねえ、貴男、何か誤解してらつしやるんじやアない？ 昨日や今日のおつきあいでもないくせに、そんな素面はきらないでよ。それどころか、妾、淋しくつて、困つてんのよ。逢つて頂戴！ ね、お供するワ、いゝでしよ？」

ノ一ときたのか、イエスとでたのか、それを判断する暇もない敏捷さで、公衆電話をたび出してきつた彼女は、甘酔ッぱい香料をプンと漂わせて、地下鉄の階段をコツコツと降りて行く。——不死身な肉体を酷使せんがために。……

彼女が立ち去つて、二三分たつた頃、近鉄地下劇場の二回目の上

映が終つたらしい。スクリーンにの陶酔からはじめて覚めた観客がいつとき各乗り場に満ちあふれた。

「さよなら」

「じゃ、また

ネ」

二人連れ



女学生が、たがいに手を振つて別れてく

る。制服のバツジはT高女、それも卒業期に近い上級生である。見るからに、健康そのものの、濃刺とした姿態だ。皮膚は平素のスポーツで練えているだけに、さすがに浅黒く、濃紺のセーラ服の下に、豊かな肉体が伸びきつてゐるのがはつきりと判るようなみず／＼しい体格。腰の發育も、もうすつかり女である。

彼女は、ずらりと並んだ公衆電話の、空いているボックスに、身軽く入つた。胸のポケットから財布を取り出して、一円札をさがしている。百円札が七、八枚のぞいた。かなり裕福な家庭だらう。電話が通じた。

「モシ／＼、ねえや？ あたしよ。あのね、今晩すこし遅くなるか

云つて頂戴。うん、映画観るだけ……、十時までにはお邸に帰るワ。ね、頼んだわよ」その映画は、今観て出たばかりなのに、彼女もう一本観るつもりなんだらうか。何かありそう。女学生……と簡単にたずねてゐるけれど、娘も年頃の十八、九才にもなると、油断も隙もできないところだ。

アイロンのよくあたつた、ヒザの多いスカートを、寄膝踏にひるがえして、近鉄交差点を西へ横断。向いは天寺公園、下へ降りると新世界の映画街。横断歩道の停止線にたゞずんで、しばらく行き交う人波を見送る。

「八代さん、何処へ行くの？」彼女と三米と離れない背後から突然、同じ制服の女学生があらわれた。

「まア……」彼女は瞬間、ぱつと悪い顔をされた。「今まで、何してはつたの。もう七時よ」買物の包みを提げた、女学生が訊く。

「助平」女学生たちは及び腰で、怒鳴つた。



花園 一郎  
浦井 弱郎



別れも愉し

お馴染みの料理旅館、鳶尾の離れに入つてくるなり

「駄目よ。私忙しい身体なのよ。それに、もうあんたとは、きれいに別れたはずじゃないの」

と桂子嬢は山田君をきめつけた。

「分つてるよ。今日のは君、君の新しい恋愛を祝福して、心ばかりの祝杯をあげて貰おうと思つてね」

胸に一物、魂胆のある山田君は、ここま

で相手をおびき寄せれば、半ばは成功と、猫撫で声になだめすかして、まアまアそこは端近かずうと奥へと、桂子嬢を招き入れてしまった。

「私、忙しいのよ」

鼻を鳴らして、桂子はタイトのスカートから、すんなりした絹靴下の脚をそろえて投げ出した。桂子の魅力は、このビチビチした肢体にある。タイトのスカートが打つてつけによく似合う、揉みくしやにしてやりたい程可愛く、むちむち白い肢なのだ。

山田君は怨めしそくに、眼をそらした。

「分つてるよ。明日つから、菊井重役第二世と、旅行に行くんだろ」

抱腹絶倒、断然面白いエロチツク・ユーモア

「あら、知つてたの？」

「そりやア、君、蛇の道は蛇さ」

「厭やアねえ」

満更らでもない証拠に、桂子はうきうきしている。嬉しいのだ。畜生、と山田君は抑えようとしてもつい感情がとがってくる

「ま、一パイ、何はともあれ、君の前途を祝して」

「とか何んとかつて、私には何の用なの？恨みつらみなら真ツ平よ。あんたと私とは一年契約の恋愛で、芽出たく満期終了になつてるのよ。」

「分つてるよ。だからさ、友人として君の新しい恋愛に幸あれと……」

「あら、それ、新型の趣味なの？」

「違ふよ。そんなんじゃない。さつぱりした事、水だきの大根というほどの僕の心境なんだよ」

「案外そのお大根、スが入つてるんじゃないの？怪しいわ。何かありそうね」

「ありやしないよ。別れも愉しつて、この前、君が言つてた通りだよ」

「じゃ、どして、こんな場所へ、わざわざ私をおびき出したのよ」

「おびき出すなんて、人聞きが悪いね。安サラリーマンの僕には、ここしかお馴染みがないんだよ。それに、ここだつたら、お風呂もあるし、融通も利くし」

「駄目よ。その手は桑名の何んとかだわ。焼けぼつにくいに火をつかさうなんて、厭らしい根性よ」

「大丈夫。そんな卑しいことは言やアしない。その点は太鼓判をおすよ。」

「ま、いいわよ。お酒、頂くわ」

「うん、そうときまれば、君、一風呂浴びて来ないか。僕も君を待つてゐる間に入つておいたんだがね。いい湯加減で暖つたよ。今日は寒いからねえ」

「寒くないわ。私、ボカ／＼してるわ」

「そりや、君は……おと、これは厭味でも何んでもないんだよ。ほんの軽い」

「分つてるわよ。明日はさぞおたのしみでそれを思うとワクワク／＼ズキ／＼、寒い所じやないつてんでしょ」

「そ、そうなんだよ」

「私、頭いいでしょ。あんたの気持位い、手に取るように分るわ。じゃ、折角だから一風呂浴びて来ようかしら……。ここのお風呂とも、もうお別れだもの」

「うん、そうし給え」

今に見ろ、と口には出さないが、山田君はそわ／＼して、桂子嬢を湯殿へ送り出した。

山田君と桂子嬢とは、すでにこの鳶尾でいく十回となく、鳶尾の語らいを交した仲なのだ。たとえ、それが一年契約であつたとて、人間の感情つてもものは、そう割り切れるものじゃない。ことに、相手が重役の息子に乗り替えたあつては、怨み骨髄に徹して、おのれと思ふのは理の当然である。

しかも、桂子嬢は、山田君の勤めている丸高産業の社長の隠し子なのだ。早く言う

と二号の娘、その二号郎へ、社長秘書の山田君が出入りする中に、この隠だらけ、ふれる先からころげ落ちそうなイロツぽいお嬢さんを射止めたなら、たとえ社長の娘を物にしたほどの効果はなくとも一寸した出



世の緒口と、色と欲との二筋道を心ざし、まんまと図に乗ったその矢先、この名にし負うアプレ嬢、期限切れとばかりに当りそこなつた車券みたいに、ボーと山田君を捨ててしまったのだ。

## 奇抜な復讐

乳色に、湯殿の窓がくもつている。湯音がしきりとしている。薄暗い脱衣場の乱れ籠には、脱ぎ捨てた桂子の衣裳が、なまめいた下着を上にして、入れられている。足音忍ばせて、山田君は、脱衣場にこつそりとやつて来た。

ジャブジャブという湯音にまじつて、桂子のハミングがもれてくる。

しめしめ、山田君は乱れ籠から、桃色のパンティをさがし出した。

見覚えのある、いわばなつかしいパンティだ。むれたように、桂子の体臭がすりつけた鼻先に匂つてくる。

山田君は、おもむろに上衣のポケットから小さな薬瓶を取り出すと、蓋をねじ戻した。

そして、パンティをひろげると、薬瓶をさかさまに、トントんと底をたたいた。パラ／＼とゴマ粒ほどの物が、こぼれ落ちた作業完了。

ニタリと薄ら笑いを口辺にうかべて、山田君は、指先につまみ上げたパンティを元へ戻し、おもむろに、脱衣場を出ると、便所に入つた。そこで、例の薬瓶をボトリと黄金溜めに投げ捨てた。

何喰わぬ顔という言葉通り、山田君は、上気嫌で湯上りの桂子を迎え、ごく快活に

「さア、桂ちゃん、気持よく飲んで、別れよう」

「ええ、飲みましょう」

と程よく酔つばらしい。

「あまり遅くなつてもいけないね。自動車を呼んで、君の家まで送つてくよ。何しろ僕は社長秘書ですからね、社長の御令嬢に万一の事があるで大変」

「そオ、じゃ、送つて頂戴」

勢よく自動車はスタートして、二人は仄暗いルームランプの中に並んでいた。

「これで、僕は、もう何も思ひ残すことはなくなつたよ」

「そオ、嬉しいわ。やつぱり山田さんで、さつぱりしたい方だつたのね」

フフフ、山田は、思わずふき出しそうになる笑いを噛み殺すのに苦労した。そしてあのパンティを得々としてはいっている桂子の上に、何か変化の起るのを今か今かと待ち受けていたのだ。それでなければ、裏切つた女に、なけなしの財布をはたいて、酒を飲ませたり自動車を奮発したりする馬鹿はいない。山田君は実験の結果を見届ける

科学者のように、全神経を集めて、桂子嬢を見守つていたのである。

すると、やがて、桂子は、それと分らぬ程度に、もぞ／＼と腰を動かした。はじめた。

「あああ、すつかり酔つ払つて、ねむくなつちまつた。桂子さん、僕、一寸失礼しますよ」

山田君はわざと眼をつむり、心眼を眼瞼にこらしていた。

「ええ、どうぞ、私も酔つたわよ」

しなだれかかるように、姿勢を変えた桂子は、一二度お尻を動かしたかと思うと、

山田君の眼をとじたのを幸い、豪華なお

バーの間から、素早く右手を中へしのばせた。ところがタイトのスカートという奴は金城鉄壁、なか／＼思うところへ手がふれない。焦ら立つた桂子は、腿と腿をすり合せて、しきりにもが／＼と焦つているが靴を隔ててかゆきを搔くの謔へ通り、うまくゆかない。

ざまア見ろ、赤い舌をペロリと出して、山田君は快哉を叫んだ。そして、意地悪くこの上はスカートをめくり上げてもと、勇ましく決心した桂子が実行に取りかかつた最中に、パチリと眼を開いて、伸びを一つやつてのけた。

「あああ、桂子さん、お宅はまだですか」

「え、ええ」

あわてて、桂子はオーバーの裾をつくらつたが、今はもう堪らずに、とび上つてしまつた。

「ど、どうしたんです？」

「いいえ、何んでも。……この辺、道が凸凹なのよ」

道は坦々としたアスファルト道路なのであつた。

「さア、もうすぐですよ」

「ええ、私、この辺で下りて歩きたいわ」

「そうですかア、気分でも悪いの？」

「ええ、運転手さん停めて頂戴」

今は見栄も外聞もなく、桂子は車内に立ち上ると、フラダンスよろしく、腰をふつている。

可笑しいやら痛快やら、いや／＼これ位いではまだ足りぬ、もつと／＼苛めてやらなくては胸の溜飲は下りはないぞ、山田君はなほ執拗に、

「じゃ桂子さん、歩いてお宅まで送つて上げますよ」

「ええ、私も酔つたわよ」

山田君の眼をとじたのを幸い、豪華なお



と自動車を下りた。

「あら、いいわよ。あんたこの自動車で帰えんなさいよ。私一人で大丈夫よ」

桂子はしきりに一人になりたがつている山田君はさあアみる、明日の旅行はさぞ動物だらうぜと、

「でも、この辺、物騒ですからねえ」

それを聞くと、桂子は溜息ついて、トンと地団駄を踏んでいる。所が地団駄ぐらいでは到底ゴマ化せなくなつてきた。

「ああ」

軽い叫びをのこすなり、桂子はバツと走り出した。

「桂子さアーン」

山田君はどこまでもつきまといつて、散々に苦しめてやる気で追かけた。

## 特別製のあれ

「まあ、癪だ」

血の出るほど爪をたてて、ガリ／＼掻くの、ちつともかゆみが止らない。かゆみ止めの薬をぬつても全然利き目がない。

「困つたわア」

一晩中、桂子は眠れなかつたのだ。

はれぼつたい臉をこすりこすり、一体全体どうしたんだらうと、閉る朝陽のさし込むベツトで、よくしらべてみたが、自分

のかき跡以外に異状はみあたらない。ノミでもない南京虫でもない、かゆいのは一箇所だけ、こんな肝腎のところが何かにかぶ

れたんだらうかと、よく／＼眼を見張つて見定めると、桂子は、見慣れない小昆虫が

キラリと、つる／＼した身体を光らして動いたのに気づいた。

「アッ」

つかまえたようと指先に唾をぬつてい

と、そのゴマ粒ほどの虫は森の中に逃げこんでしまつた。

「さては……」

指先で森をかき分けて、らん／＼と眼をこらしてみると、いるわ／＼、無数のゴマ粒ほどの昆虫群が、ウヨ／＼とうごめいているではないか。

「う、まア！」

呆れて、やがて猛然と怒りがこみ上げて来た。おのれ、この家ダニのエロダニ奴、お前たちは搦りに撰つてこの私の宮殿を荒したな、不屈者奴、覚えてらつしやい。

由来、この家ダニという虫物、特に好んで人体三角地帯に生棲し、あのあたりの柔い肉をチクリチクリとやる大変な痴れ者なのだ。

桂子は、思いついたように、枕許の水差しの水を洗面に移すと、しばらく、陽射しを宮殿に当てて、昆虫たちを森に追いやる

と頃はよしと、ひよいとその森を引んめくつて、洗面器の中へ、チャボンとつけてしまつた。驚いたのは家ダニ先生の一族だ。

ぬく／＼と森の中で安眠をむさぼつていたのに、思いがけなくも、あれは人工の森であつたのだ。アツ／＼と水の上に無数の虫たちが浮き沈みしている。

桂子は特別性のカツラを水につけてしまると、女中にいつけて熱湯を運んで来させた。

「さア、覚えてらつしやい。

熱湯漬にしてやるわよ。フフ、慣りながら、私はカツラを使用したのよ、だ。

お前たちみたいエロダニになめられる私じやないわよ」

桂子はとんだタンカを切つてい

山田君の復讐は見事に、くつがえされてしまつたのだ。上には上があるといおうか敵もさるもの、あながち天然の森ばかりを彼女が持つてい

るとはいえ、いく十回となく同食したく女に、山田君がそれと気づかなかつたほど、桂子嬢の人工森は巧妙に作られた特別製品であつたのだ。

そも／＼故事来歴を述べようなら、桂子嬢の母親、丸高産業の社長の二号夫人は、世に所謂、パイ

バンであつたのだ。だから桂子のそれは母親譲りなのである。この特別製のカツラは、母親に貰つたもので、母娘共に同じ色の、同じような人工森を飾りつけていた

のである。それ、何所にでもあるそこにもある代物ではなく、現在の旦那、変人でさえ気づかぬ程精巧なものを義毛の職人に金目を惜しまず作らせた代物であつた。

## とんだ忘れ物

「一寸桂子、一体そんなところで、何をしているのよ。菊井さんがいらつしやつたじやないの。あんた早く、旅行のお支度なさいよ」

湯殿の外から、母親が声をかけた。

「あら、そオ。菊井さん、もういらつしたの」

家ダニ退治に夢中になつていた桂子は、それを聞くなり、あわてて湯殿を

「何してたの？ あらまあ、この娘は、香気な。お洗濯なんてしている場合じやないわ何よ。ふだんは下着一つ洗つた事もない癖に」

「ううん、洗濯じやないの。それより、菊井さん、どこ？」

「あ、どうも、僕、まだ早いとは思つたんですけど、家にいたつて落着かないでしよだから、お迎えに上つたんですよ」

菊井イカレボンチ氏は、ヤニ下つてい

「ううん、嬉しいわ、私、すぐお支度するわ」

いそ／＼と、部屋に戻ると、桂子はス

ツケースを掲げて、あれもこれもと詰め込みはじめた。

そこへ、母親とイカレ氏も入つて来て、やれどれを持つて行こう、どれを着て行こうと一騒動。

その中、汽車の時間も追つて来た。

「ああ、大変、後二十分よ」

それ急げと、イカレ氏の自動車に乗り込んだ。

その二人を見送つておいて、母の二号夫人は、

「そり／＼、ねえや、お前、お嬢様の洗濯物が湯殿にあるから、しておいておくれ」

と十六才になる女中にいつけた。

かしこまりましたと、湯殿にやつて来た女中は、そこで、いとも奇妙な品物をみつけ出したのであつた。

手に取つてみると小さなカツラなのだ。お人形のカツラにしては毛が立ちすぎているし、縮れ毛の世にも不思議なカツラなのだ。

「ま、いいわきつとお人形のカツラなんだわ。貰つとこり」

と彼女は手製の人形の頭にかぶせる気

例のカツラをポケットにしまい込んでしまつた。

ところで、桂子がこのとんでもない忘れ物に気づいたのは、二等車の中なのだ。



こんな美しい女性にだつて排泄作用はある。W・Cに行つた彼女は、ふと、冷い風がシカに肌を冷やすのに気づいた。

「しまった、あれを忘れて来たわ」

禿山では困るのだ。あの特製のカツラがあつてこそ、彼女は天下無敵だが、羽衣を失つたストリップ天女であつては神通力も利き目はなくなるといふ物。さう、困つた大変。

「どうしました。急に考へ込んだじまつたんですね。大丈夫ですよ。結婚の事だつたら旅行から帰えり次第、ちゃんと親父に話をしますよ」

「ううん、そんな事じゃないのよ。私、大事な忘れ物をして来たのよ」

「大変なつて、何んです。お金だつたら、僕十分持つて来ていますよ」

「そんなのじゃないの。もつと大切な。困つたわ」

あれがなくては折角の旅行もオジヤンである。アルコールの抜けたお酒みたいに味のないものになつてしまふ。

ましてや、これを機会にイカレ氏と正式に結婚話を持ち出すことも出来なくなつてしまふではないか。

桂子はヤキモキしているが、列車は容赦なく、ひた走りに目的地へと進んでいる。

「ね、一体、何を忘れたんですよ」

「何つて、とつても大事な物なのよ」

「だから、何なんですよ。水臭いなア。僕たちが結婚するんですよ。だつたら言つて下さいよ」

イカレ氏も、親切をみせるのはここぞとばかり食い下つて来た。

「何つて、言えないわア。あれがないと、風邪引いちさうのよ」

「風邪を引くつて、薬ですか、それともマスカミたいもの？」

「え、そう。マスクなの。ね、あなた、私です」

「ま、嬉しい。私だつて、あんなカツラを」と桂子嬢は小声でイカレ氏の耳許に囁い

「いいですとも、マスクなんて、僕、嫌い」

「エッ、カツラですつて／＼どこの」

イカレ氏は思はず桂子嬢の顔を眺めたが桂子は桂子で、無意識にタイトのスカートの上をしつかりおさえつけていた。

(オシマイ)

### 十一月号グラビヤ頁

#### 懸賞モデル年令当

##### 解答発表表

◎モデル嬢の、年令(満)は左記の通りでした。

①雲井 久子 二十三才

②津森志奈子 二十四才

③吉田 百合 十八才

④赤坂 和枝 二十二才

⑤黒川 タミ 十九才

⑥浜名 藤子 二十才

⑦中林カオル 十九才

⑧緑川 滝江 二十二才

⑨藤原 ユキ 二十才

⑩渡辺満佐子 二十三才

⑪牧野マリ子 十九才

⑫土井 昭子 二十四才

愛読者の方々の熱心なる多数の応募を頂き有難うございました。全部適中者に規定の賞金賞品を差上げる予定の所、残念ながら十二名全部適中者

○五名適中者 (メード・フオト中版三枚)

谷野治(兵庫) 甘木アサ(鳥

は勿論、九名から十一名適中した方もございせんでしたので、比較的適中数の多い方々に左記の通り贈呈致すことにしました。賞金残額につきましては、追つて新企画により懸賞致します故、その節は暫て御応募あらんことをお願い致します。

○八名適中者 (賞金五千元並メード・アルバム一冊)

奥村忠明(鳥取)

○七名適中者 (賞金三千元並メード・アルバム一冊)

宇津美代(長野) 柿本昭治

(徳島) 瀬本文子(東京)

○六名適中者 (賞金一千元並メード・アルバム一冊)

真田雪雄(愛媛) 下井巖(岐阜)

浮遊子(宮崎) 堀本伸三(仙

台)

○四名適中者 (メード・フオト中版二枚)

取) 徳永由一(仙台) 野田

曼作(愛知) 米村桓夫(高

知)

○三名適中者 (メード・フオト中版一枚)

小林正(茨城) 島林いし(東

京) 栗原徳助(広島) 畑村

信夫(福岡) 乾謙一(福岡)

三木清治(大阪) 犬飼吟生

(愛知) 桃井青三(徳島)

衆一(奈良) 伊藤照夫(三

重) 戸部勸(大分)

○二名、一名適中者及び無適中者の多数の方々には、誌上より厚く御礼申上ます。

◎若し記載漏レガアリマシタラ御手数乍ラ御一報下サイ

☆モデル年令当懸賞係

恵(石川) 明治福夫(大阪)

松井津男(三重) 宮本鶴子

(岐阜) 内川敬江(岡山)

布施忍(群馬) 清水玄太(神

戸) 森嶋一郎(和歌山) 野

口加藏(広島) 宮野伴造(大

分) 林正一(山形) 喜多晴

男(名古屋) 伊東鶴子(清

水) 榎原伊短男(東京) 吉

田広治(島根) 大木芳郎(京

都) 伊吹達吉(福岡) 秀本

伸太郎(高松) 古森明(佐

賀) 三国信七(京都) 西村

真次郎(津) 向井力男(秋

田) 加藤謙(奈良) 田島次

郎(津山) 渡部伸七郎(佐

賀) 杉浦龜造(広島) 宇原

弘(大阪) 浜田正文(山口)

山中菊夫(佐野) 津島明子

(奈良)

○二名、一名適中者及び無適中者の多数の方々には、誌上より厚く御礼申上ます。

◎若し記載漏レガアリマシタラ御手数乍ラ御一報下サイ

☆モデル年令当懸賞係

谷野治(兵庫) 甘木アサ(鳥

崎) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井

中) 赤井トミ(京都) 桜井



# 特 高 の 惨 虐 行 爲

拷問  
ごうもん  
片矢 薫  
え須磨とけい

交叉点の角に立ち止つて由紀は宣伝マツチを配つて歩く男を待つていた。昭和十年の秋である。都会の繁華な十字路にまで何処からともなく黄ばんだ木の葉が舞い落ちて来る気候であつた。もう夕方に近い街は、帰りを急ぐ人達の群で渦巻いてゐる。その十字路に面した洋装店の飾窓の前で由紀は何気ない客の一人ように、あでやかに飾られた洋服を眺めていた。夕暮の沈んだ光が飾窓の硝子にくつきりと由紀の姿を浮び出している。すうりした長身の軀を好みのよい洋服でびつたりと包んで、ハンドバックを小脇にかゝえて佇んでいる姿は何処から見ても一分の隙もない職業婦人だ。由紀は硝子にうつるそんな自分の姿に満足したように二三歩いてみてからくると振返つた。

するとその時、車道を距てた向う側の歩道を人の波にぶつかつて歩くようにし乍ら、通りすがりの人に何か小さなものを手渡しゆく男の姿があつた。一見労働者風の男だが、何処からうぶれ果てた感じがなくてもない。その男はちらりと視線を泳がせて由紀の姿を見附ける、矢張り同じような運動を繰返し乍ら側へ渡つて来た。がそれは由紀とその男とが感じたことであつて、他所見には何の意味もないコースしか見えない。

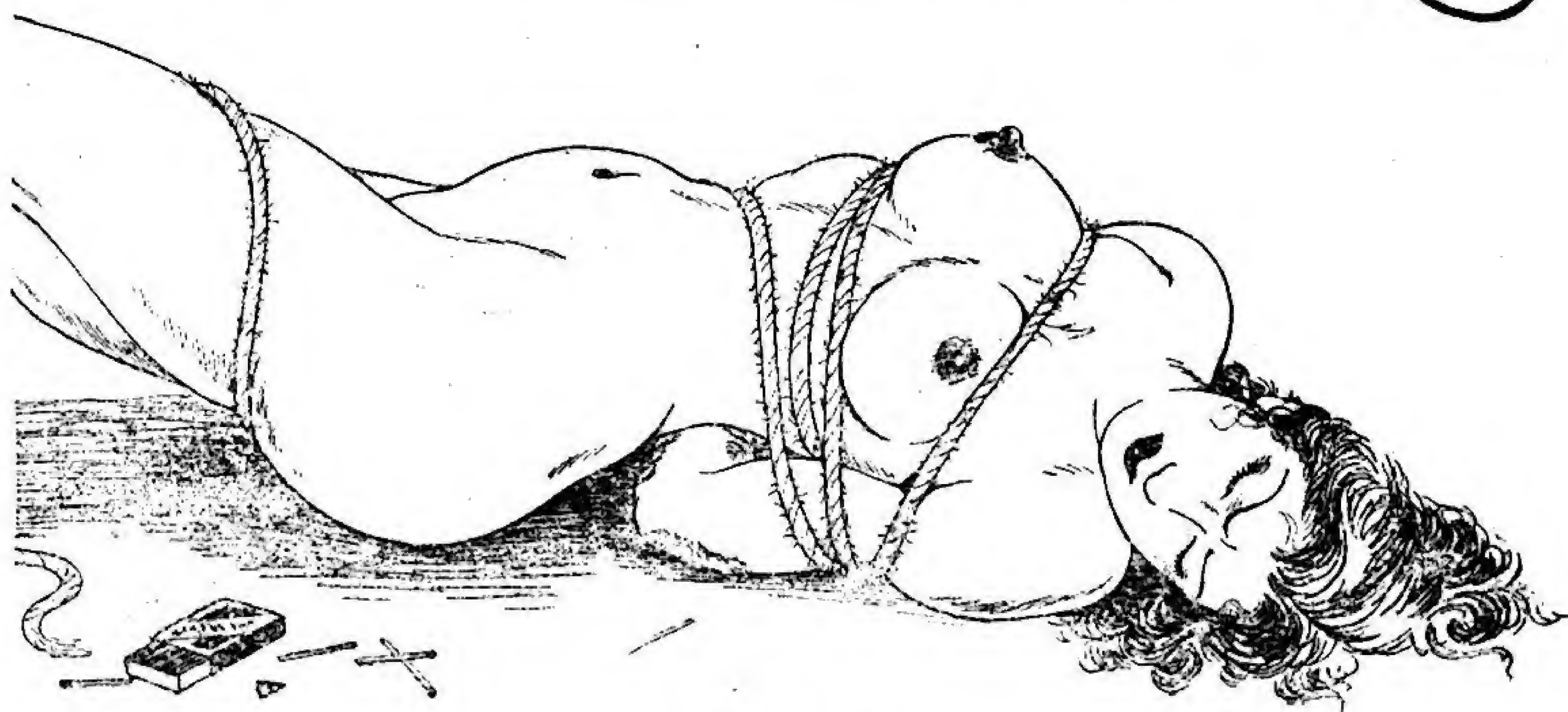
その男の持つてゐるものはマツチであつた。一見みるからに貧相なその男は、宣伝マツチを配つて歩く宣伝員

なのだ。歩りすがつた人にひよいと手渡す。その手つきの巧さは、いかにも物馴れた感じである。ゆるい動作のようでは実は素早い動きを繰返している。丁度身の軽い小鳥が枝から枝へと飛び移つて歩くように、その男はひよい／＼と人ごみをうまく縫うようにしてやつて来た。由紀の目の前迄来ると、通りかゝつた紳士風の男の手にすべり込ませるようにマツチを渡し、ごく自然な、なりゆきとして由紀の手にも一つのマツチをすべらせた。その瞬間のせいのか、その男の眼が、得も言われぬ鋭い光を放つたように思われ、由紀は、はつとマツチを握りしめた。がその時はもう男は由紀の前を離れていた。相変らずじくじく足跡を残して、その後姿を人ごみの中へ消して行つた。

由紀は握りしめたマツチを、そつと掌を開いて眺めて見た。一見何の変哲もないマツチである。桃色の地白く秋の化粧品祭と浮かしてある。化粧店の連盟の売出し広告であらう。が由紀はそのマツチを握りしめた手が、かすかにふるえているのを見た。

不安な眼差しであたりをそつと見廻した。とうとうしてしまつた、とそつと恐怖の念が沸いて来るのが押え切れず急ぎ足でその立場を去ろうとした。

その時である。一歩踏み出した由紀の手を後からぐつと掴んだ者がある。由紀は思わず「あつ」





# る え に 子 女 婦

と声を出して振り向いた。

眼の鋭い中年の男が深い鳥打帽の下から由紀の掌にあるマツチを凝視している。刑事だ、由紀はさつと血の引いて行く感じで手をふり切つて逃げ出そうとした。が男の手は松の根のように頑として離れないのだ。然かも何時の間にか反対側にも背広姿の同じようなタイプの男が由紀の様子を見守っているのに気附いたからである。

捕つた、あとは無我夢中であつた。

「何をするのです、離して下さい、離して」

と絶叫した。二人男は始終無言であつたが、由紀の叫び声に集つて来た四五人の人達に、ちえつと軽い舌打ちをする。

「警察の者だ。ついて来い」

と一言低く言い捨て、由紀の手をしっかりとつかんだまゝ歩き出した。

## 二

一夜を留置場で明かしたあくる日、由紀は呼び出された。調べ室は矢張り留置場と同じように薄暗い陰気な部屋であつた。由紀は一晚中眠れないまゝ重く沈んだ頭がづきづき痛むのに苦しみ乍ら坐つていた。やがて二人の刑事が入つて来た。二人の会話の中で、一人が刑事部長であることが分つた。その刑事部長が由紀の椅子に坐ると、もう一人は後に立つていた。由紀は深くうなだれてたゞ空廻りする頭ががんぐ鳴るのを意識していた。

「山本由紀だな」

「はい」

「頭を上げる、顔を上げてわしの顔をよく見るがよい」

由紀は頭を上げろと言われて初めて顔を起した。

「あッ、貴方は関野さん」

知つていた。学生の頃知つていた関野に違いない。髪をたくわえて、過しく年配らしい顔にはなつてゐるが、関野に違ひなかつた。

「関野さん」

由紀は二度言つた。逢おうとは思ひなかつ男と、然かもこんな場所で、こんな風に逢おうとは思ひがけないことであつた。暫くして由紀は今自分の置かれてゐる立場を振り返つて見る余裕が出来た。何はともあれこゝが警察である以上恥しいことには違ひなかつた。弱身を見せたくない相手ではある。が、昨夜からの精神的疲れが由紀の心を全く弱いものにしてゐた。

「済みません」

「わしも思ひがけなかつたよ。昨夜逮捕になつた中に、昔の名があつたので、わざと君の取調べをかつて出たのだがね」

言葉つきは全くその勝者の響きがあつた。が由紀にはそんなことはどうでもよかつた。昔なじみを幸いに早くこゝを出して欲しかつた。

「すみません」

たゞ謝るより外なかつた。

「君はあのマツチがどんな役目をするか知つていてやつたのだね。あれが赤いグループの集合の秘密信号の連絡であることを知つていてやつたのだね」

由紀は返答に窮した。知つていたとすれば、まぎれもない思想犯の一人である。知らないと言へば、……

「知りません」

或は関野が好意的に釈放して呉れるかも知れないという期待からであつた。その由紀の返答に関野は頬をゆがめて笑つた。

「知らないことはない筈だ」

「本当に知らないのです」

「君は困つた人だ。知らない筈のないものを知らない」と強情を張つては、取調べも長引くし、従つてわしの好意も無駄になるばかりだ」

由紀は迷つた。知つていたと言へば本当に釈放して呉れるだろうかという疑は残つた。が何よりも地獄に仏と



いう謠通りの関野にすぎるより外ないようにも思つた。

「すみません、本当は知つていたのです」

「そうだろう」

関野はにやりと笑つた。

「そう正直に答へなさい。ではそのマツチによる連絡方法」

かわす暇のない関野の訊問であつた。由紀は自分の気の弱さから、次第に引き込まれて行く危険を氣附き始めていた。関野はもう私より職務に忠実である、ということが、当然のことであるのが当然でないように思ひたかつた。

「もう勘忍して下さい。こゝを出して下さい。」

由紀は哀願した、もう関野に笑われてもいい。嘲けられてもいい、たゞ我が身がいとほしくつてゐた。

「そうはゆかんさ、」

そんな由紀の態度に関野もがらりと態度を替えて横柄に言つた。

「知つてることだけはちゃんとやつて貰わないと、助けにも助けようがない」



横柄な関野の言葉に、由紀の腕がなつてゐる心の中にかすかに反感が芽生えた。

「知らないわ」

幾分乗鉢にさえたつた。

「何、知らない、皆初めは知らない」と強情を張るが、それはよくないことだ。そんな強情ではとんだことになるよ、知つてゐることは全部話さない。そうすればわしだつて何とかして上げよう」

今度は少しやさしくなつて言つた。が由紀は、

「知りません。私はたゞある人に、造い度くてやつただけのことです」

その返事に関野は腕を拱いた。

### 三

その夜、由紀は取調室の隅に立たされてゐた。その隅で先刻から由紀は目を覆い、耳をふさいで身の置き所もない様にふるえていた。目の前で、矢張り由紀と同じような年配の若い女が刑事達の拷問を受けてゐるからだ。

これは関野の強胆であつた。由紀に白状を強いる一つの手初めの手段であつた。由紀が拷問の有様を見て、恐怖の余り、すべてを洗いざらし白状するであろう計画であつた。その計画は當つてゐた。由紀は自分のこのようにされることからは、どんな醜い、どんな卑怯なことをしてでも逃れ度いと思つてゐた。

目の前の女は、全身裸にされて天井から逆さに吊り下げられていた。白い裸身が芋虫のようにぶら下つてゐる頭髪をたらし、絶えず苦しそりに呻いてゐる。

「どうだ、××」

一人の刑事が女の名前を言つた。

「まだ言ひ度くないか」

女は呻いた切りであつた。

「しぶとい女だ、」

その刑事は竹刀を握りしめると、大きな輪を回して、

その竹刀を振り下つた女の乳房のあたりをしたゝか打つた。

「う、う、う、」

女の身体が左右にゆれ、女は苦痛に絶え切れぬかのようによろめんだ。由紀は目を覆つた。が女の呻き声が、由紀の全身をゆり動かすように喰ひ入つた。目を閉じた由紀の耳に、更に二つ三つ、竹刀が身体にはじける音が聞えた。それに伴つて女の悲鳴がだん／＼高く、次第に息を絶え／＼になつてゆくのも判つた。女は呻くのみで何一つ言わない。

「竹刀じゃ、手ぬるいな」

「少し突いてみる」

刑事達の会話が入つた。

かねて由紀は特高の拷問の様子を聞いたことがある。その方法の残酷さは、聞いただけでも身ぶるいのするものであつたが、實際目のあたりに行われていることは、その想像をはるかに越えるものがあつた。

由紀は目を覆つたまゝ、次に何が行われているのか知らないわけにはゆかなかつた。何か木の棒で肉体の一部を突く音である。鈍い然かも暗闇とした音である。女の悲鳴は前にも増して苦痛の激しさを表現してゐた。その音と悲鳴は中々止みそうにない。由紀はやゝ薄れてゆくような意識の中で、今行われていることが果して此の世の中の出来事であるのかどうか疑つてゐた。一人の女の自由を、それこそ指一本動かすことの出来ない状態にして、その身体を思うまゝに苛めぬくということ。それは何かの絶頂である。束縛の最高である。鞭を加える者は自由の最高であらうし、加えられるものは苦しみの上である筈だ。由紀は物狂しくなつた。

「言います、言います、みんな白状します、早く此処から出して、あ、私はもう絶えられない」

由紀の声であつた。半ば放心したように由紀はそう叫んだ。係りの刑事はそれを聞くと、由紀を部屋から連れ

出した。その敷居際で、由紀は女の悲鳴の途切れたのを意識してゐた。氣を失つたのであらう、が氣を失つたにせよ、苦痛から逃れたのが、ほつとする思いであつた。

屋の調室へ入ると関野は机の上の書類を眺めてゐた。

「部長殿、この女が白状するそうです」

由紀を連れ出した刑事が関野に報告した。関野は書類から目を放すと、

「こゝへ」

と前の椅子を指さした。

「連絡方法から訊ねよう」

「はい、あのマツチを此処へ持つて来て頂けば私が集合場所を設け取ります」

「じゃ君の貰つたあのマツチから、君はその場所を知ることが出来るのだね」

「はい」

「じゃ、やつて貰おう」

「はい」

関野は傍の刑事にマツチを持つて来るように命じた。

刑事が出て行くと、関野は、ゆがんだ笑いを浮べて、

「皆本はどうしてる」

と由紀の顔を覗き込んだ。

皆本の名前を聞くと由紀は表情を硬ばらせた。皆本、命をすてゝ運動に挺てゐる逞しい意志の男の顔が思い浮んで来る。鼻筋の通つた切長の眼の皆本の顔を考えると、ふと由紀は今から自分のやろうとしてゐることの重大さを考えねばならなかつた。

「皆本も確か君達の同志だつたな？」

由紀は今此処で白状すれば、アジトは当然警察の手で急襲されるであらう。自分の一言で皆本を初め数多の同志が暗い運命を背負わねばならないことになる。然かも嘗て嫌ひ通して来た男に、皆本を売らねばならない。

「おい、どうした」

その時、刑事がマツチ箱を持つて来た。

が、その時既に由紀は覚悟してゐた。皆本が好きであ



ることが、皆本を慕っている自分の気持がこんなにはつきり意識されたことは今迄になかった。右か左かで自分の身体に加えられるあらゆる苦痛を前にして、皆本を愛している事実を知り得たことが不思議な力になった。

「矢張り言えませんか」

関野は驚いたように立ち上った。が次第に残酷な陰が顔に出た。

「よろしい、言いたくなければ、無理とは言わん。が言わなければならぬようにするぞ、覚悟はいゝんだな」

由紀はかすかにうなづいた。

「よし、わしが直接、君の身体に聞こう、その洋服を剥いで、裸にむかれたその身体に思う存分訊ねてやろう」

四

話はずつと以前、由紀がまだセーラー服の女学生の頃にさかのぼる。由紀の家は都会を離れた郊外にあつたが隣の家はずつと前からの下宿屋であつた。学生相手の下宿屋で、由紀は子供の頃から色んな学生の出入りしてゆくのを眺めて暮して来た。貧乏な学生もあつたし、豊かな学生もあつた。が一樣に角帽の学生は勤勉であつ

た。が勿論由紀はそんなことには何等関心がなかつたが由紀が女学校の三年の時、ふとしたきっかけから、二人の学生に知り合つた。

それはその年の冬も最中である晩、由紀の家へ泥鰌が忍び込んだことに始まる。由紀の父親は幼少の頃に既に無かつた。母娘二人暮しの家であつたが、その晩は特に寒気も激しく殊更に淋しい夜であつた。玄關の戸がたたく風に鳴るので氣にしいく寝ついたが、その晩は二階の窓から入り込んだのだ。眠りの浅い母親が二階の足音に目を覚まし、由紀を起してそつと耳打ちした。が落着いて、という母親の言葉も耳に入らず、氣もすつかりてんとうした由紀は矢庭に縁側から庭へ飛び出ると、大声で救いを求めた。その庭を距てて隣の下宿屋があつた。

由紀の声で特別勇敢に飛び込んで来て呉れた二人の学生があつた。

一人の名前を皆本と言ひ、一人は関野と言つた。

二人のおかげで其の賊は一物も得ず逃げ去つてしまつたことは幸いであつたが、その代りにそんなことがあつてからは、この二人がちよいくと由紀の家へ遊びに来るようになった。皆本は貧乏らしく、然かも神経の細い

言わばプロレタリア階級の人間であり、関野は反対に生家も裕福らしく性質も大ざつばで、ブルジョア気取りの学生であつた。

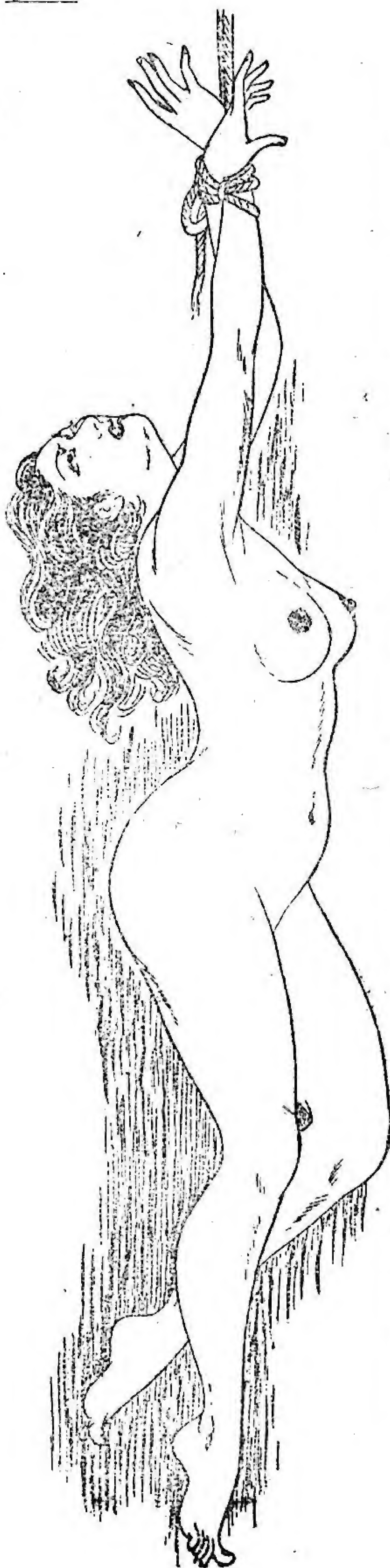
由紀自身母と二八切りの、父親の残したわずかの遺産で飢をしのいでいる暮しだけに、関野のブルジョア趣味を嫌つた。がその時は、そつといつて皆本に好意を寄せるような気持も勿論持つていなかった。

当時は労働争議が相当大きな社会問題として世論に浮び上つていた頃であつた。炭坑とか工場とかのストライキが新聞紙上に賑わし、人々の関心の的となつてた。或る晩、亡父の命日に當つていた由紀の家では、皆本と関野を晩飯に招いた。その席上で由紀の母親が二人にこんな話をした。

「皆本さんと関野さんは卒業なさつたらどんな方面にお進みですか？」

ありふれた質問であつたが、由紀はある興味を以てその答を聞いた。

関野はその癖になつてゐる自信ありげな様子で、「社会の正義を代表する職務につき度いと思つてます。即ち法律の執行にたづさわる職務ですね」





とはつきり答えた。その言葉に皆本はちらりと反感的な眼付で関野の横顔を見たが、

「僕も、矢張り社会の正義を守ることを一生の仕事にしようと思っています。といつても関野君と違つた意味で」

この言葉は関野を大いに刺戟した。

「それは、どういう意味なんだい」

「どういう意味でもないさ、法律を正しく解釈したいだけのことさ」

「じゃ今の法律は間違つてるといふのか」

「いや、間違つてはいないが、それを盾にとる人達が理解してないといふことだ」

「君は変なことを言うじやないか、法律の解釈に善し悪しがあるわけがない」

「所があるんだ。法律はブルジョアを擁護するようにのみ解され一般の勤労者はたゞ弾圧を受けるばかりだ。一方的な法律の施行だよ」

関野は顔を赤くして昂奮した。

「君は赤化思想だな」

「赤とかなんとかに関係なしに、そうだと言ふんだ」

二人の論争は何時果てるともなかつた。

関野は偉丈高になり、皆本は蒼白になつて言い合つた。

「まあまあ、お二人ともいゝじやありませんか、何も喧嘩なさらずとも、」

柔く母親が仲に入ると、皆本は黙つたが関野は未だ憤懣に絶えぬらしく、

「今に見てろ、僕は警察に入つて左翼思想になつて君をしよつびいてやるからな」

由紀はそんな争いの中で、関野のいかにも単純に権威を信頼し、そこに生活を求め

る気持を汚いと思ひ、同時に危険を知り乍ら、懷疑のまゝに不安定な生甲斐を求めようとしている皆本に好意を持つた。然かもこれは簡単な少女的センチメンタリズムと片付けられないものを持つていた。

## 五

皆本と関野が夫々大学を卒業する年に、由紀も女学校を卒業した。その偶然に重なつた卒業の年、由紀は皆本と関野の二人から愛の告白を受けた。その方法も二人な

りに異つていた。関野は母親を通して正面から由紀に結婚を申し込んだ。一方皆本はひそかに由紀との川縁の散歩を楽しみ乍ら、

「僕はこれから危い運動の中へ入つて行く。が君に対する愛情は決してゆるがない心算だ。やがてきつと僕達の努力が実を結ぶ時が来る、その時は僕はきつと君を幸せに出来る筈だ」

それは非常に遠い将来のものであつた。又そのような人生を歩いてゆく皆本と結婚することは自分も亦不安定



だこのとつあんは、渡し守りである。年は知らない。だごとは何であるのか、どう言ふ字を書くのか知つてゐる者も一人もない。

恐らく「オオの文学」を書いた柳田国男先生も御存知でないであらう。

だこのとつあんの跡のいたるところには肉をそいだあとの穴があいている。ふくらはぎ、だとか、二の腕だとか、尻にも太股にもそのきずあとがあるそうである。何かいまいましい病氣のためか、と言ふとそうでもないらしい。彼自身病氣をしたことがないと言ふから確かであらう。

私が彼を訪ねたのはつい一週間前である。彼は丁度、細長い、まろやかな石が傾いて砂に埋れてゐるのを両手で掘出してゐると

## だこのとつあ

### 二俣 志津子

ころであつた。去年もそうしていた、川が氾濫すると又砂に埋つてしまふのである。それに、藪かげで、注意する人もない。私もべつに急ぐ用でもないの、とつ

あんと一しように、根のあるようなその石を撫ぜたり、砂を平らにしたりしたりすることを手伝つた。すると、とつあんはめづらしく和やかな微笑を私に投げかけた。

だこのとつあんと言えば、名代の変物で五十年間笑つた顔を見た者は稀なのである「志津子はこの石を知つてゐるがんだか」

「いえの」

と、私も地方訛を使う。

「おこ、知らんがんだつたかや。まんず、炉端へ来いや。」

私は砂を払つて渡し守の小屋に入つた。彼はセンブリのように濃いお茶を私について藪の方を目で示した。私は苦味を耐えて、とつあんの眼で示す方を眺めた。赤トンボが藪の上をスイスイ飛んでゐる。風

もないよい日和だ、時情がある。私はうつとりと川辺の野の景色を見渡した。と、「のゝて志津子。あの石は、ちよんぼに見えやせんか?」

え? と、私はとつあんの言葉がよく聞きとれなくて振返つた。藪だらけの老翁の表情に苦悩のかけがある。彼は私が振返ると、照れくさい苦笑をちらつと浮べたが年で、「わしは、ちよんぼのつもりながんだがのオ。」

と、押し切つた。なるほど、そう見れば私の顔は次第に赤くなつた。茶の苦味のためではない。とつあんは私の感情などにかまつてゐない。

「あれは、わしの墓石じやよ。わしと女のな。埋れる度に掘出すのが、わしの一つの供養じやよ。いや、わしはそのために生きてゐるんだかもしれないて。」

「何の?、そして、誰の?。」

私はやつと少し落付きを取もどした。と、



な生活を続けなければならぬ意味であつた。

関野の傲慢を嫌い、皆本の不幸を避けた由紀は当然、二人の愛を又受け入れることは出来なかつた。

間もなく三人は夫々の異つた途を歩いて行くことを余儀なくされた。

二三年経つて、関野は希望通り警察界へ入り、皆本は左翼運動に入つて行つたことを誰からもなく聞いていた由紀は、ある会社にタイピストとして働いていた。

その年の暮に、由紀の働いている会社でも争議が起つた。今迄話に聞き噂に聞いていたストライキが自分の身边に始めて起つたということが由紀には身ぶるいのする程の興奮を感じさせた。由紀自身も、夜遅くまで働かされて申訳ばかりの手当を貰つてゐることに、ある憤りを持つていただけに労働組合の幹部の覚悟には同情もし、礼賛もした。然かも由紀の昂奮はそれに止らなかつた。この争議の指導に入り込んで来ているメンバーの指揮者が皆本であることが耳に入つたからである。あの時からもう三年近く、皆本とは逢つたこともなければ文通もしていなかつた。それだけに皆本の名前を聞いただけで懐しかつた。今になつて漸く皆本の考

えていたことが、少しづつ分りかけてきたようにも思えた。と同時に又いかに危険な仕事であるかも痛感した。争議は数日を経ずして解決した。当局の手が入つて組合の幹部はその組合法の廠で逮捕され、又反面その効果もあつて、資本主はある程度の待遇改善を約してけりとなつた逮捕された中に皆本の名のないことを由紀は喜んだ。

とつあんは、私の質問には答えず、いきなり、ちよんぼ型の墓石のコジライレキを語り出した。説みにくいために方言を改めてとつあんの話をこゝに記そう。

「ここらは一歩つが虫の多く居るところじやて。春の終りから今頃まで、陽のあるうち中、そこらをはねまわつてゐる。野ねづみの耳に収つて旅行しくさる。志津子は靴下はいて手袋はめてるからいいがな、そりや、若い衆より油断出来んぞ。きまつて女子の方が多くやられる。肉がやわらかいせいもある。んだがな、女子は虫が一番多く居る藪かげで用を足すから、な、それで女子達は刺されたことをかくす。それ発熱じや。どこをやられた、言わん。ゲス、(陰部)を刺された。と言つた女子を一人も聞かない。わしの女子は別だぞ。それで処置なしじや。つつが虫にやられたらしいどこじや。医者も誰もわからん。本人だけがそのことを胸に秘めたまゝ死んでしまふ。わしは、つつが虫を防ぐ方法を考え出した。

まつて、みんな耕地にしてしまえばいいのだが、それも出来ん。DDTも効かんとなれば、さうれたところの肉をえぐり取つてしまえばいいんだ。わしが証憑じや。これらの傷はみんなそれじや。わしは村の衆に肉をけづることをすすめるが誰もやらん。それで死んでいつてしまふ。ちよつとそばばいんじや。もうそろそろおらなくなるが、まだ危い。

私がたまらないわ。」  
わしがこゝの渡し守になつてから七人の女が居た。五十年の間だから少いものじや。なあ志津子。その女子達はみな精力のある女子達じやつたから屋も夜もじや。わしはつつが虫を知つてゐるで、屋は広場の真中でなければいかん。と言う。女子共は、誰も見ておらんでもお天道様にしよしい差しいと言ひよる。  
それで、あの石のあるところを、熊のかげを選ぶのじやよ。熊がさすと言うのじやろうつつが虫がさした。向き合えば尻やふくらはぎなどをさし、きわどいところを、最中の時でもさしよる。尻の肉をそぎ、股の肉をそぎ、それでもこればかりはやめられん。男と女の時はきまつて女子をさしおる。  
仕様もない虫じや。いくら女子に肉があるといつても、そうそうそぎとれぬものではない。わしの女は七人ともそこでされて死んだ。わしも死ぬ時はあの石のところまで死ぬつもりでな、供養じやよ。わかるかな志津子。



よきにつけ、あしきにつけ物事は来る時には次々とやつて来るものだ。争議がすんで数旬たつたある日の夕方

会社の帰り途で由紀は、ばつたりと皆本に出逢つた。テツシユアワの雑踏の中で、皆本が由紀を見附けた。

カーキ色の労働者のナツバ服と着込んだ皆本は、学生時代の面貌とはすつかり変つた苦悩の満ちた顔になつていた。その顔に一ぱいの笑いをためて、

「由紀さん」

と呼びかけた。

由紀は余りの思いがけなさで、たゞおろおろしたが、じんと鼻をつき上げて涙のたまるのを押え切れなかつたがそんな感激も長くはなかつた。皆本は絶えずあたりに眼を配つて落着かず、

「ゆつくりしてはいられない。急ぐ用事があるんです君に迷惑がかゝつてもいけな。一緒に歩き出そう」  
そう由紀をうながして急ぎ足で歩き出した。その道す



「はい」  
「出る、部長殿のお調べだ」  
「よろしく、皆本は、着いたかつた、逢いたかつた、と繰返した。」

「私も」

「そう言うのが由紀にはせい一杯であつた。」

「今度ゆつくり逢おう、僕は普通の所でじや逢えないんだ。今度会合がすんだ後で、そこでゆつくり話しよう」

「場所はどこなの」

「それもまだ判つていない、その後で連絡しよう、連絡する場所は……」

その場所ですつていればマツチ配りの宣伝員がやつて来る、その男の渡したマツチの硫酸をほじして、その中の紙片の文字を組み合わせると、場所が判るようになるというところ、待つてゐる時は、ハンドバッグを小脇にかゝえて、ショウインドウを何気ない振りで眺めてゐること、などを、そんな風なことには慣れ切つた素早さで、簡単に然かも手際よく皆本は由紀に伝えた。

由紀は一抹の不安が湧いてくるのにためらつたが、皆本は押しつけるようにそれだけのことを言い切ると、

「じゃ、楽しみにしてるよ」

と、由紀が一言も挟む暇もない程に、人の群の中へ姿を消して行つた。

それが約一週間ばかり前のことである。

## 六

今自分の身にこれからどんな危害が加えられるかも知れない現実を前にして、由紀の心を支えているものは、思想でもない。運動でもない、又関野に対する反感でもない。たつた一つの皆本に対する愛情だけである。由紀は亦その純粋な愛情だけであることに一層の決心が固つた。

扉がぎいと鳴つて開いた。

「山本由紀」



「はい」  
「出る、部長殿のお調べだ」  
「よろしく、皆本は、着いたかつた、逢いたかつた、と繰返した。」  
関野の顔がふるえる胸の中をよぎる。刑事に手錠をひかれて、階段上つた。物置のような乱雑な廊下を通つて突き当りの部屋へ入つた。関野は窓側に腰を下して煙草をふかしている。入つて来た由紀を見ると、  
「どうしても言えないか」と言つた。  
由紀は黙つていた。  
暫く由紀の顔を見つめていた関野は、  
「仕方がないな」  
と言ひ、先から関野と一緒にいた刑事と、由紀を連れ込んだ刑事の二人に、頸をしやくつた。それが合図だつたか、二人の刑事は矢急に由紀をそこへ押し倒した。由紀は必死に抵抗した。が手錠に挟まれた手は殆んど空をもぐだけであつた。ブラウスは裂かれ、スカートは外され、下着は勿論、最後の腰のままで肌から剥ぎ取ら

今は昔お江戸の洒落れた連中の中にも事々に屍の始末の肝要な事をいませめたのも今も昔も変りはない。現て此処は或商人町に、紺屋の八十郎と那智六こと那智六十郎という至つて結構な身代の呑気者があつた人間、金が出来て何不自

由がない様になると誰もが一度は世の中の美人の一人位は自由にして見たいのが人情で、御多分に洩れず此の兩人も或る時、花の廊の吉原に遊び事を憶えてしまつた。  
ことに其処の居敷屋といふ大店の冷水という誠に聴

れた。由紀は、わつと泣き伏した。部屋の冷氣がじかに皮膚に感じられ、何一つ身体をかくすものがないことがはつきり意識された。特に腰のあたりの空虚さが、羞恥を伴つて由紀の心をかきまわした。  
手錠が外され、代りに後手にしめ上げられ太い縄が手首に喰ひ込んだ。仰向けにされると、手首をつないだ縄を床に結びつけた。由紀は本能的に裸身を手で蔽おうとしたが、手首は自分の背の下で頑丈に床に縫いつけられたようにびくともしない。由紀は自分の今、置かれてゐる姿を想像して慄然となつた。何一つ身体を蔽ふことも許されない裸で、然かも仰向けにされたまゝ、三人の男の目に楽しまれてゐる。もがいて見たが、それは却つて関野の目に虐げられる者の美しさを見せたに過ぎなかつた。盛り上つた乳房に関野の革靴がのつて来た。由紀の乳房を靴で踏むと、関野は全体重をのせて、踏みこむた。何回でも踏みこむた。関野はその快感に耐え切れ

くからに冷たい源氏名の花魁にうづを抜かして、家業は番頭に委せ切りで二人共彼女に大熱々と来たから全く仕末におえぬ仲となり、廊の内の鞆当ても再三ならず互に張合つて敗けじ劣らじと通ひ詰めたからたまらない。色の道にかけては男の意地というものの程恐ろしいものはない。  
六十郎は性来船というものが嫌い、女郎屋通いも専ら駕籠にばかり乗つて行くので、次第に尻に四ツ手駕籠のたこが出来て家に居ても唯もう何んとなく尻がモチモチして落着かぬ日が多い。  
又一方八十郎の方は駕籠などに乗らないで歩くにも尻に帆掛けで走ると云つた様な案配で通ひつめるので遂には尻の上に帆柱のたこが出来てしまつて落着かず何時もソワソワニヤニヤと彼女の姿を胸にえがいて紺屋の八十郎吾こそ紺屋高尾の再来だと思ひ込んで居るので仕末が悪い。  
さて今宵も那智六の旦那は彼女を相方に窓越しに見える廊の雪景色を肴に好きな酒をチビリチビリやり乍ら、温かいコタツに体の半分を突込んで目尻を下げて



ぬように、  
「うむ」

と声を洩らして踏みつけた。横に立つていたもう一人の刑事も昂奮を抑え切れぬように近づくと、関野と同じように由紀の片方の乳房に土足をかけた。

由紀は両方の柔い乳房を、二人の太い男の足の下に踏みにじられ、苦痛はその忍耐の極限まで来ていた。乳房の核心が頭の中までその痛みを響かせた。

「あつ、あつ、」

という呻きから、次第に大きな悲鳴を洩らした。自分ではどう言っているのか判断は出来なかつた。が何か大声でその苦しみを訴えることが少しでもその苦痛を和げるような気がした。身もだえして本能的にその足の下から逃れようとした。がそれは所詮無駄な努力であつた。たゞあでやかに身をくねらしたような結果に過ぎなかつた。そんな恰好に刺戟されてもう一人の刑事は、由紀の最後の、下腹部の肉のやらかい部分を踏みつけ始めた。今迄処女の誇りとして自分でもそうつとしていたわつて来た肉体を荒々しい三人の男に、文字通り足に踏みこじられて、由紀は心身共に絶え難い苦痛に失神した。

どれ程経つただろうか、由紀は重苦しい中に息を吹き返した。暫くは夢の中のような意識がつゞいたが、次第にはつきりして来ると、乳房と股とがずきん／＼とうづいているのが氣づかせる助けになつた。身体が冷えびえしているのにも氣附いた。水がかけられていた。由紀の記憶がそこではつきりした。遠い想い出のような先刻の苦痛がよみがえる。

が、状態は何も変わっていない。依然裸のまま、身動き一つ出来ない。先刻苦しみの中から眺めた天井の節目もそのまゝである。

「氣がついたらしいな」

聞き覚えのある刑事の声である。

「始めようか」

居た。

やがて程なく紺屋大將も尻を捲つて居敷屋の表にかけ込んで、「オオ寒い／＼」こんな日は肉布団に潜るが肝要だわい。」などと無駄口を叩き乍ら馴柔の親しさと／＼と突当りの広い階段を上ろうとした。トタンに下の方から妓夫太郎の番頭呼び止められ、先口の六十旦那の上がつて居る事を聴かされてガツカリするやら悔しいやら、糞、明日こそは居続けしてやろうと意氣巻いて居るが、六十郎の方も紺屋の来てる事がわかつて居るから此方も何糞動くものかと尻を据えて一向に帰る氣配さえ見せない其の内に日一日と尻が長くなつて来た。

八十郎は氣が氣でなくシビレを切らして今日は六十が帰るだろうと待つて居るが根つからラチがあかぬのに先方の様子を覗いて驚いた。段々居続けの尻が長くなつて来た。あの尻の長さでは、たとえ休は帰える様になつても尻

だけは後に残つて居居るに違いない。ヨシ此の上は奴の尻を手短く切つて呉れ様と腰の物をひつ提げて六十郎の座敷へ踏込んだ。

互に女の事が心に在るかから遂には大喧嘩となりやがて腰の藥物を抜き放つての大立廻りとなつてしまつたアレ／＼と云うのみで誰一人として止め手に二人の中に入る者も無くとう／＼六十郎の長尻をスポツとチヨン切ると其のまゝ逃げ帰つて仕舞つた。六十は喧嘩の相手に逃げられてボカンとして立つて居る。

尻切れとんぼとは此の時から謂い始めたのかも知れない。

さて六十郎は尻を切られてす／＼と帰つては来たものの、尻腰の無い男だと笑われて、何んとかして此の仕返しをしてやろうと思ふが何分にも尻が痛み出して仕方が無い。尻が頭痛がする様だと呑気な事を云つて居る内に段々と此の尻が腫

者の竹あん先生に見て貰つ

たが兎角こうした尻の病はおけつ(不潔)の結果だと洒落れてすましたもの一向になおる氣配もみえぬ

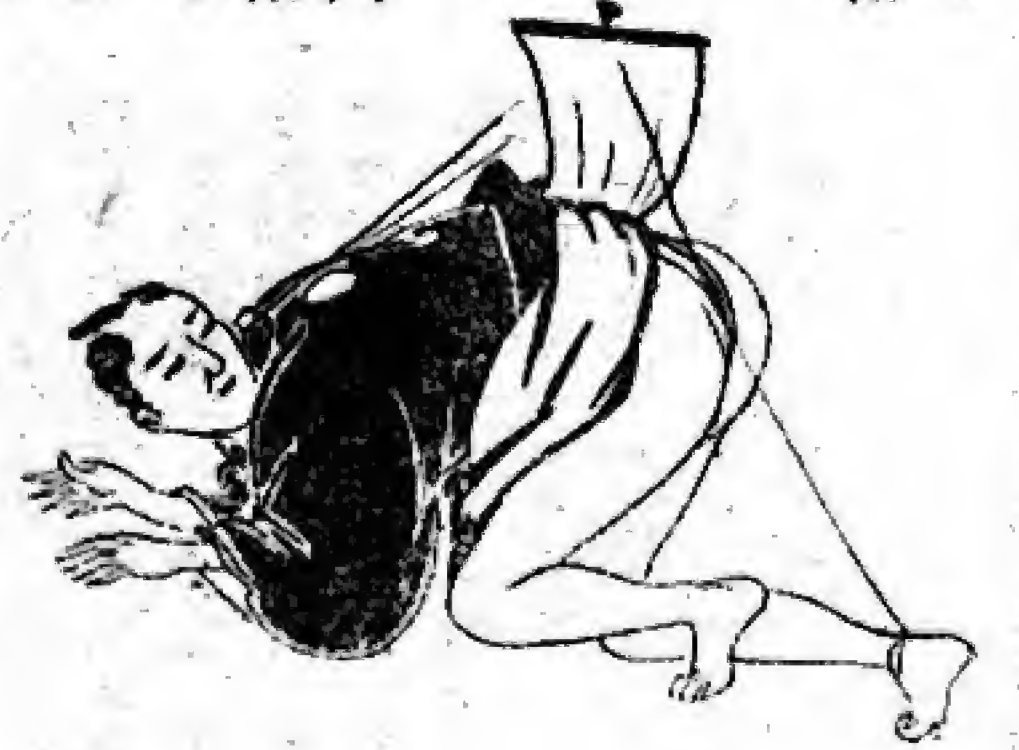
内に、尻の方は遠慮会釈もなく腫れて大きくなる何んとしてもこの尻を八十郎の方へ持つて行かねばならないと力きんで見てもなか／＼重くて到底一人や二人ではこの尻を持ち揚がるものではない。さればとて此の儘ではどうにも尻の始末がつかず、尻持ちが無ければせめて尻押しでも頼んで後から押して貰はな

い事には仲々動かれそうにも無いと思案投首の折柄丁度幸い、六十郎の叔父に釣舟の三郎兵衛という大力の男があつて、

「たとえ、どんな尻にもせよ身内の者の難儀を見ても居られぬ、六十の尻持の役を引受けよう、なまじ尻腰の立たねえと云われるのは強腹だ、何んなにしてもこの尻を先方へ持つて行かぬ事には此の出入は出来難い心配するな大舟に乗る氣で尻を委せな。」

と云う心強い言葉に六十郎の喜びは大変なものであ

る。相手八十郎は六十郎の尻



切り沙汰以来もう安心と腰を落着けて居た処、近頃になつて六十郎の噂を聞いて驚いたがわざと平然たる風を装つて、

「何にどんな大きな尻を持つて来るか知れぬが尻とも思いやしねえ焼火箸でもお付けてやつたら奴さんそれこそ尻尾を巻いて逃げ出すだろう。」

と高をく／＼つて構えて居る。

い／＼釣舟の三郎兵衛は六十郎の尻を持つて出掛けたが思つたより大きな尻で、本人の六十の体はグツと先の方へ出ても尻の方は四五間も後の方からヨイシヨ／＼とかついで行くといつた有様に、道行く人々も之を見て度胆を抜かれて地面に尻餅をつくといつた有様である。



これは関野の声、それは地獄の声である。苦痛から迷  
れて失神した由紀の意識をゆり戻して、再び残酷な行い  
を始めようとしている。

「悪魔ッ」

由紀は口走つた。体内から起つた自然の叫びである。

「ほう、仲々元気だ」

「よし、やれ」

由紀は太腿の間から、木の棒が、肉体の中心部へ向け  
て突き立てられるのを知つた。最初は自分の身体でない  
ような麻痺があつたが、やがて激しい痛みが突き抜けて  
来るのを味わなければならなかつた。自然と両脚が開く  
何とかして少しでも苦痛を逃れ度い本能の働きである。  
羞恥を越えた生の行いである。そんな中にも、にや／＼  
し乍らこの由紀の身軀を眺めている関野の目を想い浮べ  
て口惜しかつた。

その苦しみもそう長くは続かなかつた。由紀は再び意  
識の薄れて行くのを、丁度死の訪れたような気持で待つ  
ていた。

………気づいた時は冷いコンクリートの留置場の中  
であつた。皮膚にコンクリートの冷さを感じ、裸のまゝ  
放り込まれている自分を発見した。傍には、裂けた下着  
やスカート、下着きなどが乱暴に投げ込まれてあつた。  
看守が暗い光の中で、格子の向う側から由紀の姿を見て  
いた。由紀は慌て、身をかくそうとしたが、身体は動か  
なかつた。一寸動くと体中が焼けつくように痛んだ。独  
りでに涙が頬をぬらした。助からないかも知れない、や  
がて死ぬ、そんな考えが独房の壁に反響して一杯にうづ  
巻いた。がやがて眠りとも失神ともつかぬ状態に由紀は  
陥つた。

あくる日、又由紀は呼び出された。一人で歩くことは  
出来ず、刑事の肩につかまつて、例の二階へ上り、昨日  
の部屋へ入れられた。昨日の苦痛は生々しい。確か仰向  
けにねかされたあたりに血痕があつて、由紀は目をそむ

ようようの事に三郎兵衛  
は八十郎の玄関先へドサツ  
と尻を据えて、さあこの  
尻の始末を付けて貰いまし  
ようと掛け合いが始つたか  
ら、家の者はゆつくり座つ  
て居る処もない有様、それ  
にこの尻がさあどうだ／＼  
とうるさくブウブウ云うか  
ら益々其所ら辺りに居た／＼  
まれずことに八十郎の女房  
は隣近所へ逃げ廻つて果て  
は伊勢屋の御隠居の処へ相  
談に出掛けて、

「私も大がいの尻なら負け  
は致しませんがあんな様大  
きな尻は遂にぞ抱かせられ  
た事は御座居ません。」  
と嘆げくまい事か、伊勢  
屋の老人もだまつて居る訳  
けにもゆかぬから、マアマ  
アと色々取なして仲に入つ  
て尻の始末だけは付けるこ  
とが出来た。

これで八十郎は一応ホッ  
としたものの、之迄も色々  
と廊に通いつめて相当買い  
でしまつたから懐の方も次  
第に秋の風が吹き始めて、  
さすがの身代も危うく成り  
果ては尻に火がついて居た  
たまれぬ日がやつて来た。  
出入の米屋酒屋を始めとし  
て、肴屋八百屋等の払いを  
次々に済せても後から何や  
かやと買掛の帳尻が廻つて

来るからや  
りきれたも  
のではない  
えつま／＼

よこの上は  
せめて好き  
な女と手に  
手を取つて

馳落ちする

より他に道

がないと思

つた。相手

の女も万更

憎からず想

つて居る常

々の口振り

ましてや末は手銅

提げても女房にな

ろうとさえ云つて

くれた程だから、

これは一番廊へ行

つて女と相談する

のが早道だと、氣の早い八

十郎は旅姿に身を包んで廊

まじ郎



交して在る事故これからは  
二人連れ立つて乞な道行と  
洒落込もうという考えであ  
る。

計らずも亦二人が此処で  
鉢合せをしたから大喧嘩の  
火花が散ろうという事にな  
つた。再三チャンバラをや  
られては、たまつたもので  
はない。花魁もたまりかね  
て二人を制して、さておも  
むろに日頃馴れた口から廊  
駈りで語り出したもので両  
人其の場にかしこまつて拜

聴するより仕方ない。

「二人共お江戸の人ならち  
つとは他人様のお尻の穴を  
覗いて見なんし、その穴こ  
そ広がり有んししょうが、其  
れに引き替お二人さんのお  
尻の穴は狭き故、わきち等  
が商口で嘘をつくのは誠と  
思ひなんして通い詰めたる  
揚句の果ては今の身の上と  
成りんしたは、誰の罪とが  
でもありません。おぬし達  
の誤りで御座んすおぬし達  
も商人なら悪い代物でも好  
いと云い、高い物でも安い  
と云つて客人に売りなんす  
が、客人がきり／＼と銭金  
を払う内は何んの彼んのと  
追従しなんして機嫌を取り  
んすだろう程に、さて／＼  
買い手がそろ／＼金の工面  
に追われ払いにもぶり淋し  
く見えなんしたら、とんと  
見向きも仕なんしまいに。  
わきち等とても同じ事看板  
掛けての売物故、主達が無  
性に金を使いなんす内は何  
かと御機嫌を取り嘘と誠を  
こき混ぜてお対合いして居  
んしたが、もうそんな身の  
上と成りんしたから二た目  
と見るも嫌で御座んす。わ  
きち等とても毎度誠ばかり売  
り物にした日には年中客人  
と馳け落ばかりして居なき  
やなりんすせん。斯う申し



けた。  
関野は丁度昨日と同じ場所で同じように煙草をふかし  
ていた。

「どうだ。昨日は少しこたえたか、白状する気になつた  
か」

関野はわざと由紀の顔を見ず、そう言つた。由紀は白  
状しなければ、又昨日と同じようにされることが分り過  
ぎる程判り切つたことであつた。

「あんな浅ましい姿を見たら、皆本君はどう思うだろう  
な、君をそんな風にして黙っている皆本君を憎いと思わ  
ないか」

「皆本さんには私一人よりもつと大切なことを沢山お持  
ちです」

由紀はそう言つてしまつた。言つたあとで再び今から  
加えられる拷問に身ぶるいした。

「そう、そうなら、仕方がない。全く救い難いものだね  
嫌なことだが仕方がない。又裸になつて貰おう」

昨日と同じ刑事が由紀の衣類を同じように剥いだ。由  
紀は抵抗しなかつた。諦めと、それに抵抗するだけの力  
もなかつた。

由紀の手首は頭の上で結えられ、その手首を縛つた縄  
は、今度は天井の梁を通された。刑事がその端を引くと  
由紀の身体は、ずる／＼と引き上げられた。足が床を離  
れると、手首と横腹に縄をあてられたような痛みが来  
た。刑事の一人が竹刀を持つて横に立つた。関野が吊り  
下つた由紀の前に立つた。

「今日は白状するまで勘弁しないぞ」

竹刀の一撃が由紀の臀部に激しく鳴つた。自身がゆれ  
手首がもぎれるように痛んだ。

その時、一人の刑事が扉を開いて入つて来ると、関野  
に何か耳打ちした。関野は何か低声で訊ね返していたが  
深くうなづくと、由紀の方へ振向いて

「皆本が自首して出た。自分の信念は変わらないが、自分

たらずぞお腹を立てなんす  
だらうが、そりや先にも謂  
う通り主達のお尻の穴の狭  
き故、なんら此所に在る絵  
草子の、女子に上から仕掛  
けた男衆の後向に見えるお  
尻の穴を見なんし、之れが  
生酔の江ツ子の尻の穴の広  
さで有りんす。それで少し  
はお二人さん共悟りをお開  
きなんし。」

ところ事細かに申し開か  
れては一々もつともな事ば  
かりで散々に胸に沁みて思  
い知らされ、其の上江ツ子  
の尻の広さを今更乍ら感心  
したり驚かされたり一言の  
返す言葉もない。

今迄は冷水花魁の他に女  
は無い様にさえ思つて馬鹿

な真似を儘したのは結局此  
方の誤ちと互に悟つたから  
は、うらみも憎しみも消え  
て初めて心と心が落け合う  
事が出来た。

何はさてさて二人共着た  
切り雀の尻はしよりでは下  
尻の始末が悪く、道中行く  
当も無く尻もあらわに寒晒  
しと云つた恰好で住み馴れ  
た江戸を後に西へ差して落  
ちのびるより仕方がなかつ  
た。途々人の情を乞ひ乍ら  
この上は神や仏にすがつて  
身の振り方尻の落着く方法  
を考えるより他はなく、漸  
くにたどり着いた所は靈驗  
あらたかな高野山。

弘法大師様も二人の様子  
をみて不憚に思われたので



高野山

の不注意から他人に恐ろしい迷惑はかけ度くない。

それで君を釈放してくれというのだそうだ」

関野はそう言つて薄笑ひした。由紀はその関野に言い  
ようのない怒りを愛じた。

「貴方はそれで勝つたとお思いなの」  
「当然だ、皆本が自首したんだから」

あろうか、或る時二人の前  
に現われ給うて申されるの  
である。

「其れ智者の一失、愚者の  
一徳と謂ふ事有り、吾にも  
筆の誤り有れば、尻を放つ  
て尻をしめる位の事は凡夫  
の身には有り勝ちの事、然  
し乍ら等が尻癖悪く遂には  
尻捲つて往来をさ迷うは誠  
に憐れなり、そも／＼尻な  
ど捲るは好く／＼の事にて  
男子一旦尻を捲るが最後之  
が出入り騒ぎ等一生頭も上  
らぬ印なれば、汝等が女色  
に迷ひ女の尻を追い廻した  
る果ては己が尻の置き処す  
らも迷うは、之即ち因果応  
報なり、家に今後己が前非  
を悔ひ心を改め家業を励め  
まんとちかうなれば、我仏  
力をかり再び家運隆昌成る  
様守るべし依つて今後くれ  
／＼も尻捲り等かるがるし  
き振舞ひに及ばざる様要慎  
せよ。之皆信ず可き事也夢  
々疑ふ事無かれ。」

と云われたかと思ふと大  
師のお姿はかき消す様に雲

「貴方は馬鹿、腰ぬけよ、私は皆本さんを信じるわ、皆  
本さんの正義を信じるわ」

由紀は吊り下げられた自分の身体をいとしみ乍ら、  
永久に皆本を愛し信じつづける気持になつていた。

拷問にかゝつたこの心身は恋の拷問にも打ち克つた喜  
びをしつかりと秘めているようであつた。

(終)



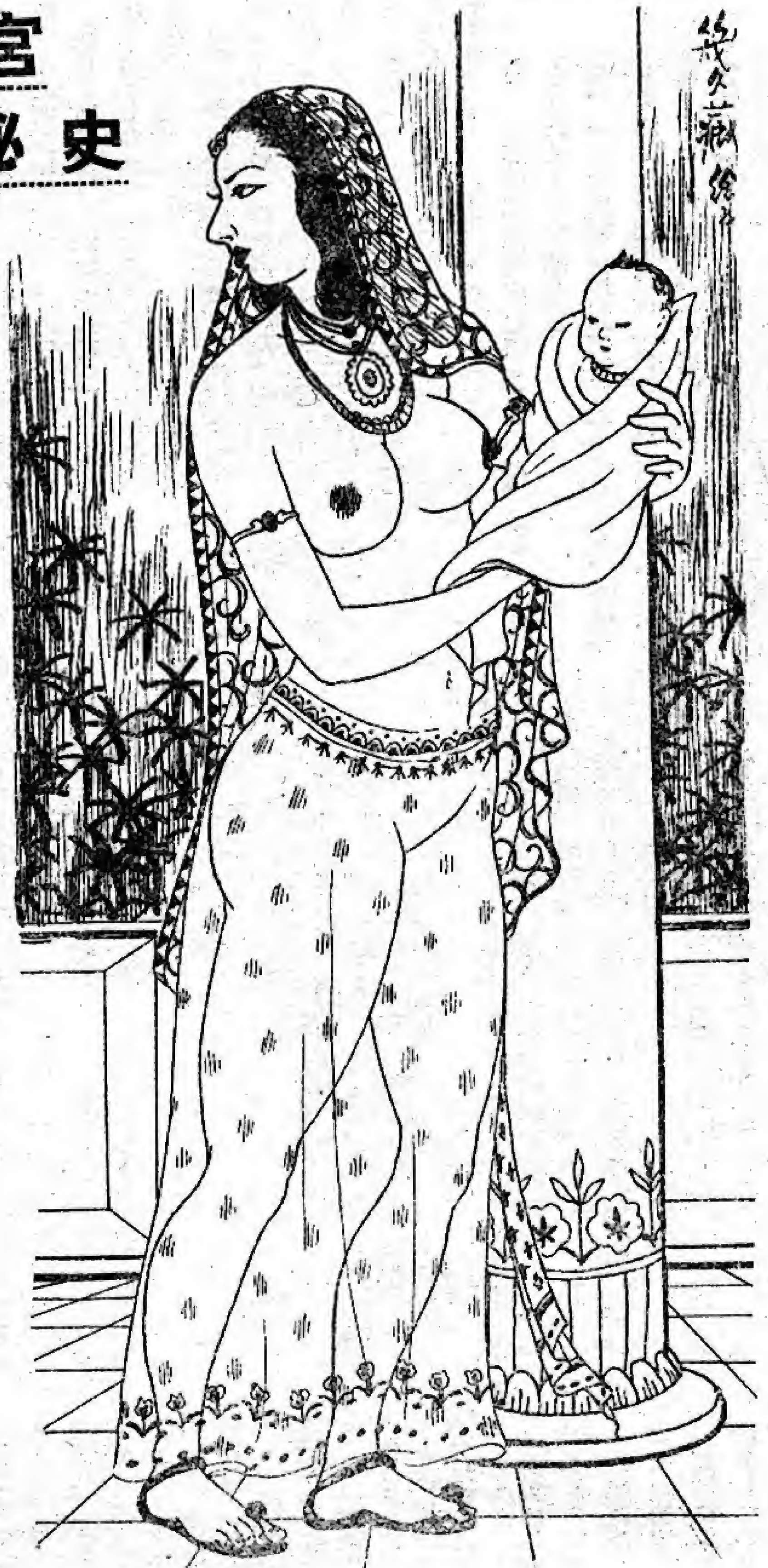
# 印度宮 廷秘史

らんりん  
乱倫の果て

娼婦ウトパラヴァルナー

中澤 公平

今幾久藏 畫



娼婦ウトパラヴァルナー

「お母さんと呼んでちょうだい！早く、早く！」

北インドのガンダーラ国の都、タクシヤシラー城市きつての豪家の若夫人、ウトパラヴァルナーは、今にも分娩の時期が迫つ

ている激しい初産の陣痛のさなかで、滑石のように美しい額にジツと油汗をにじませながら、弱りきつた細い声をふりしほつてやつと、こゝろ下女に呼びかけた。

豪家の若夫人——という語は、すぐ心身ともに成熟しきつた、二十二歳のノブナインテリ女性を想像させ勝ちである。が、その声にどこかおぼこじみた乳臭い響

のある、このガンダーラの新婦は、まだよりやく十四歳であつた。

今から二十年前に、インド特有の「童婚」

(国民が迷信に禍されて、われ先に自分の娘をまだ幼女期や末月経少女期のうちに縁

づけてしまふ悪習)の災態を調査したイン

ドの国家的機関、「ジョシ委員会」の報告

によれば、「インドの少女たちは、ヨロ

ツバの少女たちにくらべて、わずかに一節年あまり早く毛生期に達するに過ぎない。世間に伝えられているように、インド婦人が驚くべく早熟であるという事実はない。……」と。

もし現代の流行であるコンクールという催し事が、当時に於てもはやつていたとしたならば、「ミス・タクシヤシラー」はおろか、「ミス・ガンダーラ」をも、いや、場合によつては「ミス・インド」の栄冠をさえ悠々と勝ち得たであらうと思われるこの麗麗無比な美女は、しかし、彼女の同年輩の幼なじみたちと同様、もう立派に成熟し、ネルリ(インド原産の果樹)の処女果のような、張りきつたみずみずしい豊満さをそなえていたのだつた。安逸と放恣とに明け暮れた古代インドの上流階級の子女たちは、貧窮とたたかっている現代の一般インド人の子女たちよりも、やはり、はるかにほろかに早熟だつたのである。

タイベツトに伝わつた大藏經のカンギユル部(経律部)の第一部たるドウルワ(律)の記事によれば、「彼女が生れた時、その眼は青蓮華の如く、その身からは蓮華に似た香を放ち、その膚の色は蓮華の雄蕊に似通つていたので、親族一同は、彼女をウトパラヴァルナー(青蓮華色)と呼んだ」とある。また、ある伝承によれば、「彼女のジュニ(女陰)は紅蓮の如く、その内からは蓮華に似た香が洩れた」という。

二人の年老いた助産婦たちの手伝いをす



下女は、愚直で忠実一点張りの下婢らしく  
声に應じてすぐ立ちあがると、一生懸命の  
足取りで、長い廊下を走り抜け、階段を飛  
び上り、奥まつた一隅にある大奥様タムラ  
セナの居室へと、駆けつけた。

下女が部屋の扉を叩こうとした時、恐ら  
く不注意からびつたりと締めきらずにあつ  
たその扉と柱との細い隙間から、彼女の眼  
に、思いもかけず、人間として絶対に見る  
べからざるものが映つたのである。

それは、単に「見るべからざるもの」だ  
けではなかつた。実に、二重に「見るべか  
らざるもの」であつた。何故なら、若奥様  
の奥母である大奥様と、若奥様の「最愛の  
人」であるべき嬌君タルミカとが、今しも  
取り乱した寝臺の上で、赤裸裸の交情を楽  
しんでいる真最中だつたからである。

下女は、声も立て得ずに、飛び退いた。  
そして、その驚くべく恐るべき「実演」が  
やがて終るまで、扉一つ隔てて、息を殺し  
ながら、じつと待つたのだつた。

下層階級者であり勝ちな、その婚期を逸  
した女盛りの下婢は、異常な興奮と好奇心  
とに胸をたかぶらせながら、つい夢中で、  
二度、三度と隙間の快をむさぼつた。

「まあ、随分……」  
火のように頬をはてらせた彼女の唇から  
は、名状し難い感情が、低い呻き声となつ  
て洩れた。

若奥様と同じような年輩でこの家へ嫁い  
で来て、彼女と同じような年輩で一人娘を  
生み、その後、十年ばかりで夫に先立たれ

てしまつたこの内気な大奥様は、数年来、  
さびしい閑の中、まだ三十歳にもならな  
い爛熟しきつた豊麗な肉体の要求の捌け口  
に、狂わしいほど悶悶としていたが、とう  
とう、わが娘の初産という絶好の機会をと  
らえて、これも他に情人をこしらえる術を  
知らない堅人の婿を、やすやすと誘惑する  
のに成功していたのであつた。

ざらざらと白い光焰を発するばかりの熱  
狂的な抱擁……。女盛りの富裕な未亡人の  
毒毒しいほど紅い乳首をもつた、はちきれ  
そうな大きな乳房と、軟く盛りあがつて、  
息する度に波打っている腹と、くつきりと  
した腰のくびれた境に、鮮かな弧を描いて  
隆起した古代インド彫刻そのままの秀麗な  
臀部と大腿部の肉量とに密着され、圧迫さ  
れて、彼女よりもはるかに年下のその養子  
のすらりとした瘡形の肉体が、今しも痛痛  
しいほど必死に対抗しているのを、半ば明  
け放された窓から射し込む初夏の惱ましい  
光の中に、まざまざと見た下女は、瞳孔が  
散大しきつたかと思われるほど瞳はつたま  
まだつた。

やがて、彼女の「最大の要件」をすませ  
たタムラセナが、無造作に薄衣をまとい、  
疲れきつたような足取りで、不浄場へ行こ  
うとして扉をあけた瞬間、そこに佇んでい  
るいわくありげな下婢の姿を発見したのだ  
つた。

「まあ、お前は！こんな所で、今まで何し  
ていたの？」

大奥様は、きつと相手を見据えた。

が、その一本気な下婢は、咄嗟に、放心  
状態から、あからさまな抗議的態度に立ち  
直つた。

「若奥様が……若奥様がお呼びになつてい  
らつしやいます！本当に……今にも、赤さ  
まがお生れになりそうですの！」

眼に怒りを込めて、えげつない口調で答  
えた。嫉妬をまじえた義憤が、彼女を一層  
荒唐しく駆り立てたのである。

「……！」

大奥様は、不自然にも無言のまま、その  
場に立ちすくんだ。

今まで誰にも感づかれずにいた秘密を、  
わずかの油断から、取るにも足らぬ端た女  
のために握られてしまつたのではないかと  
いう極度の不安が、この豪家の大奥様の二  
の句を麻痺させたのである。

## 家出

下女が取つて返した時には、ウトラヴァ  
アルナーは、もう女の子を生み落していた  
「まあ、……どおして、こんなに手間取つ  
たの？」

喘ぎながら若奥様の詰問に対して、下女  
は、わざと間だるっこく答えた。

「大奥様と旦那様のお邪魔を致したくなか  
つたものですから！」

敏感な若奥様から、その言葉の意味を問  
い詰められると、彼女は、泣きながら、事  
実見た通りを話した。

「それ本当？何か、お前の勘違いじゃない  
こと？」

くらくらつと眼の光が眩んで来るのを、  
じつとこらえながら、ウトラヴァアルナー  
は、相手を軽くたしなめるように言つた。

すると、その愚直な下女は、ぼろぼろ大  
粒の涙をこぼしながら、さも悔しそうに答  
えた。

「まあ、奥様は！わたしが、大奥様と旦那  
様とを隠匿しているとでも、思つていらつ  
しやるのでしうか！それなら、わたしの  
今申し上げたことが嘘か本当か、その中に  
きつとその証拠を見せてあげますわ！」

一月あまり経つた時、またしても母堂と  
嬌君とが不義の快楽に耽つている現場を見  
澄ました下女は、時を移さず、若奥様をそ  
の現場へ連れて行つた。

ウトラヴァアルナーは、人もあろうに自  
分の夫と自分の母とが、野良犬のように醜  
行を演じている現場を見届けると、もう涙  
も出なかつた。そして、齒を食いしばりな  
がら、空しい自問自答をして見るのだつた  
「何という恥知らずのお母さん！現在自分  
の婿とくつつくとは、この人は、まだこの  
タクシヤシラーの町で、ほかの男一人見た  
こともないのかしら！何という恥知らずの  
夫でしう！現在自分の姑とくつつくとは  
この人は、まだこのタクシヤシラーの町で  
ほかに女一人見たこともないのかしら！」  
怒りに狂つた彼女は、夫のタルミカに向  
つて、声高にわめいた。  
「恥知らずめ！これからは、お母さんと好



き放題にしたがいいわ！」  
 そう言うが早い、彼女は、抱いていた  
 女の子を、夫に投げつけた。が、嬰兒は、  
 父親の体から外れて、闘の上に落ち、頭を  
 傷つけてしまった。  
 手早く身仕度をしたウトバラヴァルナ  
 は、面紗で顔をかくすと、わが家を  
 立ち去った。

## 十四年の後

タクシヤシラー城市の  
 市場の前の広場では  
 今しも中インドの  
 マトウラー城市  
 へ向つて出発  
 する隊商の  
 一隊が、  
 勢揃い  
 をし



「世間見ずの家出夫人」は、ただ本能の導  
 くがままにふらふらと、大胆な媚態を、見  
 ず知らずの隊商の首領に投げかけたのであ  
 った。

「これは、これは！あなたは、どなた  
 の奥様でいらつしやいますか？」  
 毛深い精悍な面ざしに似ず首  
 領は、にたりと眼尻を  
 下げた。

相手がつつ  
 た一目

と、自分の住むマトウラー城市へつれて  
 行つた。偶然にも、彼は、少し以前に愛妻  
 に死に別れ、後添いをさがしていた矢先だ  
 ったのである。

首領は、ナンダといつて、非常に金儲け  
 の上手な慾深屋ではあつたが、この思いが  
 けなく転がり込んで来た玉のような新妻を  
 文字通り妬めるように愛した。が、彼には  
 いつも一つの不安をまじえた不満があつた  
 それは、立派な夫婦でありながら、彼は、  
 今もつて妻の素性を知ることが出来ずにい  
 たからである。

しかし、彼は、結婚の初夜に彼女との間  
 に交した誓いを守つて、一言もそれにつ  
 いて詮索しようとはしなかつた。――「も  
 し、あなたが無条件にわたしを愛して下さ  
 るのなら、そして永久に楽しい結婚生活を  
 お望みなら、どうぞ、一生運、絶対にわた  
 しの氏素性をたしかめないで下さいね！」  
 これが、彼に肌をゆるす前に、彼女が、深  
 い思い入れを見せながら申し入れた、退つ  
 引きならぬ条件だつた。

琴瑟相和す楽しい夫婦生活が、それから  
 十四年もつづいた。二人の間には、まず愛  
 くるしい男の子が生まれ、それから女の子が  
 ……というように、都合四人の子供が生れ  
 た。そして、それがみな丈夫に幸福に育つ  
 ていたという外は、この物語の筋として、  
 取り立てて記すほどのこともなかつた。  
 ところが、ある日、ナンダが旅に出かけ  
 た留守に、彼の幼なじみの友達の一人在り  
 つて来て、この朗かなマダムの中に嫉妬の

種をまきつけようとした。その男は、とう  
 から、留守勝ちの夫をもつ彼女に、ひそか  
 に想いを寄せていたのである。

「奥さんは、瞞されていらつしやるのじや  
 ありませんか？ナンダ君は、タクシヤシラ  
 ーの町から、あなたも敵わないようなガン  
 ダーラ美人をつれて来て、囲つてるので  
 すよ！」

男は、單刀直入にきり出した。  
 「これは、確かな事実ですよ。何なら、そ  
 の美人の囲われている場所を、お教えして  
 もよいですよ」

男が煽り立てるようになり言つた時にも  
 しかし、聰明な彼女は、わざと微笑を浮べ  
 たまま、押し黙つていた。  
 が、夫が戻つて来ると、彼女は、不気味  
 なほど禮かな態度で言つた。

「あなたは、わたしを瞞していらつしやい  
 ますね。タクシヤシラーからガンダーラ美  
 人を連れていらつしやつたということは、  
 もうとうに聞いているのですよ。その人を  
 お家へ連れていらつしやいますし。二箇所を  
 掛け持ちになさつても、直ぐばれてしま  
 うではありませんか」

ナンダは、苦笑いを浮かべながら、苦しい  
 弁解をした。  
 「全く、それはお前の言通りだな。しか  
 し、二人の女房を同じ屋根の下に寝起きさ  
 せると、お汁の味まで遜なしになつてしま  
 うという謠もある。第一、内輪喧嘩の絶え  
 間なしということになるのではね」  
 彼女は、強く言い切つた。



「あなた、そんなことを気にかけるには及びませんわ。そんな事になりッこはありませんの。兎に角、その人を連れていらつしやいまし。その人がもしわたしの妹ぐらいでしたら、妹に上げてあげたいと思いますのもし娘のくらいでしたら、娘に上げてあげたいと思いますの」

ナンダは、彼女の望みに応じて、そのうら若い美人を連れて来たが、彼女は、その娘を一目見るなり、不思議な親愛を覚えたのだつた。

「この娘は、バドヤーバディというんだ。可愛がつてやつてくれ」

夫から、こうその娘を紹介された時、ウトラヴァルナーは、はッとして眼を見張つた。忘れもしない、十四年前に、前夫めがけて投げつけたあのわが子の名と、同じだつたからである。

あくる日、ウトラヴァルナーが娘の髪を梳いてやつていると、その頭に傷痕が現れた。彼女は、ぎくツとしたが、さり気なく尋ねた。

「この傷は、どうしたのですの？」

娘は、いかにも素直に答えた。

「よくは知りませんが、何でもお祖母さんの話によりますと、お母さんがある時、お祖母を起して、お父さん目掛けてわたしを投げつけたのだそうです。すると、頭の上へ落ちて、わたしはそんな傷をこしらえてしまつたのです」

ウトラヴァルナーは、かすかに震える声で、その娘の祖母の名をたずねて見た。

娘は、平然と答えた。

「タムラセナと申しますの」

ウトラヴァルナーは、

「では、あなたのお母さんの名は？」

と、たたみかけて尋ねた。

娘は、露ほども疑心を見せずに、

「ウトラヴァルナーと申しますの」

と答えた。

「まあ、いいお名前を持つたお母さんね」

ウトラヴァルナーは、何気なく装いながらも、眼に見えない恐ろしい運命の手に心臓を一握みにされているのを覚えた。

「あのタクシヤシラーの町にいた時には、

わたしは、この娘の母であると同時に、自分の生みの母といつしよに同じ男に仕え、このマトウラーの町へ来ては、この娘が、わたしといつしよに同じ男に仕えているのでは、わたしはもうどの道、このままでは居られない！」

そこで、彼女は、面紗で顔をかくすと、倉皇としてわが家を立ち去つた。

## りんらく 倫落の女王

町外れで、一隊商が同じ中インドのヴァイシャリー城市へ向つて進発するのに出会つたウトラヴァルナーは、それに加わつて、道道、誘惑されるままに、つい商人たちの誰とも深い関係を結んでしまつた。そして、彼等といつしよに、ヴァイシャリー城市に到着した。

隊商が、目的地の城市へ到着すると、そ

の商人たちは、何をさし置いてもお馴染みの色街へ行つて、久し振りの気晴らしをするのが当時の習わしになつていたが、ウトラヴァルナーを同伴したその隊商の一行は、誰一人として、色街へ走ろうともしなかつた。何故か？

古代インドのリシ（ブラーフマナ教の賢者で、五通力を具えた人）たちの深い研究によれば、インドの女性は、肉慾的に大別して、左の四つの型に分たれる。

第一型。中肉中骨で、骨細く肉軟く、情慾弱き夫にも満足し、また、情慾旺んな夫にも耐え得る。

第二型。長身で、肩幅せまく、乳房は比較的小さいが、下腹部、臀部、大腿部は素晴らしい発達し、みだりに発情しないが、一度発情すれば、色慾猛烈を極め、止まる所を知らない。

第三型。可成り長身、多肉で、肩幅もあり、乳房頗る豊満、腹部も膨隆し、臀部、大腿部は骨格はさして大きくないが過しく肥満している。容易に興奮し、昼夜を分たず間断なく発情状態にあり、常に夫との次の交情を楽しむに生きている。

第四型。丈低く、乳房の發育悪しく、軀幹扁平で、陰毛こわく、発情すること少く夫と幾度××しても満足しない。

「娼婦ウトラヴァルナー」に関するインドの諸古書の記事をかれこれ綜合してみると、彼女は、どうやらこの第一型と第二型の複合型に属していたらしいが、彼女が、同行した多くの商人たちの全部に洩れなく

満足を与え、それによつて、彼等をして色街へ走る必要を感じさせなかつた第一の理由は、彼女の性器の構造と機能とに、幾十万人に一人あるかなしかの特異性があつた事にあることは、これも上記の諸古書の記事と、古代インドのリシたちの手に成る諸秘本の記述とを照合することによつて、はつきりと推断することが出来る。

その特異な構造と機能とを具えたジョニ（女陰）の持主は、男性との××に際して如何なる技巧をも弄する必要がなく、いとも簡単に相手を極度の恍惚境に導くことが出来るのである。また、その特異な構造と機能とと遺伝性のもものと見られているが、さて、その正体は如何なるものであつたか？リシたちの記述は、実に精細を極めて、遺漏ながら、筆者は、それについてここで詳説する自由を有しない。

ヴァイシャリー城市の一角に巣喰つてゐる妻腕の娼婦たちは、当てにしていたお得意さまがとんと寄りつかないので、すっかり算段が狂つてしまつた。

「マトウラー城市から来たあの商人さんたちは、なぜわたしたちの所へ寄りつこうともしないのでしょう？」

「ほんとうに、どうしたと言ふんでは？」

と、彼女たちが、いぶかりながら語り合つてゐるところへ、外出先から戻つて来た仲間一人が、次のような、はやはやのニュースを披露した。

「それはね、あの商人さんたちは、わたし



たちなど足もとへも寄りつけないような妻  
いガンダーラ美人を一人、連れて来たから  
なの！」

そこで、頭のよい彼女たちは、みんな  
連れ立って、ウトパラヴァルナーの所へ押  
しかけて行くと、いかにも親しげに、こ  
う勧誘したのだつた。

「あんたも、わたしと同じ商売じやな  
いの？悪いことは言わないわ。いつそ、わ  
たしたちの仲間へ入つたら、どう？」

「どうも有り難う。願つてもない幸だわ」  
ウトパラヴァルナーは、面紗をかなぐり  
捨てると、即座に、彼女たちの仲間入りを  
した。

ある日のこと、彼女たちは、ちやぶ台で  
酒をあおりながら、今までにさんざん金を  
捲き上げてやつた色々な商人たちについて  
語り合っていた。

さて、ヴァイシャリー城市には、アニ  
シタブラーバタという若い美貌の雑貨商が  
住んでいたが、娼婦たちの中の誰一人とし  
て、まだこの若者を手に入れた者はないの  
だつた。

彼女たちは、はやし立てた。

「わたしたちの中で、あの若い雑貨屋さん  
を手に入れた人があつたら、みんな、そ  
の人を『女王』と呼んで上げようじやない  
の！」

ウトパラヴァルナーは念を押してみた。

「わたしがその雑貨屋さんを射留めたら、  
あんたたちは、本当に、わたしを女王にし  
てくれる？」

彼女たちは、黄色い声でさげんだ。  
「して上げるとも！」

ブツダ・バガヴァント（仏世尊）の言葉  
によれば、女が男を惹きつける方法には八  
種あるという。即ち、踊ること、歌うこと  
楽器を奏でること、笑うこと、泣くこと、  
眉目をつくること、体を触れること、もの  
を尋ねること、である。

ウトパラヴァルナーが、その中のどの手  
とどの手とを用いて、どのようにして、そ  
の堅人で聞えている美貌の雑貨商を手  
入れたかについては、くわしく記して  
いる暇はないが、兎に角、彼女は  
その「ミスター・ヴァイシャリー」

「ミスター・ヴァイシャリー」ともいふべき美青年  
を、完全に「恋の虜」  
にすることに成功し

た。さしもの海  
千山千の朋輩た  
ちも、舌を巻い  
てしまった。そして、

「ガンダーラの姉さんは、  
やつぱり、わたしたちとは腕  
が違ふんだよ！」

といつて、彼女を女王に戴いたのだ  
つた。

## カルマ（業）

他の娼婦たちに伍して、しばらく耽溺生  
活を送っている中に、ウトパラヴァルナー  
は身重になつた。

さて、ヴァイシャリー城市には

東門に一人、西門に一人、合せ

て二人の門番がいた。彼等

は、たがいに非常に懇意

にしていた、出来る

ことなら、自分た

ちの死後も、

その状態

を継し

く約束していたのだつた。

やがて、月満ちて、ウトパラヴァルナー

は、男の子を生み落したが、子持ち女は男

に嫌われることに気がついた。そこで

彼女は、下婢に言い含めて、赤子

を捨てさせた。二人の門番たち

の間柄をよく知っていた下

婢は、氣転をきかして

赤子を東の門番の戸

口に、ソツと捨

てた。果し

て、東の

門番

夫婦

は、その

赤子を拾い

上げて育てた。

西の門番は、それ

を見て、こう考えた。

「たとえ拾い子でもよい

もしわしに娘が出来たら、あ

の東の門番さんの息子は、わしの

娘の亭主になるわけだな」

そこで、彼は、祝いの産衣を贈つた。

その男の子を生んでから間もなく、ウト

パラヴァルナーは、ふたたび身籠り、今度

は女の子を生み落したが、その女の子にも

彼女は、男の子にしたと同じように振舞つ

たのだつた。下婢は、赤子を西の門番の戸

口に捨てたところ、西の門番夫婦は、その

子供同志を夫婦

たいも  
望んでいた  
たちに子供が  
ののだと  
ので、自分  
生れたら、そ  
にすることに、固

の子供同志を夫婦

にすることに、固



赤子を拾い上げて、喜んで育てた。

すると、東の門番は、

「あの西の門番さんの娘は、将来、わしの息子の子房になるのだな」

と考へ、祝いの産衣を送りとどけた。

男の子も、女の子も、どちらもすくすくと成長して行つた。

ウトラヴァルナーは、その後、十四年間も売笑渡世をつづけていたが、娼婦とはなつても、その局所の稀有の構造と機能と

のために、人氣は依然として衰えなかつた

いや、前掲の諸古書によれば、「彼女は、いかに年を重ねても美しく見え、その皮膚には張り」と光沢とがあつた」という。ホル

モンの分泌が実に旺んだのに違ひない

あの日のこと、彼女は、遊宴へ出かける

一団の組合（同じ階級の人たちが組織して

いる組合）の人たちに慰安婦として雇われ

たが、その物好きな男たちは、次のような

申合せをしたのだつた。

「もしわれわれの中の時でも、あの女に一切手出しをしなかつた場合には、その人は

われわれ一同に六十カルルシャーバナ（当時のインドの銭貨）支払うことにしようじやないか」

遊苑へ着いた彼等は、その五百カルルシ

ヤーナバで雇つた「倦むことを知らない女陰」によつて、代る代る、心行くばかりの

にいきなり抱きついて言つた。  
「お坊つちやん、遊びなさいな。さもないと、あなたは六十カルルシャーバナも支払わなければなりませんよ」  
若者は、その罰金が恐さに、と言うよりも、ただ無我夢中で快楽に走つてしまつた  
それが縁で、その後、グルマは、ウトラヴァルナーに深く恋著し、とうとう彼女をわが家へ引き入れたが、その家こそは、あの東の門番の家なのだつた。しかも、それから幾許もなく、彼は、許嫁の小娘を否応なしに押しつけられ、二人の妻をいっしょに側に置いた。  
折柄、ブツダ（仏陀）の十大弟子の一人で、神通第一の声誉を得ていたマウドガリヤーナ（目連）が、遊行の道すがら、その家の前を通りかかつた。彼は、その名高い神通力によつて、門先にいたグルマの小女房を一目見るなり、言つた。  
「おお、娘よ。そなたといつしよに、そなたの夫に仕えているもう一人の妻は、そなたの産みの母であるぞ。そなたが夫として仕えている人は、そなたの夫の兄であるぞ……けれども、あまり氣にかけぬがよいぞ地獄のことなどは、考へぬがよいよ！」  
ウトラヴァルナーは、しばらく夫と起臥しを共にする中に、男の子を生んだ。  
グルマの小女房は、毎日のように、門先でその赤子をあやしていた。そこへ一人のブライフマン（僧侶階級の人）が通りかかつて、彼女をしげしげと打ち見やつた後、彼女に向つてたずねた。  
「それなる男の子は、そなたの何に當つて

居るか？」

彼女は答へた。

「おお、ブライフマンさまよ。この子は、わたしの実の弟でもあり、わたしの実の兄

の子でもあり、わたしの継子でもあり、わたしの異父弟でもあります。この子の父は、わたしの継父でもあります。この子の父

兄でもあり、その上、現にわたしの夫でもありまする！」

ウトラヴァルナーは、ふと、それを耳にしたので、興入れする時にも連れて来た例の下婢に向つてたずねた。

「あの二人は、何を話し合つてゐるの？」

下婢は、言つて聞かすように、答へた。

「あの二人が語り合つてゐることは、本当ですとも！決して嘘じやありません」

ウトラヴァルナーは尋ねた。

「で、その本当とは何のこと？」

下婢は、急に堪らなくなつて、泣き出しながら答へた。

「わたしが東門の際に捨てたあなたのお坊ちやんは、現にあなたの旦那様なのです。わたしが西門の際に捨てたあなたのお嬢

さんは、旦那様の妻として、現にあなたのお嬢さんなのです。わたしは、今まで、それをお隠ししてゐたのでした！」

ウトラヴァルナーは、涙も出なかつた。

そこで、彼女は、面紗で顔をかくすと、わが家を立ち去つた。

## デーヴァダッタ

### （提婆達多）の鉄拳

ラージャグリハ城市の郊外にあるカラングアヴェヌヴァナ（迦蘭陀竹園精舎）には、当時、ブツダが止住して、国王ビンビサーラの供養を受けながら、四苦に悩む民衆を教化してゐた。

ある日のこと、マウドガリヤーナは、ブツダの旨を受けて、ウトラヴァルナーを発心さすべく、彼女の家の前に立つた。

が、この名うての娼婦の女王は、発心どころか、逆にマウドガリヤーナ尊者を誘惑しようとして、売女の持つ手練手管の限りを尽した。最後に、彼女は、衣裳をぬぎ捨て、丸裸となつて相手に抱きつこうとした

マウドガリヤーナは、しかし、得意の幻術を使つて、翼をいっばいに拡げた紅鶴の王のように、空高く舞い上つてしまつた。

やがて、尊者の口から洩れる聖なる言葉

を聴くに及んで、ウトラヴァルナーは、初めて深い感に打たれ、

「どうぞお説教をお聞かせ下さいまし！」と、願ひ出たのであつた。

マウドガリヤーナは、その願ひを叶えてやつた。すると、ウトラヴァルナーの胸の底に長く眠つてゐた理性は忽然と目覚め、彼女は、ついに四諦（ブツダの教に於ける迷悟の因果、即ち苦、集、滅、道）の理を観ずるに至つた。

後に、デーヴァダッタ（提婆達多）が逆心を起してブツダを殺害しようとした時、身代りとなつて、デーヴァダッタの鉄拳の下に絶命した聖尼は、この薄命な佳人であつた。（大尾）



# 艶色晝夜帯

かゆらばん・ちやれいふじんのこいびと  
 緑猛比古  
 絵 今幾久藏



「しんとんとろりと見惚れる男。」

と云う、寛永時代武芸の誉高かつた、笹野権三を謳つた名代の文句が、唄いはやられていた享保元年の初夏人々はそろそろ単衣で夜の灯を恋慕つて、ぞめき歩き始めた頃の出来事である。

一尺七寸、金縷えの渋い蠟づくりを落し差した、濡羽色の結い立て髪も爽やかに、静々と歩む姿を見ては、松江城下の老いも若きも、女と云う女は等しく溜息をついて花の枝からこぼれた様な美しい男と、しんとろりと暫し見惚れ、あれこそは今様の唄に名高い、笹野権三その儘の男と、いつしか女達は離れ云々となく、池田文治の事を笹野権三、と呼びはやす様になつた。

松平出羽の兄小姓で、男色ナンバーワン——権三も要するに俗語で云うおカマであり、彼の地で家老小林大膳に申付けてみめよき女繰し出させては精々ど精を出している留守、漸やく日頃のつとめより離れて、久方振りの男らしい気振に還つていた。が一難去つて又一難。殿様留守の間に、今のうちと眼の色変えた権三フアンの家中の娘達、いづれ劣らぬあやめ、かきつばたが、手を変え品を変えては権三の行く処、忽然と現われて秋波を送り、所用に事寄せては権三の宅を訪れて、いつ帰るとも知れず、もじくと長腰の居坐り戦術で頭張る有様流石の権三もこれには参つた。こゝ暫くは後門の狼の恐れなけれど、前門の牝虎の恐怖に、則へ立つてもれんじ窓から覗かれていた様な錯覚に陥り、ホト／＼弱り果てたとは何とも羨やましくて、百分の一でもお

すそわけに預りたい程である——と、これは家中の専らの噂。その権三を遂に首尾よく仕止めた娘が現われた。名をお雪と云つて、いかにもしらしく感じるが、豈はからんやこれがいと勇敢なる娘で、お馬廻り役川越半之助の妹——。

お雪とて焦れ死ぬ程、人知れず権三に恋い惚れているが、何しろテイルは数知れず、尋常の手段ではとても及びつかない手ねてからチャンスを探り内、権三が晴れた一日、浜の宮島居通りの流鏑馬馬場へ、手綱捌きに出掛けんとするのを見すまして今ぞ絶好の機会と、そつと先廻りするや木立に隠れて、今か／＼と権三の来るのを待ち兼ねていた。カッ／＼と蹄の音が響いてくる。頃やよしと、バツとお雪は捨身に権三の馬前に飛び出す。何とも恋はがむしやらのものである。

「あッ！」と権三手綱を絞つたが一步遅かつた。無惨にもお雪は馬の前脚に蹴られて其の場に打倒れた。否、蹴られたと見せかけたが、其の実はお馬廻り伴之助の妹だから多少の心得はあつて、うまく蹄は避けていたのだが——。

そんな事は知らぬ権三、突嗟の出来事にハツと驚いて慌て、馬を降りるとお雪を抱き起す。ぐつたり眼をつぶつたお雪の、その氣持よさそうな表情と云つたら、これが馬足にかけられた女の表情とも思えぬが、まさか放つておく訳にもゆかぬ。抱き上げて辺りを見廻すと、こんもりした柔かそうな草むらが少し先にあつた。氣失なつた娘

## 新釋 鑑の権三重帷子

口移しに飲まされた  
 水の味加減

江戸の流行唄に

「鑑の権三は伊達者で御座る

油壺から出たようないゝ男

雲州松江の城主松平出羽守——例の河

内山に乗り込まれて、面目丸潰しにされた好色大名を御存知の方もあろうの近習中小姓で、池田文治と云う美青年があつた。

齡二十四の、男ならこれからと云う青年盛りで、ひとかどの男らしく、いよく肉体的にも美しく、逞しくなろうとする年頃である。日頃、越前下阪国綱の作、細身で



をそこへそつと寝かし、権三は、素早く傍々の流れの水を口に含んできてぐつと口移しに吞ませた。水がすつかり娘の喉元を過ぎたのに彼の唇が吸いつけられて離れない。こんな管ではなかつたと気がついたが遅かつた。日頃の思い叶つて、こゝを先途と、お雪は眼を閉じた儘、魂を宙天に飛ばして一心不乱に権三の唇を吸っている。しつとりうるんで濡れた瞳、ほの赤い耳たぶ、心臓の早鐘の様なときめき。お雪は正に興奮のクライマックスである。事ここに至つては権三も我慢なり兼ねる。幸い辺りに人はなし、ましてや甘い盛りの十八角豆、柔かいうちに一口食うて見たいが人情。皇居前広場の善男善女と同一心理にかり立てられて不覚にも権三、人間本能で思わず知らずフラフラと、なつていつたのも亦、若い男として己むを得ない事ではあつた――。

## 年増に毒な閨のとりもち

「……と云う訳で妹の雪奴、恥を忍んで拙者に打明けた次第――。思い焦れた妹の身を思いやれば不慮。何とかして権三と添わしてやりたいと思ふは肉親の情。おさい殿そなたからひとつ、呉々もよろしく権三に話しては戴かせぬか。――」

こう云つて伴之進は涙つとおさいの返事を待った。此処はお膳番で、茶道指南浅香市之進の宅である。

夫の市之進が主君の随行で江戸詰となつた留守、三十六の年増盛りのおさいが淋し

く空間をかこつていたそこをねらつて、伴之進は権三とお雪の媒介を頼み込んだのである。伴之進も権三も共に茶道の相弟子で市之進に茶道の教えを乞うていた。

「外ならぬ伴之進様のお頼みとあらば、精々骨折つても見ましようが、何と申しても色事の駆引。ホホほんにこれは又とんとむつかしい事――」

口先では恩に着せた口吻のその瞬、毎日退屈で体を持ち扱いかねていた折柄、おさいはいゝ愉しみが出来たと、心の中では大喜びである。

早速権三に使いを立てたその夕刻――。

縁側の風鈴がチリン／＼と爽やかな音を立て、打水した庭園に微風が涼しく亘つて行くのも清々しい。

湯上りのほてつた体を、さつぱりとした浴衣に衣替えて、おさいは何か心ときめき、まるで自分の恋人でも待つ心地になつては、ハツと顔赤らめて、夕刻早く寝かしつけた三人の子供の寝息を、そつと横越しに覗うのであつた。

間もなく権三様が御見えになる刻限、冷めたい飲物でも整えておこうと立上つた折しも。

「御免下さりませ――」と訪う声。

「はい、唯今――」

おさいはドギマギして玄關にそゝくさと迎えに出る。日頃市之進から教えを乞う権三の姿は度々垣間見たれど、主人の留守の間、たつた二人の相対づくで逢うは今宵が始めてだけに何から切り出していいやらわからない。

世の中の酸いも甘いも可成り知り尽し、況して三人の子の母親となる迄には、大概の閨房秘術もし尽して来た身――。今更若い男を見て顔赤らめる様な年でもないが、相手が何しろ油壺から出て来た様な、水も滴る、美男子でおさいの差出した手燭に、ほんのりと濃闇に浮び上つたため姿はまるで人間離れのした美しさ。長谷川一夫でも上原謙でも尻尾を巻いて遁げ出す程の男振りである。

「ほんにわざ／＼お呼び立てしてお氣の毒なこと。さあ／＼そこは端近か。奥へずつとお通り下され。」

と案内した奥の間で、冷えた麦茶を差出して、団扇で風を送ればもう話を切出すより仕方がない。おさいは成可く権三の顔を見ぬ様に乍ら、それでもやつと平靜にかえつて、そうなるこそは年増の圖々しさで、ボツ／＼お雪の一件を語り出す。

「よしやそなた様もお忘れあるまいが先達つて馬場への行きがけに、伴之進様の妹御に御情かけたその時のお言葉――。まさか一度限り、これ限りと仰有られはすまいにあれからと云うものは忘れたかの様に、ついぞお雪様を其の後お避けになる御様子との事。日頃の思い叶いし娘心の一途で、近頃では御飯もろく／＼喉へ通らず、明暮れそなたの名を口走つて半病人の如き有様。

夜鷹、辻君ではなし、たつた一度限りに体を切売する様な娘御じや御座りませぬぞえそれに又思ひのたけを書き連ねたお文送ればとて、返事しよう／＼で一度もなされぬ梨の隣――。それでは余りにお嬢さまが可

哀想――。たつた一言、好きだ……祝言してやろうと仰有れば八方円満に納まる話。さあ権三様どうおしやる。大事なおぼこ娘傷つけて、その儘では済みませぬぞえ――」

と喋り出すとよく喋べる。まるで自分がお雪の様な氣持で喋べるのだから真実がある。権三は驚いた。どうしてあの様な仮初の交り、ふとした出来心の慾情をおさいが知つてゐるのかと、不審げに。

「いかにもふとしたはつみで雪殿と罰なき事になりましたたれど――おさい様には又どうしてその事を――」

「ホホ、お雪様は女の身でさぞ恥かしからうに、思いつめてかその時の、そなたの一言一句、手足の動かし様まで洩らさず私に打明けたたぞえ。

のう権三様、何はともあれ思いつめ、恋い焦れた娘の切ない氣持をお汲み遊ばして兎も角も今一度ゆつくり逢つて見ては下さらぬか。話はその上の事。私とて乗りかゝつた船、丁度幸い主人も留守の折、明日の宵でもお教寄屋で、肌寄せ合つて、しつぱり濡れての露の玉、しみ／＼甘い花盛りをぐつと味うのも悪うは有りませぬぞえ。今度は私のこの顔立て、これこの通り、数ある女子に怨まれるかも知れませぬが、たつてお願いします――」

と云われて権三も断り切れず、一度が二度となろうと、まかり間違えば女房にする迄の事。まゝ上娘の身から濡れるつもりその氣なら、据膳食わぬは反つて怨まれもしようと、腹をきめて承諾する。が豈にはからんや触れなば落ちん大輪咲きの仇花が



獨闔をかこつて目前でしつぽり女体をしめ  
らしていようとは、まさか権三も気がつか  
なかつたに違いない。

## 夜は曲者、案に相違 の身代り枕

陰曆六月初旬は既に蒸し暑く、そよと  
した風もない。どつしりとした男の性慾を  
そより立てる様な量感のある乳房をゆらゆ  
らさせ乍ら今宵、権三お雪がしつぽりなま  
めかしく濡れる数寄屋に、おさいは甲斐  
くしく、紅の薄夜具に青蚊帳整え、箱枕  
の抽出に、みす紙まで差し入れる周到さで  
若い二人の醜言をあれやこれやと想像して  
は、秘かにほろ苦い感傷に妖しく胸をとき  
めかしていた。

ほんにお雪様の遅い事、あれ程恋い焦れ  
ており乍ら、未だ姿を見せぬはどうしたわ  
けやら——。

おさいは先刻から、座敷と数寄屋の間を  
うろくくと、往つたり来たりしていた。約  
束の成の刻限も迫っている。かくするうち  
に権三が訪れてくるかも知れぬ。訪ねてく  
ればどうしよう。我が身から粹に取捌いて  
万事のみ込んでおき乍ら、今更相手の娘が  
来ぬでは話にならぬ。えらい焦れつたい娘  
御上のう。どうせ今宵晴れと、念に念入れ  
た濃化粧に腰湯使つたその挙句、衣裳の選  
り好みにあれやこれやと迷つては、心を碎  
いての遅刻なれりと思えども、何としても  
おさいは気が気ではない。

権三がくればどうしよう——と思ひ悩む

折しも、表で、

「御免下され……」と鈴やか権三の声。

お雪は未だ見えぬ。何とした事、困つた  
くとおさいは一途に義理堅く。少し待て  
ばよかつたものを、突嗟に何か心に決した  
と見え、スーッと彼女の頬に赤味がさした  
さても恋は魔物、曲者とか——、権三が醜  
男であれば間違ひもなかつたろうに、兼ね  
て人恋しく下地があつただけにおさいにと  
つて、お雪の来ぬ事が天来の福音の様にひ  
らめいた。夢に迄叫んだ権三様とせめて一  
度、よもや思ひ叶わぬと諦めていたが、何  
が幸いになるか知れぬ——。

全く姦淫の様相は、案外にとんでもない  
瞬間に現われるものである。

「まあ権三様、ようこそ——。お雪様は一  
刻も前から隣りの部屋でお待ち兼ねでまりま  
す。さあ——万事この私に任せて、とあれ  
御数寄屋へ御出でなされませ。」

おさいは自分でも呆れる位すらく——と嘘  
を云つて、権三の余りにも美しい若衆姿を  
眩しそりに見やり乍ら、胸をドキ——させ  
て彼を御数寄屋へと案内した。

お雪が定刻に來なかつたが為、おさいの  
愛慾は、一瞬にして百八十度の変貌を示し  
た。芸術品の如き権三を前にしては三十六  
と云う年増盛りのおさいがムラ——と慾情  
するのは無理もない。況してや夫は江戸詰  
の留守と来ている。

この場合おさいならずともフラ——と、  
濡れて見たい気持になるのはさもありなん  
で、要するにおさいはお雪の身代りに刹那  
の歡びを味うべく、そつとお数寄屋へ忍び

込む事に腹を定めたのである。

「もし権三様——、あの娘御は何と云つて  
も未だおぼこ娘。行燈の灯に御互の顔見合  
せるも氣恥かしく、傍らに添寝の床の二ツ  
枕を見れば、その恥かしさも又一入のこと  
恋の闇路に灯は要らぬ故。行燈消して一先  
づ先にゆるりとおより遊ばしては……」

と云うより早く、フツと灯を吹き消して  
数寄屋を出ると、  
「すぐにも見えるでござんしよ。暫らくの  
辛抱でふります。」

と声をかけてあわたしく己が部屋に駆  
込む。鏡の蓋外しておさいは大急ぎ、ぼつ  
てりとした肌を肩脱ぎして、素早く厚化粧  
を施すと、意外に若い若い三十たらずに見  
えて、部屋になまめかしい匂いが漂う。子

供は何も知らずスヤ——と寝息を立て、い  
る。鉄漿落して眉毛をスーッと引いたおさ  
いは見違える許りになつて静かに数寄屋へ  
と近づいていつた。

何十日振りかで男の肌に触れるかと思  
うと、胸は不逞にドキ——と高鳴る。キュー  
ツと引き緊る身内の疼きに耐え様もなく、  
そつと開けた障子を後手に閉め、その儘無  
言でドツと権三にしがみついていた。て  
つきりお雪と許り思い込んでいた権三は、  
これも無言で抱きしめる。

ぼつてりとした肉体、濡れた肌——。聞  
は生ぶな娘をかくも大胆にするものかと、  
不思議な情感に捉われ乍ら権三は、いつし  
か没我の境地に誘ひ込まれていつた。

——雪どの……そなたは……





と権三がきょろ／＼に囁いている頃、当のお雪は、遅れた身も慌たゞしく、今支関に案内を乞うて立疎んでいた。シンとした家中の気配——。フト差し迫つた云い知れぬ不安と焦燥を感じて、彼女は思わず足音を殺して畳を踏んでいた。行燈の灯の洩れる奥座敷を覗けば、子供三人無心の躰を立てゝいる中におさいの姿は見えぬ。フト頭脳をよぎる厭な予感に満ち顔を凝らしたお雪の脚元がブル／＼と慄える。じつと辺りの氣配に事をすますと、地の底を這う様な、微かな／＼ざわめきがどこからともなく流れ洩れてくる。お雪の足は夢遊病者の様に覺束なく声を辿つて行く。張りつめた琴線が今にもビチンと裂けん許りの極度の緊張が御数寄屋をソツと覗いた瞬間遂に音を立てゝされた。

お雪の血は逆流した。恋しい、死ぬ程焦れた男を寝取られ、その痴態をまざ／＼眼前に見ては、お雪ならずとも逆上するのは当然。

「口惜しいッ！」と魂切る悲愴な悲鳴がしゝまを破つて、バタリと障子が倒れたと思ふとお雪の無念に悶絶した女体がドタリと二人の前に投げ出された。

庭燈籠の灯の影がすく、権三が闇にじつとすかし見れば、意外とも何とも、裾を乱して華やかに氣を失なつて倒れているのはまぎれもないお雪のあでやかな姿——。「やゝッ！そなたは雪殿、さすれば今のは……」

こゝに至つて権三は、はつきり重大なる錯誤を侵した事に氣付いた。

おさいは寝乱れ髪をかき上げ、露わに捲れ上つた裾をつと合せて、すべてが終つた事を悟つた——。

密通——不義——有夫の身——世間のそしり——夫の怒り——手討……と、刹那目まぐるしくカタストロフがヒタ／＼と我が身を取り巻いたことをさすると、それを突き破るかの様に、毒喰わば皿までの太々しい氣持が湧然とのし上つて来た。

若さに満ち溢れた権三とのひと／＼の悦楽の、何と愉しかつたこと。これから先何十年かの寿命を僅かの一刻に押し縮めてもおさいは悔いがない思ひであつた。

権三に活を入れられてお雪がウーンと息を吹き返したをたしかめたおさいは、その瞬間権三の手をとつて素早く御数寄屋から遁れ出た。お雪の慟哭が尾を引いて静かな闇に流れる。不義の闇に残された定紋三ッ引裏菊の男帯と、花色綸子の女帯が、まざ／＼二人の情痴の果を物語る如く、長くからんで残されてあつた——

## 浮名立つのも恥しい 年増女の深情

その翌日の六月八日——。二人は松江城下を手にとつて出発した。

お雪の叶わぬ恋の逆恨みで、呪咀の言葉が吐かれる処、実は虚ををうんでまた／＼間に、波紋の様に二人の恋の迷進行が松江の城下は劣か近郊近在に迄知れ亘つた。

この醜聞が、逸早く江戸詰の市之進の耳に達した頃、二人は松江から米子を經て鳥

取へと急ぎ、夜を日に繼いで一刻も早く噂の地を離れに、他国に安住の地を求めんと一先づ大阪に向つて只管急いでいた。

大山を左に見て根河の廊を過ぎ、四十曲の險を越して津山から岡山へと、互に励まし合い乍らを追手を避け、人眼を避れては日夜歩きに歩き続けた。

松江を發つて二週間目、二十三日に二人は漸く大阪の土を踏んでホツと一息ついた。一方裂火の如く怒つた市之進は四日遅れた二十七日、妻敵討の屈を出す、一路西へ／＼と急いでいた。おさい権三の考えは根本的に間違つていた。彼等二人は追手を避れるどころか、反つて市之進に近づいて行つたのだつたからである。

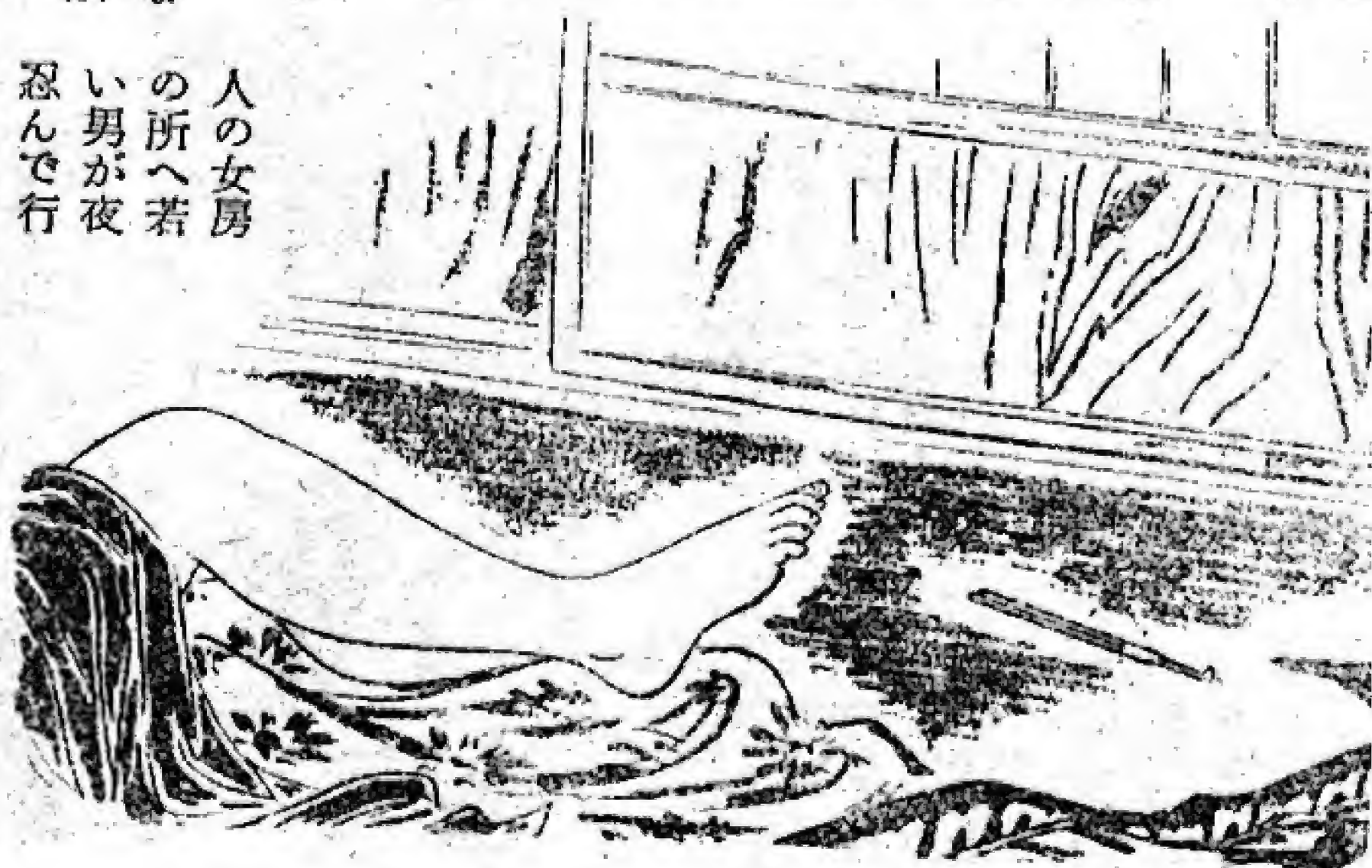
妻敵討——。これは姦通罪の成立した昔であつても尙且滑稽なものであつた。

親の敵、子の敵、夫の仇、主君の仇討ならいつ尋常に勝負／＼と呼ばわつても体裁がよいが

「よくも／＼わしの留守の間に間男しおつたな。二人していゝ目をした恨み、いざ勝負／＼」では間が抜けている。

その間男呼ばわりされるには、一寸氣の毒な権三の立場——。全く思ひもかけぬ身に振りかゝつた災難で、引く手星の数ある女子の中から、又選りによつて有天の大年増とまるで詐欺にかゝつたやうなたつた一回の契りで、とんでもハツプンの身の上となり、一時は果然としたが、これは対岸の火事でない。何しろ事が間違ひでは済まされぬ。

どんな理由があるにせよ、独り住居の他



人の女房

の所へ若い男が夜忍んで行

けば、世間は女が受身の体と考えるは当然で、悪いのは男、誘惑したのは男の方と云ふことになる。

夫の市之進は街道／＼で松江からの連絡を受け二人の道どりが、どうやら大阪へ向つた事を知つて、数日遅れて大坂の街へと到着した。

月は七月に代つて暑いさなかつたがいつ何処で知り人に逢うかも知れず、二人の異様な組合せが人眼につくだけに、危なくて一歩も外へ出歩けない。

うだる様な暑氣にあてられて、二人は自棄氣味の火花の様な刹那／＼の淫樂に日夜



耽溺しきつていた。流石に若々しい権三も日増しに憔悴——、脂ぎつて今を盛りのおさいから、夜となく風となく挑まれてはたまつたものでない。女はそれでもいゝが男となるとそうはゆかない。肉体に限りがあるだけに、半月許りのうちに昔の面影は何処へやら、眼は窪み、ふちは黒く蒼ずんでおさいが愈々張切る一方、権三はすつかり年上の女の執拗に食傷してしまつて、もう辛捧出来なくなつて来つゝあつた。度過ぎた性愛が二人の仲にひびを入れ、氣拙い空氣のうちに、愈々大詰の七月十七日の夜を迎えたのであつた。

## 長恨高麗橋妻敵討の顛末

浅香市之進は根氣に任せて、大阪の宿を隅から隅まで片ツ端から二人を探し求めて訊ね歩いてゐた。

妻も憎いが、権三は尙更憎い。何しろ相手の男が油壺から出て来た様な男振りであるだけに、油に火を注いだ様な激しい嫉妬が胸に渦を巻いてゐた。

懸命に探し求めた七月十六日の夜、漸くにして念願叶つて二人の泊つてゐる宿屋を見付け出した。早速にも乗り込んで仇とうとしたが、宿屋の中では逃げられる恐れもあり、迷惑をかけても悪いと、訳を話して女中を買収すると、何とかして外へおびき出してほしいと頼み込んだ——。

「そう、今夜は堂島で花火がふります氣晴しにお揃いで見に行かれますか——」

大変な人出でふいますので滅多な事もありませんまい——」

と女中が言葉巧みに外出を奨める。暑さうだり、明け暮れ狭い一室で差し向ひの氣づまりから、ツイ言葉に誘われて氣を許して出たのが二人の最後となつたのである七月十七日の夜九時過ぎ、おさい権三は宿屋紀之國屋惣次郎方を立出でると西へ向つた。真夏の月が漸やく中天に懸つて、明るく街並に冴えてゐる。

蠟いぶしの国綱を落し差しにし、片手を懷手に、右手に冷み扇子を携え、白帷子をさらりと着流して房事に荒んで險しくなつた顔も反つて苦味走り、月光を正面に浴びて立つ優姿は、見送る女中もホツと溜息のつく男振りであつた。

おさいは白帷子の上に、萩の墨絵の絹縮みを着て、白ちりめんの湯文字をチラ／＼ちらつかせて、紫縮緬の帽子をかんだしで止めて若作りに体一杯の性的魅力を発散させて、権三にヒタと寄り添い、さも嬉しげにイソ／＼として本町橋を亘つて行く——

その後ろから半丁許り離れて市之進が、腸の煮えくり返る思いで潜かに尾行してゐた。

平野橋、思案橋を打過ぎて高麗橋に差しかゝつた頃、市之進は今こそとぐつと押し迫つたが、花火見物と夕涼みの人浪に押されて、こゝで名乗りを上げる機会を失なつてしまつた。

今こそ——、と市之進はバタ／＼と追つくなり、「不義者、そこ動くなッ！」

と叫ぶや腰の一刀颯ツと引抜いて、間髪入れずアツと驚くおさいの腰から斜めにガツと斬り払つたバツと上つた花火と共に、何条たまろ、おさいはギヤ／＼と悲鳴を挙げて打倒れる——。

突然の事とて一瞬ギョツと驚いた権三も、いつかはこの事を予想してただけに今はこれまでと、例の一尺七寸の蠟轡払つて大上段に振りかぶり、おさいをかばつて堀を背にきつと構えた。御互いに中小姓と茶道指南の事とて、腕は大した事もなく五分／＼だが、

権三は日夜の荒淫で可成り肉体の抵抗が弱つてゐる。下手な同志が滅茶苦茶に刃を振り廻してゐたが恨みの一念は恐ろしく、悪戦苦斗一刻の後、権三は大小十二ヶ所の疵を受けて、堂つとおさいに折り重なつて倒れ伏した。

致命傷を与える事が出来ず、滅茶斬りに斬つたのを見ても、市之進の腕は大したものではなかつた事が察せられる。権三の刃が



一尺七寸の短い刀でなく、今少し、せめて二尺三四寸あれば或は共倒れになつてゐたかも知れない。

市之進も足や手首に三四ヶ所の傷をうけてゐた。勿論妻敵討として咎めはなかつたものの、帰国した彼を、人々は天晴れと雖も褒めなかつた。

僕々と楽しまぬ儘に一生を終えたが、後に残された三人の子供にしても、母を殺したの父であり、妙なジレンマに悩んだ事であろう、茲通罪が罪にならぬ今にして思えば、後味の悪い無益の殺生をしたものである。



異色  
短篇

罰

金

と

附

文

北海廣介

電氣會社の調査員である笠井が、電熱器具の不正使用を発見した家は、  
彼が昔同棲した女、千代が圍れている妾宅であつた。愛憎と利害の渦まく  
微苦笑の好短篇

一

千代は笠井の顔から眼を離して

「……なんと云つたつて、もうわたしは貴方の処へなんか帰るものですか」

と、庭の八ツ手の根元を見つめた。

「そりやア、千代さんの怒るのもよく分るが、僕はまだ千代さんを諦め切れない。今でも愛している」

吸残じのバットに火を点け、笠井は細々と煙を吐いた。

「今でも愛して……、そりやア、貴方の勝手よ。でも、だからつて何もわたくしが……そんな義理ないわ」

「そりやア。しかし、昔の千代さんはそんな女じゃなかつた」

「そうよ。さん／＼誰かさんに苦労させられるまではね。でも、今は違ふ。そんな甘口になる馬鹿でなくなつたわ。何よ。聞いてりやア、先程から昔の千代さん／＼つて

甘たるい昔話ばかりしてさ。今はね、これでも、渡部組の大川のれつきとした愛人なんだから」

千代はもっしつこい笠井の話を打切るように、こり云うと、ちらつとあざけるように唇の端を歪めた。

笠井は取付く島もなく、顔を伏せた。電氣會社の制服の紺サージの膝が、微かに震えていた。

（何故、こんなつまらないことを云出したんだ。よほど、俺はお目出度ぞ！）

笠井は煙草を灰皿へ擦付けて消した。

二

三年前に、飛田の小さな喫茶店に出ていた千代と結婚した当時、笠井は市の日傭人夫であつた。お互いに愛し合つてはいたが、戦後の苦しい生活は半年もすると、喫茶店でいろいろ派手な男を見馴れていた千代は、その日の食糧にも困る笠井に愛想を

つかし、逃出してしまつた。が笠井は甲斐性のない自分を諦めて、追探す氣もしなかつた。そのうち日傭人夫から今の電氣會社の集金人になり、始めは田舎を廻つていたが、最近この町へ転勤して来て、仕事も定

細制の家庭を調査に廻るようになった。そして、その三週間目の今日、計らずも、この大川の妾宅で久振りの千代と再会したのだ。彼は懐しさの余り、電氣の調査もそこ／＼にして、つい昔話にふけるうち

いつか千代に逃げられた愚痴を口にしていた。そればかりか、もう昔のような苦労はさせぬから……とつい云つたばかりに、たちまち千代を怒らせてしまつたところだつた。

急に隣から、鶏が盛んにクウクウと咽喉を鳴らして、羽ばたくのが聞えて来た。庭の八ツ手の影は一層濃くなり、部屋の中も

薄暗くなつた。笠井はもう帰ろうと思つた拍子に、横坐りに膝を崩している千代の腰の辺りが、眼についた。あれから三年の間の千代の生活が、略々想像出来るような肉付きの良い、しかし何か崩れた感じの腰だつた。笠井の胸は焼付くように痛んだ。大川という男に嫉妬を感じた。

三

いきなり、笠井は千代のふつくらした乳房の辺りを眼掛けて、体を押かぶせていつた。不意を喰つた千代はあきなく、仰向けに転んだ。膝の辺りが一層崩れて、白い脚が空をうつた。笠井はしつかり、千代を押付けて、胸の間から手を乳房へ滑らせた。千代はその手を力一杯噛んだ。しかし、笠井は乳房をつかんだ手を放さなかつた。

「いや、いやだつてば……もういや、放して、誰があんななんかに……」

千代は今度は両手で笠井の顔や肩をポンポン叩いた。

「千代さん、久振りじゃないか。ネ、いゝだろう……一度位は」

「いや、／＼」

千代は体をくねらせて、もがいた。笠井はあまり千代の足が暴れるので、片手で足をおさえようとした。と、笠井は驚いた。

千代の腰から下があらわにはみ出ていて、おまけに、あのほのぐらい繁みさえまる出したつた。笠井は、ひるんだ。

その隙に千代は笠井の体をどんとついてすばやく、体を滑らせ、笠井から逃げた。笠井はのけぞつた体を起しながら、もう



千代を追おうとはしなかつた。千代の露わな繁みを見て、嘔吐さえもよほしそりになつた。もう少し、美しく千代を夢見ていたのだつた。それが、ノーズロとは笠井は呆氣に取られるばかりだつた。

ふと、千代を見ると、荒い息づかいで、笠井を睨みすえていた。

笠井はニッソリしながら、皮肉に

「そんな恰好で、金で飼われているのが幸福なのか」

「まア。大川に愛情がないとでも云うの。」

そんなことあるのですか……愛情があるからこうさせて遊ばして呉れるのよ。お金と愛情があるからだわ。とても、貴方のよりに不意に女を襲う色魔には出来ない芸だわ」

笠井の落着いたのを知ると、千代は鼻先で負おしみのように笑つて立上り、電燈のスイッチを捻つた。

#### 四

こんなにまでいう大川という男は一体どんな男かと、軽い嫉妬を憶えながら、笠井は大川の片鱗でも見付けようと部屋中を見廻したが、それらしいものは見当らなかつた。唯、千代が先程まで使つていたらしいアイロンがコードを乱したまゝ隅で光つていた。

定額制の家にアイロン。笠井の眼は瞬間輝いた。職業意識に返つたのだ。が黙つていた。

隣から鶏に餌を与えるらしい、トウトツトと云う幼い声が聞え出した。

すると、千代は我に返つたように「サア、そろ／＼夕飯の仕度だわ。今日は大川が来る日……」

と独言のように云つて、変な笑い顔を浮べ着物の乱れを慌てゝ直した。

「サア、僕も失礼しよう」

笠井は横の鞆を引寄せた。が、思い返したように、中から調査票カードを取出し、大川の所を開いた。各月の欄に調査員の印が赤く綺麗に並んでいた。が、どの月もその横に少さく、**〔注〕**……電熱、アイロンと書込まれていた。

定額制の家庭では電熱やアイロンのような電気器具の使用は禁じている。もし、使用した時は見付け次第に器物没収と罰金である。**〔注〕**とは調査員が現場を押えないが、使用した跡があることを認めた場合の符合である。しかし、笠井が見たのは使用の跡どころか、現物である。

「千代さん、この家は定額制の管ですネ。困りますねえ。あゝ、いろいろな物を使われては……」

笠井はアイロンを顎でしやくつた。

「アッ。でもこれ位どこのお内だつて使つてゐるわ」

「……使つてたつて、現物を見ていませんからね」

「じゃア、どうしろと仰云るの」

「そのアイロンと外に電熱とそれから、罰金とを貰つて帰ります」

突然、千代は笑い出した。

「罰金？エ、」

「規則ですから」

「おどかさないで……それとも、それが云うことを聞かなかつた仕返しなの……そうでしょう。私が、あのまゝ云うことを聞けばさつさと腰がるに帰つたのでしょう。助平！」千代は鋭く睨んだ。

慌てゝ笠井は眼を外らし

「とにかく……」

「卑怯者」叩きつけるように言つた千代の声は震えていた。

「卑怯者でも何んでも、規則は規則ですからネ」

「そう、分つたわ、何よ罰金位。払うわ。」

払やアいゝんでしよう。もう、大川が来るころだから、そういつて貰つとくは。だからさア、帰つて……」

千代は立上つてせきたてるように、笠井を見降した。

その時、庭の八ツ手の葉がバサ／＼揺れ「おい、千代……」と、太い男の音がした

「ハイッ、たゞいま……大川よ、早く帰つて」そう云い捨てゝ、千代は縁へ出て行つた。

#### 五

(まづい！)

思わず笠井は腰を浮かしたが、今更もう迷ひ出せないと、またその腰を据え、ゆつくり鞆へカードをしまつた。

大川と千代が入つて来た。

大川は笠井を見ると不審げに

「どなた？」と千代を振返つた。

「アノ。バ、この方電気の調査にこられたの」

「そう。……こりやア、どうも御苦勞様です」そう云つて、笠井の前へ肥満した体を投出すように坐り禿げた頭をびよこんと下げた。

この男が、千代が頻りに云う大川か。笠井はいさゝか拍子抜けがした。妾を持つ男にしては着ている服も大分臥れているし好色漢らしい赤顔の鼻の下にもよつぱり蓄えた鬚は不恰好で寧ろ滑稽に思えた。女をとられたと云う嫉妬の気持は少しも湧かなかつた。彼は、大川の横に坐つた千代を見た。

千代も笠井を苦々しそりに見返したので、笠井はムツとして大川に「実はお宅は定額制になつていますのに、アイロンをあゝしてお使いになつておられますので」

すぐ千代が、大川の手をとつて、それ自分の膝の上ののせて握りしめながら、「……でね。電熱もアイロンも没収した上に罰金ですつて」

「罰金？、そりやア」

急に慌てた大川に笠井は皮肉に笑顔で「どうも職務上、止むを得ませんので」

「ハア、もう充分、それは……」

急いで、膝を窮屈そうに正し、細い目を畳に落した。

笠井は先程千代から受けた侮辱がこれで帳消しだと思ひ

「では、これで失礼しますが、規則のものだけは……」

「マアアア、そりお急ぎにならずに」

大川は急に顔を挙げて、振返つて千代に



「千代、早く、お茶でも……」

「はい」と千代はしぶく立上った。丁度笠井は俯向いて煙草に火を点けていた。大川は素早くポケットから金を掻出すと、一寸眼で合図して千代に手渡した。千代は唇の端を軽く噛んで出て行つた。

笠井が煙草の煙を吐きながら顔を上げると、大川は

「しかし、調査員つて大変ですな。実は私も土木の方をやつていますが、材料はありまして、仕事がないので、此頃はとんと金詰りでね。そんな訳で、まあ先月はどうかこちらへも金を廻せたのですが、今月辺りから半分にして、後は勤めにでも出て貰わなければと思つております。何しろ、一二月月世話する積りだつたのが、せがまれるまゝずるゝに一年半にもなりましてね。こんなことなら始めから止めて置けばよかつたと思ひますよ」

ふと、笠井は、これは罰金が払えない云釈か、それとも、千代に飽きたことをそれとなく云つてゐるのか。そのどちらも引掛けた五十男の狡さだらうか。いづれにしても、千代のいう愛情なんて、この男から微塵も感じられない。こんな男を、千代は信じてゐるのかと思ふと可笑しかつた。

これ以上、笠井はこの家に坐り続けるのが、厭になつて

「アノ、今夜は何かと御都合もおありのようですから、明日また改めて伺いますとし夜で今はこれで……」

「オイ、まだか？」慌てゝ、大川は及び腰になつて奥へ云つた。

やがて、千

代は手に紙片のよなものを持つて現れた。待構えたようにそれを大川は受取つて

「これはほんの、お口汚しですが……」

差出された

白い角封筒を見て、笠井は

「これは？」

わざと、怒

つた顔でいつた。

「いえ、大したものでも、どうかお収めになつて……」

だが笠井は結局強く押返して立上ると、ムツとした顔で

「では、明日また」すると、千代は慌てゝ

封筒を大川から取上げ

「これどうか、受取つて下さい」

笠井のポケットへ捻込んだ。

笠井はそれを出そうとした。すると、千代は、その手を強く押え

「ネ、お受取りになつて……お願い」

顔を火照らせて笠井をじつと見上げた。

始めて千代に新世界のジャン／＼横丁の

角で接吻した時も、こんな眼をしていたつ

けと、ふと笠井は遠い郷愁を呼び戻しながら、鞆を小脇に抱えた。



「何分と宜敷く」

ほつとしたような顔で大川は云つた。

## 六

外へ出た笠井は暫く足連やに歩いているうち、街角まで来て、ふと客のない喫茶店を見付けると入つて行つた。

出て来た女にコーヒーを注文して、煙草に火を点け、暫くぼんやり煙をふかしていたが、今頃千代は大川と乳繰合つて食事でもしてゐるだらうと思ひつくと、彼はふと、

ポケットから先程の封筒を取出して、封を切つてみた。

（一体、いくら入れてやがるんだ）

しかし、中味は予期した金でなく、手紙だつた。

——久振りであつておきながら

ついあんなことを云つてしまつてごめんなさいネ。先程のあのことだつて、本当はあなたのものになるつもりでした。が、あんなことになつてしまつて、後悔しています。わたしもそろそろこんな生活の足を洗つて堅忍になりたいと思つていた処だつたのよ。ですから、お願いしますわ。明日お屋過ぎ松竹座の前へ来て下さいませんか。今更こんなことを云えた義理ではありませんけど、いろいろお詫びもし出来たら、御相談にもものつて置きたいと思ひます。あなたのことは今夜きつぱり大川に打明ける決心です。千代はあなたの愛情を信じています——。

読み終つた笠井は苦笑した。

先刻の自分の間拔けた馬鹿な所業を思い出した。腹立たしかつた。

彼はふと、手紙の「あなたの愛情を信ず」という所の愛情の二字に煙草の火を押付けて丸く穴を明けた。残酷めいた快感があつた。そして、急にまたマツチをすつて手紙を焼捨てた。

そこへ、コーヒーが運ばれて来た。コーヒーは苦かつた。一口吸つてから鞆をあけて大

川のカードを取出し、今月の欄へ先と同じ

く(注)……アイロン、電熱と荒つぽい字で

記入して、印を捺した。

終





# 小説 肉体を見せた女

## 温泉バスの中

吉岡温泉行のバスは、鳥取駅前を僅かに左に折れたデパート横の営業所から出ていた。

汽車を降りた私が、ボストンバックを提げたまま、駅前の人込みの中できよくしなから、そのバスを探し当てた時は、丁度、最後の客を乗せ終った車掌が、助手席

に上ろうとしていた処だった。警笛が鳴っていた。

「お乗りなのですか。御急ぎ願います」私が右足をかけるのと同時に、バスは動き出した。

満員であつた。

同体の客と乗り合せたのだと思い、次の車にすれば良かったと後悔した。しかし、もし私がこのバスに乗っていない

温泉行の中で、はからずも見ただ妙齡の令嬢の秘密！それは若い私にとつて、頭の奥をしびれさせるような強い刺激であつた。……が……

かつたら、これから話すような事件は、全然知らないで過していた筈なのである。というのは、この満員の客達は、温泉行ではなかつたのだ。

バスが市内を離れて、平坦な田舎道に差掛つたと思うと、間なしの停留場で、悉く降りてしまつたのである。その近くの寺で講話のある日だと、後で知つた。そりゃい

ば、客は老年の男女が多かつたようだ。再びバスが動き始めた時、私は手術の痕がまだ完全に良くなつていない肛門の痛さに要心しながら、坐席に腰を下したのだが見れば真向いの坐席に、若い女が一人居るだけで、つい先程までのすし詰めのような押合いは、まるで嘘のような広さになつて

いた。処々氷の張つた田舎道を、バスは左右に大きく揺れながら走つていた。

いつもの事なのか、どんよりと曇つたような裏日本の空模様である。荒野にも似た田が見渡す限り続いていて、農夫が鎌を振つてゐるのが、まるで人形のようにである。

と、車内に眼を転じた私は、思わず、はつとして唾液を呑むような事実を発見したのだつた。

真向いに、此方を向いて坐つてゐる若い女の、右頬から下顎にかけて、炭団を思わせるような、はつきりとした青紫色の痣が浮んでいたのである。

瞬間、女は私の視線に狼狽したように、あわてゝ顔を伏せた。

私は自分の投げた無遠慮な視線に嫌悪を感じながらも、急に痛々しい気がして、良心のとがめを感じないでいられたかつた。そりゃいえば、女の美しくカールした髪はきちんと櫛が通つていて、清らかな鎖けが匂うようだった。その表情には、耐え切れないような苦痛が漂つてゐるようと思えるのだつた。

二十一、二才であろうか。白と黒のコンビネーションの靴をはき、茶がかつた黄色のオーバーを、ゆつたりと着こなしていた連れの客——そう思えた。

しかし、若い女が、まさか一人で温泉に行くとは思像出来ない。途中の何処かで下車するのであろう。

その辺りから、道路が悪くなつたのか、車の振動が烈しくなつた。

私は手術部に動揺を与えないため、右手で体を支えていた。

その内に、車が峠のような、ダンダラ坂に掛り、振動が益々烈しくなつた。

時々ガタン！と振動して、思わず、二三寸跳び上る事があつた。そのたびに、手術の痕が差し込むように痛む。恐らく、私は顔をしかめていた事であらう。

そんな苦痛に耐えている時だった。何気なく、ひよいと女の方を見た私は、



え？と、自分の眼を疑ったのである。  
それは丁度、車が揺れて、女の体が坐席から跳び上った時だった。そのはずみに女の両脚が、体をふん張るように開いたのだが、その刹那、私の眼は、その白い太腿に釘付けになったのだ。

思わず我を忘れた。

この若い女が！と思つた。そして、あやしい動悸に胸が躍つた。

車が揺れるたびに、女の両脚が宙に浮きはつきりと、それとわかる肉体が、私の眼を射るのだつた。

ズロースをはいていないのだ。

手をふれ、はね返りそうな、弾力性に富んだ白い太腿にからまつて、その奥に覗いた肉体が、車の振動と共に上下して、パツパツと、まるでむせるような香りをふりまいてるように見えた。

## 宿の朝

その日、私は人に聞いていた通り、三谷旅館に泊つた。

二級の旅館だったが、あふれるように湧き出て来る湯が、手術の痕に快かつた。

足の爪まで見透せる澄んだ湯は、私の全身を疑う程白いものに見せた。

他に、二、三組の客があり、皮膚一面に吹出物のある男や、腹部に手術痕のある中老の女などが、物も言わずに、永い間、湯に浸つていたりした。

私は浴槽の傍に横たわり、設付けの柄杓で全身にまんべんなく湯をかけた。

数時間の汽車の旅が応えたのか、まだ体の揺れているような気が続いていた。

そして、脳裏に饒付いたように、例の女

のあやしい程はつきりした肉体の幻惑が、閉じた眼にまざまざと躍つた。

夢であつたような気がする。

しかし、夢でない証拠に、私はちやんとこうして湯に浸つてゐる。

程のある美しい女——顔から痣さえ取除けば、彼女は典型的な美人型に違ひなかつた。

そして、あの濃い愁いに満ちた表情は——それが、彼女自身、鏡に対する悲観的な

気持から出ているものにせよ——却つて、彼女の整い過ぎた顔の輪廓に、一人の彩りを与えていた。

しかも若い女のたしなみを嘲笑するかのやうに、ズロースも着けていないのだ。ズロースの歴史は新しい。つい、二三十年前までは、そんな物は無かつたそうである。

現在でも、奥深い山村では、使用しない娘達も居るかも知れないのだ。

私も最初は、彼女は、彼女を山奥の娘なのかと思つても見た。しかし、その服装や髪型は、垢抜けのした都会型である。

驚異であつた。

もつとも、大都会にあつても、夜毎に客の袖をひく種族の女には、便宜上、所謂、ノーズロの場合もある。が、彼女の場合は立場も違つてゐるし、彼女は絶対的に——

と、私は見たのだが——そんな種族の女ではない。

どうした訳なのか？

最初、私の血潮を逆流させた煩悩と好奇心とは、いつの間にか、それをせんさくする疑問に變つてゐた。

女は、ついに終点の吉岡温泉まで乗つてゐた。そして、私が下車して、停留場前の三谷旅館へ入つてから振返つてみると、女

は、どこの宿が良いかといつたやうな顔で看板を見上げたり、あたりを見渡したりしてゐた。

その夜、私は床に入つてからも、中々眠れなかつた。

静かな夜である。

温泉地といつても、歓楽街がある訳ではなく、唯湯が湧くだけといつた、都会の文化から取り残されたやうな山峡である。

湯の流れる音と、時々起る樹木のざわめきとが、遅くまで私の耳に響いた。

今頃、あの女は——と、私は思い、続けた。どこかの宿で、鏡に写る自分の姿を眺めながら、それを発見した時の私の驚愕した表情を憶んでいるかも知れない。そして

湯に浸りながら、成熟し切つた肉体を見つめ、しみじみと宿の夜の、一人旅の淋しさを味わつてゐるかも知れない。

翌朝、私は眼を覚ました時、急に普通事ではない氣配を察した。

それは、まづ、宿の表を走るやうな足音と共に

「自殺だ！自殺だ！」

と、口々に叫んでいる血走つたやうな口調が聞えたのだつた。

私は、はつとしてはね起きた。

何の関連もない筈なのに、自殺という言葉には、昨日の女の面影が結びついたのである。

## 親への同情

この温泉地の西に、小山のような雑木林があつた。

雑草と笹が生い繁つていて、分け入るのも困難なクサムラである。

女は、その中の大樹に、腰を折つてもたれかゝつたまゝで死んでゐた。

壁に、封を切つた許りの睡眠剤の空瓶が転がつてゐた。

宿のドテラが大きい過ぎた故か、仇氣ない程小柄に見えた。

そして、樹枝を通した光線の色いか、還は一層の濃いさを含んでいるやうである。

二重に取り囲んだ村人や浴客の肩越しに私はその状景を暫らく見てゐた。

眠つてゐるとしか思えない程の温顔である。一筋か二筋、額にかゝつた髪のはつれも、昨日のまゝの女と少しの違いもない。

多くの、無遠慮な視線を受けて、今にもさつと顔を伏せそうであつた。

生あるものゝ如く——そんな意味の事が私の頭に浮ぶ。昨日、女を見た時は、既に彼女にとつて死出の旅路だつたのだ。

永い間思い詰めた末の、覚悟し切つた落着きが、彼女のどこかに滲つてゐたやうに思われて来た。

この温泉地には駐在所もなく、宿のお神は、近くの警察へ連絡に行つてゐるやうである。

処が、私はこれらの人々の中から、一つの噂を聞きとつた。

それは、この女の相手は何処へ逃げた、というのである。昨日、バスで来た時は、確か男と一緒にたつた、と——

「無理心中だ。片割れは逃げた」

「可哀そうに男にかゝつてふられたのだ」

私は氣を悪くして、宿へ帰つた。

女が昨日から一人であつた事は、私は知り尽している。随つて、人々のいう、女の相手というのは、私自身の事を指しているのだ。



大きな誤解である。  
私自身としての立場は明白なのだが、人の口に戸は立てられない。  
(大変な事になったぞ)  
と、思った。

しかし、いざとなれば、昨日の運転手にしても、車掌にしても、私と女とが、唯、偶然に乗り合せた関係に過ぎない事を知つていて、証言して呉れる筈である。

が、厩前になつて、私服と制服の二名の訪問を受けた。

私は軽い気持で、玄関口へ出て行つた。

「実は、御存知だと思ひますが、今朝、若い女の自殺がありましたね」

私服は、そういふながら、内ポケットから黒い手帳を取り出した。

「その女と、あなたとの関係をお聞きしたいのです。まさか、御夫婦じやないでしやうが、例えば、内縁とか、てかけ、とかいふた……」

「とんでもない」

即座に、私は答えていた。

「全然知らない女なんですよ」

そして、昨日のバスの中での事を、あらまし述べた。

馬鹿らしい弁解のような気がして、いら立つたが、身に掛つた疑いを晴らすためには、他に手段がないのだつた。

「運転手も車掌も知つてゐる筈です。念の爲にお聞き下さい」

と、附け加えた。

「しかし、附近の者は、あなたと女とが、仲良くバスを降りたといつてゐるんですが、なあ。まあよろしいや。しかし、妙ですな。屍体は、ちゃんとグロースをはいてゐるんですがね。いや、お邪魔致しました」

それから四、五日間、私は一步も外出なかつた。

口うるさい村人達は、きつと私に対して後指をさすに違ひないと思つたからだ。

朝から晩まで、何回となく湯に浸り、飽きが来ると、本を読んだり、窓から、雲の往来を眺めたりした。そして、合間／＼にひよいと例の女の事を思い出したりした。

それも、今は無縁仏として火葬に附され遺骨が村役場に保管されてゐる筈であつた五日目の夕方であつた。

この宿の裏にある温泉ホテルから、私に使いが来た。

話によると、例の女が自殺の朝、両親宛に遺書を郵便で送つてゐたのだつた。驚いた両親は、消印を頼りに、漸く今日、この地へ赴き着いたのだが、もはや後の祭りである。遺骨を受取り、明早朝出発するのだが、一度御尋ねしたい事がある、といふのだつた。

私は最初、この使いに対して、少なからぬ反感を覚えた。

親達は、役場や警察で話を聞きながらもやはり、私を疑つてゐるに違ひないのである。娘をかどわかし奴——そう思つてゐる。

が、私にしては、私こそ、迷惑を受けた被害者なのである。

誰、偶然にバスに乗り合せたというだけの事で、(もつとも、その時には、前述のような余得があつたが)四面楚歌の立場へ大げさだが、に迫りやられ、二十日間の人院生活の苦痛を、予後療養の温泉地で、洗ひ落そうとした望みが、滅茶苦茶になつてしまつたのだ。

随つて、私は、その親達に会う必要は毛



頭もないのだ。

ホテルの使いを、突つ返した。

暫らくして、又、やつて来た。

誤解しないで欲しい。娘の遺書に、どうも解らぬ処があるので、粗飯でも差上げながらお話を聞き出したのです。と、いふのだつた。

私は少し冷静になつた。

娘を失つた親の立場を考えてみれば、それが、死目はおろか、死体も見えてないだけに、測り知れない程の心残りがあるのか知もれない。

死出の旅路にあつた娘の目撃者としての私の話から、何かの慰めを求めているのであろう。

秋は腰を上げた。

## 遺書の真相

会つてみると、案外な程、腰の低い親達だつた。

父親は、大学教授を思はせるようなタイプの男で、ポンプ工事の請負いをしています、と先づ自己紹介をした。

母親は、泣きはれて充血した眼をしばたきながら

「この度は、いろ／＼と……」

と、後は何を言つたのかわからなかつたが、あの娘と、そつくりの顔立ちをしてゐた。

そして、床の間には骨壺が置かれ、親達の心遣いか、線香がたかれていた。

「……たつた一人の子供だつたんですよ。」



# 船員 愛慾 實話 呼子港の娘船頭

井口 正 憲

子運が悪くてね。そのせいか、可愛がり過ぎたのが却つて悪かつたのかも知れませんが。知つてのように、堪えかね。あれがある許りに本人は親以上に苦しんでいたんです。つい此の間も、四回目の見合いをさせたんですが、——今までは、何でも思うようにさせとりましたものが、この縁談という奴だけは、そうはいきませんでね。」  
女中が膳を運んで来た。  
父親の差出す盃を、体に悪いから、と断りながら  
「遺書があるんですか？」  
「ええ、これなんです。手紙で送つて来たんですが、私も、家内も、どうもおかしいんですよ。」

それには、次のような事が書いてあつた  
——お父様、お母様、今更何も申し上げません。苦しかつた事も、悲しかつた事も加代子はきれいに忘れます。  
(中略)  
四回の見合いに失敗した私は、自分の肉体に自信を失いました。堪があるばかりに——そう思いました。深夜、ひとり起き出でて、つくづく自分の肉体を眺め通した事が幾たびあつた事でしよう。この肉体の何処に、男達から侮蔑視されるような欠陥がありましよう。それなのにあらゆる男女は、総て私の顔を見るなり嘲笑と侮辱の混つた表情をするのです。

悲しう御座居ました。  
私の肉体が、どんな男にも相手にされない事を知つたのです。これが、どれ程悲しく苦しい事か。全身をゆさぶるような身悶えを感じる毎に、私はひとり泣きました。そして、空蟬のような気持で生きてゆくには、あまりにも苦痛が大き過ぎた。到底、耐え抜け切れない事を悟りました。  
私は死を選びました。  
そして、今日——私は初めて、自分の肉体に勝利を感じました。私の肉体が、他のどんな女にも劣らない事を知つたのです。  
お父様、お母様、私は今日、見ず知らず

の男に、意識して私の肉体をさらしました。その男は、はつとしたように眼を輝かし、食い入るように私の肉体を見詰めたではありませんか。私がバスを降りるまで——初め私の顔を見た時の歪んだような表情も、瞬間、跡方もなく消えていたのです。  
私は危く涙がこぼれそうになりました。嬉しかつたのです。私の肉体にも、やはり人に劣らないだけの魅力があつたのです。  
お父様、お母様、私はあなたから与えられた肉体に、生れて初めての満足を感ぜながら、永久にお別れの道を歩んでゆきます。

一  
青海丸は長崎の石炭を積んで若松や瀬戸内海沿岸の都市へ運んだり、佐世保からスクラップを積んで大阪あたりへ運ぶのが重な仕事にしている五百屯積機帆船であつた。  
私が機関長として青海丸へ乗船して四ヵ月ほど過ぎて、七月も末のある日、航海の都合で、青海丸は夕陽のきら／＼と映える玄海灘のオアシス呼子港へ入つた。

明朝は西と東へ別れて出帆する夥しい機帆船が、呼子港の兩岸に艘とを接して、百杯以上も碇泊している中に、青海丸は松浦側に割込んで、型の良い船体を静かにいこわしていた。  
二三日前にひよつとした事故から、右手を痛めた私は、船長を始め船員達の上陸を見送ると、自室へ入つてゴロリと寝台に横になつてしまつた。

カチリとライターに火を付け、煙を腹一杯に吸い込んで、コルク張りの天井を流れる煙を望めていると、コック／＼とドアにノックの音がする。  
私の乗組よりもずっと以前から青海丸に乗っている名瀬機関員だつた。私の郷里のすぐ隣村の生れで、今年十九才。愛嬌のある紅顔の少年で、機帆船乗りには珍らしく気立もよいので、私は此頃はすっかり彼を信用していた。

「機関長さん、陸へ氷水でも飲みに行きましようや」  
半開きにしたドアから、顔だけ出して名瀬が云うのだ。  
「又小使がないのだから、持つて行け」  
私は不自由な右手で、寝台の枕元の本箱から百円札をつまみ出すと、寝たまゝ名瀬につきつけながら、  
「月給日には返えすんだぞ」と、苦笑すると、  
「ちがいますよ機関長さん、金は持っていますよ。機関長さんがこの頃あまり淋しそりに考え

「ねえ、どんな意味なんだろうかね。お若いあなたなら、きつと、おわかりになると思つたんですがね。」  
「……」  
「バスの中で御一緒だつたと聞きましたので、……その女によると、まさかとは思いますが、娘はバスの中で裸になつたような意味の事が書かれているのではないでしようか？」  
「……」  
どう答えて、良いものなのか。  
あ——と、私は大きく溜息を突いた。ズロースをはかなかつた娘の、不可解な気持が、今になつて、はつきりとわかる気がする。しかし、それを、ありのまま、言つて良いものかどうか。  
母親が云つていた。  
「おわりの事でしたら仰言つて下さいませな。それだからといって、私達は決してあなたをお怒りしたり、変に解釈したりは



「いなさるの——」  
「ありがとう名瀬、気晴しに出かけようか」  
私は、寝台の上に、上半身を起した。

二

呼子で上陸するには、自船の伝馬船か、それがない時には、港内に二杯ほどある伝馬船の通船を呼ばなくてはならない。だが日が暮れるとこの通船は広い港内のどこに居るのかわからずなか／＼呼ぶ事が出来ないのだ。

その夜は私が口笛を吹くと待つていたように、船の鰻で、「ハイ」とよく透きとおる女船頭の声が出て、櫓の音がギューとすると、通船はタラップの下に来ていた。

「名瀬、早く来んか」  
何時も手拭で顔を包んでいる女船頭が、今夜は珍らしく手拭を冠つていない、タラップから見えるすじの通った鼻と、美しい双眸が月光に青白く浮いた笑しい顔に行当つた私は、ドギマギしながら、照れ臭さゝに、まだタラップの上に見えない名瀬を大声で呼んだ。

「いま行きます」

返事と同時にタラップを下りて来た名瀬は、毛布を、しかも二枚もかゝえている。  
「毛布をどうするのか名瀬」

驚いて聞くと、

「どうするのか、すぐおわかりになりますよ、さあ船頭さん、僕が漕ぐから、貴女は機関長さんは手が不自由だから、腰を下ろさして上げて下さいよ」

名瀬は娘の手から櫓を取ると

慣れた手つきで漕ぎ出した。

「足は大丈夫だ」

笑いながら娘の抱けた毛布に

私が腰を下ろすと、恥しそうに娘も私に並んで腰を下した。

「オヤ、名瀬どつちへ行くんだ」

「気付く

と通船は

陸へ行か

ずに沖へ

鰻を向け

ている。

「いやだ

な機関長

さんは、

もう知れ

ているで

しように

僕が毛布

を持つて

来たのが

——三四

分で着く

所へ毛布

が入用な

もんです

か、僕は

前は見え



せんから、機関長さん抱いてやんなさいよ。その女は機関長さんが好きなんですつて、あんまり物を云わすのは罪ですよ」

若い名瀬にすっかりしてやられたと云う形だつた。娘の顔を覗くとすつかり紅くなつてモジ／＼している。

「さあ機関長さん沖へ出ました流しますよ」

櫓をすてると、名瀬は鰻を向いて腰を下して、口笛を吹き出した。

静かな波のような海面を引潮

に乗つて通船は沖へ沖へと流れて行く。

三

も／＼が十七才からの船乗り、港々の女を相手に過して来た私だつた。

そつと女の肩に左手を廻すと女の上半身は私の胸にたおれて来た。

息もあえぐ女の唇へ、私が顔を近づけると、はげしく熱い唇が私の舌を吸い込むのだつた。

ズボン脱ぎ上衣を取ろうとすると、右手がズキリと痛い。

「おい名瀬。脱がしてくれんか」  
思わず名瀬を呼ぶと。

「いやんなつちやうな、そんな世話までさせるんですか」  
苦笑しながら名瀬は立ち上つて来て、私を裸にして呉れると

「姉さん、貴女も恥しがつていちや駄目じゃないか——」  
どう水はそんなに冷くないだろう。

機関長さん、僕ちよつと泳ぎますから」

私達の方へもう一枚の毛布を蒔けかけると、スルリと裸になつた名瀬は、ボチャリと水音を上げて、海へ飛込んで行つた。

ホツと大きな息をして、私が顔を上げると何時海から上つたか、たくましい裸身から海水をたらしながら、名瀬が漕いでいて、通船は港内へ入つて来てい

致しませんでした。」

「はあ。しかし、私としても……」

「どんな事を娘がしたのでしよう？」

「短かい車中でしたから、私としては、何らこれといった事は知らずに過しましたしこの文にどんな意味の事が書かれているのか、どうにも解釈が付きません。」

「……」

三人は沈黙に落ちた。

この親達に、真実を話した処で、何の慰めになるだろうか。却つて、娘に対する不意の情で、胸を痛める許りなのだ。

絶対に話してはならない。そう思つた。母親は、私の返事に、不満のような表情のまま俯向いていた。

三十分許りして、私は夫妻に送られながら、ホテルを出た。  
美しい月の夜だつた。

地上に動く自分の影法師を踏みながら「あゝ！」  
と、私は心の中で叫んだ。

ほのぼのと体温の通つた、肌理のこまかい、白い、奥深い艶を含んだ、あの大腿。そして、車の振動と共に、その奥に覗いた処女性の神秘！あの娘は、処女だつた。！

「あゝ！」  
女に接したことの無い私にとつて、それは今志い出しても、目のくらむような強烈な刺激であつた。

それは、もうあの娘はすでに一塊の骨片と化し去つてこの世にはいないのだ。女と生れ来て女本来の何らの喜びすら味うことをしないこの世を去つてしまつたのだ。

私の見たあの真白いすべ／＼とした肌は一場の夢であつたのだろうか——

私は思わず駆け出したい衝動にかられた



た。兩岸の家々の灯が明々と輝き、まだ目を閉じている娘のうつむいた顔を、中天に昇つた月が覗いているのだつた。

四

翌朝未明呼子港を出帆した青海丸。

「名瀬、昨夜はひどい事をしたな」

機関室で名瀬が一人当直をしている処へ私は下りて行つて、笑ひながらなると、

「すみません機関長さん。あの女船頭に千円貰つたんですよ。機関長さんとアレにして呉つて半分出しますから」

ひょうきんに名瀬は頭を掻くのだった。

「馬鹿、誰が半分呉れと云つた」

「へー、泳ぐふりして見ていたら……」

「こら、見ていたのか」

「見せてぐらい貰わなくちや、千円じゃ安いですよ」

「ひどい奴だ」

すつかり大笑いになつたが、

私には娘の心がどうしても知れなかつた。彼女はどうか考えても処女だつた。

それから一カ月余り清海丸は呼子に入港しなかつた。

九月の月に入つたばかりの曇つた日、再度呼子に入つた。

「機関長さん待っていますよ」

すつかり手も良くなつて、機関の把手を握っている私に、名瀬がささやく。

「うん」私も正直に答えるより仕方がなかつた。

入港処置が全部終つて、上陸

の用意をしていると、名瀬がノックもせずに部屋に飛込んで来た。

「どうしたんだ、名瀬」

「ハア」と息を切つている名瀬は、やつと気を静めると、

「機関長さん、あの娘はいませんよ」

「えー、なんだつて」

「あの娘の通船には別な女が乗つていんですよ」

「そ、つかしい奴だ。休んでい

るんだろ」

「姉さん、何時もこの通船に居る姉さんは」

通船に乗ると、名瀬が自分の事のように、気ぜわしく女に問

いかける、だがその返事はあまりに意外だつた。

「えつ」

果然と私の顔を見る名瀬より

当人の私の方が落付いていた。

「何時ですか」

「早くから話が定まつていたんですが、女の方が一日延しに延していましたが、七月の末にその朝になつてから急に——」

そうだつたのか。

名瀬と私は思わず顔を見合したのだつた。

氣に入らない結婚に、処女で

巖ぎたくなかつた娘は、乱暴に

も私に処女をなげ与えたのか、

それとも、そんなに私を愛して

いたのだつたらうか、あれから四年、私はいまだにどつちとも

(終)

くなるものだろうね。

話して

みるもの

素敵にY談のうまい紳士がタクシーに乗つていくつかの氣の利いたヤツを運転手に聴かせてやつた。

降りる時、メーターを見て料金を払うと運転手は、半分紳士に返した。

「旦那御心配なく——次ぎの客に、いまの話をして、チップを稼ぎますよ」

重大な感激

或る老時人が新聞記者に、今まで最も影響を受けた感激について問

われた。

即座に老時人は答えた。

「それは八才の時、始めて父と母の、深夜の旋律を見

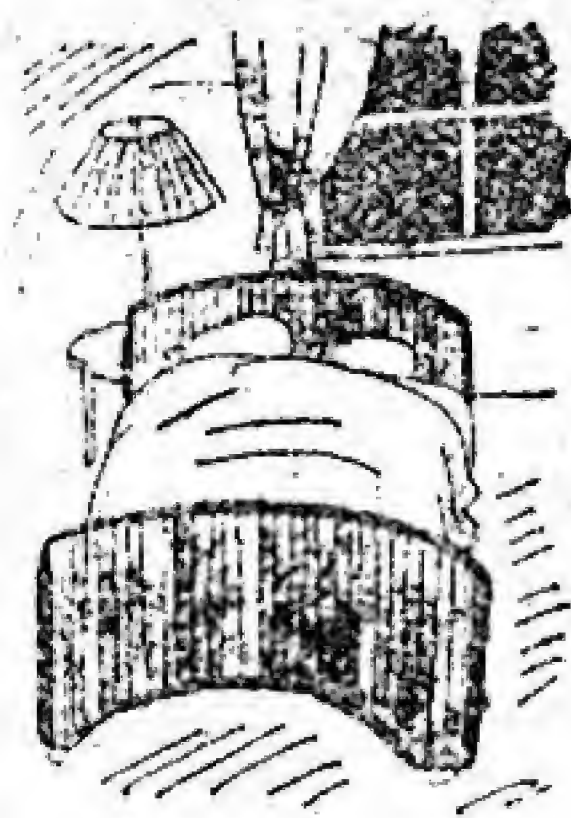
聞したことさ——」

そうでし

ようども

A 本能と何だい？

B 経験を重ねるたびに、また経験を



合わせる？

夜の女が出ると

いう町角に立つて

いると、案の定、

一人の女が寄つて

きた。

ね旦那、私の深さと貴方の長さを、比べてみない

迷推理

「君はどうしてこの男の死が自殺だと断定するのですか？」

「証人」はあ、何しろ、この男はこれまで何一つとして他人のやつたことで満足するやうな奴ではありませんでしたから」

敵は本能寺

女「ねえ、今晚どこかへ行きませんか？」

男「どこへでもお伴しますよ」

女「映画にしましょうか、それともお芝居にしましょうか？」

男「どちらでもいいですよ。暗くさえあれば——」

北 濱 湯川胃腸病院

院長 湯川 永 洋  
副院長 三 浦

大阪市東区今橋三丁目  
電話 北濱 0922・6057

がら「あー」と再び心の中で叫んでいた。そして、何の氣なしにふりむいたホテルの窓辺には、私の姿を見送る夫妻の何か物言いたやうな顔が月の光に次第にうるんでいた。

再び、私は心の中で叫んでいた。終。



## 毒婦小説

## 山窩

## のおろく

笠置良夫

宮内三郎



## 狂暴な血

夏の夕方は、ほの甘く匂う白粉の花から訪れる。山窩のおろくは、紫色に染まる夕陽の箱根道を駈けるように登つていく。久しぶりに辿る家路である。

山窩の娘として山に生まれ、山で育ち、山から山へ流転するおろくは里に出て盗みを働き、人を殺す。そして山へ逃げこむ。

五年前、山の男久兵衛と恋を語ったが、久兵衛はおろくの操を弄んだ末、山の人々の誓いの言葉にも反いて山を捨てた。

男の裏切りに対する反逆、苦しい失恋の悲しみは山の娘おろくを毒婦にした。

男のあとを追うて山を下った。それから山窩のおろく、毒蛇のおろくと異名をとるほど悪事を重ねた。

ふつくらとした肌には蛇の刺青が彫り込まれ、その刺青で脅迫して多くの男達から金を絞った。放火、強盗——一かどの姐御となつて六人の乾分を手足のように動かす程になつた。

初恋を踏みにぢられた彼女は、その二倍も三倍もの烈しさであらゆる男を踏みにぢつて復讐してきたのだ。

程が谷の国道を過ぎて山道にさしかかったころは月が出る時分だつた。月光は繁茂した木の葉から降りそそぎ、おろくの背に蒼白い縞を織り成している。

「おろくさん」

不意に暗闇の木立の中から声がした。男の声なのでおろくはぎよつとして立留まると、たくましい脉をした若者がのっそり出

てきた。

「平吉だね」

おろくはほつとして声をかけた。

「久しぶりだつたな」

平吉は懐しそうにおろくをみた。

「ほんとに——一年も会わなかつたね」

「去年の夏だつたからな。で、どこへ行ってきたんだい」

「箱根にさ」

「いい仕事でもあつたのかい」

「まあね——」

「それとも、あの男と湯治にでも行つたのかい」

「あの男?——」

「きまつてらあ、久兵衛とさ」

「ちえッ、戯談ぢやないよ。あんな裏切り者なんか会いにいくものか」

「それでもあるまい」

「そりやあね。初恋の男だもの。捨てられて憎いに憎いさ。でも、でも、矢張り忘れられない人だよ。忘れない、忘れないと思ふほど恋しくなつてくることもあるよ」

おろくは、しんみりと応えた。

「忘れられないづていつてもだ。あいつはお前を捨てて山を逃げたばかりぢやない。生まれると直ぐから仲間になつた俺達を捨てて山を下りやがつた裏切者だ」

「だから、私も憎いんだ。平さん、止めにしようよ。あんな男の話、それよりもお前はどこへいくんだい」

「山へ帰えろうと思つてる。仲間は大山にきてるのさ。でも、急にお前に会いたくなつたのでお前の家へ行こうかと思つてやつ



できたところだ」

「山はいいね。わたしも、なんだか山へ帰りたくなつたの」

「そりやいいところだ。一緒に帰えろ」

ヒタヒタと夜道に草履の音を響かせて二人は並んで歩いた。沈黙がしばらく彼等の間にあつた。

「ね、おろくさん」

平吉が、幾度かためらつた調子で重々しくいつた。

「なんだい」

おろくの声は、いつものようになまめかしく齒切れがよかつた。

「俺あ真面目に聴いてもらいたいことがあるんだが」

「いつてごらん。相談に乗ろうぢやないか」

「お前には俺が今いおうとしていることが分つてゐるはずだが」

「戯談ぢやない。八卦見ぢやあるまいし、分るもんかね」

「分らないかなあ、俺あ、山にいた時分からお前が好きだつた——今でもあきらめられないんだ」

平吉の声はかなり激していた。烈しい感情にふるえているようだつた。

「ふざけるのは止しておくれ」

嘲笑するようにおろくは応えた。

「いいや、真剣なんだ。おろくさん、俺あお前のことを、五年も前から、一日も忘れたことはないんだ。真剣なんだ。おろくさん」

「およしつたら、女を口説く柄ぢやないよ」

……

投げつけるように言つて、おろくは山道を駆け上つていつた。

「まつてくれ、おろくさん」

平吉は追い縋つておろくの袂を捉え「真面目なんだ。大真面目なんだ。どうこうするといふんぢやない。なあ、聞いてくれるだけでいいから」

必死であつた。熱情に燃えた平吉は、頬の痣も忘れたようにおろくの顔に真正面に對し、眸を輝やかして詰め寄つてゐた。がその言葉にはありありと哀願の調子があつた。

「馬鹿々々しくつて、聞いぢやいられないよ」

おろくの言葉は、跳ねつけるように冷めたく無表情だつた。

平吉は、われを忘れて激昂した。それは山の男特有の突発的な狂暴性の発露であつた。

蒼白に歪み、殺氣を帯びた平吉の唇がきつと締つた。右手が山刀にかかつた。興奮に湧き立つ激しい呼吸がおろくの冷めたい頬に吐きつけられた。

「うるさいね」

おろくも呼吸を詰めてぢろりと平吉が握つてゐる山刀をみた。

瞬間、しなやかなおろくの手は平吉の頬をびしやりと叩いてゐた。

「意氣地なし！馬鹿！わたしをどうしようというんだ。毒蛇のおろくさんを忘れたんぢやあるまいね」

「畜生奴！なぐりやがつたな。里に降りや

毒蛇のおろくか知らねえが、俺にや通用しないんだ」

平吉の眸は爛々と光り、全身はもう制することのできない狂暴な血が猛り狂つた。獸のような感情と怒りが忽ち爆発した。ぐいつとおろくの襟首を掴んで、ずるずると女のからだを引き寄せた。

「なにをするんだよ」

反抗したが、男の力は逞ましかつた。おろくは彼の腕に抱き締められた。ばかりと光る山刀はいきなりおろくの胸に突き出された。

「おろく！俺が、どんなに惚れているか、それが、分らないのか。俺は、強い。久兵衛であらうと、誰であらうと、お前を俺のものにしてしまや、渡すものか、お前は、さあ、俺の自由になるんだ。いやだといやあ、猪でも絞め殺した俺だ。この山刀で、ずぶりとお前の咽喉を突き刺すなんざわけないんだぜ」

しかし、おろくは、もう騒がなかつた。目の前に凄く光る刃をみながら、微かに笑いさえ唇に浮べた。

「おい、笑つたな。返事をしてくれ。いやか、応か、返事一つでこの刀がどうにでも動くんだ」

平吉は見違えるような鋭い顔に月光を浴びながらおろくに迫つた。おろくは、その顔をじつと睥睨した。山では、醜男のぼんやりした男だと思つてゐたのに、なんというきびきびした顔をしてゐるんだらうと思つた。月光のせいか頬の痣もそう醜くは見えなかつた。

「ほほほ、いやにお芝居がかりだわね」

おろくは高らかに笑つた。もう恐ろしいとも思わなかつた。胸がすうつと晴れたような感じだつた。美しい瞳でちつと男の顔をみつめた。

「ぐづぐづいわないで返事をするんだ」

「お前さん、そんなにまで、わたしに惚れているのかい」

「きまつてらあ。お前が、あどけない娘だつた頃から惚れてゐたんだ」

「知らなかつたわ。お前さんが、そんなに惚れてゐてくれたとは知らなかつたわ」

「そんなことはどうでもいいのだ。俺が望んでゐるのは今のことだ。この山刀が、お前を殺すか殺さないかだ。早く返事しろ」

「お待ちよ。わたしだつて、木や石ぢやない。お前さんの心がしみじみ嬉しいわよ。男に捨てられたわたしに、こんなに、命がけで惚れてくれる人があるかと思つと、嬉しいよ」

「ぢや、俺のいうことを、きくというんだな」

「ええ、でも、その前に約束して貰いたいことがあるわよ」

「約束つて」

「それ程わたしを可愛がつてくれるお前さんだもの、頼みはきいてくれるわね」

「いつてみるがいい。どんなことだ」

「ほかでもないがね。わたし、首がほしいの」

「首？——」

平吉は思わすぎよつとして問い返した。「驚かなくてもいいわ。お前さん強いんだ



ろく

「でも、首つて、誰の首だ」

「あの男の首さ」

「あの男?——」

「あの男さ。わたしを裏切つた久兵衛の生首さ。仲間を裏切つて山を逃げた久兵衛の生首なのさ」

おろくは、熱病患者のうわごとのようにいいつづけた。寂しい、やるせない響きがこもつていた。

平吉は、あまりに恐ろしいおろくの要求に、しばらく石のように黙して突き立つていた。

「いやなのかい」

「——いやではない」

「ちやあ、あの男を殺してきておくれ。あいつの、血のしたたる生首を土産にとつてきてくれたら、わたしのからだを、お前さんにあげようぢやないか」

平吉は、ごくりと睡を飲んだ。

「よし! やつつけてくる」

「ほんとだね」

「大丈夫だ」

「どこにいるか知つて

いるかい」

「陰蒸気（いんしょうき）のレールを敷く仕事場にいるつて話だ」



「そう、ぢやあ行つておいで、帰つてくるのを待つているよ」

「よし!」

平吉は弾かれたように身を蹴すと、坂道を猿のように駆降りていつた。

おろくは、淋しい、あきらめを胸に秘めた面持で消えて行く男の姿を追つていた。

樹陰から飛んで来た螢が、白い頬をすれすれにかすめて舞い上つた。

明治五年八月五日の夜のことである。

## 牢 格 子

品川、横浜間に出来る汽車の線路工事はほとんど竣工している。

大森には工夫達の合宿所がある。三番組の組長をつとめているのは、おろくが初恋の男久兵衛であつた。

八月十四日の夜、平吉は闇にまぎれて合宿所の塀をするすると乗り越えた。雨戸に近づき、すき間から覗き込むと、工夫達は疲労のためにぐつぐつと眠つていた。

雨戸を伝つて奥座敷へ忍んでいつて、すき間から更に覗き込んだ。

久兵衛は一人で眠っている。

平吉はにたりと笑つた。鋭利な山刀で戸を切り破つて足音を忍ばせ座敷に上つていく。

ざらりと光る山刀を、眠っている久兵衛の目の前に突き出してゆり起した。

「誰だ!」

目覚めた久兵衛が一喝した瞬間、山刀はぐさりと胸板を貫いていた。

さつと血が迸つて畳に降りそそいだ

「俺だ! 平吉だ!」

久兵衛は血みどろになつて平吉にしがみつこうとしたが、兩手は忽ちねじ伏せられた。

「山の者を裏切つた頼んだ。それから、おろくを捨て

た怨みだ往生しろ」

久兵衛は必死に起き上ろうとしたが、山刀は更に彼の咽喉をえぐつた。

「ふふ、いい気味だ」

残忍な笑みを浮かべて平吉は、やがて血の生首を風呂敷に包んで抱きかかえた。

疾風のように庭に飛び降り塀を越え、新しく敷かれたレールの上をひた走りに走つた。

「おろく、おろく——」

心で叫びながら、平吉はおろくの幻を描きながら夜道を駆け回っていく。

その頃、おろくは、ある富豪の邸宅に忍び込んで大仕事をする積りで、高い板塀を乗り越えようとしていた。二人の乾分が塀を飛び越えようとしたとき

「待て!」

一喝した者がある。棒を提げた巡邏である。三人は慌てて塀から飛び降り、逃げようとした瞬間、ビリビリと警笛が夜の街にとどろき渡つた。

ばらばらと数人の警官の姿が現れた。二人の乾分はたちまち捕えられる。おろくは準のように身を隠えし、まつしぐらに夜の街を滅茶々に走つた。それは隙のような速さだつた。

「それ!」

警官は追跡した。が、風のようにおろくの姿は街角から消えてしまった。

どこをどう逃げ廻つたのか、それから半刻の後の、おろくの姿は山下町近くを歩いていた。眼の先に洋館の灯が見えている。

横浜の居留地であるそこは、警察権を外人



が持つているから我國の警察力はその居留地には及ばないのである。おろくはそれを知っていた。

筒袖に頬冠りの男が暗の中から突然、ひよつくり現れた。

おろくは、さすがにぎよつとしたが、さあらぬ体で行き過ぎようとする

「もしもし」

男が声をかけた。

おろくは聞えぬふりをして歩いた。

「ちよつとお待ち下さい」

男はづかづかと彼女の傍に歩みよつた。

「なにか御用」

「お呼び止めて相済みません。ちよつとお尋ねしたいんですが、その、東には、ど

つちへ行けばいいんでしょう」

「え？どこをお尋ねになるんですか」

「はい、じつは——」

瞬間、男の手が燕のように彼女の手許へ飛びこんだ。

「山窩のおろく御用だ！」

電撃のような声と共に捕縄が彼女の手首に蛇のようにからみついた。

「何をするんです」

おろくは叫んで素早く身を退くと、懐中

からピストルを取り出していた。

「おふざけでないよ。まごつくで一発でお

だぶつだよ」

彼女の眼は血走り、色蒼ざめた頬はひき

つり、一案の殺気がさつと迸つた。

巡査はぎよつとして地にひれ伏した。

おろくは捕縄を齒で喰ひ切つて逃げよう

とした。その瞬間、どこから現れたのか二

人の巡査がばらばらと飛び出し、一人がおろくの背後から飛びついて兩腕を羽掻い締めにした。

ズドン、ズドン。

二発の銃音が闇をつん裂くと、おろくはそこへ押し倒されていた。

「骨を折らすあまだ」

巡査がいつた。おろくは既に高手小手に縛られていた。

「どうにでも勝手にするがいいや」

おろくは自棄になつていい放つた。

短い夏の夜はほのぼのと紫色に明け初めていつた。

翌日から、連日おろくは罪を白状せよと責められた。が彼女は唇を喰いしばつて一

言も応えなかつた。あらゆる責め道具が彼女の上に加えられた。

おろくは疲勞の極に達してしまつた。う

づき出す肘の痛みに唇をかみしめて牢舎の中

にうづくまつていた。

或る夜のことである。

はげしい雨が牢舎内まで吹き込んでくる凄じい嵐を突いて獄内に忍びこんできた

男があつた。

「誰だ！」

巡回してきた看手が目ざとく発見して角

燈を突きつけた。

瞬間、石のつぶてが看手の小鼻に命中し

た。

「曲者」

悲鳴と共に看手は倒れた。

男は地を匍うように獄舎に近づいていつ

た。

「おろくさん！」

忍びやかな声であつた。

おろくは立上つた。牢の格子ににぎり寄

つて外を覗きみた。

「俺だ、平吉だ」

「おお、平吉、平吉——」

なつかしさと、嬉しさに、おろくは叫んだ。

「助けにきたんだ」

「有難う、平さん」

「約束通り久兵衛の首をとつてきたぜ」

「え？あの人の！」

おろくは思わず叫んだ。急に取り返しのつかないことをしたように思つた。それと

同時に、平吉の思いつめた心が強く胸をう

つた。

おろくは、眼頭が熱くなるのを覚えた。

初恋の男が死んだという悲しみのためか、平吉の真実に始めて愛情を感じたのか、お

ろく自身すら分らなかつたけれど——その

ときである。どやどやと人の近づく足音がした。カンテラと提灯がおろくの獄舎目が

けて走つてくる。

「あつ！いけない、俺や逃げろぜ、お前も

牢破りしてくれ」

平吉は山刀を牢格子の間へ放り込んでさ

つと闇に消えた。

「すまない、平さん」

「達者で逃げ出してくるんだよ」

平吉の聲音が遠ざかつたと思つた頃、突

然

「曲者——」

おろくは、看手の山添千太郎という男の声だと突進に思つた。

その時、

「ああつ！」

平吉の悲痛な叫びがした。どおつと物体の倒れる音がした。おろくはびくつと呼吸

を飲み、声のした方をみつめた。

「お、おろく——」

平吉の断末魔の声であつた。

「おお、平さん、平さん——」

わたしのために、とうとう命まで捨ててしまつた平吉——。

おろくは氣狂いのように牢格子にしがみついて平吉の名を叫び続けた。

「畜生！畜生！平さん、許しておくれ、きつと仇は討つてやるからね」

看手の山添が血刀を提げてこちらへやつてくる。

「やかましいぞ、このあま！」

おろくは、はつと山刀に氣がつき、あわてて柱のかげにかくした。

「明日は、きさまを半殺しの目に会わして

くれる、楽しみに待つていろ」

憎々しげに山添千太郎はおろくを睨みつ

けていつた。血刀が無氣味に光っている。

## 生首

おろくはひとりになると、いろいろな激しい感情がせりあげてきて胸が張り裂けそ



目に会っている。そう思うと、おろくは、もう世の中が味気なく急に死にたくなつた命を賭して慕つてくれた平吉のことが懐しく、哀しく、せめて、あのとき身を委しめていた方がどれだけよかつたかと思われ、急に恋しさがつのつた。口惜しさと恨めしさと、絶望の涙がとめどなく頬を流れた。おろくは泣いた。暗闇の獄舎で激しく身を震わせて泣きじやくつた。風は空を狂い廻り、雨はしきりなしに獄舎に嘯みついてきた。だがおろくは、風の音も雨の音も聞こえなかつた。所詮、弱い女に過ぎないのだ。

夜が更けるにつれ、雨風も次第に衰え、やがて気味悪いほど澄みきつた空に、冴えた月がぼつかり姿を現した。蒼白い光に包まれた獄舎の屋根が、まるで水の底にでも沈められたと思われるような静けさにかえつた。明方近くと思われる頃、カンテラを提げた看手が見廻つてきた。おろくの入っている獄舎の近くまできたとき、彼は何か怖ろしいものをみとめて立竦んだ。獄舎の屋根から、ぬうつと女の生首が出てゐるのだ。黒髪が、眸が、銀色に輝いている。

「ああっ！」  
看手は叫んで卒倒した。  
生首は、更に、胴体、腰、脚と延びて屋根には美しい、眼もくらむような輝やかしい異様なものが抜け出した。  
真白な肌は真珠色に輝き、その肌に、奇怪な刺青がうごめいている。鳥羽玉の黒

髪は女の蠱惑的な匂いをふくんで濡れ光っている。兩の頬は牡丹のようにぼつと染まつている。そして、ふつくらした兩腕にからみついている毒蛇は呪いの鎌首をもたげ豊かな乳房に喰ひ下つている。

兩腕には二匹のとかが喰ひさがり、背には血のしたたる男の生首が怖ろしい眼でぐいと睨みつけている。その首の額には一本の刀がぐさつと突き立つて呪いの叫びをあげているようなのだ。凄艶とも媚美とも形容できない、それはおろくの裸体であつた。

平吉から貰つた山刀で天井を破り、屋根裏を伝つて脱獄したのである。

おろくは素早く着物をまとつた。帯を締めた。頬かむりをした。そして、一瞬、弾みをつけたかと思うと飛鳥の如く屋根近くに聳えている一本の松の木に跳びついた。するすると枝に登り、猿のように枝にぶらさがつて高塀の上に昇ると、ひらりと地上に飛び降りた。

正氣づいた看手が氣狂いのように叫んで警笛を吹いた。

「脱獄だ！女賊が逃げた！」

獄内はたちまち大騒ぎになり、提灯が乱れ飛んだ。

「今夜中に捕えろ！」

看手の群は右往左往に走る、走る。静寂な月明の夜に逃げる者追う者の足音が乱れ市民の夢を破つた。

おろくは、太田の陣屋近くの草原の真只中をひた走りに走つた。草原を突き抜ける人と喰ひ森がある。森の中に逃げ込めばい

いと思ひ、夢中で斬ける。切株につまづいたり、はだしの足を血まみれにしながら駆け続ける。

森近くの木立に走り進んだ頃、東の空が薄明るくなつてきた。早く森の中へとあせらるおろくの行手に、突然

「待て！」

底力のこもつた声が誰何した。

ぎよつとしておろくは立止つた。胸が割れそうな激しい動悸に、よろめきつつ、きつと前方を睨んだ。

木立の中から出てきたのは看手の山添千太郎であつた。平吉を斬り殺した憎い男なのだ。おろくははつと思つた。たちまち逃げ出そうとした。

「御用だ！」

山添看手は一喝して、刀に手をかけた。

「逃げるゝと斬るぞ！」

絶対絶命。おろくは歯ぎしりして度胸を据えた。

「斬れるもんなら斬るがいい、青侍あがりのくせに、わたしが斬れて、たまるもんかい」

薬とした毒蛇のおろくの啖呵であつた。

「神妙にせぬと容赦はせぬぞ」

山添看手は、づかづかとおろくの傍へ歩み寄つて強い力でおろくの肩を掴んだ。

瞬間！ざらりと光つたものが山添看手の脇腹めがけて突入した。

「う、うぬ！」

血が、どく、どくと溢れ、みるまにおろくの手を真赤に染めた。おろくは、かくし持つた山刀で刺したのだ。

「うぬ！」

山添看手も護身用の短刀を素早く抜いておろくにもたれかかりながら、ぐざりと彼女の脇腹に突き立てた。鮮血がさつと雑草の上に降りかかった。

「畜生っ！」

二人は、血みどろにからみ合つたまま、どざりと地上に倒れた。山添看手は既に事切れていた。おろくも傷ついていたが、傷口を抑えながらよろよろと立上つた。全身を掻きむしるような苦痛をこらえ、  
「ちくしよう、いい気味だ。平さんの仇討だ」

おろくはそういつて、血のしたたる山刀を提げて凄艶な笑を泛べた。

「平さん！平さん！仇は討つてやつたよ、わたしもすぐ行くから、あの世で待つてておくれ」

白々と明け初めた空に向つて叫ぶと、山刀を逆手に握りしめて咽喉笛を突いた。

「平さん、平さん——」

消えゆく魂の最後の叫びのように、その声はだんだん薄れていつた。

遠くに足音が乱れながら近づいてくる。

おろくは、その音をかすかに聞きながらよろ／＼とよろめくと、虚空に大きく兩手をひろげて、

「平さん——」

一声弱々しく声を洩らして、そのまゝばつたりと草叢の中に倒れた。





# お妾アパート火遊び異変

小島 伸二

森 あきら画

(一)

二畳にずらり向きあつてならんだ十六の部屋、四の字抜きで十八号室、そのなかで堅気らしいのは四部屋、あとの十二部屋はひと眼見ると、それ者とわかる女性の独住居、四十に近い大年増から、二十そこそこの腋毛さえ生え揃つていないような乳くさい娘たちそれらが醸し出す、夜のケンラン豪華な桃色絵巻き櫃子はそんなことを思う

とミシンを踏む足はふるえ胸は高鳴つた。

こゝに住みついて三年、

「この部屋じゆうでみじめなのは、わたしだけだわ」

櫃子の脳裡からそんな想念がどうしても去らなかつた、夫と死別してから孤獨を守つて、経済的にも肉体的にもうちひしがれて過してきた三年が、ひどく惜しまれたことの住人たちのような生活をしていたなら

もつと面白かつただろうに、こうまで老けはしなかつただろうに。

まじめに働く者が不自由な生活をして、面白おかしく、享楽面を追ひ廻している者が、満ち足りた生活をする。その矛盾が櫃子には納得できなかつた。納得できない半面に不幸が湧き、怒りがこみあげてくる。その櫃子の怒りが、アパートの住人たちへ向けられた。

櫃子は住人たちへ鋭い観察の眼を光らせた。まづ、十二号室の玉江と呼ぶ女へ最初の眼を向けた。なにかと話題をふりまく淫奔な玉枝である。きまつた旦那のないこの女は、夜毎に異つた男性をくわえこんでいる。

その玉枝が。

「大島さん、スカートを仕立てゝ下さらない」

と櫃子の部屋を訪れた。胸にギャバジンを抱えていた。

「まいど、ありがとうございます」

ミシンの前を離れて、櫃子は玉江を迎えた。

「いゝ生地ですわね」

櫃子は膝の上へとりあげて見た、この女がまたこんなスカートをつくるなんて、男と交渉を持つところも裕福になるのかしら玉枝に対して憎悪がわきあがつてきた。けれど、商売、櫃子はぐつとこらえた。

「タイト、フレアーそれともパネル」

この女にタイトのような煽情的なスカートははかしたくないと思つた。

「わてに、なにがよくうつるかしら、タイ

トがえゝわ、前の主人が好きだつたから」

「前の主人？」

「死にまつたの、あのひとさえ生きておれば、こんなに墮落はしないわ、七曜旦那をとるようなことはしないわ」

玉江の女らしい殊勝さがちらりと頭を出した。

「あなたも未亡人なのね」

同じ境遇への同情が湧く

「えゝ未亡人なの、夫の死後、一時はあなたのようにまつとうに生きたいと思つて、森小路で洋服店をひらいたの、失敗したわ男に騙されて店をたゝんでしまつたの、というのは、わたしの牀内に淫奔な血が流れていたんだわ、男なしでは生きていられない多情な女だつたの、人間、一度ぐれると駄目ね、変つた男がほしくて……こんな話はやめときますわわ、スカートと、もう一つお願いしたいの子供のものだけれど」

玉江は白生地を見せながら、

「五つになつてゐる女の子なんですけれど

シュミーズとズロースがお願いしたいの」

「まあ、お子さんがおありなの」

「えゝ国へ預けてゐるんですわ、母親の夜毎に変わる男性の対手、子供にはとても見せられせんわ」

玉枝はさびしく笑つた、享楽を追ひ嬌声のあけくれのなかにも、子供への愛情を忘れ得ぬ玉枝の事情をきくと、非行をあばかずにそつとおいてやりたい、櫃子はついそんな氣になつてしまつた。

「わたしの月曜旦那は工員、火曜は会社員水曜は某会社の重役、木曜は町のボス、金曜



は本町筋の店員、土曜は保険の外交員、日曜だけは普通のサラリーマン並にお休みなあきれた女でしょう」

玉江は自嘲するように笑った。

「よく駄がつまますわねえ」

「その点、とつても精力的なだけけれど……でも、もう少しお金ができれば、田舎の子供のそばへ帰つて、いゝお母さんになりますわ」

玉江はそう云い残して静かに出て行つた。榎子はギヤバジンを手にとつて、しばらく眺めていたが、玉江のあの飽くなき瀾れた生活を思うと、なぜか、この布地までが急にきたならしく思えてきた。

純情の仮面をかぶる妖女、そんな言葉がしつくり、玉江にあてはまるような気がしてきた、その半面、玉江の生活への羨望と魅力を感じ、ミシンを踏む、灰色の生活がますますいやになつてきた。

「わたしも、月曜旦那をつくつてみようかしら」

そう思うと、急に駄のなかを熱い血が、どくどくと音をたて、まわりはじめ、いままでの駄内のどこかにひそんでいた女が、ぐいぐい頭をもたげてきた。

けれど、いま、それをどう解決しようという手段も目標もなかつた、それがもどかしかつた。

## (二)

玉江をそつとおこちと思つと、次に榎子の頭に浮びあがつたのは八号室の、高慢ちきな頭をしている、マダム道子であつた。マダム道子とはどんな意味があるのか

も榎子は知らなかつた。いづれどこかで酒場でもやつていて、茶瓶頭の重役タイプの男をくわえたのだから、このマダム道子が一人の旦那を守りきつてゐるのだつたら、榎子もそつとおいてやりたいのだが、浮気しているという噂が、榎子のかんにさわつた。

浮気の相手を榎子も知つてゐる。忍び猫のような足音で訪れてくる男の態度が眼に浮ぶ。あの男もアパートの廊下では盗人足だろうが、マダム道子の部屋へはいると、どかつと胡座でも組んで、とたんに図太く構えているだろうと思つと急に、おかしくなつてきた。

ちやうど、マダム道子からエプロンを頼まれていたので、それを口実に、一度、あの部屋観察してやろうと、いう氣になつた。ノックすると「はいッ」と、マダムの若々しい声。

「大島でございですが」

「あらまあ、大島さん、どうぞ」

無難作に部屋へ招き入れるのは、誰もいないせいなのだろう、だが、一步部屋へ入つた榎子ははつと息をのんで棒立ちになつた。そこには道子の浮気の相手だという男が、悠々と煙草をふかせていた。

「弟が来ていますの」

道子はおちついて云つた、この女狐め、いまに面の皮をはいでやる。榎子はそう思いつゝ座つた。

「あのうエプロンのことですが、生地ができていましたら、寸法をとらせていたときたいと思ひまして」

榎子は巻尺を膝にのせて弄んだ。  
「できていますの、持つて行こうと思ひつゝつい忘れるともなく忘れてしまつて……」  
道子は立つて簞笥から白生地をとり出してきた。

「では、寸法を……」

榎子は弟だという男に關心をはらいながら、巻尺を持つて、道子の前に膝をついた。「奥さまはお太りのようですから、少し大きな目にして仕立てますわ」

「えゝお願いします、樂をして遊んでいるせいか贅肉がホ……ホ」

「精力的でいゝですわ、わたしなんかすっかり、萎れてしまつて、

からつきし台無しですわ」

「失礼ですが、おいくつ」

「アメリカ年齢で三十二

才ですの」

「まあ、まだお若いのね

これからですわ大島さん

あなた、女を枯らしてしま

まうお氣なの、どう、も

う一度花をお咲かせにな

つたら」

「だめですわ、こんなお

婆さんになつてしまつて」

「女盛りはこれからでも

女の四十はなんとか盛り

と云つてね」

道子はひどく偏情的なことを云う、最初こゝへ入つたとき、煙草をふかしている男を弟だなどと言つたが、どうしてどう

して弟だろう、いくら厚顔の姉だつて、弟の前でこんなことが云えるはずはない。それに弟だという男も、少しも弟らしくなく、ときたま道子と見合す眼の色に、ひどくみだらなものがひそんでいる。  
この女狐めと思ひつゝ「奥さま、そこにいらつしやる方弟さんとは違ひでしょう」ずばりと榎子は云つた、どんな顔をすればだろうと見守つてゐると、

「大島さん、誰にも内緒よ、わたしの危険な火遊びの相手なの、……わたしのよな女は、あんなお爺さん一人ではとても辛抱できないの、それで……」





道子はしあ、しあやと云つて、男と顔を合せて笑つた。

「云いつけますよ、そんな火遊びをなさつていたら」

「お願い、秘密よ。あなたも、わたしのよきな境遇になつてごらん、きつと同じ道をお歩みになるわ遊ぶ相手は若い男性、経済的援助をうけるには老人、アブレゲール女性の感覚よ、火遊びはスリルがあつてとても面白いの……」

マダム道子の饒舌にはとめどがない。榎子が寸法をとつて立とうとすると、いきなりドアが開いて、茶瓶頭が現われた。

「今日は、そこまで来たんだが、急に前顔が見たくなつて……」

茶瓶は人前もはばかりに、でれりとやにさがつた。

「わたしも逢いたかつたわ、今日は来て下さるだろう、と、そんな気がしたわ」

道子は茶瓶頭になめつくようにしながら云つた。

「お客さまだね」

「え、同じアパートにいらつしやる、御夫婦の方なんですわ」

白々と嘘をつく。

「今日は少し急ぐんだが」

茶瓶はこゝへ訪れた目的を婉曲に云つて榎子たちを退けようとした。

「島さん、あなたたちも気をきかせてよ、さあ、さあ早く」

追い立てられて、榎子と若い男は廊下へ出た「ちへえッ」男は舌を鳴らした。

「どんな、お気持ち」

榎子は運葉なしぐさで、ぼんと男の肩をたいた。

### (三)

自室へ帰つて来た榎子は窓際にべたりと坐つて、生地を膝の上に乘せたまま考えこんだ、いまごろは八号室でくりひろげられているあられもない桃色絵巻、想像するだけでも、榎子の胸は、ずきんずきんと音を立て、鳴つた、やるせなさ、こみあげてくる。

ノックの音にはつと我に返つた榎子は、ドアの方を向いて、「どうぞ」と言つた。

入つて来たのは、先刻、八号室でみかけた若い男だつた。

「失礼します、僕、橋のそばまで帰つたのですがどうにも帰れないのです、しばらくここで休ませて下さらないでしょうか」言葉づきから、あまり悪人とは思えぬので

「え、どうぞ」

不覚にも胸がずきんと鳴つた。

「すみません」

「どうぞ、この窓際へいらつしやい、暖かくていいですわ」

榎子は胸のとろろきを抑えながら、さつと立つてミシンの前へ行つた。縫いかけの白のブラウスをすべりへおしこんで、かたりと押え金をおとした。

「大変、御熱心ですね」

男は立つてきて、ミシンの横からのぞきこんだ、鼻へぶうんとくる男の鼻臭に頭がくらくらとして、ミシンを踏む足が、がく

がくとふるえた。

「どうなすつたんですか」

男が言つたとき、榎子はミシンへ頭をもたせかけて、胸のとろろきを抑えていた。

「少し、眼まいがして」

「それは、いけませんね、おふとんを敷きましやう、少しお休みになつては……」

男は勝手を知つたものの、ように押入からふとんを出して敷いた。

「ありがとうございます」

榎子は横になつて、故意に煽情的に、白太股まで露出して、男の次の動作を待つた。さいぜんからの牀内をのたうつている女を、なんとかして満足させたかつた。

「あなた、窓のカーテンをひいて下さらない」

黒の遮光布をひくと、部屋は、急にうすぐらくなつた。

こうして待機の姿勢でいる榎子には、男のだんだん荒くなつてくる息が感じられたもう発火点まで達している、なにかの衝動があれば、男はがばつとおゝいかぶさるであらう、榎子はその時期を待つていた。

「あなた、甘えてすみませんけれど、頭を少しさすつて下さらない」と、

誘いかけた、男の手がふるえながら額にふれた。

「あなたは、親切な方、道子さんは幸福だわ、わたしも、あなたのような親切な方がほしい」

いまの榎子は男でさえあれば誰だつていいのだ、女の満足させてくれる男であれば「熱はないようですわね」

「え、軽い目まいですもの、もういいわ」と言いつゝ、榎子は額をさすつている男の手を、ぎゅつと握つた。細目をあけて見ると男の眼はきらきらと妖しく光っている

榎子は、力を入れて、ぐいつと男の手をひいた。男はのめるように榎子の上へ倒れた。その腰をぐつと抱きながら、

「あなた、わたし悪い女でしよう。でも、もう辛抱出来ないの、わたしだつて女ですもの」

男の腕が、強く首を抱いたとき、榎子は夢中になつて唇を求めた。

他人の非行をあばこうと思つていた榎子は、ついに誰にも知られたくない秘密をつくつてしまつた。けれど満足だつた。

「道子さんに隠れて度々来てちやうだいねわたしは、あなた一人よ、ねえ判つて」

榎子は男の胸を抱いたまま、喘ぐようにいく度も言つた。火遊びはスリルがあつて面白いわ……そう言つた、マダム道子の白い顔を榎子は、ばつきり頭に描いた。

(完)

「處女流轉」と題して九十三枚の原稿をお寄せ下さいました 山澄美

和子さま編集部へ御住所をお知らせ下さる様お願いします。

さ本号所載の「尻」作者増田志郎様御住所をお知らせ下さい。

編集部





# 好色將軍と淫蛇女優

高橋義信

## (1) 國境の將軍

印度支那の都會河内から、北東約六十キロ、南支那の広西省鎮南關に對峙する國境の町、ドンダ

ン。  
椰子の木が丈け高く繁つて二抱えほどの樹々には、どの木にも緑のような草がざわざわ下つていた。

兵舎には眼のさめるような熱帯微樹の濃緑を配した建物には赤黄の花が乱れ咲いていた。その建物の中には、いかにも仮住居と云つた雑然さでニッポンの將兵が、むれ返つていた。青葉は白く埃をかぶつて、強烈な陽射しの中にうなだれている。

そよと風も無いこの灼熱の下、ニッポン仏印進駐軍は、南支沿岸を扼して、こゝまで延びて来ていたので。

部隊長は中支宜昌作戰で馳名を謳われた、猛虎將軍、内山中將でドンダンには彼の麾下の主力が駐屯していた。

高い檳榔樹に囲まれた、一部の

兵舎の庭に、急造の仮演藝場が設置された舞台はアンベラの天井で、粗末な隙間から青天井が見えた。群集した夥しい兵隊達は南國の強烈な太陽の下で、戦斗帽の上から赤い日の丸の染つた手拭で頭を包んで、灼けた大地に坐を占めていた。

部隊長、参謀、將校、準士官らの席は天幕が張られた椅子席が設けられてあつた今夜幾太郎一行の、満映派遣の慰問劇団の数々の演藝種目は、この辺境瘴癘の地に進駐している部隊將兵を狂喜させた。

その夜。兵舎から少し離れた將校食堂で酒宴が催された。広い部屋正面に、部隊長の席があつて、その左右に高級参謀、参謀、部隊長の正面に、團長の今夜幾太郎、その左右に、木々夏野、筑前琵琶の一人者の田中旭嶺女史、川上朱美、水谷聖子、その他幹部女優が坐つた。その席から縦列の若い將校の間に、慰問団の男女優が華やかに彩つていた。部屋の中は蒸風呂のように暑い。

電燈がないので、ロソクの灯が燭台の上でゆら／＼とゆらめく。

内山中將の、長途慰問の謝辞のあとをついで、團長の今夜幾太郎が起つて口を開く「内山閣下は、有名なる戦上手の將軍であります。そのかわり兵隊を殺すことも上手

な隊長であります。

部下の皆さんは、この戦場に臨んで、三軍を叱咤する鬼將軍に、畏怖と尊敬で、常に威嚇されて、戦慄に近い恐怖感を抱いていられると想像します。そこで、私は一案を内山閣下に提示、その快諾を得ました。それは、今夕こそは、内山閣下も一兵卒であること。皆さんは閣下であること。この契約が、内山閣下と私との間に成立されたのです。だから、今夜は大いにハリキツて、はめをはずして、閣下になつたおつもりでどうぞ泥酔して下さい」

挨拶が終るか終わらないうちに、歓声と拍手が部屋を揺すつた。酒が進むにつれて、血氣まかせの酔いが、部屋一杯に満ちて、内山中將と、劇団のスター格の木々夏野との間に、顔りに盃がかわされた。

木々夏野。

古い、大正末期から昭和初期の松竹蒲田映画時代のスターで、その当時の主演級に田中絹代、八雲恵美子、筑波雪子、松井千枝子、等々が、栗島澄子、五月信子、川田芳子の大スターに迫つていた、スターで、純情な女学生、処女役が役柄で、かなり人氣があつた。

いまは、映画を退いて、実演に出ていたが、こんど親しく、今夜幾太郎の慰問団に



参加した。三十を少し出た、女優としては結構に近いが、くつきりとした色白の、細面の上品な顔立ちで、目は細いがきりりとした所が妖艶で、残んの情熱を秘めていた彼女は酒好きで、酒が廻るにつれて、その白い細面の顔が、うす紅を刷いたほどの艶やかを帯びて、へんに男の心をそよめるものがあつた。そしてひとを見る眼つきが、やゝ流し眼に、じつと艶をふくんで、三十すぎた年増の爛熟した媚態を、淫蛇のようににくねくと男の体に這い寄せてゆく。男の手を握つて、その手を鼻のところへもつてきて鼻呼吸をかけると思つたら、その鼻を手の甲に押しつけて、

「ねエーねエーよう」

と男の情慾を、そよる。

脂肪が小鼻に浮いて、ほとぼしる情慾の衝動が見られた。

人並はずれた情慾を抱く半面、皮肉にも人一倍純潔を愛し、理智を尊ぶ性癖を有する二重人格の女で、女子大出身のインテリ演技も素直で、新劇出身の幾太郎のよき相手役であつた。性格は明朗で、団員にも親まれていたが、個性が強く、強情で、ちよつとしたことで、自分の不利になつた場合、その相手を睨みつける様に目尻をつりあげて、怒りに変貌した。

そんな時にはこの女がと想像さえ出来ない鉄火な下卑た口調で挑みかゝつた。

その夏野が、しどけなくも酔つて、内山中将の太い手を握つて、鼻のところへもつてきたのだ。

「ねエーようーうちやま……」

目は細く、やわらかく、將軍の心をそよる。内山中将は、

左眼は義眼で、眼の縁が黒くにごつて醜悪で変に凄味を帯び、鼻下のスターリン髪は、陸軍部内でも「内山のスターリン髪」として有名で、巨大な体軀、佩剣をドシンと床についた偉容は、聳える巨巖で、威圧されそう。何々と高笑いすると、部屋一杯になつて、若い將校は厭迫されているような気がしたが、

「今夕は部隊長が一兵卒であること」と協定があるので、宴がだんだん静になつてゆくにつれて、むし暑い部屋は、笑い声と歌声と歡語の音が沸き返り、人々は皆上衣の襟を外したり、或は上服を脱いで、シヤツ一枚となつて、行儀作法を打ち忘れて騒いだ。

この騒音の最中に、夏野と内山將軍との秘やかな話声が、とぎれ／＼に洩れてきた

「いやッ！うち。そんなの嫌らしい！」

若い副官の中井大尉は、その間を、大膽持ちように酒をついで廻つた。

副官の中井大尉は、間違つて軍人になつたような優型の美男子で、市井にいたなら一人前の蕩児にならうと思われる男で、この様な宴会の席になると一人で切廻した。

参謀の一人が

「閣下は酒もお強いが、戦もお強い」

「ウム、戦も今夜クンのように名優の芸じやが！あれも強いぞハッハッ……」

高笑いが部屋の様子をゆすぶる。

「吾輩が戦に強いのは、この御守があるからじや、この御守があればこそ国境を突破

して、孤印進駐ができたのじや」

内山將軍は、ポケットから、銀製のシガレットケースを出して、夏野の前に投げた

夏野は、そのケースを開けて見た。

「あらつまあ！八雲さんじやないの」

そのケースの内側に、夏野の友達で、蒲田映画スターであつた八雲恵美子の艶姿の小型プロマイドがはさんであつた。

夏野は内山閣下の顔と、恵美子のプロマイドを、互いに見ながら

「閣下は、八雲さんの……あれなの……」

「嘘だよ！」

「まあ憎らしい、八雲さんは、発つ折会つても云わないのよ、若しか孤印にゆくなら妾の彼氏に会うかもしれないわと言つていたの！やつぱり閣下だつたのね、まあ！おどろいた」

流石の夏野もこの偶然には驚いた。

夏野は、ケースの片面に薄い紙に包んだものを見つけ出した。

「閣下、これどこの御守り？」

内山將軍は、何々と大笑して

「あれの、あれじや。」

夏野は、紙包の中の、さゝやかな数本の毛は、女の陰毛で、それが往年のスター八雲恵美子のものであることを直感した。

並居る、参謀達の眼が、その陰毛に、そゝがれた。

「このお守を懐に、南支からこゝへ進駐したのじや、吾輩の戦に強い理由は、これあるゆえんじや」

再び大声と爆笑の渦が巻いた。

夏野は、孤印進駐、時の英雄、この頼母

しい男の魂を、煙波万里を離れても、ガツチリとつかんでいる、友だちの八雲恵美子への、妬心が激しく、じかに胸に伝つてくるのであつた。

彼女は、その陰毛の入つたケースを閣下の前へほり投げて

「馬鹿にしているわねエー……」

と優しく、流し眼で睨んだ。

参謀等は口々に好色的な顔をほころばせて囁やいた。

「自分たちも、閣下に依頼して、すぐ飛行機で、女房のアレを送らせよう」

## (2) 宿舍の情痴

夜はすっかり更けた、宴はいつ終るとも見えず、馬鹿騒ぎは一層さかんになつた。

内山部隊長は、佩剣をドシンと床について起つた。将校一同は、バネ仕掛の人形のように盆をすて、直立不動の姿勢となつた

幾太郎慰問団の宿舍は、食堂から廊下伝いの離れたところで、そのまん中が通路になつて、兩側に洋室が並んでいた。部員毎に粗末な寝台が置れてあつた。

幾太郎も酔つた。団員もべろべろに泥酔のまゝ、各自の部屋に這入つた。

外は、南国の星がきらめいて、月はまだ姿を見せなかつたが、山の頂に、月が出るらしい気配の微光が、ほのかにいろどつて

いる。

部隊長の乗用車が将校食堂の表に、その黒びかりの車体を横たえていた。

内山閣下は、深酔の巨軀をだらしなく揺すぶつて軍刀の鞘が長靴に触れてガチャ



く」と鳴った、中井副官に抱れて、慰問団の宿舎の廊下を歩く、闇の通路を

「夏野ッ夏野ッ」

餌を求めている、飢餓の猛獣のような声だ。

「夏野！夏野ッ！」

「はいッ」

夏野の声が部屋の奥でした。

「何んだ、君はこの部屋かい」

「閣下、あけては駄目、いま着ますから」

寢室の夏野は、酒酔と、慣れない暑熱で肉体が、じつとり汗ばんでいたもので、しどけなくなつて、シミーズだけで横になつて

いたのだ。素早く浴衣に帯を締めながら薄暗い廊下に出た。閣下は、夏野の手を握つて唇で、手の甲を吸つた、夏野は、くすくす

と忍び笑いをした。

毛むくじやの逼ましい双腕で夏野の

肢体を抱いて、自動車のある玄関

口によろくと歩いた。夏野が

「いやよく嫌や」

と迷れようとものがく、暗い廊下で

巨体と媚態とが、からみあつた。浴

衣の裾から夏野の白い素足がその度

にちらついた。

この時、慰問団長幾太郎の部屋を

中井副官が叩いた。

「団長さん今夜団長さん」

幾太郎がドアを開けると中井大

尉は救いを求めるような物腰で。

「ヤア、団長、寝ていたのですか、

団長がそんなに酒に弱いのは淋しい

ですね、ね団長ちよつと、夏野さん

を！下の宿までいゝでしようね」

「宴会後は、一切外出はいけないことにな

つているんですが、」

「そこをなんとか！」

「それは、マアいゝとしても、本人が、ど

うですか」

「夏野さんは、自分が納めますから、どう

も親爺（閣下のこと）が！副官役は、つら

いですよ！……お察し下さい」

幾太郎が暗い玄関口にくると、車内の灯

は消燈されて、内山將軍と、木々夏野のも

つれあう様な姿が見えた。

夏野は、幾太郎を見て

「団長さん！うちいつてもいゝの？あんな

は団長よ、こんなこと見逃してもいゝの！

うち嫌ッ」

車から降りようとするのを、中井副官が

扉を閉めた。

しかし、幾太郎には、夏野が、深夜、単

身で將軍閣下の宿舎に誘われてゆくことが、

その態度にも言葉にも嫌悪らしくはしてい

るが、実はその反対の心情である事を曉む

ことが出来た。

自動車は軋み出た。

慰問団員、ことに女優は、戦地での深夜

外出は許せないことになつている。それを

団長である幾太郎が、眼前でこの反則行為

を何故許容しなければならなかつたか。内

山陸軍中將の堂々たる實録に押されて、無

惨にも団長の権利を剝奪され、自己の手で

夏野を停めること出来なかつたのか、幾太

郎は、權威に追従する自分の卑屈な心に悔

いた。

しかも、台湾、南支、仏印、慰問の月日

夏野が幾太郎に寄せる好意、眼眸、女心の

動きを悉知している幾太郎には、夏野の氣

持は読めていた。

果実が熟れる時を待つていたのだ、そざ

が、熟して、いま木から落ちそうになると

ころまでなつてゐるのだ。

油揚を薦にさらわれたとはこのことだ。

自動車の響が闇に消える、幾太郎は踵を回

らして、寢合に上つた。眼を閉じた。夏野

と閣下との宿舎での情痴の景が眼に浮ぶ。

がふてぶてしい寛容の心易さを感じた。

内山將軍と夏野を乗せた自動車は黄色の

將官旗をはためかせながら寝静つて森閑と

した兵舎と兵舎の間の闇を縫つて、月の微

光に浮き上つた兵舎の表門を出た。

時々物々しい「敬礼」と云う声が厳しく聞

える。その自動車には、好色將軍と、淫蕩

女優が抱きあつてゐるのだ。

車中のクツションにもたれた夏野は、仏

印進駐、世界の眼の焦点の英雄、武勲赫々

たる、内山將軍、万人畏怖と尊敬するこの

巨軀に、愛撫され抱かれてゐる。權勢に媚

びる、輕薄な感じと、羞恥が感じたが、そ

れがすぐつぎの瞬間には跡形もなく消えて

英雄を囚にすると云う諺と、幸福感で、上

摺つていた。

八雲恵美子の白い指に光る、青ダイヤが

闇に浮ぶ。恵美子の顔。内山將軍の巨体。

二人の夜の営み。豪奢な、百日紅咲く、瀟

洒な恵美子の家。生活、妬心がうづいた。

自動車はフランス風の洋館の前で停つた

こんな辺境に、あるかと思われる立派な

建物で、堂々たる館であつた。館の門には





華麗なゴシック風の円柱が立ち残っているアーチ型の入口の向うには古風な翼廊がつづく。七色硝子の極彩色に輝き、館主体は広々として壮大である。電燈はなぜか消燈されて、広い部屋のテーブルには銀のランプが燃えていた。

内山將軍、參謀、副官、四五人がテーブルを囲む、テーブルの上の大花瓶に、紫の花が無雑作に差込んであった。

マングスチン、シャボチユ、パイヤ、パイナップル等の果実、魚肉、鶏肉、野菜、白ブドウ、ジン、ベルモット、シャンペン、ウイスキー等が並んだ。安南人の料理人と小婢が働いた。

夜はすっかり更けて、皆泥酔と疲労に倒れた。やがて話と歌は止み、テーブルから一人欠け二人欠けた、夏野は暑さによる悪酔で、周囲がどんな情景も、わからなつた額に脂汗をにじませ乍ら、顔をテーブルに伏したが、肢体がぐらくして椅子から崩れそうになつた。

中井副官が寄り添つた。

「苦しそうですね」

「嘔きそうですね」

「それはいけない。しばらく横になられた方がいゝですよ」

中井副官は夏野を抱えて、廻廊へ出た。風があつた、ソケイの花の匂いが漂う。西瓜のような月が黒い国境の山の端に出ていた。

寢室には白い細の蚊帳が垂れ、純白の寝台の枕元にローソクが微かに燃えている。中井副官が水を入れたコップと薬をもつて

来た。

「気分がよくなつたら、車を寄越しますからしばらく休んでおられるがいゝですよ」と言つて立ち去つた。

虫の鳴く音が聞え、遠くの杜で梟が鳴いていた、夏野は後頭部がきり／＼痛んだ幾太郎の顔が走馬燈のように浮んで又消えた深い溜息を洩したが、溜息は何物も解決してくれなかつたので、寝台を降りて、酔歩で窓を開けた。月を眺めた、周囲をとりまく樹木が黒々とどこ迄も続いている。はるかに白銀色に輝く紅河が滝の帯に見えてゆつたり流れていた。

じつと立つていられない程身体がだるいので、寝台に横になつた。部屋は蒸風呂のように蒸暑い。

強烈な洋酒の酔いがベト／＼とネバつくような餅肌になつてこゝろよく全身をしびれさせ、夜の痴戯を悉知した、三十過ぎの女の慾情は、酔とともに、そこはかとなく掻きたてた。だらしなくベットから足を垂れた。

睡魔は險のあたりから次第にしのび寄ってくる。

館を包む空気は、氷山のように静かであつた。夏野がフト眼を醒した。広間の方で聲音がした、人間の気配である、夏野は息をこらした。猫のようにしのび歩く、聲音を盗む。閣下の忍足だ。

いまこゝで展開される場面が浮んだ。それは自分の顔の上に、義眼のスターリン髭の顔が抱擁を強要して、のしかゝつてくるのを想像した。別に嫌悪も感じない。

いりもぎつて、逃げるほどでもない。

彼の前に肅然と全身の筋肉を硬直させて剣を擡げて敬礼する数方の兵隊、彼の馬上の英姿！

黒くにごつて奥に光る醜惡な管の將軍の顔が、一つの個性的美貌のようにさえ思えた。將軍の八雲恵美子への愛情に奇妙な反感を感じさせて、はね返つた妬心であつた。夏野はじつと忍ぶ聲音を聞いて、酒と肉食の脂肪が小鼻に浮いているのを、プフではたいた。胸を少しはだけで、やわらかく唇をむすんだ、男の情慾に油をそゝぐ媚態と、寝顔で、すやすやと軽い寝息をたてたすつと、扉が開いた、白飛白の巨体が立つた、ドアが締められた。

「夏野！」

何物も恐れぬ自信に満ちた、太い強い声。夏野の微かな寝息！久しぶりにみる、日本女のあらわな肢体だ。打てば響く残んの情念を秘めて、激情が溢れてくるらしい媚態。内山將軍の不規則に抑制されていた情慾は、せきを切つて、心臓の鼓動がはげしく突き上げてくる。呼吸がみだれて荒々しくなつた。

「夏野ッ！」

太い声は乱れて、枕元のローソクの灯が消えた、月の光がカーテンの隙間から、綿のように流れる、荒い酒臭い呼吸が夏野の顔の上にのしかゝつてきた。

むつと鼻を衝く体臭、夏野は唇を求めてくる髪面を力一杯で寄せまいとして。

「いや、嫌、閣下！乱暴はいやよ！ね！八雲ちゃん、うちのともだちよ！ね！勘忍！」

して！そんなの！いけない！

「こゝは安南じゃ、戦地だ、夏野！わしはがまんが出来ん！許せ！」

「あつ！いけないつたら！そんなの！恵美子にわるいから！ね！八雲にわるいから！ね！」

「夏野！わしは！」

「あやまる！ね！そんなに乱暴しちゃ！からだがこわれるわよ！勘忍！かんにん！あゝあゝ」

夏野の必死の抵抗らしい抵抗！それは寧ろ男の狂暴を増城の中にたゞきこんで慾情に油を注ぐ、それは夏野の巧みな閣房の技巧であつた、月光の寝台で、夏野の秘めたすゝり泣くような声がつづいた。

内山將軍は巨軀を、放心したように、寝台に横えた。

「これを！これをとつてしまいたい」

と夏野の浴衣をたぐりあげて、脱がせる夏野は、くす／＼と身をくねらせると、嫌いやと鼻をならしていたが

「閣下も！ね！閣下もよ！」

内山將軍は、たわいない、白飛白をぬぐたくましい巨体だ、夏野は声をあげて

「閣下は、野性の魅力ねえね、抱いて強く、閣下！接吻よ！接吻よ！ね、火のように」

夜が白々とあけそめる頃、しのびよるような淫蛇女優夏野のたくましい淫慾に、内山將軍は、泥のようにねむつていた。

「閣下は案外弱虫なのね！」

夏野は、内山將軍の寝顔を、のぞいて、くすりと笑つた。



- 航空機偵察行動区域
- 軍用船隻により封鎖された地区
- 船隻の出発海面
- ソ連地図にある境界線
- 鉄道防害又は破壊の行われた路線
- ▲ 海上オールの設置
- △ 潜水艦の出発海面
- Ⓟ : フナロフ工場



赤色革命による北海道共和国の幻影に脅える此處吹雪に明け吹雪に暮れる北邊根室の一漁村に起つた二人の兄妹の物語、現地小説恐怖の北海道！

ソ連の北海道攻略予想図

ソ連・中共除外の対日講和は、われわれに對する宣戦布告だ、日本國民よ、覺悟はいゝかと。桑港會議で冷たい微笑を浮べたソ連代表カラフト・千島に増強するソ連の壓倒的兵力。赤色革命の危機に脅える北海道のハボマイへの密航基地根室偵察機の爆音と、潜水艦の威嚇照射に悩まされながら人々はどんな氣持で生活しているのてあろうか。

愛山 久

画 沖 研 二

ぶく／＼する綿の厚い防寒服に防寒頭巾拳斗のグローブほどの大きな手袋をはめた芳枝が徹夜の見張番を終えて、わが家へ帰ってきたのは、眼もあけて居られない吹雪の朝だった。

「ご苦労さんやつた、熱い雑炊が鍋にぐらぐら沸かしてあるけん、疲れやすめに腹いっぱい食いなされ……、若い女の身空でほんとに毎晩えらいことじやのう」ぶすぶすと炬の中にいぶるふとい生木をいま／＼しそくに火の中に突っこみながら芳枝の母親のお勝は、眼をしよ／＼させた。

「うん」ふだんから口数の少い芳枝は、うさぎのように真赤に腫れた眼をこすり、髪のを、けだつた顔を、ぼち／＼と熾る炬にむけると、疲れきつたようにべたりと横坐りになった。

母と娘の住むこの根室の寒村は、幅二里に足りない狭い海峡をへだて、ソ連に占領されているハボマイ群島に向いあつた。去年の暮ごろから、対岸のハボマイへ脱出を企てる無謀な赤色分子、あるいは逆にハボマイから潜入してくるスパイは日を送うて増えてきた。その密出入に利用するため、この村では、よく浜につないであるたいせつな漁船を盗まれるのだつた。まずしい漁師村で漁船を盗まれるのはたちまち明日の暮しにさしつかえる。

「仕方なかけん、おらたちも自警団を組織して、船を守るべえ」

村会で決議したことはさつそく実行に移された。毎日輪番制で一軒から一人づゝ漁船見張りをやることはどんなにつらいか知れなかつたが、それよりも漁師達が一番こ



まるのは、密航者の多くが生命がけの覚悟であるためか、船を盗みそこなうと逆上して、むしろぶついてくることだつた。短刀で刺されたり、ピストルで射たれて、死傷する監視人の犠牲も一月に二三人は必らずあつた。しかもこちらの武器といえは櫓や槳、棍棒のようなものしかなかった。

「お母あ、……この村の女の人はみんな心配で夜もろく／＼眠れんじやろなあ」

大きな井に盛つた雑炊をかきこみながら芳枝は、とろ／＼と居眠りをするお勝に声をかけた。

「うん、毎日夜晩気味のわるい飛行機がぶん／＼と上を飛びよるし、なんじやろ、このごろはハボマイで大砲でもうつとるような音が／＼と響いてくるしなあ、そのたんびにこの家中が／＼／＼ふるえよつて……、芳枝や、あれ見んさい」

お勝は脅えたように窓ガラスを指した。隙を越えねばならぬこの辺では、特に厚い二重ガラスを使うのだが、そのガラスはまるで蜘蛛の巣を張つたように、び／＼割れていた。

「ほう、お母あ、こりや、ハボマイでうつ大砲の音で破れたんじや、……う、ただけじやなかろうがな、……女や子供が脅えるのもむりはないのう」

「なあ、芳枝や、ハボマイを占領しとるソ連の兵隊は北海道へいつ攻めてくるつもりじやろか……わしはそれが怖しうて／＼」

「オホホ、そう心配せんでも……、なんぼソ連じやとて、そない乱暴なことを急にやるもんかいな、又、やる腹になつたとしても、日本にはアメリカの飛行機や軍艦がうんとたくさん守つてくれとるんじやけんアメリカと大戦争しても勝てるみこみがな

きや、ソ連じやつてそり向う見ずに北海道を攻めたりはせんじやろで……」

母親をばげましながら、ふつと芳枝の心は暗くなつた。この間、小学校で国土防衛の講演会があつたとき、はる／＼東京からやつてきた、なんとかい警察予備隊のえらい人が話してくれたのには、なんでも、根室とは眼と鼻の先にある南千島のエトロフ、クナシリおよびハボマイ群島（色丹、

多摩、秋田、水島など）には、ソ連の戦艦が三百機以上もプロペラを隠らせているし、陸軍の機械化部隊は約二万以上、それが近頃では日曜もぶつ／＼で特別大演習をやつてゐるのだそりな。晴れた日によく見える望遠鏡でのぞくと、ハボマイあたりの島々には、特徴のあるカマボコ型兵舎が／＼／＼増設されてゐるらしいのだ……

いつたいソ連は北海道をどう料理しようというのだろか？。実のところ、誰にもよくはわからないのだ。この間、芳枝が海岸の見張台に立つてゐたとき、それは妙に濃霧の晴れた、根室の冬としては珍らしい夜であつたが、真夜中ごろ、芳枝はすぐ眼の前の海中から、なにか奇妙なものがむく／＼と巨体をあらわしてくるのにぎ／＼とした。やがて音もなく月光のみなざる海中にぬつと真黒な鯨のようなものが浮き上つた。

「あつ、潜水艦じや！」  
あわてふためいた芳枝が、危急を知らせようと、見張台に吊られた半鐘を／＼叩きはじめるよりも早く、潜水艦から、パツと強烈なサーチライトの光を浴びせかけられた。

その照射は、ちょうど子供が手鏡で日光反射をさせて友達をからかうように、ゆつ

つくりと芳枝のあわてふためく姿を照らし次には海岸一帯の漁師の小屋をすう／＼と照めるように照らすのだつた。いた／＼好きの若いソ連の水兵連中が、腹をか／＼えて笑いながら、無邪気な深夜のあそびに興じている／＼としか解釈できないのだ……

「ほう、そりや、芳枝さんが女じやけん、からかいよつたのにちがいないわな」

翌日その不気味な潜水艦の話をする、聞いていた者がみなそりやう不気味な照射を一度ならず受けたことがわかつた。それをおもひ出すと、

「なんのためにあんなまねをするんじやろか」

単に若い水兵の無邪気ないた／＼なのかそれとも、なにか意地悪い底意のあるおどかしなのだつたらうか、芳枝はふつと嘆息をついた。

「ついこの間まで日本に連合艦隊があつた時分には、怖がつてどこかの隅にちいさく縮こまつていたくせに、日本人をなめたことをするなあ……」

「なんやな、芳枝、なにをぶつ／＼ひとり言をいうとるんかや、雑炊食うたら一休みぐつ／＼眠らにや身体が疲れとろうがな」

「うん……」

徹夜して見張台に立つた疲れのためか、熱い雑炊で腹がいっぱいになり、かつ／＼と威勢よく燃える焚火にあたつてゐると、いつしか／＼と眠気がおそつてきた。ぐろりと横になつて枕をしながら、

「お母あ、となりの為吉さんの傷はどうなんけ」

「それが可哀そうになあ、どうやら、右腕をすつ／＼手術して切り落すんじやそりな。お前を花嫁さんにもろ／＼ばつかりのだいじ

な時じやに、為吉さんんもどえらい災難に会うたもんじやのう」

「ふうん、それじや一生片輪じやが……、生命拾うてまだ幸いとはいうても、もう二度と漁師の荒仕事はできんわな」

根室湾とクナシリ島との距離はわずかに二里あまり、しかも、その狭い海峡の真中をマツカーサーラインが通つてゐる。ラインの内側が新しい日本の領海に過ぎないとすれば、漁師達の働き場所は根室沿岸一里の幅しかないのである。広いオホーツク海で、赤銅色の日焼潮の身体を晒けて、

鮭や鱈やカハなどの獲物を追う逞ましい生活をつゞけてきた海の男達にとつてこれは全く飯の食いあげだつた。漁に出なければ暮しが立たない。しかし何百隻という漁船が、沿岸一里の漁場の獲物をうばいあつていては、魚の獲れる数も少しいし、毎日あぶれる漁師がふえる一方だつた。

あぶれまいと死ものぐるいで漁船を操つていて、いつの間にかマ・ラインを越えてしまふと、たちまちソ連の監視艇が、フルスピードで波を蹴立て、追跡してくるのだ。ラインを越えまいと警戒していても、名物の濃霧の中で梃をとり誤まることも少くない。

こうして終戦以来、今日までソ連側に捕つた漁船は百三十隻、乗組員は一千人を越えてゐる。しかも、一旦捕まえられたら、事情はどうあつても、越境と密漁のソ連の刑法で、懲役が半年と罰金が五百ドル（約二十万円）という苛酷な罪になる。やつと懲役の刑期を終え罰金を納めて、送還されても、漁船はそのまま没収されてしまふのだつた。

（芳枝の小学校時代からの仲よしである、



となりの為吉は、同い年の二十三才、負けぎらいの豪胆な男だつた。けに、われ知らずマ・ラインを越えて、ソ連監視艇の追跡を受けたとき、

「なにこそ！、手前などにやす／＼捕まるものか」

とばかり、全速力で逃走をくわだてたのだつた。マ・ラインの内側にさえ逃げ込めば大丈夫だ、と、勇敢に停船命令を無視し

た。とたんに、ダダダとけた／＼ましい機銃掃射を受けた！

「うわつ、やられた」

操縦室を蜂の巣のように射抜かれ、舵を握つていた運転手は即死、甲板に居た三人の乗組員も血しぶきを立て、真逆様に濃霧の海へ落ちてしまつた。生命を助かつた為吉が一人右腕に三発の貫通銃創を負いながら、舵をあやつつて、間一髪、背後に迫る監視艇を逃れてマ・ライン内側へすべりこんだのであつた。

その活劇もたつた三日前の生々しい事件であつた。

「おらたちはなぜこんなに苦しめられるんじや！、お母や、おらは産湯をオホ／＼ツクの海水で使つて育つた女じや、鮭や鱒をとる他に暮しを知らんけん……。為吉さんと夫婦になる他もらい手がないんじや、おら口惜しい、おらあ……」

芳枝はげつそり落ちくぼんだ頬に、ボロ／＼涙をした／＼らせて、赤ん坊のように大声で泣き出した

「……おめえも苦労するのう、しかし、漁師がきらいで函館の工場で働いとる鉄次はどうしとるか、わしはあれの身の上も心配で仕方がないわい」

「お母あ！……おらがなんべんいうてもお母あはまだ鉄次の野郎を可愛がりなさるんけ、おらあ、あんちくしよ

うを兄などとはもう思うとらんぞい」

「……芳枝や、おめえ

はどうしても鉄次をゆるしてやれんかえ」

「お母あ！」

びよんとはね起きた芳枝は、激怒のあすりわな／＼と全身をふるわせた。

「お母あも共産党に欺されとりなさる！、もしもじや、鉄次がいうように共産党がわしらの味方じやというなら、その親元のソ連がなぜ、カラフトや千島を無理無体

に占領して、わしらに返してくれんのじや……鉄次が惚れこんどるソ連のおかげで、わしら根室湾の漁師はこないみじめなことに追いつめられとるんじやぞな……となりの為吉さんの腕に機関銃の弾丸を叩つこんだのもどこのどいつの仕業じや」

芳枝はまるで眼の前に共産党員の兄が坐つてゐるかのやうに、拳で自分の膝をたたきながら喚き立てゝいた。

## 二

……その鉄次が漂然と訪ねてきたのは、吹雪を混えた烈風の吹きすさぶ、身も凍るやうな深夜のことであつた。お勝はおどろいた。

「まあ！鉄次じやないけ、いつたいどうしとつたんじや」

芳枝は、沿岸警備のために、もつと国家警察の配置人員を増やしてほしいという陳情に、はる／＼根室支庁にある管区本部まで、他の数人の陳情委員と一緒に出かけ

て、不在だつた。

「お母さん、すつかりやつれなさつたなあ」

痛ずしそうにお勝のめつきり白髪のおえた頭を眺めながら、鉄次は長靴をぬぐの

つた。ソ連将校用の毛皮襪巻つきの外套の下に、茶色の背広、厚い防寒長靴をはき、深い防寒帽の中からやさしく澄んだ眼をのぞかせながら、鉄次は、ふと戸外に声をか

けた。

「おい、恥ずかしがらないでもいゝから入つてきたまえ、僕の母親だけだから」

「おや、誰か連れてきたのかね……。そんなら早う云わんかい。ぼんやり吹雪の中に待たせときなすつたら、たちまち凍死じやけん」

丸太を組み合わせたまるで豚小屋のやうな汚ない狭い漁師の家。鉄次のつれてきた二人を入れると、お勝はそわ／＼と、ふと

い薪をくべ足した。客の一人は鉄次と同じ年頃の二十四五のきりつとした青年で、もう一人は、まだ二十前後の美貌の女だつた

「同じ函館の工場に勤めてゐる友達です」

鉄次のかんたんな紹介に、

「よろしく」

「どうぞよろしく」



ゆすつて流れてゆく吹雪まじりの烈風。

「お母さん……、僕はまだ晩飯を食つてないんです。ちよつと失礼、お母さんも夜食代りにつきあつてください」

鉄次はそういつて、携えて来た皮製のボストンバックをひらいた。黒パン、罐詰、リンゴなどを取り出して、お勝にも分けながら、鉄次達は黙つて食事をはじめた。

「……鉄次や、このごろ工場の方は仕事が忙しいじやろ、ちよつとも手紙をくれんから、わしは案じとつたぞな、何の用か知らんけど今夜はゆつくり休んでいろ、話を聞かしてくんろ」

そういうお勝に答えるかわりに、鉄次は友達の人とすばやく意味ありげな視線を交した。

「お母さん、……あんたは僕が共産黨員になつてゐるのをどうおもいますか」

「そりや……お前、男は誰でも自分が一番正しいと考える道があるのが立派なんじやがな、亡くなつたお父つつあんかて、好きな漁師で一生涯貫きなすつたもんなんあ、男はなんちゆうても仕事が生計じやけん」

「芳枝はどういうとりますな」

「あれはお前とは丸つきり反対の道を歩く女じやろ、共産党なんぞは大きいらしいのじやが、わしは、それはそれで立派な女じやとおもうとるがな」

「そりや、お前」

「実は僕等三人は、これからハボマイへ脱出するんです」

「ええつ？……なんぼなんでもこんな真夜中に」

中に」

「むろん波の荒いことも、吹雪の激しいことも覚悟してゐます。しかし、党の命令でどうしてもハボマイのソ連進駐軍情報部に渡さなければならぬ機密書類があるんです」

「……」

「根室湾一帯に国家警察や自警団の網が張りつめられてゐる以上、脱出がどんなに危険な生命がけであるかも知つてゐますが、党の最高指令に従うのは黨員の絶対義務なんです……お母さん、もしも私が失敗して死んでも決して泣かないでください親不幸はお詫びの仕様がありませんが」

「ええじやろ、それもええじやろ、また、わしが許さぬというても、お前はどうしても決行する男じやものなあ」

「お母さん、僕はどんな犠牲を払つてもきつと北海道の人民解放をやりとげます……それが成功したら、いま日本人が抱いてゐるソ連や共産党についての誤解は氷解するはずですよ……僕は断じてソ連に隔らされてゐるのでもない。マルキシズムのいさゝかの誤りを知らないでもない……」

「おこがましいかも知れませんが、日本を幸福にしたい、貧乏にあえぐものが、働かないで遊んで食つてゆくもの下積しになつてゐることから解放したいのです」

鉄次は、情熱に輝く瞳を上げて、じつとお勝の顔を見つめた。

「……しかし鉄次、わしらは北海道がソ連の爆撃や砲撃でめちやくになつたらこわい」

「アハハ、ソ連の敵は決して罪のないあなた方善良な人民ではありません。ソ連がいま沿海州、カラフト、千島に配備してゐる

軍隊は、空挺部隊が六個師団、飛行部隊が二個師団、機甲部隊が二個師団、狙撃部隊が八個師団、そして潜水艦が数百隻という圧倒的なものなのです……もし、この兵力の恐怖を痛感しなければ自滅の他ないはずですよ」

「鉄次……、女のわしにはそんなむづかしいことはわからないけれど、とにかく戦争はどうあつても二度といやじや」

「僕はだつて、戦争は大きらいですよ……しかし戦争の危険はますます今後増大しゆくだけでしょう」

「しかし、わしらは、ソ連が戦争をししかるから、こちらが仕方なしに、もう一べん日本に兵隊をおいて自分の国を守るようにするんじや、と聞かされとるがのう」

「オホホ、そのあらわれとして、とりあえず警察予備隊の装備を強化するとか、増原長官が言明してますわね、迫撃砲だの小型ロケット砲を持たせたり、旭川や帯広、札幌辺に演習場を設けたりするんですよ……ソ連の諜報網では北海道の工業状態、国家警察、海上保安部の装備、それからアメリカ進駐軍の所在地や、警察予備隊の兵員数とか実力までもうすつかり露抜けですのにねえ」

鉄次のつれてきた若い娘はかしこやうな瞳を輝かせておかしやうに笑つた。

「おばさん……、いくら予備隊など増やしてもだめですよ。ソ連の飛行機はどの土地からでも北海道へ一時間足らずで来るんだし、津軽海峡に機雷をけば、本州との交通は絶えますからねえ。バズーカ砲や迫撃砲を大事に抱えたまま、全員袋のねずみですのう」

もう一人の青年も声をそろえて愉快そう



(侵入予想地帯)

に笑つた。

「そんなもんかのう……、あんたの方のような若い人達がそういうとえらいことを考へてなさるちゆうのかね、そう言つたら、明治維新のときの倒幕の志士もみな二十代やつたというから別にふしぎじやないけん」

「お母さん……、僕たちはすばらしい組織を作りましたよ。函館、室蘭、札幌、余市、砂川、旭川、釧路、稚内などの大工場にはみんな共産黨員がブチロフ活動を始め、いざとなれば一せいに蜂起するんですよ」

「へえ？、そのブチロフとかはなんのことぞいな」

「つまり革命の根拠地ですよ、都合地にはこうして、強力なブチロフ工場をどしどし育てゆく、炭鉱、油田、森林地帯にもがつちりと拠点を設け、農村や漁村には遊撃隊が秘密に築かれていますよ、あは、いつでも指令一本で起ちあがりますよ、お母さんたちのような食うにこまる人たちの助けで、平和で愉しい新日本をみんなの手で作りますよ」

鉄次達三人の若者は楽しそうにうなずき







胸にどすくろく血が滲み出していた。  
「あれ？、この娘さんは！」  
お勝はぎよつと顔色をかえた。断末魔の苦悶に歪んではいないが、二日前、鉄次につれられて、深夜訪れてきたあの快活な娘の顔にまぎれなかつた。外套をぬがしながら内ポケットの遺留品を探っていた警官は、うつとめいて顔色をかえた。  
「この娘は共産黨員じゃぞ、そら、これを見い！」  
相棒の巡査に、ポケットからつまみ出した名刺型の証明書を見せた。  
「ふうん、こりや、この間検査した密航未遂の男も持つとつたなあ……」  
厚紙の表面には太い赤線が左から右へ斜めに引かれ、ロシア文字と本人の写真、裏には日本文字で、本人の氏名、生年月日、黨員番号などが記入されていた。北海道の共産黨員なら必らず肌身離さず持つていけるはずの身分証明書であつた。  
こち／＼に肌に凍りついた衣服を脱がすのは相当に骨の折れる仕事らしかつた。……やがて、上半身がくると現われた。まるで冷凍魚の肌のように、つや／＼と冷たい白蠟の肌、そのふくよかな乳房の真下あたりに、ポツポツと二発の拳銃弾の痕が残つていた。心臓を貫通しては一たまりもないだろう。  
「お母あ、気分がわるいんけ、がた／＼ふるえとりなさるが、あれ、顔色も真青じや」  
おどろいてお勝の身体をさ／＼える芳枝に「いや、なんでもない。風邪でもひいたんじやろ……」  
とつぶやきながら、鉄次も同じ運命を辿つたのではなからうかと、お勝は脳髄血を流してふらふらと芳枝にもたれかゝつた。

その夜。

母と娘二人きりのまつしい夕餉を炉辺でとりながら、芳枝はじいとお勝の顔を見つめた。  
「お母あは、屋間の仏様を知つとりなさつたんじやろ？」  
ぎよつとして、  
「いんや、いんや、……どうして知るものかな」

「そんなはずはないじやて、……なにか、鉄次兄さんとも関係があるはずじや」  
「そ、そんなこと、わしは知らん、たゞ、お前と同じ年頃の若い娘さんが、密航にしくじつて、警備隊のビストルで死になすつたんが哀れじやつたから、つい身につまされて」  
「あれ？、……あの仏様がなぜ密航者じやの、警備隊に射たれたのと知つてなさるのじや……、お母あは、きつとわしになんぞかくしてなさる」  
「……」  
「お母あは卒倒してから、うわごとに、鉄次、鉄次、そんな危いところへ行くんじやねえ、と泣いてなさつたぞな」  
ぼろ／＼の麦飯を盛つた飲けた茶碗と、箸を炉辺におくと、お勝は、しもやけだらけの手で眼頭をこすつた。  
「だれが、だれが一番悪いんじや！、わし

は生れてからこつち神や仏の罰をあてられるよりなことは一つもしとらんはずじや……、こんなボロを小さい赤ん坊の時から着て、一生を貧乏漁師の女房で苦勞してきたえ、夢はなに一つ見て来やせん……。そして、そして、やつと息子と娘を大きくしたら、兄と妹が敵同志みたいにいがいありとる。一体わしはどうすればいいんじや」  
むせぶ泣くお勝の白髪が、とう／＼くすぶる炉火に、ちかちかとふるえていた。  
今夜も又、ソ連潜水艦は悠々と浮き上つて、この根室湾のまづしい悲劇の漁師小屋をサーチライトで照らすのであろうか。



笹田 豊

パチンコ全盛

当て外れ

「あなた……少し強く……少し……あゝ、又駄目だわ……どうして、うまく入らないのかしら？……矢張り、あなたの掘り方が悪いのよ。ね、一度やつて御覧なさいよ……今度はいま／＼やつてね……指の使い方に気を付けて……そろ／＼其の調子だわ……あ、私、胸がどき／＼して来た……あれ／＼、あゝ……と入つちやつたわ……」  
男「うるさいね、金は無いつて云つてるじやないか」  
男「引……旦那、好い娘を世話しましよ。一寸いけますぜ肉附の素晴らしい……」  
男「俺は金を持つてないよ」  
男「引……ご冗談を……ねえ旦那、お願いだから行つてやつて下さいよ。色が白くて器量もそう悪くないし……何せ、あのぼちや／＼とした味が素敵なんぞさ。一度味ありと……」  
男「うるさいね、金は無いつて云つてるじやないか」

男「ハハハハ……こいつはお笑いだ。俺は、万年修にインクを詰める為に銀行へ入つたんだよ」  
男「引……」

男「ハハハハ……こいつはお笑いだ。俺は、万年修にインクを詰める為に銀行へ入つたんだよ」  
男「引……」



迷廣告

ある薬屋の貼紙。  
「当店販売の避妊薬はサンガール夫人御愛用のもので御座います」

× × × ×



## 女をめぐる電話公衆

## 椿 昭彦

日本三大祭りの一ツ、天神祭の渡興で名高い、堂島川を北へたどると、戦災で焼け残された天満宮と、バラックながら、浪華商人の根強い商魂をみせて、はやくも戦前の賑やかさにかえろうとしている、天神橋筋十丁の商店街が連つてゐる。戦災にかゝるまでは、南の心斎橋筋か、北の天神橋筋かといわれるほどの、鈴蘭燈の美しい街並も、今は僅かその四分の一完全な復興を見せているに過ぎない。

そのために、散策の客足はほとんど天神橋筋六丁目に吸収されていわゆる天六繁華街をつくつてゐる。しかし、この天六界隈の盛り場は、笠置シズ子の大坂ブギで喧伝されるまでもなく、昔から伝統

身重みおもになつた家出娘いんでむすめ

を誇つた、此の浪華ソ子に馴染の深いところなのだ。

昔流にいう新大阪の乗り場を中心にして、北大阪線と黒崎町をむすぶ三角形の地帯のなかには、酒と、レコードと、フィルムが刻を忘れてハンランしている

し、一步裏町の小路にふみこむと、下半身で生計をたてゝいる、サービス満点のデルタ地帯がバツコしている。彼女たちの根城というのは、主として京阪デパートの横道である。街燈の灯のどかない所や、乗り場の前の公衆電話の蔭で、若い女が所在なげに立つておれば、十人のうち九人までが貞操らん売の女性なのだ。

所轄警察署も、売春行為の検挙にあたつては、少なからず努力しているのであるが素人女の素振りをして、公衆電話にたゝずんでゐるのでは、見境が付かないので困らしい。

ところが、彼女たちはそこがつけ目で、この小さな治外法権の区域を利用して、電話をかける男たちに、煽情的なモーションをかけてくる。巧妙な手口になると、自分の順番をわざと後ろの男に譲つて、それをきつかけに、二、三分の立ち話の中で、ショート・タイムの取引をきめる、乗合バス式の街娼もあり、戦後の天六は、さながら

ら売淫街の代名詞となつた観がある。

二十一才の商家の女中が、公衆電話をかける途中に、主人の金を失い、身の潔白を証すために、仕方なく酔客に身をまかせたり、また、電話で愛人が秋風をふかせたために、自棄になつた女が、その場で男に媚を売り、近くの旅館に泊りに行つたという公衆電話エレジーの数々は、此処で一番古いといわれる、夕刊売りの婆さん以外には誰も知らない話題である。

筆者は、この豊富な見聞記を有する婆さんから、夕刊五部を買い、ご機嫌をとつておいて、電話をかけにくる、女の筋を洗つてもらつた。——そして、約十七、八分。夕刊を売るかたわら、親切？に、風体、物腰し、年令と、行れ代り立ち代つて行く、公衆電話の若い女たちを、一人ひとり吟味してくれた。

「チョット、あの一番向う側の電話室にいる娘はん、何かありそうだつせ。ほれ、どことなく違いまつしやろ？」

そう云われて、問題のボックスを注目したが、さすがに経験者だ。よく動作に氣を付けて見ると、なるほど、普通の眼力では一寸判らない、女の祕密がチラついてゐる。

電話をかけ終つて、出てくるのを見るとしもぶくれのした初々しい顔だつた。左手に薄茶色の風呂敷包をかゝえ、クリームの

## 艶笑コント

## 名販賣員

北海廣介

ドブ池筋と云えば大阪では雜貨卸店がずらりと並んでゐるので有名である。その一軒へ来た四十過ぎの男

男「このシミーズとズロースいくら？」

主人「これは上下で千円です。」

男「上下千円は高いな。」

男「そのまゝ首をひねつて帰つて行つた。」

男「このシミーズいくら？」

主人「五百円です。」

男「ズロースは？」

主人「これも五百円です。」

男「両方買ひから、まかりませんか？」

主人「まかりません。」

その翌日、またもやこの男が現れた。しかし、丁度主人が留守で、女店員が応待に出て来た。

男「このシミーズはいくらだ？」

女「六百円です。」

男「ズロースは？」

女「四百円です。」

男「上下もらいましょう。」

夕方帰つて来た主人がシミーズとズロースが売れてゐるのを見て、ニツタリとして女店員に聞いた。

主人「まさか買ったと違ひやろな。」

女「いえ。千円で売りました。」

主人「千円であつた男千円では買つて行つたやろ。」

女「わけあれしまへん。シミーズ六百円でズロース四百円で売りましただけです。」

主人「なんや、値が違ひだけで、合計一緒やないか……そんな阿呆な。」

女「いえ。男の人はシミーズを上げて、ズロースを下けたらお喜びになりますから。」

主人「エ、？」

(終)



程度で済ましている、ほとんど素顔に近い丸いあごを風呂敷包に埋めるような恰好で、うつ向きかげんに歩いて行く。天神橋筋を南へ歩きながら、ときどき呉服店や洋装店のショーウィンドを覗き、物欲しそうな顔つきで立ち止つたり「女給さん募集」と広告の出ている、三流カフェーの中を見つめる。四丁目の省線天満駅のガード下まできて、洋食と井物一式をやっている、大衆食堂の中に入つた。若い女が十数人、ぜんざいやしるこを食べている隅で、天ぶらうどん一つとつた。熱いので、なか／＼一杯の丼が減つて行かない。フー、フー息をかけては、一口喰べ、そして店の柱時計を見あげている。そのうちに、一杯五十円为天ぶらうどんが空になつた。

大衆食堂を出て、扇町の大阪プールへ差しかゝつた時、「キミ、……」と彼女の背後から呼びとめた。一瞬、ギクツとなつたらしい。

尾行してきた筆者の顔と風体を、ジツとまじろぎもせずに見守つていたが、やがて一緒に喫茶店に入つて話しているうちに、次第に警戒心をゆるめてきた。話を訊くと思惑通り、彼女は和歌山の家を飛び出してきて、あてもなく就職をさがしていたのだという。

## 身重になつた家出娘

「どんな理由で家出をしたんです」  
「……（黙つて答えようとしない）」  
「何か結婚問題か恋愛で……？ それとも家庭的に厭やなことがあつたんですか」  
「えゝ（頷いて一寸いゝよどむ）……両親が私たちの結婚に反対してますの」

「その人は和歌山にいるの、大阪？」

「一カ月ばかり前に、私にだけ知らせて大阪に来ていたんです。それで、私は家を出る決心したんですけど、最近下宿先を移つていたので、ぜんぜん行先が判らないので困つていたのですワ」

彼女の口ぶりでは、転宅先の手紙が来たのに、両親たちが、その消息をにぎりつぶしていたらしいのだ。

「相手のひとは、幾つ？」

「四十一才です。私と二十一年が違ふのですけれど、一昨年奥さんに死別されて、ずつと独身で暮らしていた、真面目な方ですワ」

「恋愛の動機は何からです？」

「知り合いの人の紹介で、その方の家にお手伝いに行つていました。お洗濯をしてあげたり、炊事の世話をいつさい、私がしていました」

「それで仲よくなり、深入したわけなんですかね？」

「はじめは、私もそれほど真剣ではなかつたのですが、いつもやさしくして頂いていゝうちに、自分では知らぬ間に愛してゐたんです。……今では、誰が何といつても別れられません。さつき、電話でだいたいの所が判りましたので、明日、たずねてみようと思つています」



「さようなら」

田舎の二十才の娘にしては、しつかりとした口のきゝ方である。両親の反対を押しきつて、単身で幸福をつかもうとする彼女は、喫茶店の椅子から立ちあがる際、氣どられぬように動作をしたが、銘仙の着物の下に、少くとも妊娠四カ月の異状のあることは、男の眼にもハッキリと判つた。その身重の軀で、神戸の友達のうち泊りに行くというので、大阪駅まで一緒に見送つてやつた。

「さようなら」

「じゃア元気で、幸に暮して下さい」

フラットホームと車窓から、まるで十年の知己のように別れて行つた――。

帰りみち、ふたゝび公衆電話をのぞいて見ると、酔つた中年の紳士と女給風の女が一つのボックスに隣り、もたれ合つた恰好で、ゲラ／＼笑いながら喋つている。その両側のボックスには、若い女性がうつとりとした姿で、何かしきりに話しつゞける。

――こうして、何処の公衆電話をのぞいて見ても、若い女性が圧倒的に多い。僅か一円の電話料金で、誰にはゝかるところなくプライベート（内密の）意志の疎通を許された、公共施設の狭いボックスの中で、彼女たちは何を囁き、何を期待しているのだろうか。――

## ハナヲタカクスル

（問）私は鼻が低くて悩んでいます最近隆鼻術というものをよく聞きますが効果があるものでしょうか。

（答）先づ特殊薬注入法があります本法は従来のパライン系の欠点を一掃した劃期的な新法です。最近これが永久不変のものであることが認められ、希望者が増えています。一回ですみ、入院通院の必要なく無痛で遠方の方でも、すぐ帰れます。

次の象牙挿入法があります。本法は古代から使用されいまだに使用されている方法ですが、施行者の技術の良否による点が多いので医師も患者も仲々危惧の念にかられていたのですが、最近では進歩した独創的な器具の使用により簡単に手術が出来ます。やはり捨てられない方法です。

更に合成樹脂挿入法があります。本法は以前から歯科医が使用していたものを、最近隆鼻用に使用しています。御希望の方には施行して居ります。

次に肉質法があります。少しづつ高くしたい方にはこれも良い方法です。

（費用約六千円）

大阪市北区梅田新道交差点  
東一丁電車道三山医院内

三山隆鼻法

研究所長談



# 業寝る上に見 相撲花 土俵四股平

我が床に今日も手活の相撲花

その「相撲花」にも見あきて、アキビの二つ三つをかみ殺して、我には興味のうすい春場所の勝負附を見ていると、ふと名案がうかんできた。

土俵の相撲や、座敷のそれに見あきた我輩は力女（メトマーズ）が四股をふみ、四つに組んだ人字形の足もとへ首を突んで、息づく彼女達の乳房や腹を鑑賞する珍芸を案出したが、これは見物人の自分が寝転んで、力女達に踏まれぬように、ゴロ／＼と移動しながら見物するのだから、傷害保険どころか、生命保険も掛けねばあぶなくて、そうたび／＼は実行出来ない。

嘗て本誌に寄せた「女に跳がせる男」の拙稿が其実態だが、いくら大胆な女でも、足もとに目上の人がねていると思えば、足さばきがにぶる、これじや折角の珍芸珍案も曲がない。誰かのように、ガ

ラス板の上で取らせるといふ案もあるが、ガラスそのものが硬質だから、見物人の方はいいとしても取組む力女の方が怪我をする。無理にやらせれば、初切り程度の八百長相撲しか取れない。近頃流行の「空中ストリップ」の類、闘技が真剣でなくなる点では同類項だと充分に読者諸氏をじらせておいて、サテ我が名案の披露に及ぼるか。

それはニューフェースの新鮮味を失つて、はや実用時代に入つたナイロンを利用する布土俵であるこれは一反風呂敷ならぬ狸のどこのやらの如く、八畳敷に近いナイロン大風呂敷を調製して、これの周りに丈夫な麻縄を通し、さらに其ロープをタートンバックル（緊締器）つきのワイヤートロープでピンと水平に張るのである。うすくて弱そうに見える透明ナイロンも、三十貫位の重量はヘツチヤラという

力持、強靱さだ、この独創的なナイロン土俵なら、いくら投出されても怪我はマズない、ガラスと違つて透光度がや／＼にぶるが、それがかえつて鳥肌や不要なシミを全部吸収してしまふから有難い。論より証だ、それ鼻の下を長くして御覧なされ、床から三尺のナイロン土俵、坐つてあおのいていちや、あとから首が下らなくなりますぞ、だから我輩のように、大の字に寝ころんで御覧するのが第一ですぞ。

東は当家の秘藏娘「玉椿やち」西は新進の「八重衣うた」です、それ足の裏から股まで、腹から股まで見通して御座い、こんな相撲に裸は不粋ですよ、人工的なものは大自然の心に反しますからね、大いに原始的にやらかしましょう土俵では見られないところが全部見えるでしょう。それ四股を踏んで、踊つてゐるんじやありませんよ、ナイロンには弾力がありますからね、作用反作用の法則、弾力的反動があるのであんなにピョン／＼するのはです。笑つちやいけません、貴郎だつて僕だつてあんな風になりますよ、例えば投げつけた女を抑えこもうとしても、相手が上下にバウンドするし、自分すら下手をすると御同様になるので、しつかり掴合ふか組合ふまで



都会では盛り場の片隅、田舎でも縁日の道筋に黒山の人ばかりで人気を得ているのに大道将棋がある。畳の半分もありそうな大きな盤に、これは又大きな駒がバラバラと五つ六つ並べてある。

碁や麻雀と違つて、将棋は十人の中九人迄は駒の動かし方位は知つてゐる。人につられて肩の間から一寸のぞいてみる。持駒は香と歩で左図のような駒の配置である

五	香	歩							
六									
七	王	金	桂						
八									
九									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	

すると盤の向うに立つてゐる黒いジャンパーの将棋屋のオッサンが、香と歩を二枚重ねて、パンパ

ンと盤の上を叩いて「サア、直ぐ詰むでしょうが、どうです兄さん、詰ませばこのピース二個景品として進呈しますよ判つたら勇敢にやつて下さい。こちらは詰めて貰つたらいいんです持駒は香と歩、サア、そちらの方如何ですか」

成程、盤上の問題を見ると、玉の頭の上には攻方の金がどつかりと坐つてゐる。左右ドラヘ逃げたつて逃げ場はない。初めに玉の頭へ歩を打つ、八一玉と逃げる、次に八九香と打てば、あとは玉がドコへ逃げたつて香が成り込んでゆけば即詰である。

と誰しも考えて、もう景品のピース二個が自分のものになつたような気持でソワ／＼し出す。詰将



は、二人共波にゆられた水母のよう、どうにもならないことがあるんですよ、ソレ、またビヨンコくやり出しました。お可しいですね、フフ：笑いをがまんするのは胃運を我慢する以上に苦しいですよ。

互に掴む癖がないから大変です。玉椿が八重衣の首を巻きました、左で巻きながら右手の乳を狙っています、八重衣も強いですね、首を巻かせておいて玉椿の横腹を掴みましたよ、あの腹と腹のモチモチしたはずみはどうですか？ ストリッパーのような蒲鉾の板腹ではこの味が出ませんよ、太鼓腹ではありませんが臍がへこんでいゝ形をしているじやありませんか？ あつ双方乳房のしごき合いに入りました、しごき合いといつてもこんなにチンと張切つてちや掴むのが大変ですぞ、脂肪でツルツル滑つちやうのね、ミルクを詰めたゴム風船ですな、果実ですつて？新鮮ですね、マイヨール作の果実神々其まゝの感觸美、たまらないポリウム、いゝ相撲ですね、胸を殴める手相撲ならでは見られないチャーミング、テクニクですよ、若い女は性感帯の攻撃で敢闘意を火と燃すものです、頭髪を掴んだら寝業の前奏曲だと思つて

下さい、互にヴィナスの丘を狙っているようですが今日は其処迄はいきません、意恨相撲じやありませんからね……でも寝業に入ればチヨイト触るかも知れません、あの桜色した乳房の充血はどうですか、四つとも張切つて今にもパシクしそうですやありませんか、松坊の乳首がいきんですよ、ソレ髪を掴みました、マニキュアの紅が黒髪と素晴らしい対照美

ですね、噛み合はしませんよ、犬じやありませんからね、そうですね、闘牛？ まづ牝牛同志のねじ合い相撲ですか、玉椿の腰が入りました、揉合つてくるく足が掛合つてもつれて、残つたくアッあぶないケンくだソレ転んだ。ナイロン土俵のよさはいよ、これからですぞ、立業なら土俵と大した変化はないですね、ソレ互に太股の掴み合、あれッ玉椿がはねかえし損じましたよ、玉椿最



棋というものの性質を詳しく知らない人達にとつては当然なことである。こゝがオッサンのツケ目である。大道将棋は詰将棋の中でも、見かけは殊更に組し易く見えていていざ詰めて見ると、これ程厄介な代物はない。

「この問題なんかは最も初歩の簡単なものです。今日は最初だからサーピスのつもりで出しているんです。ア、お分りになりましたか、ではどうぞ」  
暫く考えていたが、やがて最前列にいた将棋の好きそうな四十五六の年配のオジサン。持駒の歩をベタリと音を立て、七二へ置いた途端将棋屋の顔はニタリとなる。もう初手百円コロがり込んだからだ。悠々と八一玉とかわす。次にこれでどうだと八九香と離して打った。  
将棋屋はやおら胸箱から一枚の桂馬を引出して八四へ合をする。客はこゝで瞬間意外な表情となる。王が九一か九二へ逃げると思つたからだ。同香より外にない。次に九二玉とくれば問題は無いが、どつこい問屋はそりは卸してくれない。再び八三金とアイをする。客は益々不思議な顔になる。詰めるのに最も大事な金を只呉れるというのだから……。勢をつけて同香とゆく。そこで将棋屋は慌て

ず九二玉と逃げる。  
これで攻方万事休す。以下八二香成、九三玉、八三成香、九四玉と一段先の大平原へ逃げていつてしまふ。

お客が八九香と打った時、何故将棋屋が八四へ桂を中合したかという、香を八四へ引きつけておけば、次に七一歩成、九二玉、八三桂不成、九二玉、九一桂成、九三玉、九三金（又は九三香成）この時に九四玉と上る手があつて詰まないからだ。  
この場合、八九香のまゝである、八三金ヨル、九四玉、八四金引、九五玉、八五金引迄にて詰む香歩問題でも本題などは極く易い方ではあるが、大道将棋として出ている時はこれ程素人のひつかり易いものはない。  
首尾よくピースをせしめようと思えば、左記のような詰手順で押しすゝめてゆかねばならない。  
（本題の詰手順）  
八三桂、八一玉、八二歩、九二玉、九五香、九三角、九一桂成、同玉、九三香、九二角、同香成、同玉、七四角、九一玉、八一步成、同玉、七二角、七二玉、六一角成、同玉、八三角成、七一玉、七二馬迄、二十三手詰。  
このように、一見して三、四手で詰めそうに見えるのに、いざ詰







原稿募集

一、探偵小説 (枚数二十枚―百枚位迄)

ほのかなエロチシズムによつて彩られたもの

二、時代小説 (枚数二十枚―五十枚)

女をめぐる裏面史、捕物帳、江戸風俗史等

三、實話讀物 (枚数十枚―三十枚)

犯罪、情痴、映画、スポーツ等、洋の東西を問わず

四、探訪記事 (枚数十枚―三十枚)

足によつて書いた社会の裏面探訪記事

五、暴露小説 (枚数十五枚―三十枚)

映画、演劇、スポーツ、政治等のかくれした秘事

六、体験告白 (枚数五枚―二十枚)

特異な体験記又は異常な生活の告白記

七、変態文獻 (枚数五枚―五十枚)

古今東西を問わず興味ある変態的資料

八、コント、小話 (枚数五枚―十枚)

機智と洒落に富んだ明朗闊達なもの

九、漫画、挿繪、寫眞、口繪、笑話

十、記録小説 (枚数二十枚―三十枚)

太平洋戦争の各戦線の秘録、資料のみにても可

① 送付先 囃書房奇譚クラブ編集部宛

② 締切は特に定めません

③ 原稿には略歴を末尾に記載して下さい

④ 原稿は原則として御返えし申し上げない方針です

⑤ 採用決定した場合は御相談に応じます

⑥ 採用決定した場合は、折返えし御連絡の上

読者通信並に文藝

〔短歌〕

京都 清水すみ子

たゞ一度逢うて別れし人なれど淋しき身

にはなつかしきかな

青空を見上げてあれば泪いづかはかり心

弱くなれるや

思うこと悲しみとなり堪えられずあつき

涙の頬をつたりも

お便り有難うございました。私、真面

目な話の合うごく少数の方と文通致した

いと存じまして、あのようなはしたない

広告をのせていただきましたところ、全

国から、私の考えてもいない程に沢山お

便りをいただきました、どうしたらいいのか間

誤つきまして、つい不躰な御返事を差上

げまして本当に申し訳ありませんでした。

お宥下さいませ。

容貌八十点は、あまりにも卑下したく

もございませぬし、百二十点ともつけら

れませぬし、昔の小学校の通信簿の乙上

を想いましてつけましたので、美人と自

分で申されませぬワ。でも、娘つて、自

分がよく思わたいものですのよ。自己

辯護みたいですけれど……。

き続けますワ。その奥、書く時は耳たば

まで赤くなる時も、溜息の出る時も、一

層のことやめてしまおうかとも考え考え

書いておりますのよ。

御文通を御申込みにならない方々も、

どうぞ、御感想なり、御教示なり賜るよ

うお願い致します。

皆様の便りに、丁寧につくりと御

返事を差上げなければなりませんところ

不躰な短い御返信しか差上げられませ

でしたことを深くお詫び致します。

冬の気配の感ぜられるこの頃、皆様の

御健勝と御幸福をお祈り致します。

かしこ

十一月十六日

お便りを下さいました

全国の皆様へ

二俣志洋子

〔川柳〕

岡山 泉江 洋

結局は金のあるのにまかせる身

恋を得て家出の遺書が反古になり

酔いたいわなどと女に甘えられ

求交際文通

編集部宛付

私には本年二十三才の何のとりえもない女

でございませぬ。勿論女ではございませ

んが、現在一人で洋裁をしながら暮し

ております。いさゝか世間の裏ものぞい

て参りましたので、若し私のような者に

でもお便りが頂けるようでしたら、又そ

れ相応の話題もあると存じます。

諸国変人奇人めぐりの内「娼婦時代の思

い出」なる一文を寄せられました吉岡銀

子さんから右のような本雑愛読者との文

通を希望する通信を寄せられましたので

編集部宛付にてお送り下されば転送致し

ます。

編集部

裸体美人寫眞賞分譲

送料共 一枚 五十円

(切手可) 五枚 二百円

十枚 三百五十円

好事家垂涎のいろ／＼のポーズを取撮え

てありますからドシム／＼お申越し下さい

プロマイド紙に焼き付けた鮮明なる写真

で必ず御満足されることと思ひます。

直接購読者募集

半年分 六冊(送料共) 五百円

(定価値上の際も据置きます)

右御払込の愛読者の方には特別景品とし

て極鮮明な裸婦写真三枚一組贈呈します

◎振替又は小為替にて御送金下さい。

奇譚クラブ

新 年 号

昭和二十六年十二月三十日印刷

昭和二十七年一月一日発行

編集人 吉田 京二

印刷人 上田 庄之助

大阪府堺区内菅原通四丁目三〇

振替口座大阪三四九五六番